
BROTHER - blood -

坂野快

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BROTHER - blood -

【Nコード】

N6000F

【作者名】

坂野快

【あらすじ】

幼少の頃事故に合いそれ以前の記憶をなくし一人助かった加賀昭次、同時に両親を亡くす。一人留守番をしていた兄・はじめはなにもわからなくなった弟と二人懸命に過ごしていた。ある日はじめの勤め先の従業員大竹成仁はお世話になってる先輩を紹介しようと姉の病院へ誘った、幸の彼氏・神崎俊にも会ってほしいと。成仁の姉・幸は重い病気で入院していた 前半は大竹兄弟と俊中心の物語。後半は加賀家物語となります。

エピソード1

1・加賀家と成仁（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉、重い病気で入院している。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

エピソード1

1・加賀家と成仁

一ヶ月・・短いと言える時間の中、長く深い時間が過ぎていった

オレ、加賀はじめ・・それに弟、昭次を取り巻いていた穏やかな世界は、まったく違うものと 変わって、いく。

十二年前、家族で旅行へと出かけた加賀家、父の運転する車に母と子供一人。

「なんで兄ちゃんいないの？」

「兄ちゃんな野球の試合があつたんだって。ごめんね知らなかったのよ」

「あいつの野球好きにはなにも勝てないからな。父ちゃんの予定が今日しかあいてなくて。昭、兄ちゃんいないとつまんないか？」

「そんなことない。父ちゃんと母ちゃんいたらいいよ、早く遊園地つかないかなあ」

5才だった昭次を連れ遊園地へと出かけた、兄のはじめは予定がつかず留守番をしていた・・

一緒に行けなかったことは残念に思っていたが遊んでいるうちにさみしい気持ちもなくなり楽しいひと時。

その帰り道、連日の仕事の疲れが溜まっていた父の運転が・・・もうすぐ家に着く、その油断が・・・事故を起こしてしまう。

「・・・あ、あぶないっ」

一瞬、目を離した・・・その瞬間、目の前には壁が迫っていた。

衝突事故・・・絶望の中、とつさに昭次をかばって身体を覆う母。大きな音と共に、車が横倒しとなった。

しばらくして、消防や救急のサイレンが鳴り響く。

そんな中・・・昭次がゆっくりと目を覚ました。

「・・・母ちゃん、なに、どうしたの？重いよ、どいてよ・・・」
母の下、這い出すように置きあがると様子のおかしさに気づく、

「母ちゃん・・・？どうした、の・・・」

母の額に流れ出る血を触る・・・何が起きているのかわからず固まる昭次。

「要救助者三名、子供が一人気づいてます。ぼうず、手伸ばせ、動けるかつ早くっ」

「な、なんでっ・・・母ちゃんも！母ちゃん、起きて、なんでなにとも言わないのっ！父ちゃん、も・・・起き、て・・・」

父を振り返る、父も同じく起きてはくれなかった・・・怖くて怖くて泣き叫ぶ昭次。

「ダメだ、早く出さないと車がもたないぞっ。そっちのドアから出せるだろっ、早くしろっ」

強引に母から離されると、意識を失いそのまま外へと飛び出した・・瞬間、車は大きな音を立て・・燃え出す。

それから、しばらくの間目を覚ます事はなく・・目を覚ました昭次に記憶はなくなっていた。

オレのことさえ忘れていた・・兄のオレのことも、事故のことさえも　あれからもう、十二年。

「兄ちゃん、遅刻だよっ。いつまで寝てんだよっ」

勢いよく布団を剥ぎ取られ、寒さにやっつとで目が覚める。

時計を見ると、まだ十分ほど寝てられる時間。

「まだ、寝れるよお・・兄ちゃん疲れてるの、布団返せよ」

「もうごはん作ったんだよっ、冷めるだろっ。オレもう行くから早くしてよ」

布団を放り投げると慌しく階段を降りていく音、一気に目が覚めるつてもんで。

「はあー。あいつはホントしっかりしてるな。母さんにそっくりじやん。なあ父さん」

枕元、いつものように写真へあいさつを交わす。

ごはんを作ってもらっておいていつまでも寝てられるほど薄情ではないのだ、兄としての威厳が。

「おはよ、昭ちゃん。朝からご苦労さん」

感謝の言葉を言いつつ、大あくびで椅子に腰掛けるオレを笑顔で迎えてくれる昭次。

「おはよ。んじゃもう行くからね。かたづけといてよ。いつてきまーす」

「おう、あつ昭次。今日早く帰ってきてな。みんなで飯食うからよ」「わかってるよー。ご馳走楽しみにしてるから、がんばってよお」「じゃあと言い残し駆け出す昭次へ「当然だろ」と叫んで返す。

「一年に一度の腕をふるうからな、まかしておけ」

笑い声と共に玄関を抜ける音、一瞬に静まる部屋。温かく用意された朝食、両手を合わせ頂いた。

いつのまにか習慣となっている家族四人での食事・・

当然、両親の姿はないが結構感じるもので、その時ばかりは戻ってきてくれているのだと思わせる。昭次には感じられてもつらいだけなんだけど・・親の事は、覚えていない。

「もう何年たつてると思ってるんだよ。いいかげんなんだよあの医者も、藪じゃねえのか治らんぞ」

時がたてば自然と思い出すとかなんとか適当なことを言われた記憶はあるが、現実はどうもいかない。

怒りにかき込むようにごはんを食べていると、ふと時計が目に入る。「げっ、もうこんな時間かよ。遅刻しちまう」

ゆっくりしすぎた、片づけの時間も考えるとマジでやばい・・速攻で食事を済ませてお皿を洗い、着替えながら歯を磨き、あちこ

ち駆け回りながらついでに戸締り確認。

「よし。いつてきまーす」

オレは本屋で働いていた、小さな本屋で店長をまかされている。
以前の店長は大きな書店に移動してしまい、後を任されたというくらいここでは長く働いている。

「おつはよーございます。なんかうれしそうっすねえ」

大慌てで店の前まで着くとすでに玄関は開いていた、荷解きをしながらどうしたんですかと笑ってる。

小さな書店なので社員もオレともう一人だけ、大竹成仁。

こいつも昔からバイトで一緒だったんだけど続けてくうちに社員としてオレの下で働いてくれている。

「おはよーさん。なんで？オレ笑ってる？」

「えーなんか、うれしそうに見えたんで。今日はなんかいい日ですか？」

確かに楽しみにしていた日では、ある・・・けど、顔に出るとは。

「なんでもねえよ。ほら、早く仕事仕事」

「先輩遅いからもうやつちやいましたよ、オレ掃除してきまーす」

「・・・それはすんませんです。って、おまえに言われたくないんですけど」

笑いながら逃げてく成仁に遅れて叫ぶオレ。

「いつも遅刻してくるやつが言ってくれるものだ。まあ、今日は助かったけど」

成仁はすっかりもののくせに遅刻だけは昔から直らないやつで、もう諦めている。

アットホームなうちならではのことだけど、ちなみにオレは遅刻したことはない・・今日も、一応時間内だし。

あいつが早く来すぎ・・珍しいことに、雪でも降るんじゃないだろうなあ。

「成仁ー、ちよつと手伝って」

人もまばらになってくる昼過ぎ時、伝票整理を始める・・いうなれば、ちよつと休憩。

「はあい。あつそうだ、先輩今日終ってからの予定は？帰り一緒にしません？」

「悪い、今日はちよつとダメなんだよな。うちで大事な食事。準備しねえと」

「なにがあるんですか？そういえば弟さんいましたよね、弟さんの誕生日？」

「ん？そうじゃないけど、似たようなものか。親のつていうか・・毎年、今日はみんなですって決めてんだ、といつても実際はオレと昭次しかいないけど」

「なんで？両親と先輩と弟さんで四人でしょ？」

オレの言葉にいまいちわからないと言ったように首を傾げてる成仁。

「あつ、もしかして、ご両親って・・」

なんとなく雰囲気気づいたのか急に静かになる成仁、気を使わせ

てしまったようだ。

「そう、いないのよ。べつにもうずっと前の話だしそんな顔はしなくてよし、気にすんな」

「そうだったんすか・でも、すごいすね、先輩作るんすか」

「オレは結構やるほうよ？まあ、たいしたことしないんだけど今日はそういうことで、悪い。そっちはよかった？」

そういえば成仁は帰りすぐ帰ってくから誘われたことは珍しい、今日朝早かったのもその流れなのでは・悪い事したかも。

「あついいんです、今日じゃなくても。姉ちゃんとその恋人さんなんですけど。会ってほしかっただけですから」

思いがけない人々の名に正直驚く、姉がいるのは知ってるが会った事はない・しかも恋人？

「なんで？オレ？」

「オレがいつも話してるからかな。お世話になってる人でしょとか言っと呼んで来てって。親みたいなたちだから、オレも会ってはほしいような・うるさいのよそういうことが」

いつも話してるってなに話してるんだか、姉ちゃんの恋人とも仲よさそうな感じで。

「そんなこと言いながら顔笑ってるよ成仁くん」

照れて睨んでくる、照れ隠しにすこまなくてもいいんじゃないですか？

「おまえが懐いてるって、いい人そうだなその人。姉ちゃんの彼氏ってことは兄ちゃんになりそうか？」

「そうなんだ、けど。やっぱ姉ちゃんの病氣悪そうで。どうなるかわかんね」

「・・・そっか、まだ悪いのか・・・」

成仁にも親がない、オレたちと同じで・・・ちょっと前まで悪いことばっかしていた悪ガキで。

ここにバイトに入るようになったのは姉の病氣がわかったからだと言っていた。

オレが無理させていたからと・・・たしかにその気持ちはわかる。

オレも親がいなくなってから無理しどうした、成仁の姉も同じ気持ちだったと思う。

そこにきてあの悪ガキの弟だ、その点オレより苦勞してるはず・・・同情するよ。

そりゃ改心もするだろう、いくら悪ぶってるあいつでもたった一人の肉親なのだから

「わかった。じゃ明日にでも会わせてもらおうかな、予定ついたら教えて」

「うん。予定聞いとくから、お願いします」

「オレもお世話になってるしおまえには、よろしく言っというて」

「世話になってるのは、オレのほうだから・・・」

なぜか逃げるように本の整理を行ってしまう成仁・・・

前の店長もとてもしいい人で礼儀の知らないあいつを根氣よく世話してた、それに便乗してただけなんだけどなオレは。

「オレも、おまえのこと兄として見てたつもりなんだけどな・・・本物には勝てないか」

苦笑いのはじめを振り向いて笑ってる成仁へ、聞こえないように呟いた。

エピソード1

2・大竹姉弟と俊（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉、重い病気で入院している。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

エピソード1

2・大竹姉弟と俊

「加賀さんがよろしくって、今度こっち来てくれるって言ってたから頼むよ。ホント世話になってる人なんだから」

病院の一室、オレの姉大竹幸の部屋、ベッドに横たわるその人へと今日のことを報告。

「わかってますよ。私が会いたいつて言っただから、あいさつくらいいっぴかりできますから姉ちゃんだって」

「どうだかね」

姉は心臓が悪く、今は落ち着いているのだが発作を起こすときかなりやばい状態で・・あまり長く生きられないと告げられていた。

こんなに普通に行っているのに、病室ではけして沈まないと決めていても時折・・沈んでくる気持ち。

そんな気持ちをかき消すようにドアをノックする音が部屋に響いた。

「あつ。俊さんじゃない？はい、どうぞ」

「こんばんわ。遅くなった、今日具合はどう？」

顔を覗かせるのは神崎俊、姉の恋人でオレの事もよくしてくれるやさしい人だ。

こうして毎日のようにお見舞いに来てくれていた、ここでしか会えないのだからしかたないのだが。

「全然平気。遅いからもう来ないのかと思った。成仁のが早いなんておかしいでしょ、いつもおっそいのに」

「なんか文句でも？失礼なやつ、ねえ俊さん」

「こら、姉さんのことやつなんて言うんやない。まったく口悪いやつやで」

「そんなの姉ちゃんもだろお。そういう俊さんも十分悪いと思うけど」

関西の人で、オレたちとはまた違った意味で口調は厳しかったりする、オレは好きだけど。

「・・・しかたないの、そんな簡単に抜けるもんやないし。とにかくもう少し考えてしゃべるように。幸もやぞ」

「このおしとやかな私を捕まえてなにいつてますの、二人とも」

無言で顔を見合わせ首を傾げるオレたち、どの口が言ってるんだか。

「失礼しちゃいますわ」

元気な笑い声が部屋に響いた。

いつも部屋に入る時は緊張してしまう・・・元気そうで、よかった・・・今日も。

神崎俊が幸と会ったのは三年くらい前の病院。

オレの母がこの病院に入っていた、ここの治療がいいと言われて大阪の病院から移ってきたんやけど・・・もう遅かったらしい。

同じような環境にあった幸がよう話かけてきてた、どこが悪いかわからんくらい元気で。

初めはうつろされるのが面倒でどっかいけやと怒鳴ってばかりいた。

それを気にもせず話しかけてくる幸とおるうちに・・・いつの間にか笑った。

わからんけど笑えてきて・・・きつと幸の能天気さが気を紛らしてくれてたんやと思う・・・

「どうしたの、ぼんやりして。仕事お疲れ？」

思い出し物思いにふけていると覗き込んでくる幸。

「姉ちゃんが疲れさせたんだろ、今のは」

瞬間突っ込みの成仁に、小さく笑った・・・ホンマこの子らは。

「幸は会った時からオレのこと疲れさせる天才やからな」

「天然な姉をもつて大変だよオレも、俊さんはもつと大変だろうけど・・・なんで選んだの姉ちゃんなんか・・・いたっ」

「失礼だなさつきから」

すかさず手が出る幸に、まあまあとだめ見てた・・・二人のやり取りを見てるのは好きだった、子犬のじゃれ合いみたいで。

「俊くんが私を選んだのは運命なの、俊も疲れるとか言わないでよ、本気にするでしょこの子」

ふいに、すごいことを言い出す幸に一瞬固まる・・・運命、確かにそれは感じてはいるけどそんな面と向かって・・・よう言えるな。

「ごめんごめん、おもわず本当のことを」

照れ隠しにおどけると怖い顔で睨んできた・・・やば、ごまかして笑ってみるとそれ以上に爆笑してる成仁。

「きやはは。いまさらそんなの隠せるかよ、天然が。加賀さんまで疲れさせんなよマジ」

「あっ、勤め先の人？」

よく出てくる名前に反応、成はホンマにその人のことが好きらしい。話を聞いてるとオレまで気に入ってくるからおかしい。

「そうそう、今度俊さんにも会ってもらうからよろしくな。姉ちゃんだけだと心配なんで」

いつの間にそんな話に、びっくり顔のオレに成が心配そうに見つめてくる。

幸と顔を合わせる、お願いと同じように見つめてきた。

成仁が世話になってるんやったらオレも一言あいさつしたいような、気もする。

「オレなんかでよければ会うけど・・・ええんか？」

「なにが？オレがお願いしてるんじゃない。なんか心配？加賀さんいい人だよ」

相手の心配やなくて・・・オレのなんやけどな。

「その加賀さんがええ人なんは聞いてたらわかるから。知らんでオレなんか会わせて、関係壊すなんてイヤやで」

キョトンと見てる二人、瞬間吹き出してる・・・なんなんや。

「どうしてそうなるのよお。俊なにか嫌われるようなことするの？それなら私のが心配じゃない」

「全然平気だよ。俊さんに悪いとこなんてないじゃん、姉ちゃんも心配ない・・・かな？大人しくしてくれたら」

「ああ、ひどくないそれ。いいのかなそういうこと言って」

楽しそうにからかいながら「いろいろ言ってやろうね」と空気を变えてくれる。

オレが悪かったこと、気にならんのやろか・・・もちろん今は更正し

たつもりやし心配ない思うけど、そんな大事にしてる人に会うとなるとなんやすごく不安やで。

オレだけが心配してるようで、二人はそんなことどうも思ってない様子・・・ありがたいことや。

「なんだよ、よけいなこと言わないでくれよ。仕事に響くだろ。で、明日大丈夫か俊さん」

「明日も見舞い来るし、その時でいいんなら」

「じゃ明日つてことをお願いしとく。そろそろ時間だよな？帰るわ姉ちゃん」

「オレも帰るわ、おとなしく寝てろよ幸」

成仁も気づいていたのか、幸の顔色が少し悪くなってきたこと。幸は結構かたくなにオレたちの前では弱さを見せない・・・だから、辛そうにしてると気づいたら席を外そうと二人で約束をしていた。

「うん明日ね・・・来る前に連絡しようだい」

じゃあと病室を出て行く二人・・・それを見送った後、咳き込む幸。掌には、血が滲んでいた・・・病気は静かに進行していく。

「顔色、悪かったな姉ちゃん・・・」

やっぱり気づいてたか、目に見えて弱っていくのがわかる分・・・毎日会ってるのも辛いもんや。

「・・・悪かったな、きつと無理して笑ってるんやろ」

寂しそうに夜空を見上げてる成仁、不安が手にとるようにわかる・・・

けど。

「そういう顔、幸に見せんかったんわえらい。けど今もしたらあかんで。おまえが笑ってるだけであいつ元気でおれるんやから」

たった一人の兄弟、成仁のためにがんばったっていつも言っている。そんな幸をオレも誇りに思う、力になりたいと思う。

「姉ちゃんの元気の素は俊さんだろ、自覚ないの？オレから言うのも変だけど、傍にいてやってね」

「・・あたりまえや。さきとりたいからおるんやで。変な気使うなや、気持ち悪い」

「なにそれ、ノロケ？」

憎たらしい顔して覗いてくる、いらんこと言った。

反撃されると思ったのかさっさと遠くに逃げてる成仁、あかん絶対変な顔してるわ今。

ノロケ、言われてもしかたない・・あいつとおるのはホンマに落ちつくし、それは成仁のことも同じでいつまでもあの空間で一緒に過ごしたいと思ってる。

・幸の、病気 母と似ていると思うのは、気のせいだろうか・
・気のせいであってほしい。

夜空の星に願う、いつまでも一緒にいられますように・・

エピソード1

3・昭次と俊と忍（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉、重い病気で入院している。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

エピソード1

3・昭次と俊と忍

加賀家の次男、加賀昭次。

部活がやっとで終わり、日も陰ってきていた。

なんか今日は長く感じてしまった・・実は兄ちゃんのご馳走は楽しみだったり、する。

お腹も準備万端。

「じゃあな、また明日」

にやけそうな顔を隠しながら友へと挨拶を交わす。

「昭次、そこ寄つてくけど行かないのか？」

声をかけてくるのは親友の相田武。

いつもなら喜んで着いていく寄り道も今日は、なしかな・・

「ごめん、今日はちよつと時間ないから。またにする」

「わかった、じゃあなまた明日」

「昭次い、明日宿題見せてねえ」

その横でちゃっかりとそんなことを言っているのは、武威直人。いつも三人でつるんでいるくされ縁。

「バーカ、そんなもん自分でやってこいっ」

「バカなんでわかりませーん」

「オレも、よろしくー」

便乗して武までも捨て台詞、じゃあなあと笑い声が遠のいてく。すぐ人を頼りにするやつら、それでも貸してしまう自分も甘いよな

あと一人笑いながら家路と向かった。

「ちょっと遅くなっちゃったなあ、手伝いしようと思ってたけどもう遅いか？」

暗くなつていく空に急ぎ足になつてく、周りをあまり見ていなかったようで・前から来た人と肩がぶつかってしまった。

「いてっ。どこ見て歩いてだよ」

「あつ、ごめんなさい。ちょっと急いでたんで、ごめんなさい」

少し悪そうな人・やばいかも、この辺りちょっと夜は治安が悪いんだっ。

素直に謝り、逃げようとしたところ・

「ちょっと待てっ。誠意が感じられんなあ、こつち来てくれる？」

「ほんまやで、最近のお子様は。あー肩痛いわあ」

「ちょ、ちょっとー。痛いって大袈裟だろ、オレと同じ力でぶつかったのに。それにちゃんと謝ったでしょ？」

急いでいるのと、理不尽な態度に思わず口答えをしてしまい・しまったと、思つたのは遅かった。

「ほんまに生意気やないやつ。どうしよか？」

「待て。もつと奥行つてからや、人目につく」

引きづられるように腕を取られ・二人に捕まえられ逃げようにも離れない。

「離せよっ！ちょっとぶつただけだろっ」

勢いで払ってしまう腕にさらに怒り出すやつら、これはちょっとただでは済まない予感。

ケン力なんて、したことないが・ただでやられるわけにはいかな

い、でしょ男の子が。

「・・・た、たいへんやっ」

小さな声でアタふたとしているのは、昭次の後ろを歩いていた同級生、井川忍。

助けようにもまったくそんな力のない普通の子、それよりも弱そうな大人しい子。

「あれ、忍やないか？なにしてるんこんなところで」
そこに偶然通りかかるのは病院帰りの俊と成仁だった。

「うわぁー、あつ俊兄。いいところに。助けて、悪そうなのに連れてかれて」

テンパっていた忍は訳も告げず俊の腕を引っ張って三人が消えて行ったほうに走る。

後ろからついて行きながら成仁は思う・・・こいつは誰だ？

俊さんのこと俊兄とか言ってるけど、弟か？

兄弟がいるとは聞いたことない、挨拶する間もないほど慌てていたので黙っていたけど。

辿りついたそこには、高校生を囲む二人の不良・・・あいつの友達、助っ人が必要だったわけか。

「ちょ、やめ・・・なよっ」

恐々と止めに入るそいつ、助けたかったのはわかるがさすがに一人では行けなかったらしい。

「あっ？なんだよてめえは、こいつのダチか？」

「関係ない奴は口出すんじゃないやねえよ、こつちの問題だろっ」

あきらかに今からやられるであろう羽交い締めになされてる。

「オレだつて関係ないよ、ちょっとぶつかったただけだろつ。離せ」
予想外に強気な子、そんなこと言つとオレの経験上・・・そいつら逆上だよ？

思い通りの行動で今にも殴りかかりそうなそいつらを一瞬で止めると間に入る腕。

「おいおい、いいかげんにしといたら。いい大人が二人がかりで、ケンカのしかたもしらんのか、おまえらは」
勢いよく腕を引き剥がされてびっくりしてる不良たち。

「おまえはなんなんだよ急に出てきて説教かつ。ふざけるんなつ」
「説教もしたなるわ、こんな学生相手にいじめとるやつらが目の前にいちゃ。いいかげんにしとけ」

俊さんは優しそうに見えても結構、怒らすと・・・「もう大丈夫、俊兄は強いんだ」
突き飛ばされて転んでるその子に駆け寄るとその忍という子、同じことを言っていた。

俊さんの昔のことを知っている？かなり気になるところだが・・・あの人を止めたほうがよさそうだな。

「ちょっと俊さん、こんなやつらほつとこつよ。もう大丈夫そうだし」

今にもケンカをはじめそうな雰囲気にかけるとそれがさらに火に油だったようで・・・

「なに言ってやがる、なめるのもいいかげんにしとけよおまえらあ」

同時に殴りかかって来る二人、余計なこと言ったと構えるオレを後ろに下げる俊さん。

飛びかかる二人を避けると腕を掴んで、軽く投げ飛ばしてしまった。

「やめろいうてんのがわからんのかつ。もう帰れ」

「うるせえー・・・ったあ」

転がりながらも文句を言う不良たち。

「うるさいんわそつちじゃ、ええかげんにせんときれるでボケが。行けやっ」

あまりのすごみに無言で去って行った不良・・・あの迫力には勝てないな。

オレもよく叱られたから・・・怖いんだよ、マジで。

で、あの子らは・・・呆然と座り込む捕まっていた子、無事でなによりだ。

次々と現れる人物についていけない頭を必死で動かす昭次、危険が去ったのは・・・理解した。

かなりやばかったから、すごく助かったんだけど・・・誰でしょうか、あの豹変する方は。

「ありがとう、俊兄。よかった通りかかってくれて、どうしようか思ったよ」

「あの・・・あり、がとうございます」

どうもこの子、隣のクラスの・・・井川くんだったか、の知り合いらしい。

オレも慌ててお礼を繋ぐ。

お礼を言つと「大丈夫か？」と優しい表情、さつきとは別人のようだ。

「加賀くん、平気？」

手を伸ばしてくれる井川くん、そんな親しくはないのだけどオレのこと知ってるみたい。

「あつ、うん・・・いったあ」

ズキンと響く足首のあたり・・・どうやら突き飛ばされた時足をくじいたようで、かなり・・・痛いかも。

痛さに足を押さえるオレに気づき「足、腫れてる。大丈夫？」と心配そうに見てる井川くん。

「あの、井川くんだよ。助け呼んでくれてありがとう、ホント助かったんだけど・・・なのになんて迷惑かけそうで」

「いいよそんなの。それより足、歩ける？どうしよ俊兄」

ふいに話を振る、その俊兄さん・・・思わずビクリ、迷惑かけて怒ってないだろうか。

そろつとそちらを見上げると困った顔で覗いていた。

「い、いいです。なんでもないですから」

思わず手をかざすと、後ろから「なんでもなくないだろ」伸びる手が足を触ると、

「うつ・・・いたあ・・・い」

その手の先を辿るともう一人誰かが一緒だったようで小さく笑ってるし、なにするんですか。

「こら、なにしてんのおまえは。平気やないみたいやなあ。ほつと

けんし、送ってくか」

え？送ってくれるの？

おもわず井川くんを見るとそうしてもらおうと頷いてる。

「・・・いいんですか？」

「いいも悪いも歩けないんだからしかたないだろ」

どうもこちらの方は機嫌がよくなり・・・オレかなり迷惑な感じ。

ちよつと、いやかなりこれはへこむ。

「加賀、くんだっけ？気にすんなよ、迷惑なんか思っていないから。ほら背中つかまって」

勢いよく持ち上げられ、おんぶされる形・・・情けないなすぎる。

「ホントすいません・・・オレ、加賀昭次って言います、助かります。今日は早く帰らないといけないのに邪魔されて・・・怒ってるかも、散々です」

思わす愚痴ると小さく笑う、俊兄さん・・・

「それは災難、おまけにこんな怪我つきじゃ余計に怒られんか？ちゃんと説明もしたるから安心し」

「オレもついてく。オレすぐ助けにいけないで、ごめんね」

井川くんの謝る理由がわからなく大きく首を振った。

「なんで謝るの。オレだってあんなの無理だよ。助け呼んでくれただけでホント感謝してるし。ありがとう」

笑いかけるとうれしそうに笑う井川くん、始めて話したけどとてもいい子みたい。

「まああそこで忍が止めに入っても犠牲者が増えただけやろうから、通りかかってホンマよかったわ。で、家はどっちな加賀くん」

「あ、はい。もうちよつとです。あの角の家」

悠長にしゃべってる場合ではなかった、人の背中の上で。

エピソード1

4・はじめと俊（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉、重い病気で入院している。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

「井川忍」昭次の同級生、俊とは家が隣同士で慕っている。

「相田武・武威直人」昭次の親友。

「関義斗」俊のケンカ仲間、昭次やはじめとの関係は？

エピソード1

4・はじめと俊

後ろについていきながら話を聞いてた成仁、なんだか誰かに通じるものをかんじていた。

あの子、加賀つて言ったよなあ・・・それに早く帰らないといけないとかって、加賀先輩と同じこと。

先輩弟いるはずだよな、絶対この子・・・加賀さんの弟。

聞こうとした時にはすでに家に到着していた、見れば一目瞭然ってことでなんだか少し緊張しつつ一番後ろから様子を伺った。

「ただいま・・・」

俊さんの背中から小さく呟く弟くん、そんなんじゃきこえないのは。

思っ間もなくかけつける姿・・・案の定、よく見知った顔。

「昭次？なんだよ遅いじゃん・・・って、なんかあったのか。あんたたち誰？」

玄関先に見知らぬ人の多さに、かなり警戒して鋭くなる加賀さんの視線。

「歩けんいうんで連れてきたんですけど、オレはただの通りすがりで・・・」

弟くんを玄関にそっと降ろしながら落ちついてくださいと言わんばかりに優しい声で呟く俊さん。

そんな兄の態度に弟くん慌てて説明を続ける。

「ちょっと絡まれて、この人たちは助けってくれた方で、失礼なこと

言うなよ」

それでもなんとなくおかしい空気にオレの出番だと顔を出してみた。

「やっぱ先輩の弟さんでしたかあ」

「えっ？成仁、なにしてんだ？」

知っている顔にさらに混乱している様子。

「だから助けに入った一人です」

弟くんとオレたちを交互に見てやっとな状況を理解したのか、ホッとした表情の加賀さん。

「なんかわからないけど、ご迷惑を・おまえなにやってんのよ。大事な日に」

「だって・しかたないじゃん」

沈んでいる弟くんを弁解するように俊さん。

「まあ大事なくてよかったです。この子はホンマタチ悪いのに絡まれてただけなんで、遅れたのは許してあげてくださいね」

オレが知り合いだったのを気にしておまえはどうする？と見てる俊さん。

今日は帰りますよ、いきなりなんで。

「先輩、怒らないように。足、見てあげて。じゃ、失礼します」

「ちょっと待ってください。上がってもらってもいいでしょ？お礼したい」

ふいに弟くんが引き止める、それに我に返るように先輩も頷いてる。

「あ、すいません。よかったら上がってください」

「え？でも今日はみんなで食事の日って」

大事な日だと聞いていたのでさすがにそれはと俊さんと顔を見合わせるが、

「そんなたいしたことじゃないって言っただろ。オレもなんか失礼

なことしたし。ちょうどごはんできてから食べてって。多めに作ったから調度いい」

すぐるような弟くんの視線と、有無を言わさぬ勢いに困っている俊さんたち。

知り合いということでオレが上げればと遠慮なくお邪魔しようとする案。

少しだけならと頷く俊さんに弟くんも喜んでいた。

部屋に上がると、いい匂いが充満してた。

マジで加賀先輩が作ってんだな、人は見かけによらないとはよく言ったものだ。

オレがそんなことに興味を示している中、忍とか言ったか？心配そうに弟くんの傍。

「痛そう。早く手当てしないと」

「とりあえずシップでも貼っておくか。たいしたことないよ、そんな心配そうにしないで」

「なんかやつぱ怒ってるみたい。こんな日に、まいったなあ」

「不可抗力なんだからしかたないよ。お兄さんだって心配して怒ってるだと思っよ？」

なんだかオレの周りにはいない優等生タイプ、見たところ昭次くんも加賀さんの弟というだけありやんちゃそうなんだ。

救急箱を持って戻ってきた加賀さん、その忍くんの言葉に少し照れてか無言で手当てを始めてる。

先輩の意外な一面がよく見えてなんだかおもしろい。

「いい。けが人なんやからちよっとはやさしくしてよ」

「うるさいぞ。心配かけたバツだ、まったくみさかいなく突っ走ったんだろまた」

見てもないのに様子がわかるくらい、無茶する子なのか・確かにかなり強気だったから。

まあこの加賀さんの様子は怒っているというよりも、あれだよな。

「楽しみにしてたからねえ、素直じゃないよね先輩。昭次くん、すねてるだけだぞこの人」

ふいに、口を挟むオレにびっくりしてなにを言うんだと睨んでくる加賀さん。

「うるさいっ成仁。余計なこと言うな、たかが一、二時間遅れくらいですねるほどガキじゃねえ」

図星さされて怒ってるし・・時間までしっかり見てるあたり拗ねてるんじゃないか。

「なっすねてるだけだろ。おまえの兄ちゃんおもしろいよな」

加賀さんに聞こえないよう昭次くんに耳打ちすると頷いて笑う。

「本屋の人ですよね？いつも話聞いている、兄がお世話になってます。さつきはありがとう」

「しっかりしてるねえ、こちらこそお世話になってます。お世話もしてますけど」

無言で見てくる先輩に笑う昭次くん、冗談ですと逃げるオレだった。

まったくあいつは余計なことを・・突然の訪問にかなり戸惑っていた。

家族といえるのをあまり見られなくなかったかも、なんだか恥ずかしくなるから。

何年も一緒に働いているのに、お互いの家との接触はまるでなかったから。

「君は昭次の友達？初めて見る顔だね、違ったかな？」

「井川忍です、はじめまして。昭次くんとは違うクラスだから。たまたま帰り道が一緒だったんで、偶然」

昭次の友達にはおとなしく、よく見るグループにはいない雰囲気。

「もしかして初めてしゃべったかも。井川くん知り合いだったからそちらの方が、助けてくれて」

手をかざす方に見るのは昭次をおぶってくれていた人、優しそうな表情の中にどこか威圧を感じてた。

成仁と親しいみたいだったけど、後で聞こうと思う。

「みんな、好きに食べてください」

治療を待っていてくれてるのに気づき慌てて進める、さっきから失礼なことばかりしているなオレ。

そんな中、井川くんが立ち上がると頭を下げていた。

「すみません、オレ帰らないと。連絡なしにどこか寄ると怒られるんで・・・」

「あつ、そうか。こちらこそごめん、気づかなくて。大丈夫かな家のほう、電話しようか？」

なぜかオレを見る昭次、はいはいオレがするんですね。

「なんだったら送っていくけど」

「そんな、平気です。電話も大丈夫なんで」

玄関先まで昭次を抱えお見送り。

「今日はごめんね。ありがとう」

「もつと話たかったのに残念・・・また明日会える？」

「学校で会えるじゃん。昼休みにでも一緒しようか？」
とてもさみしそうに見てる井川くん、どうやら昭次と仲良くなりたかった様子。

「うん。じゃ、帰ります。足お大事に、失礼します」

「ごめんな、おかまいもできません。また遊びに来て。気をつけて帰れよ」

深深とお辞儀をし、静かに玄関を出ていく・・・どこのおぼっちゃんでしょうか。

「しっかりしてる子だなあ。昭次、見習えよ」

思わず見比べてしまった、あまりに育ちが違う・・・仲良くできるのが不安です。

「うるさいなあ、井川くんほどじゃないけどちゃんとしてます。兄ちゃんが見習えよ」

部屋に戻りながらの言い合いに先に進めていた成仁たちが笑っていた。

「まあまあ二人ともしっかりしてるって。なあ俊さん、昭次くん強かったよね」

「うん。オレがいかなでも勝つとたんじゃない？」

「そんなことないです。来てくれてホント助かったんですから。すごくピンチでしたよ」

「そうなんすか、うちのアホ昭がすいません」

無茶なことするなよとバシッと昭次の頭を叩くと大人しく頭を下げる、今回はホントにやばかったのが伺えた。

「いえ、べつになにもしてないですから」

「俊さんでしたっけ？すごくて二人もいたのに軽く追いついてくれただよ。すごかったんだから」

尊敬な眼差し、人は見かけによらないなああまり想像がつかないぞ。

「あつ、そうだ。加賀さんこちらオレの姉ちゃんの彼氏さん。明日会つてもらうつもりだったのに先に会つちゃった」

「あ、挨拶が遅れまして。神崎俊です」

「こちらさつき話してた会わせなかった勤め先の加賀はじめさん」

「加賀はじめです。」

ふいに紹介される言葉に、頭にいろいろ思い出す。

「あの話の人かあ」

同時に思い出したように言うオレたちにびっくりして笑ってるみんな。

「井川くんとも知り合いなんじゃないですか？」

「ああ忍は隣に住んでる子ですよ、小さい時から遊んどるから弟みたいなもんで。いろいろ偶然でしたね」

「井川くんまで知り合いなんてなんかすごいですね」

「ホンマやね」

人なつつこい昭次、すでに昔からの友達のように笑い合っていた。昔から誰にでもこうだから心配は多いが、今回は大丈夫のようだなんせ成仁の知り合いだ。

「オレも仲良くしてほしいなあ弟くん。オレ成仁」

二人の雰囲気嫉妬したのか仲間ハズレは嫌なのか入っていく成仁に笑う、おまえそんな奴だったか。

「はい。こちらこそ。いつぺんにいっぱい友達できてうれしい。それに今日はにぎやかで楽しいね兄ちゃん」

「そうだな。母ちゃんたちも喜んでるよ」

食卓に飾った写真を見て頷く、しんみりするよりいい。

「兄ちゃんの料理おいしいでしょ、今日は気合入ってるから」

「ホントびっくり。実はお腹すいてたんだよね。加賀さんってすごいわ、マジうまい」

オレは人に食べてもらうのが好きだから、そう言ってもらえればともうれしい。

こいつだから余計にうれしいのかもしれない、いつも世話になってるからね。

「そういえば神崎さんは家よかったの？連絡しなくても」

「ああ、オレ一人暮らしたから。助かるんよこういう誘い」

「ならよかった、いつでも来てくれていいよ。成仁も」

いきなりそんなこと言われて素直にくるとは思わないけど、来てくれたらうれしいなあと思った。

「加賀さん明日病院付き合ってくださいか？姉ちゃん予定ついたんで。昭次くんもどう？」

「ああ、大丈夫だよ。病院は大人数で行くところじゃないから昭はいいよ、オレがあいさつしてくるから」

「成仁くんの姉ちゃんにも会いたかったけど、連慮しとく。よくないったら遊びに来てね」

黙り込んでしまう成仁、断ったのがいけなかったのかと昭次が複雑な表情、そういうわけじゃないと思うけど・・それに気づいて俊さんがフォローをいれた。

「そうやで、病院出たらいくらでも会えるんやから。急ぐことないなっ成」

「お、おう。そうだね、すぐ会えるって思うから。それまで待ってな昭次くん」

「うん、待つてるね」

笑ってくれた成仁に目に見えてホッとしてる昭次、オレはなにか感じてしまったけど・

ホントいい人そう、成仁がなつくのわかる、昭次もすでになつてる。

最近落ち着いてきてるし、神崎さんいるならオレの役目も終わりかな・

あとは、成仁の姉貴が元気になることが今は一番の問題ってこと、か。

さっきの様子からちよつとよくなさそうな雰囲気、どんな様子か明日会えればわかるだろうが・少し怖い気がした。

「どうも突然お邪魔しちゃいまして、ずうずうしく食事まで。ありがとうございます」

「ありがとうございます。うまかったです」

「こちらこそです、お世話になりました。また来てくださいね絶対」
「食事が終わり、帰ると言うので玄関までお見送り、名残惜しそうに昭次が告げる。」

「おそまつさんでした、気をつけて帰れよ」

「俊さんいるから大丈夫。迫力の関西弁で蹴散らすよなあ昭次くん」

「うん。それだけで逃げていったみたいなものだよね」

さすがに気づいていたが、そんなことに役立っていたとはさすが。確かに関西の方言は迫力だから、まあ実力もあるんだろうけど・
「やっぱ想像できん。」

「そんななんもうええよ。そろそろしつれいしますわ。楽しかったま

た遊んでな昭。はじめさんは、また明日やな」

「またな。成仁も遅刻しないように」

「しないですよ。それじゃ失礼します」

余計なこと言わないでよと膨れてる成仁に小さく手を上げる、笑って出て行った。

一言多かったみたい、悪い。

一気に静まる部屋。

足を引きづってる昭次、さっきシップ貼った時かなり腫れていた。

「まったくおまえは。人に迷惑かけるなよな」

「それは悪かったけど、肩ぶつかっただけで言いがかりつけられたの、急いでるのに。あー足痛い」

みんなが帰って痛みに気づいたように座り込む昭次。

「朝、医者行ってから学校行ったほうがいいな。連れてくから」

「いいよ。仕事あるじゃん、大丈夫明日になれば少しはましになるって」

「そうだといいけど。なんか腹立ってきた・・・その、相手覚えてないか？」

実はかなり心配していたのだ、昭次はすぐに問題に巻き込まれるやつなんで・・・約束はしっかり守るやつだから余計に。

なんだかんだいっても大事な弟、それをこんな傷つけたやつ、覚えてたら仕返しにでも行きたいくらいだ。

「いいよそんなの、十分やってもらったから。俊さん、怖かったもん大迫力」

「見かけによらないなあ、あんなやさしそうな人が。仕返ししてくれたならまあいいか」

神崎さんの笑顔を思い出し、怒り顔がやはり想像できなくて首を傾げると笑う昭次。

「オレもそう思った助けに来てくれた時。大丈夫かと思ってたら一瞬で追い払ってて。あれじゃ誰でも逃げてくよ」

「そうかあ。怒ると怖いタイプかな。けど、いい人だよな」
同意を求めると大きく頷いてる昭次、相当気に入った様子。

「いいなあ兄ちゃん。オレも明日遊びに行きたい」

「遊びに行くんじゃないの。お見舞い」

納得してたようで行きたかったのか、オレはなんだか緊張するので複雑なんだが。

「お姉さんもきつといい人だね。失礼なことしないように、治ったら遊びに行かせてもらうんだから」

「・・・おう、そうだな。もう寝ろ、ちゃんと足冷やしておけよ」

少し痛そうに階段を昇っていく昭次を見上げて、小さくため息をついた。

治ったら・・・その言葉に言葉を失った成仁を思い出す。

神崎さんの様子からもなぜかよくない考えが頭をよぎる、最近成仁は仕事が終わると速攻で帰っていた。病院に行くためだろう、あいつもなにかを感じているのだと思う・・・知らないうちに。

オレは自分のことのように不安を隠せずにいた・・・明るく振舞う成仁に胸が痛んでいた、オレのとり越し苦労だといいいんだけど。

片付けをしながら、なにもないことを祈るばかりだった。

エピソード1

5・俊と成仁（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉、重い病気で入院している。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

「井川忍」昭次の同級生、俊とは家が隣同士で慕っている。

「相田武・武威直人」昭次の親友。

「関義斗」俊のケンカ仲間、昭次やはじめとの関係は？

加賀さんの家からの帰り道。

「加賀さんどうだった？いい人でしょ」

「そうやね、弟思いのええ方や。夕飯ごちそうになるとは思わなかった。いつもあの人が作ってんやろか？」

「・・・えーと、小さい時亡くなったって両親。・・・弟さん記憶ないって聞いてたけど」

自分で思い出して考える、普通だったよなあ昭次くん。

「は？記憶って、べつに普通やったで？」

「そうだよね・・・くわしく知らないけど。三歳以前の記憶がないとか、小さい時の加賀さんのことも覚えてないって。一緒に事故にあったんだってあの子、昭次くんも・・・」

オレがあの本屋に就職させてもらってだいぶ慣れてきた頃。

近くで交通事故が起きたことがあった。

加賀さんが慌てて助けに行った、幸いたいしたことなかったみたいけど・・・帰って来た先輩の顔は真っ青で。

・・・前の店長もまだいる時だったから、事情を知ってるみたいで奥に連れてって休ませてた。

オレはなにが起こったのかわからず呆然としていた、どうしたのかと聞いてみたら店長が話してくれた・・・加賀さんの、昔の話

「おい、しつかりしろっ」

「助けないと、早く助けきや父ちゃんたちがっ・・・」

慌てて走り出す先輩の表情はいつもの冷静なものではなく、それを

押さえてる店長の顔も尋常なことではないことを物語る。

「しつかりしろっ！あれはおまえの親じゃないだらっわかるな、あれはもう昔のことだ。わかるな・・・」

肩を揺らされると、我に返ったように驚き・・・目を閉じて大きく息を吸い込んだ。

頭を抱える加賀さんがゆっくりと頷いてた。

オレはなにも出来ずに少し離れたところから見てた。

「・・・すいません、ちょっと混乱したみたいで。少し、休ませてくれますか？」

「そこ横になつてろ、まったく無理すんな」

控え室で横になつてる先輩、どうしても気になったオレはこっそりと店長に聞いてみた。

「どうしたんすか先輩。大きい声聞こえましたけど・・・先輩の知り合いだったんですか？」

「聞こえたか・・・違うんだけどな、昔の事故とごっちゃになつてただけ。おまえには教えておいたほうがいいか、またこんなことあったら大変だからな」

幼い加賀さんの目撃した現場、店長もその場にいたそうだ。

「車は炎上・・・中にいた両親は、助け出されたんだが・・・即死だった。そんな現場目の前で見たら忘れられないだろ、だぶつてもしかたない。それに、唯一残った家族も事故のショックで自分のこと忘れてしまっていた、となれば・・・あいつはいつまでも悲しんでなんかいられない、弟を治すために必死に暮らしてきたんだよ」

あまりの重大発言に言葉が見つからない・・・両親亡くして、記憶のない兄弟と二人・・・つらくないわけがない。

「それで・・・治ったんですか、弟は」

「今も事故前の記憶も事故の記憶もない・・治らなかつたなあ」
遠くを見つめ、思い出して少し辛そうに呟く店長。

「オレ昔隣に住んでたんだよあいつらの、親がわりみたいなもんだな」

だから事情をよく知っていたのか。

「記憶はなかつたけどすぐに仲良くなつてたよあの兄弟は。まだ小さかつたからな、記憶ない時に兄だと言うはじめを頼るしかなかったから、昭次もがんばってたと思う」

・・

今日始めて弟さん見た、そんなこと想像もできないくらい普通だった・・加賀さんも。

もう昔のことだから忘れてるのかもしれない、強いなあ二人とも。

「そんなこと・・そんな素振りも見えへんなあの二人は」

「ホント、きつと大変だったと思うのに・・あんなに、普通に」

「オレたちも、がんばらな・・幸は、まだまだ大丈夫」

「・・なんでいきなり姉ちゃんの話になるんだよ。あの人がそんな簡単にいなくなるかよ」

少し胸の中で不安に思ったことを言われびつくりして大きな声、引きつつ笑う頬をつねるってくる俊さん・・

「ええって、無理すんな・・辛いんはオレも同じや、幸の病気が進んだら・・それなのになにもできん、気にせずにおらなもたんのはわかるが、辛い時はガマンばっかすることない。もたんやろ・・」

つねられる強さと言葉に滲んでいく涙・

「・・・痛つたいなあーもう。せつかくガマンしてるのに」

「せんでええ。オレにぐらい吐き出しとかな、幸の前で泣かれちゃかなわんし」

滲む視界の先、笑っている俊さん・自分だって、同じくらい辛いはずなのに・

肩を支えてくれてる腕に、また涙が滲む・

姉ちゃん、絶対よくなつて・このやさしい人のために、それだけを今は願った。

肩を組んで寄りそう成仁の目には涙が光る、見ないように遠くを見て歩いた。

こんなこと言ってるオレが一番臆病なんやけどな、オレにはもう幸しかおらんから・・・

父なんて言えるもんはとつくの昔に存在すら消している、もう誰もおらん・幸がいなくなる、これ以上に恐ろしいことはない。

成仁は強い、日に日に悪くなつとる顔色の幸に、変わらず接して・それにのせてもらってるだけやオレは、情けない。

こうして泣いてる成に言える言葉もない、一緒に泣いてしまえたら楽なんやけど。

「ごめん・先輩の話思い出してたら悲しなつて・親を知らないオレだけど姉ちゃんのありがたみはいやってほど知ってるから。元気になるならなんでもするのにな・」

なにも言えず立ち止まってしまった、オレも気持ちは同じなんやけど・・

立ち止まるオレを覗き込んで首を傾げてる成仁。

笑いかけおもしろい頭をなでる、なんだよと笑う成仁・・元氣をもらうように、肩を抱いたまま歩いた。

成仁と別れ、暗い部屋の中・・倒れるようにベッドへ沈むと、抑えていた悲しみが襲ってきた。

今日、病院で聞いてしまったこと・・

『四号室の大竹さん、だいぶ悪いみたいよね・・昨日もすごかったじゃない発作』

・・通りすがりの廊下、おもわず駆け寄って問い詰めてた・・

「私たちが言えることじゃないですから」

「今話したたやろ、発作がどうしたんや」

「・・昨日、具合が悪なったんです。でも持ち直したから、大丈夫ですよ」

詳しくは担当医に聞いてくれとばつの悪そうな看護婦に嫌な予感のしたオレは、その足で聞きに行った・・

「あの子は本当にがんばってる、君のお母さんも同じだったが・・今の医学じゃ、どうしようもない・・移植も考えられることだが、幸くんの場合それも・・体力がもたない。神崎くんには全部話すそれが君も対応しやすいだろう・・」

「・・どういう意味ですか？」

「あの子は、もう限界なんだ。大きな発作が起きたら耐えられない

だろう・・・昨日も危険だった、今普通にされてられるのも気力だけだ、生きたいというあの子の。いつも来てくれてるのは弟さんか？二人のおかげでがんばってられるんだと思うよ。だから変わらず接してあげてくれ・・・」

今日行くのが遅れたんわ話を聞いたから、だから部屋に入るんが怖かった・・・

幸にどんな顔して会えばええんかわからなくて、幸がそこまで悪いなんか知らなかった。

いつも元気に笑つとるとこしか見せんかったから。

うそやる幸・・・ホンマにそんなに悪いんか？

思い切つて叩いたドアの向こうからは明るく笑う幸と成仁の声・・・その姿に、ふんぎるしかないと決めた。

こんなこと知られちゃいかん・・・わしが知ってしまったことも幸にわからせちゃあかん　一人で押さえておかな。

「なんで、オレの周りの幸せは・・・こんなに、小さいんやろなあ。なあ母ちゃん・・・」

小さく口にする声と同時に溢れる涙が、暗闇に小さく光った。

エピソード1

6・昭次と忍（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉、重い病気で入院している。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

「井川忍」昭次の同級生、俊とは家が隣同士で慕っている。

「相田武・武威直人」昭次の親友。

「関義斗」俊のケンカ仲間、昭次やはじめとの関係は？

「・・・痛い、かも」

朝、起きた瞬間足の痛みに驚く・・・こんなになるとは。見るとすごく、腫れていてズキズキ響く感じ。

「これじゃ一人で歩けないよ・・・どうしよう」

まだ時間が早いため兄も起きていなく、しかたなくがんばって立ち上がってみた。

平気なほうの足に体重をかけていればどうにか、いけそうな気がする。

「壁づたいになら・・・兄ちゃん起こさないで。これじゃ朝ごはんも作れない」

兄の部屋へ足を引きづりながらゆっくりとたどりつく、気を抜いた瞬間つまづき・・・眠っている兄ちゃんの上に勢いよく倒れてしまった。

「・・・う・・・」

加減なく倒れてしまったため、かなり痛かったのか声も出ない様子・・・マジごめんなさい。

「ご、ごめん。こけちゃって・・・」

「・・・昭。なにをしてくれるか・・・ああ、いつてえ」

「ごめんって、足ダメみたいだから」

倒れた時に、少しぶつけたようで兄ちゃんにも負けないほど痛い顔をしているだろうオレ。

「えっ・・・足って、どうなってる？」

「こんなです・・・ちよつと、歩けない感じ」

オレの足を見て、痛そうな顔・・・見るだけで痛いよな、これ。

「ひどいなあ。病院行かないと。遅れるって成仁に電話してくるわ」

「いいよ、そんなの。どうにかするから、の前にごはん・・・」

朝はちゃんと食べるって決めて毎日作っていたのに。

「こんな時でも律儀だなあ、今日はオレが作るし・・・って、昭次くんどうしてくれるかな？」

いつまでも乗っかっているオレ、そうでした。

ゆっくりと足を下ろそうとした、瞬間「あ、いい、いい。動くな」

そういうと腕を取り肩へと担がれる、軽がると持たれそのまま進んでいく。

「人を荷物みたいに持つなよっ。着替えてないんだから部屋でいいのに」

「持ってきてやるよそんなの、座ってる」

結局キッチンまで運ばれた・・・オレってそんなに軽いかな、ちよつとシヨック。

「今日は休めば、昭」

軽い食事を作りながら大人しく座っているオレを振り返る兄。

「これじゃ行っても迷惑かな・・・休もうかな」

「そういうとこまじめだよな。オレなんか理由なくよくさぼってたぞ」

「兄ちゃんと同じにしないでよ」

「どういうことだよ、失礼な」

怒ってますけど、この人結構なやんちゃものだったと思いますけども。

「小学生のオレが見ても普通ではなかったと思ったけど？でも、オ

レのことちゃんと面倒みてくれてたし、どうなんだろう」

振り返って見る兄のいやなそう顔、なんだよ誉めてあげたのに。

「そういうところはまじめだったってことじゃない？」

「そりゃあ、小さいおまえをほっとけるほどひどいやつではないよオレも」

ほら、出来たぞと出される食事を手を合わせ頂いた、なんだか照れているようだ、小さく笑う。

でも、ホントにどうしようかなあ。

一人で病院に行けるだろうか・・・兄ちゃんに連れてってもらうと仕事に支障だし。

この際、しょうがないかなあ。

チラリと兄を見ると「まだからかいたりないのか？」と膨れて笑ってる、気にしていたとは。

「や、なんでもないですよ。ほら兄ちゃんも早く食べないと。遅刻するよ」

「あ、それな・・・やっぱ、電話・・・」

言いかけた時、玄関のチャイムが響く。

誰だろこんな時間から、二人で顔を見合わせ首を傾げた。

「はい。どちら様ですか？」

インターホン、聞くと意外な人の返事が返って来た。

『おはようございます、井川です。昨日お邪魔した・・・早くにすいません』

「ああ、昨日の。ちよつと待ってね」

「昭次。昨日来た井川くんだけど」

「え？なんで。ちょ、待ってオレも行く」

兄ちゃんの肩に後ろから掴まって、急ぎ足で玄関に出るとホントに井川くんが立っていた。

「おはようございます。ちょっと加賀くんの足、心配で」

「え？心配で来てくれたの？・・ったあ」

思わず乗り出して顔を顔を出すと、不覚にも痛い足をついてしまい・
・痛い表情のオレ。

「やっぱり昨日より、ひどいんじゃない？」

兄にしがみついて苦しんでるオレに心配そうに声をかけてくれる井川くん。

「だ、だいじょうぶ。今日は大事とって、休もうかと思ってるからせつかく来てくれたのにごめんな」

「休むんだ、そうだよ。病院は、行かないの？」

「うん、行こうとは思ってる。ちょっと一人じゃ無理だから・・困ってるんだけどね」

連れてつてくれるようなことさっき兄ちゃん言ってたけど、チラリと兄を見るとなにを困ってるのとちよつと怖い顔。

オレがそんな薄情に見えるのかと言ってるようです。

「よかったら・・オレが、連れてきましようか？」

またも意外なセリフが聞こえ、二人してえ？つと聞き返してる。

「えっ？井川くんが？学校でしょ、ダメだよそんなの」

「そんな迷惑かけられないって」

「大丈夫だよ、ちゃんと理由あるし。自転車だから移動楽でしょ」

たしかにそうしてくれるならなんの心配もなくなるってものだけど・

「けど・・・」

「ホントいいよ。心配だったから来たんだし、役にたてたらうれしいよ?」

にこりと手伝わしてくれといわんだかりの笑顔、なんか眩しいよ君。

その笑顔にやられたのか決断したのは、兄だった。

「ここはご好意に甘えるか? 井川くん、ホントにいいの?」

「はい、僕は全然大丈夫です・・・でも、加賀くんが、嫌そうな顔」

ふいに笑顔が陰る、え? オレ? そんな顔してないでしょ! 思わず思いきり首を振ってた。

「嫌なんて思ってないよ、昨日も迷惑かけたのに・・・いいのかなあ
っと思っで・・・」

「僕が勝手にやってることなんだから気にしないで」

にこにこの井川くんにつられて笑ってるオレたち、はっと時計を見るともう結構やばい時間。

「兄ちゃん、時間」

「お、おお。やば、ちょっと失礼」

言いながら慌てて二階に駆けていく兄、そんな姿に思わず苦笑い。

「ごめんなあ、慌しくて。井川くん中入ってて。兄ちゃん出たからでもいいかな」

「うん。大丈夫。じゃ、おじゃまします」

遠慮がちに上がるとさり気なくオレに肩を貸してくれる・・・なんか、ホントに出来た人だな。

「朝から元気だね加賀くんち。うらやましいよ」

「うるさいだけでしょ?」

笑いながらリビングのソファへ座ると、ふいに井川くんの表情が曇った気がした。

「ごめんね余計なこと。せっかくだったから、役に立ちたくて。迷惑だった？」

また大きく首を振ってるオレ、さつきからこんなんばつかじゃねオレって。

「そんなこと・井川くんは気が利く人だなあって感動してたのに」「そうならよかった」

見るからにほっとしてる井川くんに、内心ちよっと思うところはあった。

実際なんでこんなに親切に親切にしてくれるのか、オレはつきり言っただけあんま面識ないんだよね。

あんまりというか、まったく言っただけが正しいかもしれない。

昨日のことは別に井川くんが悪いなんてこと全然ないし・悪いことしなかったかな、い合わせたことで気にさせなかったわけだから・

「昭次、じゃ行ってくれるけど。井川くんホント申し訳ない変なことで頼んじゃって」

「いえ！全然。ちゃんと連れてきますので安心してください」

ぽんと井川くんの頭を撫でると、任せたと笑う兄ちゃん・ちよっとな、子供じゃないんだから。

止めようとしたら井川くんがちよっとうれしそうだったので、まあいいか。

「いつてらっしゃい気をつけて。まったく落ち着きのない人でごめんね」

「うっん。うらやましい、僕も兄弟ほしかったんだ。だからあこが

れるお兄ちゃんって」

「そんなもんかなあ。あつけど、神崎さんだっけ？隣にいるじゃんやさしい兄さん」

そうだよ、あの人のがなんか優しそうで落ちついてていいんじゃない？

まあうちの兄も悪くはないと思うけど。

「俊兄は。やっぱり本物とは違うじゃない。それにあの人初めすごく怖かったんだよ」

「怖いって・・昨日みたいなこと？たしかに怖いけど、怒ってる時だけじゃないの」

見た目あんなに爽やかなのに、普段怖いという想像ができないんだけど。

「違うんだよそれが。僕が初めて会ったのなんて・・えーっと、十歳の時。怖いなんてもんじゃなかったよ、今なんて考えもできないくらい、荒れてて・・ちょっと普通じゃなかったよ」

「普通じゃない・・って？」

「荒んでたっていうといいかも・・近寄れなかった。俊兄のお母さん病気だったみたいで、いろいろ大変だったと思うんだけど」

一気に興味が沸いた、あの温厚そうな神崎さんの昔・・うちの兄も、普通ではなかったのだからわからないけど、どうも質が違いそう。

少し思い出して、苦い顔してる井川くん・・やっぱり、想像できないんですけど。

エピソード1

7・忍と俊（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉、重い病気で入院している。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

「井川忍」昭次の同級生、俊とは家が隣同士で慕っている。

「相田武・武威直人」昭次の親友。

「関義斗」俊のケンカ仲間、昭次やはじめとの関係は？

エピソード1

7・忍と俊

僕の態度、最悪だったと思う・・・

兄弟に憧れてて、隣に引っ越してきた家族にお兄さんがいるって聞いてすごく喜んでた自分は覚えている。

それなのに・・・

「ホントに？ホントに隣にお兄ちゃん来たの？」

「来たよ。今からあいさつ行くからついて来る？」

「行くつ、それで僕の兄ちゃんになってもらうんだあ」

「そんな簡単になれるものじゃないんだから、へんなこと言っちゃダメよ」

隣の家の引っ越しが終わったと知り、挨拶に行く母に引っ付いて行った。

絶対お兄ちゃんになってもらうと決めていたから頼の言葉なんてなにも聞こえていなかったようだ。

小さかったから、言ってることも理解できていなかったのだと思う。

ピンポン・・・

わくわくして母の後ろ、覗いていると出てきたのは・・・おつきな頭の尖った、怖い顔した人。

「あ、の。隣のものですけど・・・あいさつに、お一人ですか？」

「ちよう、今寝とるから・・・またにしてもらええですか、こっちらあいさつ行くんで」

この人が、お兄ちゃん？・・あまりに描いていた人と違った、もつと笑顔でやさしそうな・・思わず後ずさると思いきり叫んだ。

「・・僕の兄ちゃんはこんなのと違う、兄ちゃん失格だよお」

「こら、忍っ。なんてこと言うの、お兄さんに謝りなさい」

「ホントのことだもん、おかしいんだもんしゃべり方、変だよっ変！兄ちゃんじゃないっ」

言い捨てると、家に逃げるように帰った。

そのあと母にすごく怒られたの覚えてる、あんないい人になんてこと言うのだと。

関西というものを知らないガキだった・・ひどいことを言った後、しばらく逃げていた僕に責めることもなく普通に接してくれてた俊兄・・すでに大人だったのだろう。

「子供から見たら大人の男の人は怖いものじゃん、そう思ってただけじゃない？」

「違うよお、あの人はすごく引っ越してくる前は悪かったと思うよ」

「なんでなんで、その根拠は？なんかあったの？おもしろそう」

乗り出してくる加賀くんに苦笑い、おもしろくは、ないんだけどね・・まだ信じてないもんね。

まあ今の俊兄からはあんまり想像できないし、しかたないんだけど。

ある日の夜中、寝つけなくてトイレに立った時、バイクの音が響いてた。

何事だと恐る恐る外を覗いた、そこには一台のバイクが止まっていた・・隣の家の前。

少しするとそのうるさい音に怒鳴って出てくる神崎の姿。

「うるさいわっ誰や・・・って、関？」

驚いて立ち止まる神崎、そこにいたのは引越す前に住んでいたところで対立していた関義斗。

「なんやおとなしなつたちゅうて聞いたのに、あいかわらずやの神崎。あいさつに來たで」

「あいさつなんかいらんわい、うるさいわバイク止めっ。近所迷惑やろっ」

駆け寄って殴りかかる神崎、その手を軽く受ける関。

「おまえの口から迷惑なんて言葉聞けるとは思わなかったわ、散々人に迷惑かけとつたやつがよう言いっわ」

「オレはもう引退したんや、おまえもええかげん落ち着いたらどうや」

「まだ二十歳にもなつてへん。落ち着く？かわいいこというやないかあ神崎い」

神崎の腕を押さえたまま睨み合う二人。

「おまえんとこのやつらもうあかんで、ケンカもできんようになつとるし。頭の病気が移つたらしい」

「ええかげんに、だまらんかいっ」

腕を振り解き、反動で関の頬を殴りに行くと今度はよけきれずパンチが入る。

バイクから転げ落ちると頬押さえ立ちあがる関。

「・・・いったあ。ホンマのこと言われてキレとつたら世話ない、でっ！」

お返しとばかりに神崎へ殴りかかる関・・・殴り合いが始まった。

「・・・あいかわらず、やなあ関」

「おまえこそ手が早すぎなんじゃ」

殴り合いながらも、なにかをぶつけるように言葉を交わす二人。

「むかつくことばっか言うからや、ほっとけや人のことは・・・」

「オレの相手になるやつがおらんようになったんじゃ、勝手に引越
しやあがつて」

「おまえに了解とらななんいわれはないわっ」

「一言くらいあいさつしてかんかい、ぼけっ」

しばし殴りあう二人、疲れて倒れこんだ。

「まったく、なにしに來たんじゃ・・・疲れるわ、おまえとのケンカ
はっ」

「・・・こんだけ殴つといてなにしに來たやないわっ」

「まさか、本気でケンカしに來た言うんじゃない、わな？」

無言で立ち上がり、バイクにまたがる閑。

「乗れや。ひさしぶりに飛ばそうで」

神崎も無言のまま、後ろにまたがった・・・夜の街にバイクの音が響
いた。

・・・

「あんまり聞こえなかったし、怖くてすぐ見るのやめたんだけど・・・
本気でケンカしてた。今を思うとわかんないと思うけど、前は見た
まんま怖い人だったよ。こんな仲良くなれるなんて思わなかったし」
いつからだっただろう、あの人から怖い空気がなくなったのは・・・
覚えがあるのは、たしか俊兄のお母さんが亡くなったあたりから変
わっていった気がする。

「あの人がそんなことするなんて、やっぱちょっとムリあるよね。あつやばい、ゆつくりしすぎた、オレ着替えてくる。早くしないと学校行けなくなっちゃうよ」

現実に戻される声、時計を見ると確かに結構時間がたっていた。

べつに学校なんて行けなくてもいいんだけど・・・行っただけでつまんないし。

せつかく、昭次くん・・・と、こんなに仲よくなれてしゃべってられるのに・・・

「おまたせ。それじゃお願いできますか？病院すぐ近くだから」

「・・・うん。じゃ、行こか」

ゆつくりと自転車を漕ぎながら、なにかもやもやする気持ちが胸を小さく痛めた。

その頃、成仁の姉、幸の診断中。

「先生、今日は大丈夫かな・・・私の身体」

聴診器をあてながら、小さく相槌を打つ担当医。

「大丈夫、最近調子よさそうだな幸くん。なんだ？今日はなんかあるのか」

「うん。弟の勤め先の人に来てくれるっていうから、ちゃんとあいさつしたいじゃない」

「そうか、そりゃ姉としてしっかりしないと。あんまり騒ぐのはなしだぞ」

「騒ぐわけないでしょ、私はいつも静かです」

「そうだな」

笑って出て行く先生、ふくれる幸・・・ドアの向こうを見つめた。

「・・・先生って、ホント嘘下手」

笑いながら病室を出た、静かに廊下を歩きながら小さく呟く。

「今日、調子のよさそうなのはホント・・・だけど」

いつひどくなるなんて・・・オレにもわからない、すぐにもおかしくないこと。

先日、神崎さんに話してしまったこと少し後悔してきていた、あの子には辛い現実だ・・・母と同じ病気で亡くしているというのに。

帰りに会った時つらそうだった・・・今日はちゃんと来てくれるか、心配だ。

「幸くん・・・気をしっかり持って、な・・・」

祈るように病室の方向を見つめた・・・

朝のことを思い出して仕事中、笑ってしまうはじめ。

「井川くんにはびっくりしたなあ」

「へ？なんの話？」

本の整理しながら振り返る成仁に、はっと我に返る。

「あつ、すまん。一人ごと」

「でかい声でなにが一人ごとですか。井川がなんだって？」

「いやね、いい子だと思ってな。びっくりしたよ、朝昨日のことが気になったって迎えに来てくれてなあの子」

すごいだろ？と成仁を見ると、なぜか嫌そうな顔して見てくる・・・なぜ。

「・・・すごいっていうか、怖くないそれ。昨日の話だと昭次くん

とクラス違うし初めてしゃべったとかなんでしょ？それなのに気になつてつて・・・ありえないでしょう」

「・・・どういう意味？」

成仁の言ってることがいまいちわからなく、確かにそんな繊細な友達は今までのいなかったけど。

「だからあ・・・」

なんて言っているのかわからずしばし考えてる成仁、はじめは首を傾げてた。

「だから？なんだよ、意味深だなあ」

「だからな、友達になりたくて井川が昭次くんのことずっと見てたんだなあってこと。忘れられないように会いにきたんでしょ、朝から」

朝から会いに来るって、おかしとは思わなかったのかこの人たちは、あきれたようにはじめを見る成仁。

「はあ、なるほど。けどそんなバカじゃないようちの昭次」

「わかってないよね？なんか嫌な予感するけどなあオレ。大丈夫、昭次くん任せてきて」

「なにがよ、いいに決まってるだろ。昭次だってもう友達って言ってたし、嫌な予感ってなんだよ。あのおとなしそうな子、昭次のが強そうだろ」

検討違いの心配をしているはじめにちよつとがっくりする成仁。

「やっぱ、わかってない・・・」

まあオレの憶測だし、そういう気使いな子もいるだろうから余計な心配だろう。

相手が昭次くんならしっかりしてるから。

「昭次くんは大丈夫なんですね？」

「おう。医者行って家で休んでればたいしたことないだろうから」

「じゃ今日、姉ちゃんとこ寄れますか？」

「そのつもりだよ、約束だからな。オレはいいけど、今日行っても大丈夫そうか？身体のはうは」

「・・・うん。最近は体調よさそうで、姉ちゃんも楽しみにしてるから」

瞬間、表情が沈む成仁に気づかないはじめではない、元氣そうに見えても成仁には不安があるのだろう。

「そうか。疲れさせないように早めに帰るから、頼むな。昭次のほうも氣になるし」

「姉ちゃんは平気だけどね、昭次くんは確かに心配だ。長くなりそうになったらちゃんと止めるから安心してよ」

お客さんが来て慌ててレジへと走っていく成仁。

成仁を目で追っていた・・・最近、なんだか元氣がなくあいつまで倒れそうで。

だけどオレにはなにもしてやれることなんてなかった、成仁の不安なんて消してやれない。

せめて元氣づけられるように、少しでも役にたてればと思う・・・オレがお姉さんに会うことが少しでも二人の力になればいいと思った。

「なんだか、おおげさじゃない、これ・・・」

「しょうがないよ、歩けないんだから」

病院の待合室、松葉杖を渡された昭次が嫌そうにそれを脇に抱えていた。

病院は少し込んでいて、結構な時間が過ぎていたのに気づく昭次。

「井川くん学校よかったの？待ってなくてもよかったのに」

「・・・ごめん、迷惑だったかな・・・」

また、おかしい答えが返ってきて焦る。

「違っつてば、そういうことじゃなくて迷惑とかないし。あつ、井川くんも学校さぼりたかった？」

ちよっとおどけてみた、それがなにか気に障ったのか・・・

「・・・わかった、もう行くよ。足、気をつけてね・・・じゃ、さよなら」

「あつ、ちよ待って。なんか気悪くした？・・・ちよっ」と

呼ぶ声もむなしく、去っていく後ろ姿を見つめて首を傾げた。

なんか変なこと言っただけかなあ、これ以上遅刻すると悪いかと思っただけなんだけど・・・行きたくなかったのかもホントに。

井川くんのこと全然知らなくて、言われたくないこと言っちゃったのかもしれない。

ちゃんとお礼も言っていない・・・怒らせちゃったみたいだし。

明日、謝ろうと思った・・・ところで、井川くんって何組だ？

松葉杖をつきながら家に向かう、長い道のりいろいろと考え込む昭次だった。

エピソード1

8・俊と幸・昭次とダチ（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉、重い病気で入院している。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

「井川忍」昭次の同級生、俊とは家が隣同士で慕っている。

「相田武・武威直人」昭次の親友。

「関義斗」俊のケンカ仲間、昭次やはじめとの関係は？

神崎は、病院の前立ち止まっていた。

主治医の言葉が胸を締め、足を引きとめている・

幸には会いたい、だけど怖い・母のことを思い出しそつや、から

母が倒れた日、オレはうちにおらんかった・その日だけじゃない、ほとんどうちには帰ってなかった。

母のことを数時間後に聞き、慌てて行きつけの病院へバイクを走らせる。

階段を駆け上がり、病室のドアを思い切り開けた。

「・・・ばばあつ、平気かつ」

「こらつ。病院は走るんやない、ドアは静かにあけんかいつ、それに母のことをばばあとはっなんや」

入るなりおもいきり頭を叩かれた、その人物は小さい頃から世話になつていた医者。

「ったあ。あわてとつたんや、このクソジジ」

もう一度飛んでくる手を、ひょいと避ける。

「おまえだきやあホンマに、そんなんやから母さんも倒れるんやで」はつと母を見ると、今は意識があるようでオレたちの会話に小さく笑っていた。

「そつじゃ、おかんは平気なんか？急にどうしたんや」

「・・・急にやないよ、おかあさんのことなんかしらんやろ。ずっと

悪かったんよ、あんたには期待なんかしらんけど・・・心配してくれたんね、めずらしく」

「なに言っんや、気にぐらいしとるわ。で、先生どうなん。容態は」
「ええ、とは言えんわ。おまえは知らんやろうけどよう来とるんやで母さん、おまえ家にも帰らんでなにやつとるんじや。バイク乗りまわしてケンカばつかしとらんとちゃんと帰らんかい。体弱いんやから母さんは」

「そんなもんしらんかった・・・そんな悪いんか」
よく見ると母は、ひどくやせていた・・・こんなに小さかっただろうが。

「そんなことあらへんよ。大丈夫やそんな顔せんでも、いつものことや」

「な、なんや、そうか。あわててくることやなかったんやな、あんまびつくりさせんでくれや」

小さく笑う母だが、先生はむずかしい顔をしてた・・・それが母のウソだというのはオレにだってわかった。

その後、容態が悪化し・・・大きな病院に移動したんやけど、母がこつちで生活したんわ一ヶ月もなかったな

「あいつはおかんとは違う・・・大丈夫じゃ、大丈夫」

自分に言い聞かすようにつぶやくと病院の中へ入って行った・・・

「あつ、どうしたの。今日は早くない？仕事さぼったんじやないでしょうねえ」

「なんや起きとったんか。寝とらなあかんで？昼寝の時間やろ」

「べつにそんなの決まってるじゃないです、今日は気分いいから。それに緊張してるのよ実は」

笑う幸の表情は本当に具合がよさそうで安心した。

「そんならええけど、なんで緊張？加賀さんみえるからか？」

「そうよあ、他にないでしょ。いまさら俊に緊張なんかしないし」

「そんなこといつてへんでしょ。オレ昨日会ったで加賀さんと弟くん」

ふいに告げる言葉は幸にとって重大事件のような驚き方、言わんかったほうがよかったか？

「なんでえーひどい。私だけのけもの。なによあ、私をさしおいてどんな人だった？」

「ええ人やったよ、ごはんまでご馳走になっただけ。成も一緒やったからわかったんやけど」

昨日のことを軽く説明した、ケンカしたとかはなしで・・・幸は心配性やから。

「・・・信じられない、なんて偶然なのよ。で、ちゃんとあいさつしてくれただけ？」

「そりゃしたよ、でもおまえの言うことなくなるとあかんからそんなしてないかも・・・したようなしんような、よう考えると自分のことしか言つとらんかも」

「だめじゃないのあ。いちおう成仁の兄だっと思ってるのは、私だけ？・・・さみしいなあ」

「なに言つとるんや。オレもそう思つとるで」

勢いで大声を出してしまい、言ったセリフも合わせて一気に赤くなる頬・・・隠すように顔を背けると小さく笑っている幸。

「・・・頼りにしてるんだから、頼みますよ神崎さん」

「あほ、なに他人行儀なこといつとるんや。おまえのことも成のこともオレにまかせときゃええ、頼りにしとりゃええ」

「うん・・・」

ポンと幸の頭を撫でるとうれしそうに腕を取り寄り添う二人・・・幸の瞳が小さく揺れていた。

それがなにを意味するのか、考えるのがイヤで抱きしめながら不安をかき消した。

なにも心配なんかいらんから・・・おまえは、大丈夫や。

心の中で、何度も呟く俊だった。

昭次を病院へ送り、遅刻をして学校へついた井川忍。

職員室へ呼び出され遅刻の理由を聞かれた時、病院へ付き添っていたと答えた井川、どこか様子がおかしかった。

「2組の加賀くん・・・朝、呼ばれて。連れてったんです」

「呼ばれて？・・・どういふことがよくわからんけど。なんで井川が」

「・・・知らないですけど」

「加賀がねえ・・・そういうことするやつじゃないんだけどなあいつは」

あいつにも聞いてみるからと帰される井川、唇を噛んで出て行く。

「おい井川。なんでそこに昭次の名前が出てくる」

職員室のドアを開けると廊下で聞いていたのだろうか、昭次の親友・相田が呼び止める。

一緒にいた武威も後ろから睨んでいた。

「なにが・・・」

笑顔もなく、静かに答える井川。

「おまえ加賀となんか親しくないだろ、あいつ今日休みで・・・なんか知ってそうだな井川」

「べつに、知らないけど」

「うそつけ、さっき昭次と一緒にたつて聞こえたぞ」

詰め寄る二人、うざそうに去ろうとする井川の進む先へ立ち睨み合った。

「おまえ・・・加賀にもなんかする気が」

「・・・昭次がなにかしたのかよ」

睨みつける二人に静かに背中を向ける井川。

「なんだよ、それ。僕がなにをするっていうの。言いがかりもいいとこだな」

「ちよつと待てっ。昭次はどこ行っただんだよ」

「・・・病院。さっき言っただろ、聞いてたんでしょ？加賀くんのお友達さん」

意味深に笑いながら行ってしまう井川を悔しげに見つめてる二人。

「あいつ・・・絶対なんか、あるぞ」

「・・・昭次んち電話してみる。あいつは・・・井川はなに考えてるかわかんねえからな」

相田は井川を知っていた。

中学が同じでクラスも一緒だったけどいつも一人静かにしてるやつで・・・

オレの友達が一人そんな井川に声をかけたのがきつかけで二人は仲良くなつていつてた、いつかそいつが言った「井川って、いいやつなんだけど・・よすぎて怖い」って。

そいつは高校で離れてった、井川の追いかけてこれないくらい遠い学校に・・なにがあつたんか聞いてはいないけど見てはいた二人でいる時を・・あいつがいう意味がよくわかる。

楽しそうに見えたけど、あの時はもう怖かつたんだと思う・・
ひつついて離れない井川の姿、オレも覚えてるから

「たぶん昭次が気に入られたんだと思う・・友達選ぶのは昭次の自由だけど、あいつは気を付けろつてくらい言っておかないと。あいつのことだから平気だとは思うけど。頼もしい兄ちゃんいるし」

「確かに。怖いよなああの兄ちゃん。加賀もキレリやにたようなもんだけど、似たもの兄弟」

笑いながら教室に帰つていく武威を見送り、相田は裏庭で電話をかけた。

「・・出ないし。家にいないのか？」

しばらくかけつづけていると、思いのほか軽い昭次の声が返つて来た。

『あれ？武、どうしたの。今、授業でしょ？』

「サボつてるおまえに言われたくないね。どうしたんだよ今日は、気まぐれか？」

『今日はサボリじゃないって、ちょっと足ケガしてよ。松葉杖使つてんの、重症よ』

ふいにさっき聞いた井川の話とダブる、本当のことだったのか？

「けが？なにやつたんだよ、大丈夫か」

『ああ、ホントはたいしたことないし』

重症つてのはウソだよと笑っている・・・どこも変なところはないらしい、思い過ごしだろうか。

「おまえ、今日井川つてやつと会ったか？」

『井川くん？会ったよ』

「え？おまえあいつと面識あったか？」

『なかったけど。昨日オレ早く帰っただろ、その後ヤンキーにからまれてさ。それでケガしたんだけど。その時助け呼んでくれたのが井川くん』

「そう、か・・・で、今日はなんで？朝から会うのはおかしくないか？」

『たしかに、気にしすぎなんだよ。オレの足が心配で迎えに来てくれて。なんか自分のせいだと思ってる。病院送ってくれた。で、なんか怒らせちゃって・・・学校行ったのかなあ』

ちよつと力が抜ける・・・面識ないやつにそこまでされておかしいとかないのかよおまえはあ。

「・・・来てるよ井川。昭次い、ちよつとはへんに思えよ。いくら親切だからって仲良くもないやつがそこまでしてくれるのは、なんかあるだろ」

『なんかつてなに？確かにここまでしなくてもって思ったけど』

ちよつとはおかしく思ってたよ・・・しかし、無知は怖いなあ、純粹というのか。

「あんまり深入りすんなよ。なんかあったらすぐ相談しろ」

『だからなんかつてなによ。井川くんおまえになんかしたのか？そんな警戒しちゃって』

「あいつと中学一緒だったけど、おまえみたいな友達いなかったからびつくりしたただけ。おまえはホント誰にでもついてくからなあ・ちよつと心配になっただけ」

『人を子供みたく言うな。悪い人にはついていけないの』

「人見る目はあるって信じてるからな。じゃ足早よ治せよ」

意味わかんないと笑いながら、明日は行けると思うからと切れる通話。

電話を見つめてため息をつく相田、昭次も心配だけど・井川も、心配だった。

「まんまとはめられたって感じだな・井川、同じ失敗すんなよ。頼むから」

井川と仲良かったやつもオレとは親友で、辛そうなところを見ているだけに・やるせない気持ちに胸を打った、あいつらのことしっかり見ててやろうと思った。

おかしなことを告げて切れた電話をこちらでも眺めていた。

「武のやつはなにが言いたかったんだか・井川くん悪い子と違うけどな。けどちゃんと学校行ってるみたいでよかった」

武が井川くんのなにを知ってるのかはわからないけどオレには悪い人には見えなかったし。

たしかに昨日今日知り合った人にそこまでするかと言われたらオレはしないけど・そこが井川くんのやさしさなんだと思うから。

せっかくみんな知り合いついていう不思議な偶然の出会い、そんなこと疑いたくない・

「まだ知り合つたばつかなんだから。考えるのも変、明日会つたらまず謝ることからだよ」

みんな仲良く、それが一番だと一人燃える昭次だった。

「終わった、終わった」

カウンターで大きく伸びをしてる成仁にはじめがパシリとツツコミをいれる。

「なにするんですかぁ。終わったでしょ」

「まだ。今日は大事な用だって店長にお願いしたんだから交代までちゃんとやれ。まだ来てないぞ」

「はいはい。わかってますよ・・遅いな、店長さんっ」

玄關のあたりをうろろしてる成仁、レジをしながら小さく笑うはじめ。

待望の店長登場に目に見えてうれしそうな姿に吹き出す。

「遅れてすまん。昭次くんにせかされた」

「すみません、頼んどいて・・成仁、お願いしてる身だぞ」

叩かれる前に逃げてく成仁、ホントに子供だなこういふことは・・昭次とかわからないぞ。

「まあまあ、姉ちゃんとい行くんだろおまえも。早く会わせたいんじゃないか、どっちを自慢したいのかはわからんが」

「そりゃ姉に決まってるでしょ、まったくガキなんだから」

すでに帰る用意をすませて出てくる成仁、あきれたように睨みつけた。

「まだだつて言ってるだろ、給料やらねえぞ」

「ありえねえよそれは。店長来たら終わりって言いましたよさっき」

まったく悪気がないだけに、わなわなと怒りが湧き出てくる・・・どうしてくれようか。

「元気そうでよかった、早くいつてあげなさい。ここはまかせて」
大人な店長・・・気持ちにはわかるような気もするので、今日のところは店長に免じて許してやるか。

「ホント申し訳ないです、あとでバイトの子も来ますんで。お先に失礼させてもらいます。帰りによりますから、遅くなったら電話入れます」

荷物を取り急いで店を後にした、なんだかはずかしいのはなぜだろう・・・成仁のせいだ。

「もう信じられないんですけど成仁おー！。もうちょっと大人になれよ」

自分でも悪いとは思っているようで困り顔の成仁。

「すみません。だって早くしないと面会時間なくなっちゃいます。早く会わせたいもん、姉ちゃんに加賀さんのこと」

「オレ？オレに姉ちゃん会わせたい、だろ？自慢の姉」

「違いますよ、加賀さんを、です。昭次くんには悪いけどオレ、兄みたいに思ってる加賀さんのこと」

「・・・え？」

思いがけないセリフに、思わず聞き返してしまう・・・だって、おまえ・・・神崎さんが。

「そう思ってた・・・迷惑でしたか？」

「迷惑なんてあるか、おまえそんな素振り全然なかっただろ・・・びっくりした」

照れたように先を歩く成仁をまだ驚いて見てるはじめ。

本当に驚いた、そうならいいと思ってたけど・・・ホントにそう思ってくれてたなんて。

神崎さんの存在を知ってからよけいに思わなくなった時に言うから。

「オレでよければ喜んで兄貴やるよ。手のやける弟は一人も二人もかわらないのでね」

照れてる成仁の肩を抱くと、心からそう言う。

うれしい気持ちがすぐく湧き出てくる、こんなうれしいことだとは思わなかった・・・慕われてることが。

「そりやどうも。けどホントの兄にはならないでね、姉ちゃんに惚れたらダメだからね」

見上げる成仁がまたすごいことを言うものだから、固まってしまった・・・次の瞬間、二人で大笑い。

「当たり前だろ。それくらいわきまえてます」

「まあ先輩くらいいくと姉ちゃんなんか許容範囲じゃないだろうけど」

「そういうことじゃないの。神崎さんにチクルぞ」

「それは、やめて。マジで怖いから」

また笑った、二人それぞれの不安を思いながら・・・それを考えないように明るく、病院へと入っていった。

エピソード1

9・幸と兄（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉、重い病気で入院している。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

病室の前、後ろの加賀へ視線を向ける成仁、小さくお願いをしドアをノックした。

中からドアが開く、そこには神崎が立っていた。

「あっ、成。幸、寝てしまつてな・・さっきまで楽しみや言つて起きとつたんやけど」

「・・こんにちは」

「あっ、加賀さん。一緒やつたんですか。幸、起こさな」

慌てて止めるはじめ。

「いいです、いいです。オレのせいで疲れさせてたかもですし」

「だけど寝るつて・・すいません、せつかなのに」

せつかく早く来たのに、思わず姉にキツイ視線を飛ばすとポンと成仁の頭を撫でる手。

「気にしてないつて。そんな顔するなよ、かわいそうだろ姉ちゃん」

「とりあえずそんなとこ立つとらんと座つて。すぐ起きると思うから」

「時間大丈夫？オレお茶でも買つて来るから、姉ちゃんのあほヅラでも眺めてて」

ひどいことを言い残し出てく成仁に苦笑いの二人。

「失礼なこと言うなよ、自分の姉ちゃんつかまえて」

「いつものことやわ、二人して口悪くて大変やで」

「そうなんですか？そんなふうには見えないですけど」

小さく笑う神崎。

「それ幸に聞かせてやりたいわ。ありがとう、けど見た目と違うから。へんなこと言ったらごめんな」

神崎さんの物言いに付き合いの長さを感じた、ずっとこの人を支えてきた強さを感じる。

「神崎さんたちは付き合い長そうですね」

「ああ、そうやね。知らん間に長なってた」

幸せそうに笑う顔にどこかさみしさを感じたのは気のせいだろうか。

「加賀さんはもてそうや。結婚はせんのですか？」

「いいですよ、もてませんし」

謙虚なはじめの言葉にうそでしょーとつつこむ神崎に大きく手を振る。

「ホントですつて。今は仕事と、家族で手いっぱいなんで」

「ああ・・・わかる、それは。オレはその家族もおらんくなっただけど・・・今は、こいつらおるからな」

ふいに、また空気が変わった・・・オレも大変だったけど、この人もきつとオレ以上に大変だったはず・・・今も。

「・・・いろいろ大変だと思いますけど、オレに出来る事なら協力しますから言ってください」

「・・・ありがと。大丈夫や、それより成仁のことお願いします。見かけによらず弱いところあるやる？」

さみしそうにそう呟く神崎にどっちも心配だと思った、成仁や彼女のことはかり考えていそうなこの人・・・一番、共感できるから。

「わかりました・・・けど、神崎さんも頼りにしてくれていいから。もうそのつもりだからさ」

小さく笑い頷く神崎に、はじめも小さく微笑む・・・少しやわらかな空気が流れた。

ドアの外、いつの間にか帰ってきていた成仁、ずっと話を聞いていた。

一つ呼吸を整え、勢いよくドアを開く・・・二人の優しさに胸が苦しくて。

「おまたせ。買ってきた、はいどうぞ」

「サンキュー」

「ありがとう」

笑顔の二人を見て、気持ちがそのまま口に出てしまった。

「・・・オレ、そんなに弱くないからさ・・・姉ちゃんもそうだと思うよ」

ふいに呟く成仁に顔を見合わせてバツの悪い二人、小さく微笑む。

「聞いたったんか？」

頷く成仁が照れて壁側の椅子へ離れて座る。

「そうだな、大事な人守るのに弱いなんて言ってられないよな、悪い」

「そうだよ・・・」

立ちあがって成仁の前に立つ神崎、ポンと頭を叩く。

「アホ、強がりよって・・・」

「強がってないよ、ホントにそうなの」

「・・・私だって、弱くなんかないよ」

「幸・・・起きてたんか？」

ゆつくりと起きあがる幸に慌てて手を貸す神崎、自分の弱音を聞かれてしまったと俯く成仁。

はじめが気づき、さり気なく成仁の前に立ちあがる。

「今、起きたとこ・・加賀さん？申し訳ないです、せっかく来てもらいましたのに」

「いえ、オレこそすいません・・起こしちゃいましたね」

「起こしてくれてよかったのに」

「起こさなくていいって加賀さんが気使ってくれたんだよ」

チラリと成仁を見る幸、成仁の仏頂面に小さく笑った。

「遅れましたが、いつも弟がお世話になってます。これからもうぞお願いします」

「いえこちらこそ。助かってますよ成仁くんには」

「そうですか。よかったわね成仁」

神崎と成仁、顔を見合わせて笑い出す。

なぜ笑っているのかとびっくりしてるはじめ、幸は予想がついて睨んでいる。

「気持ち悪いなあ。へんなしゃべり方すんなよ」

「成仁・・状況考えなさい。もう余計なこと言わないでよ、人がせつかくがんばってるのに・・あっ」

大きな声で反応してしまい口を押える幸、そんな幸を見て微笑んでるはじめ。

「そんな気使わないで、普通でいいですよ。オレもそのほうが来やすいし、気使うと疲れますよ」

「加賀さんまでなんか変。もっと楽しいたらいいのに」

「ホントにお子様だなおまえは。初めはしっかりしないとダメだろ、

おまえもちゃんと紹介しろっ・・・失礼」

幸の前でいつものごとく成仁につっこんでしまう手、思わず謝ってるはじめ。

「いいですよ。どんどんやってください」

幸は頼もしいと喜んでいた。

「今更紹介もないんだけど・・・先輩の加賀はじめさん、オレの恩人みたいなもんかな？」

「大袈裟な。オレはおまえが姉ちゃんのために働きたいって言うからお世話しただけ」

意味深に笑いながら言うはじめ、思わぬセリフにびっくりして慌てて止めてる成仁。

「そ、そんなこと言ってない、言ってないって。話作らないでくださいよ」

なに照れてんだよ、笑ってるはじめと応戦してる成仁をよそに、大きく頷いてる幸。

「それは当然よね、あんたのせいで姉ちゃんどれだけ苦労したか。これからはこっちの番でしょ？」

「成仁相当迷惑かけたらしいからの。そんなに言わな幸もわり合わんよな」

「まったく。おまえの素行の悪さは有名でしたからね」

昔のことを思い出しみんなで苦い顔をした、成仁はかなり痛そうに顔を覆う。

「みんなで言わなくてもわかってるよ。がんばってるじゃんオレ」
すねる成仁に笑いが響く部屋。

「私も早く良くなるから、がんばってちょうだい。また私が世話し

てあげるし」

「そうですね。幸さんはいつごろ退院できる予定なんですか。調子よさそうですね？」

ふいに出る質問に神崎は固まり、成仁は不安そうに幸を見る・・・しまったと内心焦るはじめ、まずいこと聞いたか。

幸はなんでもないように小さく笑う。

「最近結構いい感じなんですけど。頑固な先生につかれてるもんだから・・・まだわからないみたい」

「それは、大事をとってのことなんですよ。しっかり治してからのほうが安心ですし」

おかしな空気に、必死になってるはじめ。

成仁に同意を求めると慌てて頷いてる・・・オレってやつは、不安感じてたはずなのに。

「う、うん。そうだよ、また倒れたらオレ嫌だよ。しっかりすつきり完治してからでいいよ」

「自分は治ってるつもりなんだけど、ダメって言うから。すつきり治るのはまだってことなんかな？」

「・・・ゆっくりでええんよ、難しい病気なんや。ちゃんと先生の言うこと聞かんとあかんぞ」

「なんか、ごめんねみんなに心配かけてる・・・大丈夫私は丈夫だし、加賀さんもありがとう。ごめんなさいね」

「いえ・・・」

自分が不用意に出した言葉に本気で後悔しているはじめ、神崎が気づき肩を叩いて小さく微笑む。

はじめは小さく頭を下げた。

「加賀さんは・・・オレにとっては親代わりみたいな人なんだよ。だ

からそんな気を使わないでいいよ」

突然はじめに向けて言ったのか、みんなに言ったのか成仁が俯きながら告げる。

びつくりしてる幸と神崎、はじめは呆然と成仁を見ていた。

はじめのほうを見ながら幸は少しさみしそうな表情。

親変わりか・・成仁は父を知らない、だから気持ちはすぐわかるけど姉ちゃんもすっかり親やってきたつもりだったけどなあ・・父の変わりはやっぱ男の人じゃないと無理なんだよねきっと。

自分がむちゃしてた時に叱ってくれた、それだけでもう十分大事な存在なんだろう・・成仁にとってこの人は、私には無理だったことをしてくれた人。

「お姉さんを目の前にしてなにを言ってたんだよ、オレなんかなにもしてないし幸さんに比べたら」

「姉ちゃん姉ちゃんだよ、親じゃない。俊さんもなんか違うし・・」

「

「それはオレが老けてるっていうことかな？」

「そう、かもね」

暗くなりそうな雰囲気を変えるはじめの言葉に成仁も感じたように便乗して笑うみんな。

「失礼やぞ。加賀さんそんないつてへんでしょ？」

「まあこの中じゃ一番年上だとは思いますがけど・・」

「俊と同じくらいじゃないですか？ずばり二十四歳」

「へ？神崎さんオレと同じ歳なの？」

「ホンマそうなん？同じやん」

「マジで？やっぱ老けてるなあ加賀さん・・いたっ」

足を踏まれる成仁、ほっといってくれと拗ねるはじめを笑ってる神崎と幸・・よかった、ちよつと元気になったみたい。

「そろそろ帰ります。また寄らせてもらいます」

「ありがとう、今日は楽しかったです。成仁のことこれからもよろしく願います。俊、送ってさしあげてもらえます?」

「なんやそれ。普通にしゃべってくれよ、怖いで」

立ちあがる神崎に、いいですよと断るはじめだがやめる気はない様子の子の神崎。

「ええつて。逆らえませんかねお嬢さまには」

「またいつでも来てください。待ってます」

返事を返し、病室を出て行く二人を見送る大竹兄弟。

静まる病室、ゆっくりと椅子に座る成仁。

「なに?なんか話?」

俊さん指名なのがおかしかった、わかりやすい姉の思考に素直に聞いてみるとわかった?と笑っている幸。

「あんた無理強いしてない?加賀さんに・・・それに俊にも」

「なにが・・・そんなこと、してないし」

「あんたが兄ちゃんって慕ってること、それを強制するようなこと言ってるじゃない?」

強制・・・そんなことを考えたことなかった。

「オレはホントにそう思ってる。俊さんもそう言ってくれてるし、加賀さんも喜んでくれた」

「やさしそくだもんね、あの人」

「やさしそужゃなくてやさしいの。適当に答える人じゃない。それに、ちゃんと控えとるから大丈夫。加賀さんには大事な弟くんがいるから・・・」

あきらかに落ち込んでいる様子の成仁、きついこと言いすぎたかな。本物にはかなわない、か・・俊にしてみても、本物にはなれないもんね。

もしも私と俊が・・結婚、したとしてもそれは本当の兄弟ではない・
・それより、そんなこと考えられないんだけどこんだもん私・
俊の人生狂わせるわけにはいかない。

「姉ちゃん？」

急に黙り込む幸に具合が悪くなったのかと心配になり覗き込む成仁。

「あつ・・弟さんいるんだね、成仁も知り合いなの？」

普通に返ってくる言葉にホッと椅子に座り直す。

「う、うん。昨日会った、オレより年下。さすが加賀さんの弟って
かんじで・・すっかりしてた」

「どうしたの、さっきから暗い。いいじゃないホントの兄弟じゃな
くても繋がりはしっかりしてるんでしょ？自分で言ってたじゃない」

「姉ちゃんこそさつきと言ってること違う。人の考え読むなよな・・」

「それくらいわかります。顔に出すぎ、弟くんに嫉妬して」

思わぬ凶星に、思いきり顔を上げてしまい姉と目が合い・・赤くなる類。

「うるさいなあ・・姉ちゃんが俊さんとちゃんとしてくれたらオレ
にも兄ちゃんできるんだから、いつ結婚すんだよ」

「・・悪いけど、できないよ。私の状況見て言ってる？私なんかと
結婚したら俊がかわいそうだよ」

「なんで？もうすぐ治るんだろ？なんでそんなこと言うんだよ・・
俊さんになんか言われた？」

「言わないよ・・なにも言わないから私も言わない。言われても断

るけど」

小さく笑う幸を睨む成仁、なに言っただよ意味わかんねえよ。

「そんな顔したってかわらないよ。自分のことは自分が一番わかっている・・はつきり言うけど、最近調子悪かったの・・先生はごまかしてるみたいだけど顔見たらわかる、必死なんだもん。もうダメなのかなあって思っちゃう」

「・・よくなってるんじゃないのか？いつも大丈夫だって言ってるだろっ」

突然にそんなことを言い出す幸に思わず口調が荒くなる成仁、なに簡単にそんなこと。

「心配させたくないし・・ここにいい時くらい笑ってほしい。二人の元気が私の力だから」

「・・そんなこと、言うなっ。弱気な姉ちゃんなんかおかしくて見てられない・・」

「大丈夫、あんたには二人もいい兄ちゃんいてくれるんだから」

「だから、なんだよっ！なにが言いたいっ、めったなこと思ってた許さないからなっ！」

大きな声に看護婦が走ってきて二人を止める。

「どうしたんですか？大きな声出して、大竹さん？」
幸を睨み、駆け出して成仁。

「こら、走っちゃだめよっ。どうしたの？」

「なんでもないよ、騒がしくてごめんなさい・・」

ダメだなあ・・あんなこと言う気なかったのに。

いつかは知られるんだから自分で伝えたいって気持ちはあったけど・・言い方間違えたかな。

言いたいことすぐばれちゃったし、こういうことには頭が回るんだ

から。

けどホントに俊にも、今じゃ加賀さんにも感謝してる・・・きつと、
支えてくれる思うから

エピソード1

10・はじめと俊（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉、重い病気で入院している。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

見送ると指名された神崎は律儀にはじめに着いて来ていた。

「よかつたのに、幸さんの傍にいたほうがいいんじゃないですか？」

「いいんよ、成仁に話あつたんじゃないんかな」

ああと納得した、さすが暗黙の了解つてやつですか？

「・・・なあ、もしかして幸さん、結構悪い？・・・」

「なんで？・・・元氣やったやろ、そう簡単にくたばるやつじゃないから。心配いらんよ」

笑う神崎に成仁にするように小さく頭を叩くはじめ、びっくりして固まつてる神崎。

「なにすんじゃ・・・」

「こんな短い付き合いでもすぐわかりますあんたの無理。オレも成仁に少しは聞いているからわかつてるつもりです・・・簡単に治るなんて言える病気じゃないんでしょ？」

じつと見つめてくる神崎の目が細く睨む、苦しそうな顔・・・一人で苦しんでいるのだろう。

「神崎さん一人だつて聞いた・・・相談できる人いないよね？成仁に言えることじゃないし。だからオレが聞く。それくらいしかできないから・・・」

なにも言わずうつむいていた神崎、ふつと小さく笑った気がした。

「加賀さん、あんた敬語もうええよ。くすぐったいわ。今から暇？飲みにいこうや。ええとこ知つとるから」

「あ、うん。夜仕事場戻らないとだけど、それまでなら」

「わかった。んじゃ、行こう。近くやから歩いていけるからよ」

てつきり殴られるかと思つて構えていたのだが、飲みに誘われてしまった・・・でも言つたことはホントのことだし、きつと神崎さんも吐き出したいと思つたから誘つたんだらう。

酒場の席につくなりビールを頼むと、一気に飲み干し話し出す神崎。

「オレ関西のほうで結構悪くてな、こんなしゃべりやから始めはみんな怖がつてへんな態度になつたりするんよ、とくに女の人な・・・けど幸は違つた」

「やっぱイメージ違うなああの人、神崎さんが声かけたの？」

「俊でええし」

オレもはじめ言うからと少し恥ずかしそうに止める、心が開いた気がした。

「声かけてきたのはあつちからや、初めて会つたんは病院・・・オレのおかんもあそこで死んだ。オレこんなでもちゃんと世話してたんやで、よう病院で会つてたわ」

「なにも言えなかった・・・俊、も親を亡くしていたんだな・・・しかもあの病院で。」

「そんな時に話しかけてこられたもんやからむっちゃ冷たくしてた気するわ・・・けど、笑つとるんよあいつ」

「同じ病院か・・・辛いな、なんか。幸さん、元気づけたかつたんだらうな」

「そう。そう言つとつたわ・・・その理由も後からわかつた。あいつはおかんが死んだ病気どつかで知つたんやらうね・・・同じなんよ、幸のと」

「・・・え？幸さんの病気、俊の母さんと同じなのか？それって・・・」

どう、なんだ？」

お母さんは亡くなった・・・その病気と同じって、助かるのか・・・？
一気に血が引いた。

「なんちゅう不幸なんやと、思ったで・・・けどそんなん幸やおかんに比べたらなんでもないことやろ。勇気付けて、元氣付けてくれた幸と会えたことは最高に幸せなことやと思ってる。それなのにやりきれんわ・・・実際は」

神崎の言葉にいくつか引つかかるものを感じた、まるで・・・もう、諦めてるようなそんな。

「本当のところ・・・なんか知ってるんだろ、幸さんの容体のこと」

思いきつて聞いてみた、一瞬持っていたグラスが口元で止まる・・・
チラリと見るその瞳はなんだか生氣を感じない。
そのままビールを飲み干し、どんとテーブルに落とす。

「・・・主治医に言われた。身内がおらんし、成仁じゃあかんみたいでな・・・もう長ないって、大きな発作には耐えられんって」
もしかして思っていて、聞きたくなかった事実・・・そんな重いことを背負っていたなんて。

「移植するにも体力がもたん言うんじゃ、オレにはどうもできん。
きつと疫病神なんやオレ、いつも周りにおる人・・・おらんくなって、会わんかったらよかつたんじゃオレなんかとっ」
机にうつぶせる神崎・・・頭をぽんと叩くように撫でた。

「バカなこと言うなよ。おまえに会ったからがんばってると思うお。
すぐく力になってるって、見てたらわかる、成仁にもな」

「成仁・・・あいつとも離れたほうがええかもしれんな」

「だから違うつて言ってるだろ。まだ言うか・・・怒るぞオレも。あいつらは大丈夫、しっかり支えてくれてる人いるから。自分の存在にもっと自信持てよ」

「自信なんか持てるかいな、オレホンマあいつらになんもしてへん」

あんなに頼りにされてるのに、どうしてこんな弱きになってるんだか。

気持ちにはわからなくてもないけど、実際二人にはすごい必要な人なのに・・・どうしたらわかってくれるんだろうか。

「人に言われて出るもんじゃないか自信なんて。本人に聞くのが一番か。成仁が俊の話してる時の顔、すげえうれしそうなんだぞ」

「あいつはいつも楽しそうやからな、勘違いなんじゃない？」

「違うつて・・・ホント言うところとちょっと嫌だったことあるし、ちよつとだけな」

「嫌つて、なにがよ。オレのこと？」

知らないところで嫌われてるなんてきつとすごく失礼な話なんだけど、驚いてる俊に慌てて弁解。

「しょっちゅう出てくる名前だから、あいつもうれしそうに話すし。オレも結構かわいがってるつもりなのにつて・・・まあ俊見たらしかたないつて思ってたけど」

「アホ言いなや、そりゃこっちのセリフや。はじめの話聞いててオレが思ってたことやわ」

しばし難しい顔して悩む二人。

同じことを思っていたということらしい、お互い知らないやつのこととで嫉妬していたと。

「要するにじゃ、成仁にとつたらオレらは同じくらい頼りにされと

るいうことじゃない？こんなとこであいつの取り合いしとつてもしやあない、そういうことにしとかんか？」

「そこまでして取り合うやつでもないでしょ、俊にあげるわ」

「そんなん言うど泣くで、オレ幸で手いっぱい。はじめに譲るで」

なんの話してんだかと二人で大きな声で笑った。

俊を見てると強がつてるのがすぐわかって辛い・・・オレですらどうしようかと思う話を俊は直に聞いているんだから。

そんなに悪くは見えなかったのに・・・そんなに危険な状態だったなんて、成仁は知らないのだろうか・・・この人が言うはずはなく、一人で抱えてしまうタイプだろう。

親がいない、オレと俊とではあまりに違いすぎた・・・昭次のことがあつて悲しんでいるヒマもなかった、薄情なオレにはかける言葉もない。

母を亡くし追い討ちをかけるような恋人の容態・・・この人たちにオレができることなんてないのではないか・・・あまりに大きすぎる問題。

「おらあーはじめっ。もつと呑め。おごつたる、付き合わんかい」

「見かけによらずよく入るなあ」

今日はオレも飲みたい気分、とことん付き合つてやろうと思った・・・店のことはすっかり記憶の彼方。

「加賀さん・・・まだ来てない、か」

病院から駆け出したまま仕事場まで走ってきた・・・帰りに来るはずの加賀はまだいなかった。

オレだけくるのもおかしいと、近くの公園へ向かう・・・薄暗くなっ

てる空、ベンチに座る成仁。

思わず・・・飛び出してきてしまった、姉ちゃんがあんなこと言うから。

あんな弱気なの、嫌だ・・・だって元気にやってるし、悪いなんて思えないくらい・・・それが、姉ちゃんの強さなのはわかるし、そんなに治るものじゃないってこともわかってる。

あんなもうダメみたいなこと・・・言わないでほしい、そんなのありえないし。

「姉ちゃんに気使わせてどうするよ・・・オレってホントにガキだよなあ・・・」

それが真実だとしても姉ちゃんには笑っててほしい、今までの償いはちゃんとするつもりだ。

なにもできないけど、笑っててくらいできる、と思う。

笑ってたってどうにもならないかもしれないけど、泣いてるよりましだろう。

それでもオレは長男だ、たった一人の家族守ってく・・・きつと、俊さんも一緒に

いつのまにか飲み比べになってしまっている飲み屋の二人。

「ええかげんにあきらめたらどうだよ、おまえの負けだろ」

「アホおゝ誰が負けじゃとあー・・・まだいけるわあ・・・」

「もうやめとけて・・・飲みすぎ。オレも相当きてるし、そろそろ帰ろうぜ」

机にうつ伏せる俊を抱えるはじめ、お酒に強いと思った俊・・・見かけ通りあまり強くなかったらしい。

とりあえず店を出た、肩に俊を抱えてどうしたものかと悩んでいる

と電話が鳴った・・着信は「成仁」

速攻で繋ぐ。

「ナイスタイミングだな成仁。悪い、車出せないか？」

「あ？なにやってんの、もう店閉める時間でしょ。店長さつきから外見に来てるよ」

「あーそうだった。どうしよつか・・悪い、おまえ行ける？今近くにいるのか」

「いるにはいるけど、オレがやるの？なんでこれないんすか」

「・・ちよつと俊と呑み過ぎて、つぶれてるんだわ。動けない」

「うそお、マジ？そんなの見たことない、大丈夫なの？」

ちよつと近くのバス停にあったベンチに座って伸びてる俊、心配してるぞと伝えると大丈夫じゃない顔で笑ってる俊。

「ダメだったよ。だから行けないんだけど・・来てくれるか？」

「しかたないじゃん。店先に閉めてくるから、すぐは行けないよ」

「わかった。いろいろごめんなあ、待ってるよ」

「たまにはいいんじゃない？俊さんも息抜き必要だろうし」

「なんかいろいろあるみたいだな、好きなだけ飲ませたらすぐつぶれたよ。がまんしてたのかな？」

おまえは大丈夫か？」

「・・がまんなんかオレたちしてないよ。俊さんのことよろしく、すぐ行くから・・もっかい店入ってて。あそこだろ？」

「そう、いつものとこ。ごめんな、頼む。手当てつけるからな」

「そんなのいらないよ。じゃあな」

これは成仁もなんか落ちてるなあ、幸さんとの話なんかあったのかもしれない。

当事者にしかわからない、二人の問題に大きいため息が出た・・

隣で漬れてる俊、夜風がなんだか気持ちいい・・眠っている俊を起こすのも忍びないとそのまま成仁を待った。

テレビを見ながら見上げる時計、昭次は小さくため息をついた。

「兄ちゃん今日は遅いのかなあ、これはもうごはん食べてるな。足痛くてなにも作れなかったからよかった。そろそろ寝よかな・・明日はがっこ行きたいし」

足を引きずりながら戸締りと片付け、二階へゆっくりと上っていく。

今日は一日暇だったなあ、ケガなんかするもんじゃないよ・・

そういえば、今日って兄ちゃんお見舞いだったっけ？成仁くんのお姉さんの。

なんかあったのか・・それが意気投合して話し込んでるか、迷惑かけてないといいんだけど。

ベッドにやっとでたどり着くとうつぶせに転がる昭次、電気もつけない部屋は暗闇。

「昭ちゃん。足、大丈夫か？」

不意に見知らぬ子供の顔が頭に映った・・オレに向けての問いかけに、びっくりして飛び起きる。

足の痛さも忘れるほどに。

な、んだ？今の・・

小さな子の影を思い浮かべる・

「誰なんだろう今の・・小さい子だったよな、なんか見たことあるような気もするけど・・」

小さい時のこと、覚えてるはずがない・・兄ちゃんのことですら、覚えてないのに。

兄ちゃんは思い出さなくてもいいってなにも教えてくれないし、こうやって思い出す両親の顔も写真の顔だけ・・小さい時はわからないことも今ならちゃんとわかるのに。

両親がいなくなったとともに消えてしまったオレの記憶・・きっと事故とつながってるのだと思う。

「いまさら。思い出せず悲しんでるのはもうやめたんだ、思い出さなくていいならそれでいいし。オレにはちゃんと兄ちゃんがいてくれる・・」

言い聞かすように言うが頭に広がる疑問、一人になると考えてしまうクセのようなもの。

「・・いったあ。いつものことながら頭、痛い・・」

考えるとこうなるってわかってんのに・・今は昔のことより明日のこと・・学校行けると、いいなあ・・

ふっと意識がなくなるように、深い眠りへと落ちていった

夢を見ていた・・

『待つて、待つてよおー』

小さな昭次が前に走る人たちを追いかける。

『早くおいでおいでくよ。はやくはやく』

『ちよつと、まだ小さいんだから待ってあげなよ。兄ちゃん、はいよお』

先に走っていく一番大きな子を追いかけていくもう一人の子、その一足遅く着いてくのが昭次だった。

『待つて、おいてかないでつ。いやだ、待つてええ』

笑いながら走って行く二人を一生懸命追いかけるが・・・差は広がるばかり。

『ほら、ちゃんと待つてるからゆつくりでいいよ。母さんたちもちやんといるだろ』

『おいで、ゆつくりでいいから。ゆつくりで・・・』

『うん、今行くから。待つててね』

急ぐ昭次の目の前で・・・一瞬にして消えてしまつみんな、暗闇が広がった。

『ど、こ・・・どうして・・・兄ちゃんつ、母ちゃん、父ちゃんつ。おいていかないでえー・・・』

・・・

跳ね起きる昭次、汗びつしよりで荒く響く息・・・

「・・・夢？なんで、こんな・・・今の、オレだよな・・・」

暗闇に、取り残された感覚がよみがえり・・・呆然とベッドの上座り
込んでいる昭次。
なぜか怖くて・・・目が閉じられなかった。

エピソード1

11・昭次と記憶（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉、重い病気で入院している。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

「関義斗」俊のケンカ仲間、昭次やはじめとの関係は？

エピソード1

11・昭次と記憶

店の片づけを終え、急いではじめたちを迎えに行く成仁。

「まったく、人が落ち込んでる時に振り回してくれちゃって・・・おかげで少し浮上しそうだけど」

車を走らせて行くと、店の中にいると思っていた先輩たちはバス停のベンチに座っていた。

オレに気づいたのか小さく手を振ってる加賀さん、どうやら先輩はあまり酔ってはいないようだ。

隣で俊さんは潰れてるようですけど。

車を止めると助手席の窓を開ける。

「なにをやってるんですか、いい大人が」

「わるい。ちよつと悪酔いしちゃって、ほら俊。お迎え来たぞ」

「あー成じゃ、お子様ははよ帰ってなあかんやろお。なにしとんのやあ」

「なにつて・・・こんな酔った俊さん初めて見たわ。迎えに来たのにこの言い草。この酔っ払い」

「まあまあ、いいかげんオレも酔い回ってきてつらいんやわ。乗せてやあ」

「加賀さん・・・移ってるよしやべり方」

あつと気づいて笑っている、こんな加賀さんも初めて見た気がする。いつもは飲んでもまったく変わらないのに、それにしても・・・この二人、一気に仲良くなってるし。

同じ歳なのがよかったのか、気が合ってたなによりだよ。

「なんじゃ？酔つとらへんぞおわしは、これくらいで誰が酔つかい。なあはじめえ」

「まったく典型的な酔っ払いだなこの人は。そうだ、もううち泊まっていけよ、面倒だろ。明日休みやし、よしそうしよ」

「ホント？この酔っ払いをどうしようかと思つてたんだあ。いいの？」

「おお。けど昭次もう寝てると思うから静かにな」

「オレよりこの人に言つたほうがいいんじゃないの？」

なにかよくわからないことを言っている俊さんを見て二人で笑う。お言葉に甘えて加賀さんの家へと向かった・よかった、今日は一人でいたくなかつたから。

「騒ぐなよ、あいつ起こすとうるさいから」

そつと玄関のドアを開けて扉を開く、中は真つ暗でやはりもう昭次は寝ている様子。

「はい、わかつてるでえ」

「うわ・・もうマジかよ。俊さん隔離したほうがいいと思うよ」

今だ酔いの覚めそうもない俊がご機嫌に騒いでいた、押さええる成仁に苦笑い。

「だな。一階の部屋使つて、ふとんこつちだから手伝つてな」

俊を引き連れたまま手伝いに来る成仁、早く布団引いて転がしておいたほうがいいかな？

「成仁、俊ここに座らせとけ。で、おまえはこつちな」

「はい。でも、いいのかな置いといて。暴れない？」

小さく笑う、見たことのない俊の姿にかなり困惑している成仁。
座らせるとふいに目を開ける俊、キョロキョロと辺りを見まわしていた。

「昭次くんは？もう寝とるんかあ？」

「さっきから寝てるから静かにしてって言ってるだろ、もう」
見下ろす成仁を見上げて満面の笑みの俊。

「ほー、そんならオレ、会ってきてええかなあ」

えっと思ってる矢先、止める間もなく立ちあがり階段のほうへと走ると「昭次くん、遊びましょ」叫んでいる俊に、慌てて二人で飛びついた。

「ああ、もう俊さーん。突拍子のないことしないでよ、びっくりしたあ」

「やっぱ見てないとダメだな、こりゃ。オレとってくるからおまえもそこにいて」

すいませんと謝る成仁に微笑み、少しふらつく足で押入れを物色。
久々の来客にちよつと戸惑いもあるが、あいつならいいと感じた。
・気も許せる、気がしたから。

「・・・なんや・・・騒がしい、なあ」

うなされて寝れず起きていた昭次、下の様子がなんだかおかしいのに気がつき起きあがる。

兄ちゃん、遅くなったらいつも静かにしててくれるのに・・・

少し不機嫌のまま、階段を降りて行く・奥の、使っていない部屋から明りが漏れていた。
誰か、いるのかなあ。

「はあ、やっと寝た」

「昭次くん、起きなかつたみたいでよかった・わあっ」
階段にぼーっと立っている昭次にびっくりして叫ぶ成仁。

「あーあ、さすがに起きるよな・わるい、なんでもないから寝てください」

「・・なにやってんの。夜中に」

寝つきの悪さと重なってするどい目つきの昭次に、かなり申し訳なさに小さくなってる成仁。

「ごめんな。突然お邪魔したうえに騒がしくて・・」

「・・いらっしやい・・なんか、目覚めたし・・お茶でも飲もうか」

松葉づえをつき歩いてる昭次に気づき肩を貸すはじめ。

「足、大変そうだな。遅くなって悪かったな、オレやるから。二人とも座ってて」

昭次の頭をなでて小さく謝ると、小さく首を振り微笑む昭次。

ソファーに座らせ、キッチンへ消えるはじめ。

二人にされてかなり居心地の悪さを感じてしまう成仁、怒ってるよねこれって。

「今日は、仕事の帰りですか？」

ふいに昭次が顔を上げる、そこにはもうさっきの怖い表情はなくなこやかに笑っていた。

「ち、がう。今日は病院来てもらったから早く終わっただけだ。その後飲みに行ったみたいで酔っ払って帰れないからって呼び出されてね、連れてきた」

「・・・うわあ、最悪。バカ兄がすいません」

「違うって、加賀さんは酔ってないじゃん。問題はあっちに寝てる人、こんな酔ってるの初めて見たよ」

「・・・ああ、神崎さんも来てるの？」

「うん。今、やっと静かになった。騒がしかったでしょ？ごめんねあれ俊さんだったのかと小さく笑っている昭次、やはり上まで聞こえていたようで恥ずかしくなってくる成仁。」

成仁の肩をポンと叩くと、はじめがお茶を運んで来ていた。

「悪いな。俊のあれはオレも悪いよ、吞めるって言うから調子のつてしまいました。本当に悪かった成仁くん」

「明日店長に謝ってよね、戸締りとかも手伝ってくれたんだから。それに今度はオレも誘ってよ」

少し浮上して笑う成仁にそれは無理だろおと笑うはじめ。

「ついていけないって、あんなふうになってるけど俊も強いぞ」

「・・・兄ちゃんが強すぎなんだろ、それ。大丈夫なの俊さんは」

心配そうに隣の部屋を見てる昭次に、それはわからないなあと苦笑いのはじめ。

成仁は大きくため息をついた。

「明日地獄だろきっと。あの人覚えてないんじゃないの今日のこと・オレも忘れたいよ」

ため息と共に小さく告げた言葉はしっかりと二人の耳に届いていた、とたんに空気が変わる。

「・・・忘れるのは、つらいことだよ・・・どんな小さなことだってオレ、思い出したい・・・」

膝を抱えるように小さくなって呟く昭次に、慌てて口を覆う成仁。突然の言葉に昭次の様子がおかしいことに気づいたはじめが下から顔を覗き込む。

「なんだ・・・なんか怖い夢でも、見たか？」

途端に心配が胸を襲った、少し前までよくうなされていた昭次。こんなこと言ったのは初めてだった。

思い出したい・・・そう言ったよな、おまえずっとそう思ってたのか？オレが思い出さなくていいと言ったことで、自分押えていたのだろうか・・・

「・・・なんでもない。俊さん見てくる」

暗い表情で歩いてく後ろ姿の昭次を見つめる二人。

「・・・すいません、へんなこと言っちゃって」

小声で謝る成仁、尋常じゃない空気を感じていた。

「いいって。誰もあんな返しがくるなんて思わないし。へんな夢、よく見るみたいだから、あいつ」

「・・・なんか思い出せる、かもしれないですね」

「そう、なら・・・いいんだけどな」

どこか辛そうに小さく言うはじめ、両親の仏壇へと目を向けた。

父さん、母さん・・・あいつ思い出したら、どうなるんだろ。

目の前で起こったこと、オレは思い出さなくてもいいと思ってた・・・

辛いだけだと思うから。

けどあいつは、ずっと苦しんでいるみたいだ・・オレはどうしたらいいのか。

思い出そうとして頭痛いつて泣いてる小さなあいつじゃ、もうないから・・思い出すまで、そつと待ってればいいのかなあ、わかんねえよオレ　なあ、父ちゃん。

「最悪・・」

兄ちゃん困らせたな、今は・・成仁くんもいるのに。

忘れて思い出せないのは自分のせいなのに・・なんか不安定なんだよな、最近。

だからあんなわけわかんない夢まで見る・・あれは、オレの記憶なんだろうか？

「俊さん・・大丈夫？」

返事はなく正しい寝息が聞こえる暗い部屋。

「ホントに潰れてる感じ・・風邪ひくよ、これじゃ」

掛け布団を蹴飛ばして寝てた、そつと脇に座り布団をかけているとふいになにか声がした。

「・・うそ、や。なんでなん・・」

「え？なに・・起きた？」

見ると起きてはいない様子、寝言かなと暗闇目を凝らす昭次・・はつと、思わず後ろへ下がってた。

「なんでや、幸・・うそ、やろ。嫌や・・あ」

俊の瞳からこぼれ落ちる涙に、気づいてしまった。

口から漏れる言葉はきつと入院してる成仁くんのお姉さんのことだろう、俊さんの恋人の。

なにかあったのだろうか、夢の中無意識に泣いてしまうなんて・・ただ事じゃない気がした。

まずいところを見てしまった・・

そつとふとんをかけ直し、起きないようにあわてて部屋を出た。

「おい、足。走るなよ」

倒れ込む勢いでかけてくる昭次にはじめが駆け寄る。

昭次の顔を見て、不信に思いなにかあったのかと後ろを振り返るはじめ。

「な、に？俊さん、大人しく寝てたよ」

「そうか？じゃ、オレもちよつと見てくるわ。成仁の布団も出さない」と

「ちょ、ダメだつて」

慌てて止める昭次に、いじわるな視線のはじめ。

「・・おまえつて隠し事できないやつだね、なにかあったの丸わかりだろそれじゃ」

「たしかにへんだよね。俊さんなんかやった？」

「なにも、してないけど・・今は、行っちゃダメなんだよ」

「なんでダメなんだよ。いいよ、見てくるから」

「わかった、言うから。俊さんにはなにも言わないって約束しろよ」

やっとで行くのを止めてくれた兄、不満そうに椅子に戻った。
成仁くんの前で、言ってもいいのか・・・すごくまずいんじゃないだ
ろつか？すごく嫌な予感がする。

「寝言、言っただけだよ」

「寝言？なんて？まずいこと」

興味津々の成仁に苦笑いの昭次、はじめはなんでそんなこと隠すん
だよとあきれてる。

「意味深にいうから何事かと思うだろ、大袈裟な」

「なにをのんきな・・・内容が、大変なんだろこの場合」

早く内容を教えろと乗り出して来る二人に・・・小さく呟く昭次。

「いややって、うそやろって・・・泣いてた」

言った瞬間、固まる二人の姿に・・・やっぱり言うてはいけないこと
だったと後悔した。

兄ちゃんのせいだからなとはじめを睨みつける、はじめは驚いたま
ま成仁を見つめていた。

「・・・俊さんが、泣いてた？・・・冗談、やめてよ・・・」

ひとり言のように呟く成仁にやっと反応をしめたはじめ、昭次は
おろおろと二人を見つめる。

「冗談って、なんでだよ・・・」

宙を見つめてさみしそうな表情をする成仁、昭次は隣に座った少し
でもさみしさを消すように。

そんな昭次に、小さく笑い・・・はじめの問いに淡々と答えるように
呟き出す。

「さつき・・加賀さんたちが帰った後、姉ちゃんと話した。そんな意味わかんないこと言ってた・・」

「意味わからないことって？オレたち聞いてもいいのか？」
小さく頷く成仁。

「オレ、なんで結婚しないんだって聞いた、そしたらしないって・・こんなだからとか言うんだよ？だからなんだよって話だ・・弱いところなんて見せない人があんなこと言うから、不安で」

一気にそこまで話すと、呼吸を整える成仁・・悔しそうに、続ける。

「最後には、いい兄さんたちいるから大丈夫だとか言いやがって・・まるで、もう・・」

言葉が続かない、沈黙が部屋を埋めていった。

悔しさに俯きながら成仁は昭次の言葉を頭の中、繰り返す・・

あんなこと聞いた後に・・俊さん、泣くなんて・・ホント冗談だよ
ね。

オレは姉ちゃんの病気は治るって信じてる、なにも聞いてないから・

・
けど、あの人は・・もっと深いところ知ってるって、今ので気づいた・
・なにが嫌なんだよ、くそつ。

「おまえこそ、なに言ってんだ。病気なんだ弱いところ見せたってしかたないだろ？おまえにしか見せられないからじゃないのか？おまえがそんなでどうする」

励ましてみても俯いたままの成仁、こんな言葉で慰めになる小さなことじゃないからな。

「・・・俊のどこ、行つて来い」

「え?・・・」

驚いて顔を上げる成仁にポンと頭を撫でた。

「おまえしか元気づけられないだろ。寝てる時出るのは本音だと思うぞオレは、おまえも聞いてもらえばいい」

少し考えてから、小さく頷くと奥へと進んで行く・・・ちゃんと、お互い甘えろよ。

「・・・だから言わないって言ったのに」

「いいんだよ、二人とも我慢しすぎだあいつらが倒れるよこれじゃ。俊も大丈夫だ・・・あいつなら」

「・・・成仁くんの姉ちゃん、大丈夫って言ってなかった?」

不安な顔して見上げてくる昭次、はじめもおかしいとは思っていてもそこまでやばいとは思っていなかった・・・オレだって知らねえよ、そんな深刻な話なんて。

「わからない・・・オレたちはなににもできないからな。昭、おまえ大丈夫か?またうなされてたんだろ?」

「・・・うん、最近はなかったからびっくりしただけ」

「なにか、思い出したのか?・・・」

昭次のさっきの様子、思い出して不安になる・・・思い出してなんかいないよな。

小さくたまを振る昭次。

「・・・ちょっと、いつものと違っただけ。小さい時は真っ暗な中に一人で立つてるのだった・・・今日は、誰かいた・・・たぶん、兄ちゃんだと思っけど」

「オレ?・・・それ小さい時だろ、ならなんか思い出してる感じじゃないのか?」

小さなオレが出てきた、そんな話は今まで聞いたことがなく・・・やはりなにか、思い出したのか。

「・・・わかんないけど、そうだと思う。どういう状況かわからないけど、みんな消えちゃって・・・一人にされて、目が覚めた・・・」
思い出して不安が押し寄せてる昭次、夢に出てきた人影に不思議に思っていたこと。

「兄ちゃん・・・オレってもう一人、兄ちゃんいるとか、ない？」
「・・・えっ？」

突然の言葉に、おもいきり動揺してしまうはじめ。
その表情に、それが当たっていたと知る。

「まさか、いるの？そんなこと聞いたことないよ、どういうこと？そんなこと隠すことないじゃないか」

「・・・いいんだ。もう会うことないやつなんだから。教える必要がなかったんだ」

「そんなの兄ちゃんが決めることじゃないだろ、そんな大事なことつ。オレたちにはもう一人兄弟がいるってことだね、なんで隠してたんだよっ」

つめよる昭次になにも言わないはじめ・・・

なんでそんなこと思い出すんだよおまえは・・・そりや事故のこと思ひ出すよりましかもしれないけど。

あの事故があつた後、二・三度会っただけでオレも会ってない・・・なにやってんのかわかったもんじゃない。

昭次、悪いけど会わせる気はないし、話す気もない・・・あいつのことはオレも思い出したくない。

事故が起きる一年前・・・小さな事件。

「昭次っ！どこ行った。義斗っ！隠れてないで出て来いっ」
あてもなく探し回るはじめの姿。

「はじめくん。いいじゃない、義斗くんさみしいんだと思うよ・・・」
「けど、昭次はまだ小さいんだよっ。なにかあつたらどうするんだっ、母さん甘い」

小さな昭次を連れ出してオレの下弟、義斗がどこかへ行ってしまったのだ。

「過保護だなあおまえは、昭次には」

「二人ともわかってないんだ、義斗はオレたちのこと全然許してないんだぞ。昭次のことだって、単純にかわいがってるなんて思えない」

父が今の母と再婚し、母に一人ついていったのは義斗。

義斗は離婚をひどく悔しがって、父を憎んでいる・・・というより、オレたちの家族を。

「・・・そんなことわかってるけど、それで昭次に当たるほどガキじゃないだろ？」

「もういい、二人は家に帰ってて。父さん、少しは義斗の気持ちもわかってやれよ・・・」

オレも、父には少しばかりの苛立ちは持っている・・・義斗の気持ちも、わかってしまうから。

だけど昭次を連れ出すのは許せない。

昭次を連れ出す数日前、義斗の母は病に倒れて・・・死期を迎えていた。

「母ちゃん、オレにはあんたしかおらへんのに・・・いややあ、逝ったらいややああ」

「・・・よし、ごめんな。大丈夫・・・おまえのことはちゃんと、頼んである・・・けど、あんたが行きたいとこ行けばええ・・・母ちゃんについて来てくれて・・・ありがとな。もう・・・好きにして、いいんだからね・・・しつかり、やるんだよ・・・」

伸ばしていた手がパタリと、ベッドの下へ・・・

「いややあ・・・そんなん、言うなあああ、かあちゃん」
死んでしまった母を見つめ動けない義斗。

なんや・・・ようわからんわ。

母ちゃんがこんなになったのは・・・誰が悪いんや・・・

あの人、父だった人・・・あの人らはきつと、なにも知らずに楽しく暮らしてる・・・新しい母親と

いいようなない怒りが胸を襲っていった・・・

・・・

まぶたを開けて、じつと天井を眺めている義斗。

夢を見ていた・・・それは、昭次が見たあの追いかける夢。

「なんや・・・へんな夢見たわ・・・」

起き上がり頭を振りながら、シャワーに入ってく義斗。

今は・・・あいつらやったなあ、今さらなんで出てくるんや忘れてたのに・・・

忘れたい、の間違いじゃな。

こないだ、神崎んとこ行った時・・・見たんがあかんかったわ、神崎もえらいとこ引っ越しよって。

思い出すはじめと昭次の姿、きつく目を閉じて消し去った。

「・・・オレのことなんか、覚えてへんな。やめやめ、考えたないし・・・」

しかし一度こびりついてしまった記憶は簡単には消えてはくれなかった

思い出すのは、小さな昭次を引き連れて夜の道を行った時のこと。

「昭ちゃん、帰りたいか？」

「まだよし兄と一緒に遊んでるよ。よし兄は帰っちゃうの？」

「・・・うん。もつと遊んでよな、あっち行ってみよか？」

「うん。僕なよし兄のこと好きだもん、なんでいつも家にいないの？僕の兄ちゃんだよね？」

「兄ちゃん、か・・・そうや、オレは昭次の兄ちゃんや。やから、よし兄と一緒にずっとおるか？」

「うん。ずっと一緒にいたい」

つないでる手にぎゅっと力をこめる義斗、昭次はなにもわからず握り返してた。

オレは昭次のこと連れ出してあいつらのこと困らせるつもりやった・・・のに、なんやおかしな気持ちがまじっていた、オレはこいつとおりたいのか？

心があたたかくなつてく気がする。

ホンマにこのままうちまで連れて帰りたい・・・さみしい思いはもういややなあ。

ぎゅっと、また手を握ってこれからどうしようか・・・夜空を見上げる小さな義斗だった。

・
・

「あかん・・・走ってこ」

自分をごまかすようにバイクにまたがる義斗、バイクの音が夜の街に響いた。

エピソード1

12・兄と弟（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉、重い病気で入院している。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

エピソード1

12・兄と弟

神崎の眠る部屋へゆっくりと入っていく成仁、布団の隅へそっと座る。

「・・・俊さん、姉ちゃん・・・大丈夫なんじゃないの？」
眠ってる俊を覗き込んで呟く・・・神崎の目の端が小さく光った。

「なんで、涙なんか見せるんだ・・・不安が、消えない、だろ・・・」
布団の端を握って、なにかを必死に押さえつける。

俊さんの表情は暗くてはつきりとは見えないけど、苦しそうに見える・・・まだ夢見てるの？

「・・・さ、ち。行かんで・・・」

ふいに聞こえた小さな声に思わず神崎の身体を揺らしていた。

「俊さん・・・姉ちゃんがどこ行ってくつての、どこも行かない・・・夢だ、それは。起きて・・・くれっ」

揺り起こしてるうちに我慢していた涙が零れ落ちた。

「・・・ん？あれ、成？・・・なにしとるん」

「アホ・・・それはこっちのセリフだ・・・」

成仁の様子のおかしさに目を凝らす俊、周りを見渡し首を傾げた。

「どこやここ・・・オレって、なにやってた？なんで・・・泣いとるんや、おまえ」

「泣いてないって・・・もう、いいよなあなにも覚えてないんだろ、どうせ・・・」

はつと口を閉じる、さっきの昭次の顔を思い出して・・・言っちゃダメなんだ。

「なんやねん、自分・・・しかたないやろ覚えてへんもんわ、起き抜けになんや文句でもあるん？」

起きあがりながら機嫌の悪い俊さん、確かにオレの言い方が悪かったかもしれないけど・・・

今は、そんなこと思いやつていらなかった。

「文句なんかないよ、けど・・・俊さん、自分の状態わかってないよね・・・」

「オレ？オレはここがどこかわかんだけや、で・・・あ、れ？」
ふいに自分の手のひらに落ちた雫に気づき、それが・・・涙だとわかるのに、数秒かかる。

自分の頬へ手をかざし呟く。

「・・・なんで、泣いてるんや、ろ・・・」

なぜ泣いているのか、自分でわからない・・・だけど胸に重いものを感じていた。

「知らない・・・俊さん、夢・・・見てた？」

「夢？」

成仁の問いに思い出すその夢・・・泣いていたのは、そのせいだと気づく。

オレ、幸とおかんの夢見てたわ・・・考えたくもないことなのに、なんで夢なんか見てるんやろ・・・

はつと、成仁の顔を見て青ざめる・・・あかん、こんなとこ見せたら、あかんかった。

「・・・姉ちゃんのこと、なんか知ってるの、か・・・」

ふいに幸のことを言い出す成仁に動揺は隠せない、もう泣いていた理由はわかつているかのような視線。

「え・・・？なんも、知らへんよ」

「うそ言うなよ・・・わかったんだよ今ので、俊さんが姉ちゃんの病気のこともっとしっかりわかってるって・・・泣いてたのもそのせいだろ？教えてよ、オレ大丈夫だから・・・」

「・・・だから、なんも知らん言うてるやろ」

言えるわけなかった・・・たとえオレの涙を見られていたとしても、それはどうにでもいいわけ出ることだと思うから。

言うわけには、いけない・・・口を閉ざしていると小さく告げる言葉。

「オレも姉ちゃんに聞いてるよ・・・」

目に見えて身体が跳ねる、なんで・・・幸が・・・それしか頭に浮かばない。

「えっ！なんで幸がそんなん知ってるんや、オレにしか言わへんって先生言つたのに・・・」

じつと見つめる成仁、オレの動揺に・・・小さくため息をついてた・・・うそ、なんか？

「やつぱり・・・聞いてたね。ごめん、姉ちゃんは知らないと思うよ・・・」

「なんか、わかってるみたいだった、けど。オレは信じてない」

今にも泣き出しそうにそう小さく告げる成仁に、だまされたことよりもその成仁の表情に胸が痛んだ。

幸に、なにか言われたんか・・・

「さち・・・なんて、言ってた？」

辛そうな成仁の頭を撫でる、落ち込みそうな時いつもこうしていたから。

「・・・無意識に出てるってかんじだったけど・・・成仁には頼りになる兄ちゃんが二人もいるから大丈夫よねって・・・消えちゃうみたいな、気がした」

「・・・そうか、自分の身体のことや・・・自分が一番わかってる、オレの母親もそんなこと言って笑ったわ」

小さく微笑む俊を突き飛ばす成仁、びっくりして後ろに手をつくと睨んでいる瞳を受け止める。

怒ってる理由はなんとなくわかる、オレも母の態度に怒ってたもんや。

「なに笑ってんのっ・・・俊さん、姉ちゃんのこと大事じゃないのか？なんでそんな顔できるんだよ、いなくなっても平気な、の」

「痛いなあ・・・アホなこと言いなや、大事に決まっとるやろ」
「じゃあなんで、いいいたげな瞳。また、小さく笑う。」

「成仁・・・オレ、怖いんよ、ホンマは。幸が笑ってくれるたび・・・平常をたもてんくなつてきとる・・・こんな顔あいつには見せるわけにいかんやろ。笑つとりたい・・・いつも」

またうつむいてしまう成仁の頭をなでる、何度も・・・元気になるように、思ったが小さく震えていた。

がまんすることはないと思う、泣きたい時は泣いたらええ。

「しゅん、さんの・・・知ってること、教えて・・・」

その眼差しに、もう黙ってることは・・・できなかった。

オレだけが背負っていた重荷を、こいつにも背負わせてしまう・・・
だけど、成仁はそれを受け入れられると信じている、たった一人の

姉なんやから。

「幸は・・・もう長くもたんで言いよった。移植もできんくらい弱ってる・・・次の大きな発作にたえられんかもしれんって」

目を見開き、無言で涙を流している成仁の頬を両側手のひらでそっとはさみ込む。

覗き込む視線がぶつかると、少し強くなる視線。

そうや、強くいかなあかんぞ・・・オレたちは。

「オレたちにできることは幸を元気づけたることだけや・・・おまえの支えがあいつには必要なんやからな、オレもがんばる・・・幸と一緒に戦おうや」

「あたりまえ、だろ・・・」

泣き崩れる成仁を抱き寄せた、一緒に戦っていける・・・大事な人のために、長く一緒に過ごすために。

一度はなくした希望を、今度こそ・・・三人ならきつと・・・

はじめの大きな隠し事を問い詰めていた昭次、それも吹き飛ばような二人の会話が聞こえてきてしまい問い詰めは途切れたまま。

あまりのことに、動揺を隠せない昭次・・・なんで、お姉さんそんなに悪かったのか？

苦しいくらい押さえたような泣き声に、思わず涙ぐむ。

「義斗のことは・・・時がきたらちゃんと教える。今は、やめよう・・・おまえまで泣いてんなよ。あいつらが気にしないように、普通にし

とけ」

「・・・よしとって言うの？なんかはぐらかされた気がするけど、オレも今はやめとく。あっちのが大変なのわかるし・・・大丈夫かな」

昭次のこういう素直なところ、助かってる・・・昔から、いつも。

根本的に、性格は変わってないから・・・小さな頃と。

「大丈夫、ではないだろうけど。二人で話せば、どうにかなるよ・オレたちは見守るくらいだろ。おまえは、もう寝る。足、平気なのかよ」

普通に立っている昭次に、はじめも今気づいたように驚いてる。

思い出したように、ストンと椅子に座る昭次・・・痛みはさすがに引いてないようだ

「いたた・・・忘れてたし。明日は学校行きたいんだよね、先に寝るよ。二人のこと、頼むよ」

それだけが心配だと向こうの部屋を覗き込み、心配顔。

「心配するなって、そんな弱いやつじゃないよあの二人は」

「だよ。余計なこと言わないように、兄ちゃんは」

にこりと笑う昭次に、小さく微笑む・・・心配なのは、それだけじゃないはずなのに・・・笑ってる、すげえなホント。

「うるせえよ・・・おまえのほうも、心配ないから。無理して思い出さなくても、ちゃんと教えるからよ」

オレの言葉に一瞬、表情が固まる・・・少しぐらい自分の弱さ見せてもいいのに、その一瞬で元の笑顔。

「約束、な・・・」

指きりの変わりに昔からよくやっている決まりごと、大事な時にはいつもこうしていた。

右手を合わせて、近づけた二人のおでこの間でお互いのおでこの甲をつける仕草。

ぎゅっと手を握りお願いごとをするように。

「おやすみ」

「なにも考えずに寝ろよ。おやすみ」

階段を上がつてくの見送り奥の部屋を見つめるはじめ。

「なんて言ってみても、普通でいられるほどオレも無神経じゃないけどな・・・」

小さく呟きソファへ転がった、いろんなことが一気に押し寄せいるんな顔が頭を駆け巡る・・・幸さんや、義斗・・・母や父・・・昔の思い出・・・

ぎゅっと目を閉じて、心を落ちつかせた・・・どうしたもんかな。

泣くだけ泣いて少し落ちついたようすの二人、リビングへと足を運ぶ。

ソファで上を向いて目を閉じているはじめがいた。

「・・・加賀さん？寝ちゃった？」

覗き込む成仁、瞬間目を開けるはじめにびっくりして後ずさってる成仁に俊が小さく笑った。

「寝てないよお。大丈夫だったか俊は」

「・・・うん。って・・・大丈夫ではないけど、俊さんもオレも。けど話したらちよつと落ち着いた」

二人の目の赤さに振れてはいけないと思っても、隠せるレベルではなく・・・どうしていいものやら。

とりあえず笑っている二人に、ホッとはしているはじめ。

「・・・ごめんな、なんや知らん間に家押しかけとったみたいで。帰るからよ」

「なに言ってるの？いいよ、泊めるつもりで連れてきたんだから。成仁も泊まるし」

「そうそう。遠慮なんかいらないうて」

「おまえが言うなつ。たしかに遠慮なんかしなくていいし、そんな状態で帰れるのか？明日仕事あるんだる俊は。風呂入りたかったら入って来い、そして寝なさい」

「あつ、オレ入りたい」

「だから、おまえに言ってます。俊、顔洗ってすっきりしてきたら？」

「ごつんと手をおでこにぶつける俊、情けなくて苦笑い。」

「・・・どうやら見られん顔になつとるみたいやな。じゃ、遠慮なく借りるわ」

おう行ってこい、さっきの部屋の前だからと教えられ、その後ろで成仁とケンカし出すはじめ。

オレだってすっきりしたいのにとか、おまえは少し遠慮しろとか。

おかげで固くなっていた表情が少し緩んだ気がした。

とぼとぼと教えられた洗面所へ、扉を開け鏡を覗く俊は・・・青ざめた自分の顔にびっくりしていた。

「うわっ・・・ホンマ最悪」

お風呂場の蛇口から水を勢いよく出し、服のままで頭からそれをかぶる俊。

「さち・・・すまん」

成仁に・・・ばれた、言ってしまった・・・幸も、知ってるんか？オレ顔に出とったんか、あいつもそんな素振りなにも見せず大丈夫やって笑って・・・見抜けんのが、未熟っちゅうことなんか・・・

「ちょ、俊さん。なにやってんのっ、風邪ひくだろっ」

「・・・ちょう頭冷やしとるだけや。気にせんでええから、ちよっとほっといてくれや」

成仁が驚いていたが、今は自分の情けなさを消したくて余裕なく静かに怒鳴る俊。

後ろではじめが小さくため息をついていたのを聞く・・・呆れられてもしかたないわな。

「着替え、置いとくから。風邪ひかない程度にしとけよ、ほら成仁」

「しっかりしてよ・・・ねっ、俊さん」

成仁が俊の肩をぼんと押した、よろける俊が溜まった水の上へ倒れ込む。

「・・・なるう。なにやってんだあ・・・」

睨み上げると成仁は笑っていた・・・まったく、なんちゅうことするんかねえこの子は。

はじめも一緒になって笑ってたけど、心配そうに見てたのに気づいた。

「頭だけじゃ物足りないかと思ったからさ、素直に温ったまれよ。なあ加賀さん」

「そうだな。もう十分冷えただろ？ほら、お湯出しとくから」

これ以上心配させるわけにいかないから、素直に言うことを聞くことにした。

ホント・・・オレって、情けねえ。

「・・・そうする。ほら、出た出た」

二人を追い出し、小さくため息・・・いいかげんちゃんとしないと、シャワーから流れる温かさに冷えていた身体、心も・・・ゆっくりと落ちついていく気がした。

「まったく、どうしたのかと思った・・・ごめん、なんかいろいろ迷惑ばっか」

「今更、遠慮か？気にするな。お茶でも飲むか？」

うんと大きく返事を返す成仁、笑っていられる自分にホッとしながら。

リビングへ移動し、テーブルにつくと疲れが出たのかうつ伏せてる成仁。

「・・・どうした？」

「なんでも、ない・・・それより、昭次くん怒ってなかった？」

「なにも。自分も悪かったって言ってたし、へんな夢と寝不足でおかしかったんだってよ」

「寝不足か・・・オレも今日から寝られなくなりそうだよ・・・」

ポンと頭をなでる、成仁の辛さはわかっててもかける言葉はない・・・気持ちだけでも届けられればと何度も軽く叩く。

「ちよ、なんなんですかぁ。痛いっての」

よける成仁に小さく笑う、照れているのがわかって。

「俊さんはちゃんと寝られると・・・いいんだけどなあ」

「落ち着いてたじゃん、さつき」

ふいに飛び起きると大きなため息、首を振ってる成仁。

「あれを落ち着いてるとかいうかな、おかしいでしょうどう見ても。加賀さん変？」

「そうか？」

たいして取り乱してるふうではなかったと思ってたはじめ。頭を冷やす、よくやることだよな？

「なんの話や、成仁くん・悪かったな、おかしくて」

ふいにかけられる声に二人で振り向くとさっぱりとした表情の俊が立っていた。

「おかしかったもん、マジで。大の大人が酔っ払ってむちゃしてさ、ばらすぞ姉ちゃんに」

「うるさいわ。言ったら許さへんぞ」

どうしようかなあと逃げていく成仁、じゃれてる二人を見て微笑むはじめ。

ホント、すごいなこいつらは・あんな話の後に、自然で。

オレのほうが動揺してるし、まあ心の中まではわからないけど・

成仁が交代でシャワーに向かい、俊がテーブルの横に立ち尽くしたまま。

「どうした？座れよ。今、お茶入れるからさ」

「ホンマすまん。なんやいろいろ迷惑かけたみたいで・おまけに夜中に押しかけて、ホンマすんません」

ふいに頭を下げる俊にびっくりしてポットを持って固まってるはじめ、瞬間笑い出した。

「いいって。オレも似たようなもんだったし。謝るなら成に、な。かなり酔ってって迎えに来てもらったし、覚えてるか？」

小さく首を振って苦笑いの俊、大きなため息とともにうなだれてる。

「オレ、へんなことしてへんかった？ ホンマ、失態や・・・」

「しかたないだろ、こんな時は・・・もう、酔いは覚めたか？」

「ああ・・・さすがにな。成仁に泣かれたら・・・」

「・・・悪い、聞こえてた・・・」

アレだけ騒いでれば聞こえるよと笑う俊、辛そうに湯呑を握って俯く。

小さな沈黙・・・それは気まずいものではなく、言葉を待っている優しい沈黙。

はじめの、こういう雰囲気は落ち着くわ・・・だから、今日はこんなに酔えたのだろう。

「・・・あいつに知られるのが、一番怖かったんや」

成仁の気持ちは痛いほどわかる・・・肉親を亡くすることがどんなに辛いのか、その病状を知った時の苦しさ悔しさ・・・なにもできない悔しさは、オレも同じやけど。

「俊が一人で抱えてることに、そのが辛そうに見えたよ。確かに簡単に言えることじゃないけど、伝えられたことは、よかったとオレは思う」

「オレは、ええんや。辛いのはあいつらなんやから、抱えるくらいなんてことない。だけど、今はどう接したらええかわからんくなってきた」

「アホなこと言うなよ。今更気使いすぎだ。弱気になるな、そののがまずいだろ？」

間髪入れずに怒ってくれる言葉に、胸が痛い・・・でも心地いい。

気使いすぎか・・気を使わない、それは簡単そうで難しいこと。
オレは幸に対してそういう感情をもってないんじゃないかと思う、
いつも気を使ってる気がする。

母で後悔しとるから、同じことは絶対やりたなかった・・やから、
知らん間に使ってた。

最低なんや・・結局、あいつにも気使わせとった・・いつも元気だ
と笑ってくれてた、そんなはずなのに。

「ここは・・なんや、楽やなあ」

心に秘めていたものが声に出してしまった・・瞬間はじめに睨まれる。
「そんなこと・・言うもんじゃない。重荷になんかするなよ」
小さく頭を叩く手、もっと罰してほしかったのかもしれない・・自
分の非道さを。

「事実や、から。・・あいつのこと重荷にするつもりないんも事実
や、けど成仁やはじめたちとおれて今はホンマ助かってるんよ・・
夜が、怖い」

静かに沈黙が流れた。

夜が怖いと言う俊の表情は、その怖さを物語る・・

「担当医の先生に聞いたんや・・夜遅くなると具合が悪くなるって。
オレの連絡先言ってるある、万が一のため・・おちおち寝てられん。
できることならずっと病院におりたいわ」

テーブルにうつぶせる俊、疲れているのが目に見えていた・・きつ
と眠れないでいたのだろう、ずっと一人で。

「・・ちゃんと寝てるのか、おまえ。今日はオレたちいるんだから、
寝ろ・・大変だったな、ずっと」

「こんなもん・平気や、そんな弱ないし・心配すんなや」
ふいに優しくかけられた言葉に不覚にも揺らぐ、これ以上優しくしてもらうのは危険と察した・弱くなつてく自分、今はムリにでも強くいかなければ。

「わかつてるから、無理すんな。眠ることは大事なことだろ？おまえが倒れたらどうする、余計な心配させるだけだぞ？おとなしく寝るよ」

いつの間に入れたのかコーヒークップに暖かな湯気。

「なんや、氣使わせてるなオレ」

「ああ、これ？これは、おまえ、優しさつてやつでしょ？」

「お先でしたあ」

成仁が来るのを見越してか、おまえらというはじめ・コーヒークップは二つ並んでいた。

「なんか盛り上がってる？また飲んでないよね？」

「この家じゃ酒は厳禁なの。おまえもこれ飲んで早く寝ろ、オレは風呂入る。布団引いておくから勝手にどうぞ。あと、朝昭次起こしにくると思うけど容赦ないからよろしく」

じゃあおやすみと、奥へと歩いてくはじめを見ながら俊が小さく笑った。

「なああれもはじめいわく、やさしさか？おもいきり氣使ってるやんけ」

「ああ、これとか？あの人はただの世話好き。気なんか使ってないでしょ」

いつものことだよとうれしそうに出された飲み物を飲む成仁、慣れているのだろう・・小さなはじめのやさしさに。

素直にその優しさを受け取り、飲み干した。

「昭次くん、なんだろうね。なんか怖いな」

「容赦なく起こされるってことやろ、おとなしくもう寝るか。遅いしな」

布団へ移動し、並んで寝転がる・・おやすみと小さく聞こえたかと思うと、すぐに小さな寝息が聞こえてきた。

成、疲れてたのかな・・ゆっくり休み。

こんなふうに誰かと並んで寝るんは・・久々や。

昔は母ちゃんと並んで寝てた・・仲間と雑魚寝もようしたわ、ケン力疲れやったけどな。

静かな空気、すーっと眠気が襲う　　ゆっくり、寝れそうや・・・
ここなら。

眠れなかったことが嘘のように、深い眠りに落ちていった・・

エピソード2

0・幸（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉、重い病気で入院している。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

月明かりが射す病院の一室、ベッドに横たわる幸は・・・じっと天上を見つめていた。

成仁、ちゃんと帰ったかな・・・怒ってたからなあ。

もっとゆっくり話したかったんだけど・・・今日は、気分よかったんだよね、すごく。

目を閉じてみんなの顔を思い浮かべる。

俊の、成仁の・・・加賀さんの、笑い顔が鮮明に思い出され楽しかったことが胸に溢れる。

「・・・のどかわいたあ」

起き上がるうと頭を上げた瞬間、視界が揺らいた・・・

「・・・やば。大丈夫・・・落ち着け・・・」

胸を手で押さえつける、激しい痛みが胸を打っていた。

なんたる・・・これ、なんかいつもと・・・違う。

先生・・・呼ばないと・・・

ベッドの脇へ手を伸ばす、何度もくる痛みに必死でたえながらボタンに手をかけた。

「・・・せんせ・・・早く、来て・・・」

ボタンを押した直後、意識が遠のく・・・いやだよ、成仁とケンカしたまま、なのに・・・

押してすぐかけつける先生たち、最近の幸の様子からすぐに来られ

るように待機は万全だった。

「さちくんっ！聞こえるか？ダメだ・・・すぐに運んでっ。手術の準備だっ」

慌しく走り回る看護婦たち、みんなの不安な表情は消えない。

まだ、さちくんのドナーは見つかってない・・・しかしこのままじゃ、もたない。

今はできることやらなければ、さちくんはまだ逝っていい子じゃない・・・がんばれ、絶対助けるからな。

「連絡・・・入れないと」

「急いでね、あの子たちに会わせてあげないと」

看護婦の間にも、ただならぬ空気が流れていた・・・いつも見ていた弟たちの姿を思い出し、ナースステーションへとあわてて走って行った。

眠りにつく静かな部屋、前触れもなく俊の携帯が小さく鳴り響く。

「・・・ん？」

はっと音に気づく俊は飛び起きて上着のポケットを探る。

「・・・なに、俊さん・・・」

「・・・病院、からだっ」

「えっ？」

その言葉に一瞬で目を覚ます成仁。

「はい神崎・・・えっ？・・・どうして、そんな・・・すぐ行きます」

「俊さんっ！なんかあった、の？」

携帯を握り締めて、振り返る俊が唇を噛み締めて呟く。

「・・・さちが倒れて、意識が・・・ない、やと。はよ、行かな・・・」

「うそ・・・あんな元気だったのに・・・俊さん、なにぼつとしてるの？早く行くよつ。オレ先輩に言ってくるから」

呆然としながら言われたように立ち上がる俊、足元がふらついた。

「加賀さんっ。姉ちゃんが、姉ちゃんがぁー」

階段を駆け上がり一つの部屋のドアを勢いよく開ける、ベッドの人物に勢いよく飛びついた。

「・・・えっ、なに？成仁くん？どうしたの・・・ねえちゃん？」

「あっ・・・ごめん、昭次くんの部屋だった、のか・・・なんでもない、ごめん・・・寝てて」

あわてて飛び出す成仁、ただ事ではないと感じ飛び起きる昭次。駆け出した廊下に、はじめの姿があった。

「おい、なに騒いでる・・・成仁？どうした？」

飛びつくように駆け寄ってくる成仁の見たこともない表情に、何事かと見つめるはじめ。

震えながらはじめの服を握りしめる手、小さく呟く。

「今・・・病院から、電話あって・・・それで、すぐ行かないと・・・騒がしくして、ごめんなさい」

ふらつくように歩いていく成仁の腕を支えた、見上げる瞳は小さく揺れてる。

こんな状態で、なに遠慮してるんだよおまえは。

「・・・おいっ、ちょっと待って。オレも行くっ、昭次は寝てろ」

「なんでっ、オレも行くっ」

有無を言わさない昭次の瞳、小さくため息をつき昭次の腕も掴み二人を抱えるように階段を駆け下りると、玄關に座り込んでいる俊。

「・・・俊」

声をかけると見上げる瞳、成仁と同じように苦しそうに揺れていた。

車のカギと財布を手には駈け出した。

「おい、行くぞ。オレが連れてってやるから」

立てないのか、動かない俊・・・気持ちはわかるけど、まだなにも起こってない。大丈夫かもしれないじゃないか。

「成仁、俊連れて来いっ。車持ってくる」

引っ張ってでも連れていかないとにも始まらない・・・俊、そんな弱いやつじゃないだろ？

「俊さん、お姉さん待ってるよっ！しっかりしてよ」

昭次がケガした足を引きずりながら俊の腕を引っ張った、それを見て成仁も歯を食いしばり叫ぶ。

「そっだよ、姉ちゃん待ってるから。俊さんのこと呼んでるって、気しっかりもって」

二人の思いを感じてふらつく足を前に進めた俊、車に押し込まれ病院へと急いだ。

「大丈夫だ。なんでもないよ、大丈夫っ」

静まる車の中にははじめの声だけが響いていた。

うつむいたままの俊、ぎゅっと足を強く掴み・・・強く叩く。

足が・・・ゆうつこときかん。

こういう場面いやっちゅうくらい夢に見てたわ、覚悟かてしとった・・・

直に言われたのはオレなんや。

やのに、なんやこの状態は・・・弟らに叱られとる場合じゃないやろが、しつかりせえっ・・・大丈夫、大丈夫や・・・なんでもない、きつとなんでもない・・・

俊の様子を伺いながら、隣で頭を抱えている成仁。

姉ちゃん、姉ちゃん・・・嫌だ、ケンカしたままなのに、明日謝るつもりだったのに。

こんなオレ残していなくなったりしたら、許さないからなっ、今行くから絶対待つててっ。

大丈夫、あなたは強い人だから・・・きつと、オレたちのために待つてくれる・・・

助手席、パジャマのまま駆け出してしまっていた昭次が二人の様子をそっと見て怖くなっていた。

びつくり、した・・・こんな経験初めてで、どうしていいのかわからない・・・

治ったら会わせてくれるって言ってた人が、今あぶないって・・・信じられなくて。

けどこんな二人見て落ち着いてなんていらなかった、一人で待つなんて・・・がんばってほしい、二人のためにも。

アクセルを踏み込み、できるだけ急いで車を走らせるはじめ。

バックミラーに映る二人の姿に唇をかんだ。

今、たった今・・・電話が怖いって言ってた俊・・・今日はゆっくり寝れそうだって笑ってたのに、こんなことになるなんて。

神様なんかいないって両親亡くなった時思い知ったけど、今度こそ

信じさせてくれ・・・こいつらのこと助けてあげてっ・・・お願い、だから。

それぞれの思いを乗せ、人通りもなく車もない病院への道のり・・・遠くないはずなのに、果てしなく感じられた。

手術中のランプが灯る廊下・・・ナースステーションから覗く看護婦が不安げに時計を見上げる。

「・・・時間かかってますね・・・大丈夫、ですよね？」

「私たちがそんなこと言っちゃダメでしょ、大丈夫。先生のこと信じてれば・・・」

「そうですね・・・けど、意識なくなるなんて、大竹さんありましたか？」

小さく首を振る姿、長く入院しているからすべての看護婦に親しく・・・顔を見合わせて、幸を思い祈った。

夜の病院の廊下、大きな音を立てて駆け寄る四人の姿。

「あつ、成仁くん。こっちょ、今手術中だから」

「看護婦さんっ、大丈夫なの？姉ちゃんどんなようす？」

「大丈夫、大丈夫だから落ち着いて」

看護婦へ掴みかかるように駆け出す成仁をなだめる笑顔・・・どこかぎこちなく、幸の容態を物語る。

「さち・・・」

無意識に手術室の前に歩き出す俊、ドアの前じつと佇む。

その姿を後ろから見ているはじめたち、胸の鼓動は緊張で高鳴っていた。

「俊さん・・・」

祈るように少し後ろから見つめる成仁。

「あっち座ってるな・・・成仁は、ここにいるか？」

「・・・ここに、いる」

小さく呟く声に、なにもかける声はなく・・・

「俊のどこ、行きな・・・」

背中を押した、二人なら心強いだろう・・・幸さんもきつと、感じてくれるから。

小さく微笑み俊の隣へと並ぶ成仁・・・俊は気づかず、じつと前を見つめていた。

「あの二人、大丈夫かな・・・倒れそう」

「大丈夫なわけないな・・・成仁の気持ちなら少しはわかるから」

「なんで？」

「なんでって・・・父ちゃんたちの時。そうか、おまえ覚えてないもんな・・・」

昭次の知らない場面、オレの場合救急車の中だったが・・・

聞きたそうに見てる昭次に、小さくため息をつき呟く。

「おまえも大きくなったし、いろいろ気になってると思うから・・・いい機会だ。事故のことは、知ってるよな」

「車の事故って聞いた・・・」

「おまえも一緒に乗ってたんだよ、その車・・・」
「えっ？」

思いがけない言葉に驚き固まる昭次、なんで？オレがと呟く、オレだけ助かったの？と。

ポンと頭を撫でると、続けるはじめ・・・その時の光景を思い出しながら。

「オレは、行けなかった・・・三人で出かけててな。ちょうどオレの学校の帰り道で・・・ちょうど、そこで・・・事故ってな・・・」

「兄ちゃん・・・」

辛そうに呟くはじめに昭次が心配そうに呼ぶと、そつと目を閉じて小さく大丈夫と頷く。

「最後に・・・昭次のこと頼むって言われた。ホントにもう、意識がないくらいだったけど、ちゃんと聞こえた」

もう・・・現場で、両親は瀕死状態で・・・偶然にも居合わせたオレは、幸いだったのかもしれない・・・最後に付き合えたのだから。

「救急車の中で二人とも亡くなった。一緒におまえもいたよ、ずっと起きなくて心配したよ・・・これが全部」

「オレ・・・なんで助かったの・・・二人ともダメだったのに、オレだけ・・・なんで」

「母さんがかばってたって聞いた・・・オレはホントに感謝してる、おまえのこと助けてくれた母さんに・・・」

「・・・助けてもらった人なのに、覚えてないなんて・・・思い出したい・・・全部」

じつと宙を見据える瞳は小さく揺れ、強く決意が見える。

「ごめんな、オレのせいだな・・・オレが止めてたからだ、おまえの記憶」

「そんなことないって・・・こんなこと思うの最近のことだから、またへんな夢見だして・・・ホント記憶なんて、兄ちゃんがくれたもの

だけで十分だったんだよ?」

オレの腕を掴んでくる手に、ホントだよと見つめる昭次の目に・・
なんだか余計に辛くなる、いくら辛いことでも話してやればよかったと。

そんなはじめに気づき、少しさみしそうに笑い、立ちあがる昭次。

「オレ・・俊さんたち、見てくる」

「あ、ああ。頼む・・成仁たち落ち着いたら、もっとちゃんとするから」

「うん・・オレ、大丈夫だから、もう一人の・・兄ちゃんのことも、教えてね」

走っていく昭次を悲しい顔して見送るはじめ。

「隠しておけることじゃない、か・・オレもいいかげん大人になるかな」

大きくため息をつき、天を仰ぐ・・思い出す、しかないのだ。

「・・昭次くん」

「まだ・・終わらない、みたいだね。大丈夫?」

ふいに後ろから肩に置かれる手に、ビクリと振り返る成仁、昭次の問いに小さく頷く。

「・・俊さんは、ずっとあのまま。オレ・・なんか落ち着いてて、やな弟だな」

「そんなの、違うつて。信じてるからでしょ?俊さんも、信じてるから待ってるんだよああやつて」

手術室のランプを見上げてじっとしてる俊を見つめる成仁。

昭次の言葉に、少し気持ちが落ち着いた気がした。

そう、信じてる・・・大丈夫だって、だから待てるんだと思うから。

「・・・ありがと。昭次くんまで連れてきちゃって、悪かったな。はじめさんも・・・怒ってないか？」

「怒るってなんで。なんかしたくてしかたない人だから、なんでも言つて。気にしないでいいから、オレもね」

「・・・十分だよ、こうして連れてきてくれただけで・・・オレたちだけだったと思うと・・・情けない、震えてるし」

震える手を見せると昭次がその手を握り締める。

「・・・大丈夫、姉さん強いんでしょ？がんばってるから、祈つていよう。それくらいならオレもできるから・・・」

ぎゅっと握る手に言葉を返す変わりに握り返す、手術室の方へ手をかざし目を瞑って二人で祈った。

後ろから聞こえる成仁たちの会話をしつかりと聞いていた俊、一緒に手を合わせてた。

さち、聞いたやろ、みんながんばってる、祈ってる・・・オレも一緒にがんばるから、戻ってこいや・・・

それから数分後・・・ランプが消え、開かれるドア。

「・・・先生！」

「さちは・・・」

飛びつくように出てきた先生に駆け寄る俊と成仁、なんともいえない表情の担当医。

「・・・一命は、とり止めましたが意識が・・・まだ。今夜がやまだと、ご理解ください・・・」

愕然とした・・・そんなこと、信じられなかった。

部屋から運び出される横たわるさち、駆け寄る成仁・・・俊は、その場から動けずにいた。

「姉ちゃんっ！冗談きついつて、いくらオレでも怒るからなっ！」
急いでいるのか立ち止まらずに運ばれていくベッド、張り付くように幸の顔を見つめる成仁。

真っ白な姉の顔に、足が止まる・・・今までに、見たことのない・・・
弱りきってる姉の姿に、鼓動が痛いほど高鳴り視界が歪んでいく。

「さち・・・さちっ・・・」

成仁と変わるように駆け出す俊、集中治療室に入るためドアの前で止められる。

さつきと同じようにドアの前、二人で立ち尽くす。

「・・・さち。がんばってくれや・・・成のために・・・」

「・・・こんな時にオレの心配なんかするなよ」

さつきの姉の表情に、不安ばかりが募って行く・・・

「中、入れてもらえるかな。行ってきたよ俊さん」

「ええ、ここで待ってる・・・成仁、起こして来い。おまえが行けば、起きてくれる・・・」

「なにそれ、オレよりあんたのが必要にきまつてるだろっ！看護婦さんっ、中入らせてっ」

俊のわかってない言葉に、いらだつ成仁・・・俊さんに呼びかけてもらったほうが気づくに決まってるだろ。

「わかりましたから・・・静かにね」

幸のことをよく知っている看護婦たち、その願いを断るわけにはいかなかった。

今日が、最後かもしれないのだから。

「これつけてください、それと静かに、お願いしますね」

マスクと白衣を渡された、入っていくと薄暗いカーテンの向こうに横たわる幸の姿。

「・・・姉ちゃん」

「・・・あんなに、元気そうやったのに。なんで、こうなるんや・・・」

「俊さん・・・平気だよ、すぐ気づくって・・・」

ベッドの脇に座り込み必死で見つめてる成仁、そんな姿を辛そうに見つめる俊。

オレ、この状況・・・二回目なんやで。

・ 何度も同じこと言われる、心の準備でもしとけいうことか？ 理解なんかできるか・・・

だからこんなとこ嫌いなんや・・・大事な人、みんな連れてく場所。

「どうして・・・みんな、置いてってまうんやろ・・・やっぱりオレはいらん奴なんか？ 必要ないから捨ててくんやろ・・・なあ幸っ・・・答ええやっ」

「・・・俊、さん？」

ふいに幸の前に出ると叫ぶように発する言葉、成仁は驚いて見上げる・・・俊の泣きそうな顔が見えた。

「なあ、起きてくれえや・・・置いてかれるんわ、もう嫌なんやっ・・・」

「神崎さんっ、静かにしてくださいっ。約束守ってくれないと、ここには入られませんよ」

大きな声に慌てて止めにくる看護婦。

俊は無意識に幸のベッドにはりついて、じっと見つめていた睨むように・・

その想いが、通じたのか・・答えるように、ピクリと幸の手が動き・
・ゆっくりと目が開く

エピソード2

00・家族（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉、重い病気で入院している。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

目を覚ました幸が辺りを見回した、聞こえていたのは夢ではないと気づく。

「・・・ごめん、ね・・・」

小さな小さな声が部屋に響く。

「・・・！先生っ、先生っ！幸さんがっ、意識をっ・・・」

駆け出す看護婦、よろけるようにベッドへ手をつく覗き込む俊、成仁は瞬間手を握った。

「さちっ！わかるか？俊やつ。しっかりせえっ」

「姉ちゃん！お願いしっかりして、今日のこと謝りたいんだよ・・・ごめん、ごめん・・・」

「・・・なに、言ってるの・・・成はなににも、悪くないよ・・・姉ちゃんこそ、ちゃんとできなくて・・・ごめんね」

握っている手を弱く握り返す幸に、成仁は力強く握り返した・・・今にも消えてしまいそうな姉を引き止めるように。

「なに言っただよ、謝ってくれなくていいからっ・・・もう寝ないでっ！」

「・・・そん、なこと言っても・・・姉ちゃんもう眠い、し・・・」

いつもと同じように、そんなことを軽く言う幸は小さく笑う・・・

「さち・・・」

「しゅん・・・がんばった、んだけど・・・ごめんね。悲しい思いさせ、たくないのに・・・ごめん・・・」

幸の頬をそつとなで、温もりを分けるように・・・何度も髪をなでる。なぜか、気持ちが落ちついていた俊・・・取り乱したくない、幸を最後まで見ていたいから。

「・・・なんでおまえが謝る。オレは、平気や・・・さち、ゆっくり休めや。ずっと、見とるから」

「見てて・・・私も、二人のことずっと・・・見てるから・・・なる、ひと・・・なにも、してやれなくて・・・ごめんね」

幸の頬に流れ落ちる涙、その言葉に涙に成仁は冷静さを失った。

「嫌だっ・・・そんなこと言うなって言っただろっ・・・また怒らせたのかっ。弱気な姉ちゃんなんか嫌いだ」

「・・・最後まで、怒らなくても・・・いいじゃん。怒りっぽいところ・・・直しなよ・・・」

「最後とか、言ってんじゃねえよっ。もうしゃべるなよ、がんばってよ・・・」

力なく呟く成人に、幸は困ったようにまた涙を流す・・・その涙をそつと撫でる俊。

「しゅん・・・ちゃんと、させて・・・ね。頼りに、してる・・・んだから」

頬を撫でる俊の手に弱弱しく重なる手、指を握りしめる。

力をこめてないと、眠りそうで・・・もっと、感じていたい・・・二人の体温を。

「幸・・・結婚しよう。したら、成仁はオレのホンマの弟や・・・」

ふいに聞こえてきた言葉に幸は涙も止まるほど、驚いていた。

なに、言ってるんだろこの人は・・・私の状態わかってるのかなあ。

「ばかな、こと・・・結婚なんか・・・したくないよ。簡単に、言ってくれる・・・成、こういう時は怒っていいんだよ・・・かわりに、言っ
てやってよ」

「おまえこそアホやな、簡単に言えることやないわ・・・ほら、ずっと持ってたんや。おまえが指輪嫌いいうて突っ返したもん、はめてくれるやろ？」

キラリと光る指輪が見えた・・・それは、以前俊にもらったもの・・・ただの指輪じゃないことを知って、返したもの・・・まだ、持ってたくれたんだね。

クライで返すわけないのに・・・俊は、結構抜けてるんだよね、こういうところ。

乙女心がわかってないんだから。

自分の状態を知っているから・・・重荷になんてなりたくなかった、だから結婚とかありえないと思った・・・でも、今・・・それが私たちを繋ぐ、最後のものだと感じてしまう。

いいのかな、俊のものになっても・・・ずっと一緒にいられるのかな・・・

「・・・しかたない、な・・・もらってあげる、初めての・・・指輪。最後だもん・・・ね」

「最後とか・・・言うなって言ってたんだろ、さっさともらっておけばよかったのに・・・姉ちゃんの結婚式、やりたかったのに・・・」

諦めきれない成仁の言葉に小さく微笑む幸、涙がまた頬を伝っていく。

「そう・・・ね・・・もったいなかった、ね・・・こんな、いいもの・・・貰えたんだから、元気にならないと・・・せっかく、結婚できる、の

にね」

「今、やればいい・・・成仁が、承認や。これで夫婦やる・・・十分や」

ゆるくなってしまうている指輪を、そつと指へはめ・・・ゆつくりと近づけていく唇が重なった。

「・・・しゅん・・・辛い、想いばつか・・・手間のかかる彼女で、ごめんね・・・ありがと、う・・・最後、まで私だけ・・・喜んで・・・」

「アホ、オレもうれしいに決まってるやろ・・・ずっと、願ってたことや」

そつと頭を撫でる、その手は小さく震えていた・・・見上げる幸が幸せそうに小さく微笑む。

ゆつくりと伸ばす幸の手が俊の頬を撫でる、その手も弱く震えていた。

私・・・本当に、幸せだよ・・・最後に、こうして好きな人と一緒に、なれたんだから・・・

でも・・・もう・・・

「疲れちゃった、な。もう、休んでも・・・いいかな・・・」

ビクリと、俊の身体が震えた・・・小さく唇を噛み、呟いた。

「・・・ゆつくり、したらいい・・・大事にするし、ゆつくり休め」

もう一度、頬へと口付けを落とす俊。

「・・・できた、だんなさん・・・だ・・・ありがと・・・」

話してる間、幸を診察していた先生だが覚悟を決めている二人に手を止め、瞳を閉じる。

本当に・・・感謝してる、俊に会わせてくれた俊のお母さんに・・・も

うすぐ会えますね、いたらない娘ですけどよろしく願いします・
この指輪、私の宝物だよ。

俊・ごめんね、いきなりバツイチにしちゃって・縛り付けて、
ごめんなさい・うれしかった、最高だよ私の人生。

ふっと、意識をなくす幸・まるで眠るように瞳をゆっくりと閉じ
ていった。

光の中、幸は見つめる・その先に、見たことのない女の人が立っ
ていた。

優しく微笑んでいるその人は・誰かに、似ていた。

ホンマ運のない子やね、けど俊は一途やから、大丈夫。

今まで支えになってくれてたみたいやね、ありがとね。うちら二人
してホンマ情けない・ずっと見守ってて、やってくれる？一緒に・
・

宙に浮かぶ幸、その人は俊の母だった・うれしそうに笑顔を見せ
た、母に連れられて上っていく。
俊、成仁・ありがと・

「二時十八分・・・ご臨終です・・・」

脈をとっていた先生が小さく一言告げると、立ち尽くす俊の肩をそ
っと叩くと部屋を後にした。

天を仰ぐ俊、小さく微笑み目を閉じる。

「聞こえたか・・成仁」

「・・うん。聞こえた・・なにが、ありがとう・・だよ。そんな言葉いらないし・・」

手を握り締めたまま、ベッドにうつ伏せ憎まれ口の成仁。

ポンと頭を撫でると見上げる瞳が不安いっぱいに揺れていた。

「ねえ、ちゃん・・もう、ホントに起きない・・んだよね？もう、苦しくないんだ・・ね」

「そうや。ゆっくり・・休む言つてたやろ。見てみ・・」

立ちあがってゆっくりと顔を見た、怖くて見られなかった成仁はずつと目をそらせていたから。

その表情は・・とても、安らかな・・笑っているように見えた。

「・・よ、かったな。俊さんと一緒になれたこと・・うれしくてしかたないって、顔じゃん・・」

見た瞬間に成仁の瞳から大粒の涙が流れ落ちベッドに染みていく。

声を殺して、小さく泣く成仁の肩を抱く俊。

引かれるようにその胸に抱きつき、泣いた・・姉に感謝と、さよならを祈りながら。

ありがとう、姉ちゃん・・オレはあなたのおかげでこうして過ごせていられた、ひどいことばかりしていたのに・・本当に、ごめんなさい。

それと・・結婚、おめでとう。

オレも、姉ちゃんと同じくらいうれしいよ・・俊さんのこと、兄と呼べること・・どんなに支えかわからない。

忘れないから・・見守ってて。

しばらく経ち、真つ赤な目をした成仁が「ごめん・・・」と小さく囁き身体離す。

クシャリと髪を撫でると同じように真つ赤な目をした俊が辛そうに笑う・・・

「オレ・・・伝えてくる、待っててくれると思うから・・・」

「そやな、しっかりお礼言ってきたくれや・・・オレ、もう少しここにおってもええか？」

「居てよ。姉ちゃんのこと、見ててあげて・・・俊兄ちゃん・・・」

言った瞬間、固まる二人・・・また涙が頬を伝い隠すように走って行く成仁を見送る俊・・・堪えていた涙がそつと頬を流れ落ちた。

「・・・兄ちゃんやて。今さらやけど、うれしいわ・・・わがまま聞いてくれてありがと。おまえのことやから全部お見通しやったか？オレに大切なもの残してくれて・・・ホンマ、ええ女や・・・」

涙で濡れてる幸の頬をきれいに拭いてやり、その頬へ口づける。

手を握り締め・・・ゆっくりと二人だけの時間を過ごした・・・指には、お揃いの指輪が光っていた。

駆け出してくる成仁の姿に立ち上がるはじめが駆け寄る、昭次もゆつくりと後を追った。

「・・・成仁。どう、なった・・・」

「いろいろ、すんませんでした・・・さっき、息引き取りました」

涙を隠すように、小さくそう言う成仁・・・言葉がうまく出てこない二人。

「・・・そう、か。大変、だったな・・・」

言葉より伝わりそうでポンと頭をなでるはじめ、昭次も成仁にそつと寄りそう。

そのやさしい手に涙があふれ出そうになり顔を背け隠そうとする成仁。

「大事な人が亡くなったんだ・泣けばいい、誰も見てねえよ」

「そうだよ・見られたくないんなら隠してあげるから・泣きなよ」

そう言い、手をかざす昭次の目から涙がこぼれ落ちる。

「・・昭次くんが泣いてんじゃん、大丈夫だよ。姉ちゃん、最後まで幸せそうだったから・笑って見送ってほしい、そういう人だから」

「・・そうか。それがなによりだ・俊、は・どうしてる？」

成仁の出てきた扉を見つめ心配顔のはじめに、小さく笑って首を振る。

「今、二人にしてあげたくて。あの二人、やっと結婚してくれた・最後に」

「そうか・幸さんもうれしかっただろうな、それは。俊の優しさ、決意・すごいな」

驚きは隠せない、だけど俊らしいと思った・それは、幸さんと成仁には絶大な信頼の証しだろうから。

「邪魔しちゃダメだな・あいさつ、したかったけど」

「ん、だけどオレも二人のこと見てもらいたいし。昭次くんのことも紹介したいし・来て」

部屋に入ると入り込めない空気を感じた、ためらいながら声をかけようとする成仁を止めるはじめ。

「いいって。オレらはあとでいいから、ここで見させてもらっていいか？」

「・・・うん、ごめん。見て、姉ちゃんうれしそうな顔してるから。最後までいっぱい話できた・・・ちゃんと会えて、よかった・・・」

うれしそうに姉を、二人を見つめてる成仁に目頭が熱くなるはじめ強いやつらだな三人とも、すっかり繋がってるよ・・・幸さん、ホント幸せそうだ・・・俊も。

どうなるかと思ったけど・・・かつこいいことしてくれるよ。

「・・・なんか、眠ってるみたい・・・きれいな人。ホント、安らかな表情だね・・・」

昭次が感じたまま言葉を告げる、その通りだと頷くはじめ・・・安らかに逝けたのだと見てわかる。

「そうだな、幸せそうだ・・・」

心から呟き、二人を見守った。

視線を感じたのか俊が振り返る。

「あっ・・・なにしてるんよそんなところで。幸、はじめたち来てくれたで」

「邪魔して悪い・・・幸さんにあいさつさせてもらいたくて・・・」

「喜ぶわ・・・ありがとう」

立ち上がる俊、脇へと避けると成仁が隣に並ぶ、導かれるようにベツドに向かうはじめと昭次。

近くで見る幸はまた余計にきれいに見えた。

「幸さん、結婚したって・・・おめでとう。俊なら幸せにしてくれる

と思うから。お幸せに・・・」

「・・・昭次です。はじめましてだけど、お祝いさせてください。お幸せに、幸さん」

「ありがと・・・結婚したこと、三人だけに知っててもらえればええ。十分幸せや、なっ幸」

ふと、微笑んでくれたような幸の表情に押えられず涙をこぼす昭次。
「昭次くん、ごめんな。ありがと・・・」

大きく首を振って涙を拭う。

「ごめん、なさい・・・すごくきれいだから」

死んでるなんて、信じられなくて・・・みんな我慢してるのに、オレが泣いてどうするんだよ・・・
ホントにうれしそうに俊さんの言葉に笑った気がした・・・亡くなっても気持ちは伝わるんだと感じた。

「ホンマ・・・今日はいろいろお騒がせして・・・成仁、送ってあげてや」

「いい、いい。オレらは勝手に帰れるから。気は使うなって言うてだろ、こんな時にオレらのことなんか気にするなよ。行こか昭次」

「うん。じゃ、またな。明日また会おうな」

「こつちこそ、また。ホントありがとぅ、おやすみなさい」

最後にもう一度三人を見渡し、小さく微笑み手を振った・・・悲しみと、喜びが溢れる部屋・・・いい、別れができたことを感じた。

「じゃな、手伝うことあるだろうから明日電話して、絶対にな。遠慮はなしな」

「わかった・・・頼りにしてる」

素直に頷く成仁の頭をなでて微笑むはじめ。

「少し寝なよ二人とも。これから大変なんだから・・・じゃ、な」

こういう事態の大変さは、嫌というほど知らされているはじめ・倒れるなよと願いながら部屋を後にした、あの二人なんだ大丈夫と思っながら。

二人を見送り静まる部屋、力なく椅子に腰掛ける俊。

「成仁・・勝手なことしてすまん」

「オレにはなにも言う権利ないし、姉ちゃんが決めたことだ。オレも願ってたことだよ・・」

「・・幸のは、同情や。オレに必要なもん残してってくれたやる・・」

「俊を見下ろしていた成仁、勢いよく隣に座り込み。」

「そんなこと言うと怒られるぞ。姉ちゃんの本心だよ、あれが。自分がこんなだからって俊には幸せになってもらいたって・・絶対受けないって言ってた、辛そうに笑って・・本当はこうしたかったはずだよずっと、わかってあげてよ姉ちゃんの心」

「・・何年一緒におったと思うと、あいつの気持ちはようわかってる・・会った時から、変わってないんやあいつの想いは」

大きなため息をつき、幸を見つめる・・喜んでくれてたのはオレもちゃんとわかってる、幸がオレのこと想ってくれてるのもわかってる・・だけど最後は、オレのためだった。

成仁の、ためだったのかもしれへん・・一人で生きていくのは辛いつて感じてくれてたおまえだから。

「それでもええ、から・・近くで笑ってほしかったわ」

俊の呟きに小さくため息をつく成仁。

オレは姉ちゃんの口からちゃんと聞いたのに、それで最後ケンカしたんだから。

俊さんのこれからを思って拒んでいた姉、それでも受け取ってしまった姉の気持ち・誰にも渡したくなかったんじゃないだろうか、これからの俊さんを。

オレに、繋げてくれたのだと思わずにはいられないけど・それはオレたちだけの心に止めておこうな、姉ちゃん。

「・・・俊さんが信じなくてもオレの中には姉ちゃんの心、持ってるからさ。いつでも言えよ・・・聞かせる」

ふっと小さく笑って頷く俊、倒れ込むようにベッド脇にうつ伏せた。

「・・・ちょう、寝させてもらう。さすがに神経使いすぎたようや・・・おやすみ、幸。成仁」

「おやすみなさい、いい夢見てな・・・」

幸の手を握り締めたまま、深い寝息を立てる俊。

反対側の手を握り締め姉の姿を探すように成仁も眠りについた夢の中で会えると願いながら。

エピソード2

1・義斗（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉。病院で療養中、悪化し死亡した。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

「井川忍」昭次の同級生、俊とは家が隣同士で慕っている。

「関義斗」俊のケンカ仲間、昭次やはじめとの関係は？

エピソード2

1・義斗

病院から帰宅し、すぐに横になったのはじめだったが。

「・・・はあ、寝れないわ、さすがに・・・」

はじめにとって今回のことは、いろいろと思い出させる出来事で目を閉じると昔のことが蘇り眠れなかった。

早々に起き出して、外へ出た・・・こういう時は走るのが一番だと知っている。

「あいつら・・・大丈夫かなあ。一回りしたら連絡してみるか、昭次は今日も休みだっ」

勢いよく走り出すはじめの前方・・・バイクがゆっくりと横を通っていった。

ちらりと気にしたものの、はじめは気づかずに走っていく。

バイクは加賀家の前に止まり、ちらりと振り返って小さくため息をついてるのは・・・こちらで眠れずにバイクを走らせていた、義斗。

「・・・知らんうちに、来てたんか・・・」

見上げる家は昔よく遊びに来ていた・・・昔、住んでいた家。

素直に懐かしいと思ってる・・・オレも大人になったんかな、さつきすれ違ったの・・・あいつ、やった。

気づかれずにホッとしてる、はじめとは相容れない・・・気がした、あの子がいるかぎり。

ふと顔を上げた時、二階の窓から覗く影が見えた。

おもわずメットを外して見てしまう義斗、今思っていた人物な気がして・・

「・・昭ちゃん？か・・」

呟く声は宙に消える・・確実に視線を合わせたはずなのに奥へと入っていつてしまう影。

「覚えて、へんか・・」

今のは、きつと昭次だった・・面影は、変わらない。

メットをかぶり直しアクセルを吹かす、二度と会えないと思っていた・・少しでも姿が見れて、よかったかもな。

小さく笑い、走り去る・・ここまで来たんや神崎のところでも行こう、うさ晴らしに。

頭の片隅に小さな昭次を思いながら、振り切るように走った。

目をこすりながら寝ぼけてる頭が少しずつ覚醒してく昭次。

バイクの走り去る音に、もう一度外を眺めた。

大きな音で目覚め・・何気なく窓開けた時下にいたバイクの人と目があった気がした・・知り合いだっただろうか？

知り合いにバイク乗ってる人は、いないと思うから気のせいだと思っけど・・家の前にいるってちょっと怖い、な。

寝不足がたたっていつの間にか寝てた、あんなことあった後なのに・・薄情なのかなオレ。

「はあ・・どんな顔してたらいいのか、わかんないよ・・」

ため息をついて一人うな垂れる昭次、昨日はうまくできただろうか・・二人に変な思いさせてなければいいんだけど。

「兄ちゃん、起こしてこよ」

松葉杖をつきながら隣の部屋へ、覗くとベッドにはすでにいなかった。

「あれ、どこ行っただろ。もう起きてる・・・」

そういえば、さっきバイクに氣とられてたけど走っていく人がいたような・・・きつと兄ちゃんだろう。

「悩むといつもあだから・・・今回は重症だろうな、きつと」

小さくため息をつき、部屋へと戻った・・・まだ時間はかなり早い。

オレより全然二人に近かった兄ちゃん、人の死には異常に敏感な兄はテレビのニュースを見ても辛そうな表情を浮かべてしまうような人で・・・こんな身近な人となると、心配だ。

両親を亡くしてるが全然実感ないオレ、そんなオレにできることはみんなを元気づけることくらいだけだ。

なにかおいしいものでも作ろうかな、俊さんたちにも持っていてあげればいいし。

思い立ちキッチンへと向かった、きつと心こめたらみんな喜んでくれるだろう。

それぐらいしかできないから・・・

病院では、なにかと思い入れのあった院長が様子を見に来てくれていて・・・好意で送ってくれることとなった。

「・・・じゃ、がんばるんだぞ」

一言だけ残して帰って行く、最後に幸を寂しい表情で見送った。

・がんばれなんて。何度となく経験したことだがまったく慣れることはない・かける言葉さえいつも見つからないまま。

大切な人を亡くす、辛いとわかっててもあいつらの気持ちなんてわかってやれる力はない・無力だな。

人の命を助ける仕事だというのに、がんばれとしか・言えない

俊たちの必死に作ってる静かな笑顔を思い出しながら、命運を祈った。

「がんばれよ・・・」

病院へと戻る車の中、静かに呟いた・

三人で戻った家には、寂しいほどの静けさが漂っていた・いつもと同じはずなのに。

静まる部屋に幸が横たわる、眠っているように。

「・・・成、おまえ少し寝え・オレ、見とるから・・・」

「なんで、大丈夫だよ・お茶でも入れるし」

立ち上がろうとする成仁、瞬間視界が揺らいで座り込んだ。

「素直に休め。なんかあつたらすぐ起こすから」

力なく座り込む成仁の肩を抱き、頭をなでる俊。

「俊さんも、同じでしょ・姉ちゃん、もう見てなくて、大丈夫だから・ふとん出してくる、一緒に休んでよ・・・」

成仁の言葉に素直に頷いた・もう、心配はいらないのだ。

強がつて笑う成仁を元氣付けてやる言葉も出ない、自分を保とうとすることはいっぱいで・・・幸、おまえの死はオレたちの時間止めていったみたいやわ・・・

静かに横たわる幸の眠るベッドへ頭を傾けるとどつと疲れが押し寄せ、意識を失うように眠る俊。

「・・・俊さん、持ってきた・・・」

寄り添うように眠ってる二人の姿に視界がにじむ・・・そつと肩に毛布をかけた。

いまだに、信じられないよ・・・もう動かないなんて・・・もう「成」って呼んでくれないなんて。

こうして並んできるとこも、もう見れない・・・二人の邪魔したくないけど、最後だから・・・一緒にいさせてよ。

俊の横へ座り目を閉じる、病院でも眠ったはずなのに一向に途絶えない眠気・・・それは俊も同じだった。

バイクが大きな音を立てて止まった、玄関の前で部屋を見上げてるのは義斗。

神崎の家の前、呼び鈴を鳴らす・・・出てくる気配がなかった。

「留守かよ・・・」

その様子を隣の家から覗いてるものがいた、俊のことを兄と慕う井川忍。

あの人・・・ずっと前、俊兄とケンカしてた人だよね・・・俊兄いない

のかなあ、寝てるとか。

バイクと家を行ったりきたりする困ってる姿に意を決して玄関へと走った。

何年か前に見たきりだもん、きつと久しぶりに来たんだ、それなのに会えないなんて辛いし。

俊兄きつともうすぐ帰ってくると思う、たぶん。

大きなため息をつく義斗、タバコに火をつけ煙と共にまたため息を吹き出した。

なんや今日はまったくついとらん・・・こういう時は出直したほうがええのかな、神崎にケンカ売ってすっきりしよう思うとったのになあ。

この動機があかんかったか。

タバコをもみ消しバイクにまたがると、エンジンをかけようとした瞬間動きを止めた、なにか聞こえた気がして。

「・・・あ、のお」

「へ？」

もう一度聞こえた声に振り返る義斗、そこには弱そうな男の子が立っていた。

「今、オレのこと呼んだ、か？」

「あ、はい。あの、俊、さん・・・のお友達、ですか？」

「俊？・・・ああ、そうだよ。いないみたいやから帰ろう思ったとたこや、なんで？」

なんだこいつ、オレは気軽に声かけられたことなんかない、ましてやこんな清纯そうなガキに。

思わずマジマジと見つめてしまった、そいつは逃げ腰のわりに話を

続けてる。

「オレ、隣の家なんで・・・よかつたらうちで待ってます？なんか困ってみたいだったから。俊兄すぐ帰って来ると思うよ」

・オイオイようわからんやつ家にいれてもええんか、自分でいうのもなんやけどあやしいやろオレ。

驚いて固まってしまう義斗、少し考えてから口を開いた。

「え・・・っと、それはホンマありがたいんやけど・・・ええの？親に怒られへんか」

「あつ、大丈夫。俊兄の友達だって言えば、そうなんですよ？」

「まあ、そうやけど・・・」

頭を掻きながら首を傾げる義斗。

神崎はここでどんな暮らししてんねん、友達だからって警戒しないなんて・・・ありえへんは昔を思うと。

「オレ、忍つて言います」

「あ、関義斗」

名を言われとつさに返すと小さく微笑む忍に、つられて引きつった笑顔を見せる義斗。

ほっと胸をなでおろす忍、おもわず誘ってしまったのは気になったから。

俊兄の昔を知ってる人・・・この人は昔の俊兄に一番近い人だろう。

「すみません、こんなに早く。ちょう早く来すぎまして、おらんな

んて思わんかったんで」

「いいんですよ。神崎さんの知り合いなんですよ？せつかく来たんだから。連絡はしてないの？」

「番号なんかしらんのですわ。久しぶりにびっくりさせたらう思ったんやけど、失敗や」

母と笑って話してるその人を見て首を傾げる忍、なんか普通の人に見えて。

雰囲気からして、ケンカするような感じでもないような。

「忍。母さんもう行くから。関さんにお茶でもお出ししてあげて」
どたばたと慌しい母、忍はまだ不思議顔。

打ち解ける母とずっと笑顔の義斗に少し不信を感じてしまい、玄関へ走っていく母を追い小さく問う。

「ちょ、母さん。まだいいじゃん、もうちょっといてよ。オレどうしたらいいの？」

「あなたがあげたでしょ。すごくいい人よ？付き合ってあげなさい。きつともう帰ってくるだろうから、頼むわよ」

言うだけ言って行ってしまう母に呟く忍。

「いい人って・・・なにを根拠に言ってるんだ、あの人は」

たしかに、あの人辺りのよさそうな感じ・・・あの時の人なのか、自信なくなってきた。

そろーっと義斗のいる部屋を覗くと、気づいて笑いかけてくる・・・違うかも。

「忍くん、言うたか？ありがとな、待たせてもらうだけで十分やら、なにもいらんよ」

「いえ。ちょ、待っててください」

バツ悪く、慌ててお茶を運ぶ・・・母といた時と変わらない雰囲気

ほっとした。

「サンキュ。座れば？オレおったら氣使うか・・・悪いな、怖いわな」
離れて立つ忍に小さく笑いながら聞いてくる問いにびっくりして口
ごもる忍。

「・・・あつ、えと・・・」

「ええよ。得体しれんし、無理ないわ。おまえ学校あるんやろ、一
緒に出るし」

すでに立ち上がると出て行こうとしてる義斗を思わず止めてしまう
忍。

「違います、別に今怖いとかじゃないし、そういうしゃべりも俊兄
で慣れてるから・・・まだ時間大丈夫なんで、お茶飲んでってください
い」

早口にそういうと、自分の分も持ってきていたお茶を飲み干し、隣
に座った。

「ほうか、ならええんやけど」

どこかムキになってるその子に小さく笑いながらお茶をいただいた。

「神崎んこと、よう知つとるみたいやな。仲ええの？」

「よく遊んでもらってたから仲いいですよ。最近は遊んでないけど、
彼女さんが病院入ってるみたいでいろいろあるみたいです」

「彼女・・・か。病氣なんか？・・・」

神崎の現状を初めて知った義斗は、昔のことを思い出していた。

また、病院か・・・なんや神崎、えらい恋愛しとるんちゃうやろな・・・

考え込んでしまってる義斗に話を変えるように聞く忍。

「あ、あの・・・あなたと俊兄は、友達なんですか？」

「は？あー、なんていうんか。友達ではないなあ。くされ縁？仲悪

いんよオレら」

ふと頭に浮かんだのは殴り合ってる二人の姿。

「すごいケンカしてましたもんね、友達ってのもおかしい」

納得したように頷いてる忍に義斗は小さく首を傾げた。

「ケンカって、なんで知ってるん？オレこっちじゃ神崎とケンカしてへんけどなあ」

じっと見てくる義斗になんかへんなことと言ってしまったのではと固まってる忍。

「神崎に聞いたとか、か？」

「・・・ずっと前、夜ケンカしてたでしょ？そこで、夜中」

外を指差し小さく呟く声、記憶を辿る・・・ここに來た事は一度しかなかった。

かなり前の話やな、オレが始めてここ來た時やないか・・・この子もよう覚えとるはそないなこと。

あんま周りなんか見てへんから、迷惑かけとったのかもしれないわ。

「見られとったんか。けど、そんなん見とったのによう声かけてくれたな。サンキュ」

どこか独特な笑顔に、照れながら呟く忍。

「なんか・・・困ってたし、俊兄の知り合いだから。怖かったけど・・・いい人でよかった」

笑い出す義斗。

「ええ人？そんなこと言われたんは初めてや。そんなんと違っわ」

意味深に小さく笑ってる義斗に首傾げる忍。

違っのかな・・・オレも母ちゃんと同じにいい人だと感じてる。

こうして俊兄のとこへ遠くから来てるってことはやっぱり仲いいんだと思うし、ケンカするほどっていうもんな。

笑ってるのに、さみしそうな顔・俊兄がこっち引越して来たこととその理由なら、気持ちわかるよオレ・・・

「知らんほうがええこともある。忍の中ではええ人であるわ」

「オレもなんか怖そうだから聞かなくていいや。見た目やばいし、でも直感でわかる言い人だって」

にこりと笑ってそう告げる忍に、引きつる顔。

・・・どこからでくれるんやろこいつのこの自信。

ええ人やないわ、どっちかいうたら悪いほうやし・・・調子くるうつちゅうのこいつ。

お茶を飲みながらなんだか居づらい視線を外し立ち上がり、窓の方へと歩き外を見つめる。

遠くから見えた人影に、にやりと口の端を上げる義斗がいた。

エピソード2

2・神崎と関（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉。病院で療養中、悪化し死亡した。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

「井川忍」昭次の同級生、俊とは家が隣同士で慕っている。

「関義斗」俊のケンカ仲間、昭次やはじめとの関係は？

エピソード2

2・神崎と関

ひとときの眠りから覚める成仁。

「・・・ん、そうだ。電話・・・しないと」

俊を起こさないように立ち上がり、よろよろと電話を手にした。

「もしもし。あつ、昭次くん？早くにごめん、はじめさんは？」

「あつ・・・今、走りに行ってるみたい・・・ごめんなさい。もしかしたらそつち行くかもだけど・・・」

「そうか。オレ・・・今日仕事行けないと思うから、帰ったら電話あったこと伝えてくれる？」

「はい、わかりました・・・成仁さん、大丈夫・・・」

小さく告げられる昭次の言葉に、心配が伝わる。

「・・・心配かけてごめんな、大丈夫。昭次くんも後で寄って」

できるだけ明るい声を出し、受話器を置いた。

バシツと頬を叩く成仁、沈んではばかりはいられない。

「・・・成仁。オレ、ちよつと家に一回帰るわ」

ふいに後ろからかかる声にびっくりして振り返る、いつの間にか起きてる俊の姿。

「え？帰るの？どうやって・・・歩いてはやめなよ、危ないから」

「大丈夫。すぐそこやないか、少し寝たらすつきりしたから。ちよつと一人にさせてもらいたい、ええか？」

その言葉に、ビクリとなる成仁・・・俊の顔を見て唇を噛み締める。その気持ちはすごくわかるから・・・

「ん、わかった。オレ、電話とかしとくから。ゆっくりしてきてよ」
「・・・すぐ、戻る。着替えとかも持ってくるわ・・・」

ポンと小さく頭を撫で、小さな微笑みを残し静かにドアを閉めた。

外に出ると朝の光がまぶしく一度伸びをする俊。

「なんや、久しぶりに外・・・出た気するわ」

さつき、夢を見た・・・ただ幸がおって成がおって、オレがいる・・・笑ってるだけの時間やったけど。

指輪見てうれしそうに笑ってた・・・今、こんな落ち着いておれるんわそのおかげやと思う、あの笑顔見れたから。

幸せやったって思ってもええやるか、幸・・・

幸との思い出を胸に、自宅へと足を運ぶ俊・・・朝の空気が頬に気持ちよかった。

窓の外を眺めていた義斗、俊の姿を見つけ振り振り返り歩き出す。

忍はさつきからの義斗の動きに首を傾げていた。

「おまえよ、人を疑わんのはええことやけど警戒せないかんぞ。ホンマ危ないんやから気いつけんと。オレみたいなのいっぱいおるんやから。じゃ、世話になったな。おまえも学校あるんやろ？出よか」
玄関へと歩いていく義斗へ駆け寄る忍。

「まだ時間大丈夫ですよ、もう行っちゃうんですか？」

止められるとは思ってなかった義斗は驚いて、小さく笑う。

なんやなつかれとるわ・・・ホンマにようわからんやつや。

さつき会ったばかりでこんなに警戒せんやつも初めてやし、神崎のツレいうことがそうさせてるんやろうけど・・・まあ、嫌な気はせんけどな。

「外、見てみい。帰って来たわあいつ」

その言葉に反応して窓に駆け寄る忍、玄関先に立つ俊の姿を見つけ、赤くなり慌てたように駆け出す。

「そうだった、俊兄に用でしたよね。オレあいさつしてこつと」
振り向いて笑う忍に吹き出す。

こういう無防備なチビ相手にしたの、いつ以来か。

わざと関わらんようにしとった気する・・・思い出したくないこと、思い出しそうだから。

チラリと頭をよぎる小さな影に首を振った。

周りが見えていない俊は玄関のカギを開け、戸を開けるまで駆け寄る忍に気づかなかった。

「俊兄、遅かったね」

「あ・・・おはよ、忍。早いな」

「おはよう。俊兄こそどこ行ってたの？めずらしいよね」

「いろいろあるんよオレだって。子供にはわからんこっちゃ」

「ガキ扱いしないでよー」

「どんな理由か知らんが人待たせすぎやぞ、神崎っ」

小さく笑う俊の表情が忍の後ろにいた人物に驚いて固まった。

「関・・・なにやっとなや、おまえ」

「なに、ちゆうことないが。ちよつと寄つてみただけや」

「なんで・・・忍と、おるんじゃ」

忍をかばうように前へ出る俊、義斗と睨み合う。

俊のどこか怒っているような姿に驚きながら腕を掴む忍。

「あの、うちで待ってたんだよ俊兄のこと。オレが誘ったの困ってたから・・・」

俊をなだめるように早口で言うが、見据える視線は変わらない。

「なんもしてへんぞ。睨むんやないわっ・・・おまえ、なんや顔色悪ないか。なにしとったんや」

「おまえと遊んどる暇ないわ・・・今は。悪いが帰ってくれ」

家に入っていく俊に駆け寄り止める義斗。

肩を掴むと、小さくよろけるのに気づく・・・ホンマに、なんか変やなこいつ。

「知らん仲でもないやろが、なにがあったかくらい聞いてもええやろ」

「・・・おまえには関係あらへんことや、帰れ・・・」

その言葉に思わず手が出る義斗、殴られてドアにぶつかる俊を見て、忍がびつくりして固まる。

「俊にいつ・・・ちょ、殴るとこじゃないよ今のはっ」

「悪いな。けど腑抜けのこいつ見てられん。なんや、殴り返す気力もあらへんのかいな。なにがあったんか知らんがわしらのあいさつはこうやろ。おら、こんかい」

頬を押さえて俯く俊を挑発すると、視線を上げ少し力の入った瞳が睨む。

「なんも、知らんいうのも・・・気つかわんしええもんやで。あいかわらずうつとうしいやつや！」

飛び出して殴りかかる俊に笑う義斗。

「なんじゃそれ。ホンマ腑抜けじゃな、なんでおまえに気つかわなかん、気持ち悪いこと言っなっ」

「なんでもいいわ、気分変えに付き合えやつ」

「わけのわからんことこちゃこちゃぬかすなっ・・・いったあ」
ふいに目元を押えて腰を折る義斗。

「おまえ・・・なにつけてやがる、殴り合いにケチつくようなんつけんなや」

目元から血を流す義斗、俊は呆然と手を見つめていた。

「指輪か？おまえそんなんつけてへんかったやろ・・・その指、結婚でもしたんか？」

なにかを思い出したように慌てて家の中に入っていく。

「・・・こんなことしとる場合やないっちゃうことか・・・幸」

「おいっ。なに言ってたんだ」

「これ・・・昨日、やっと渡せたんや。何年も前から言っではおった・・・やっと貰ってくれたんじゃ・・・」

「そんな人がおったとは初耳やわ。それならなんでそんなしけた顔してん、もう振られたとかいうんじゃないわな」
ゆっくりとうつろに戻った目が、振り返る。

「・・・似たようなもんや。死んだ。昨日・・・」

一瞬なにを言ってるのかわからず言葉の出ない義斗。

死んだ・・・信じたくない言葉だった、オレの心配していたことが・・・

「・・・マジか、それ・・・」

「おおマジやわ、オレ着替え取りに來ただけやった。忙しいって言ったやろケンカしとる場合やないし。おまえ、うちにおってくれていいからせっかく來たんや」

固まっている義斗と忍。家の中に消える俊を見つめる。

「・・・俊にい・・・」

「まいった。なんちゅう時に來たんやろ、最悪や・・・どないしよな、

この空気」

頭を抱えて玄関先座り込む義斗。

人の死をまじかで一度見とるオレら、それだけで心に残る痛みはでない・・それがまた神崎の身に起こった、指輪を渡すほどの人が

大事な人を亡くしたんは同じやけど、全然違うとも言える・・わかってやれるようで、なにも言ってやれない気がした。

「・・家に居れやと？居れるかい。大変なん、知ってるのにおとなししとれってか」

悔しそうに睨み家の中へと駆け上がった。

忍はそんな二人を呆然と見ていた。

俊兄の彼女が亡くなったなんて・・大変なことなのはわかるけどオレにもなんかやれることあるんだろうか。

力になりたい、誰よりも・・そうしたいのに・・オレには勝てない存在がいて、弟の位置はあの人のが近いから。

悔しそうにどこかを睨む忍、二人の後を追う家の中へ入っていった。

「神崎・・」

「・・関。せつかくやおまえも幸の式出たってくれや。服借りてきたるわ。今日と明日こっちにおれるか？」

「そんな話聞いて帰るほど薄情なやつと違うわ。手伝えることあったら手伝うぞ」

思いがけない言葉に小さく笑う俊。

「気持ち悪いわ。そんな気使ってくれなくてもええ。まあ手伝ってくれるなら助かる、頼むわ。彼女んとも親おらへんから・・オレ

らだけでやらなあかんし。早く帰らんと、心配しとるわ弟が」

「弟？・・・おつたんか兄弟」

「オレのいうか、幸のな・・・けど今はもう、オレの弟や。指輪はめてくれた、オレのために・・・それで一緒にいられるんや」

指輪を触りながら呟く俊、なにか意味ありげに見えた・・・

なんやいろいろ複雑そうや・・・今の話じゃはつきりせんが、指輪受け取ったのはホンマの弟にするために・・・ってことなのか？

「ようわからんけどな、おまえのためにってのはどうかと思うで。おまえの想いが届いたんやろ？それかな、おまえのこと誰にも渡したなくなつたんと違うか」

思わず義斗の顔を見つめてしまう俊、なんだとどこか照れて背ける顔。

「・・・そういう考えもあるんか。もうあいつの心なんか誰もわからん、そういう想い大事にしとく」

服をかばんに詰め込みながら小さく笑う俊、立ち上がり玄関に向かうと忍がいた。

「忍。世話かけたみたいですまんかったな。おまえも学校やろ、行かんでええのか？」

「オレも。手伝う。俊兄のこと兄ちゃんと思ってるのはあの人だけじゃない。オレも、でしょ？」

なんだか今にも泣きそうな忍の必死な姿に小さく首を傾げて微笑む俊。

「そやな。おまえもやな。わかってる、どうした？けどな大丈夫、関もおるしはじめさんらもおるから。帰ってからお願いするわ」

顔を覗き込み笑って頭を撫でる俊に、動けないでいる忍。

それに気づかず玄関へと出ていく俊。

「おい」

俯いてる忍に後ろから義斗が背中を叩く、びっくりして顔を上げると不思議そうに見ている義斗。

「なに張り合つとんのかしらんが神崎がどっか行くわけやないやろ。元氣出せや、後で迎えにきたるし家で待つとけや」

ポンと頭を撫でて笑って走ってく義斗。

忍は手を置かれた頭に自分の手を乗せ、じっと後ろ姿を見つめた・・僕は、ずっと兄に憧れていただけ。

バイクに乗り走る義斗、すでに歩いて行っていた俊に追いつきバイクを止めた。

「・・乗れや」

「・・オレに、運転させてくれや」

「大丈夫かいな。頼むで。事故るなよ」

「そんなへまするか・・走りたい気分なだけや」

「じゃあない、特別や。変わったる」

気持ちはわかと小さく笑う義斗、小さく笑い返す俊。

・・なにしに來たんやろなこいつは、こんな時に・・いつものままにケンカ売ってきて。

抜け殻のオレを正氣に戻してくれた、不本意ながら感謝しとる・・バイクにも乗れた、久しぶりに。

・・やっぱ気持ちええわ。

幸、前話したやろこいつがそのアホや。会いたい言うottaもんな、こんな形になつたけど。

一番アホやれる相手だ。上で笑つとるか？やっぱアホやったやろ？

小さくもれる微笑に少し驚きながら、空を見上げて笑う俊だった。

エピソード2

3・はじめと義斗（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉。病院で療養中、悪化し死亡した。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

「関義斗」俊のケンカ仲間、はじめとは血の繋がる兄弟。昭次との関係は？

エピソード2

3・はじめと義斗

ひとしきりバイクで走り回ると成仁の待つ大竹家に到着した。

「・・・俊さん？」

いつまでも帰らない俊に少し不安になっていた成仁は、外の気配に玄関へ走った。

「おまえに紹介する気はなかったけど、会ったって。オレの奥さんに」

バイクを降りるとそう言い振り返らず、家の中へ入っていく俊。その後ろからついていく義斗。

こんだけ腐れ縁やってるのにおまえの女始めて見るわ、あっちにいた頃はそれどころやなかったしな。

危ないやつやったのに・・・ホンマ落ち着いたもんやないやつ。

玄関から駆け出た先に俊がいた、がもう一人誰かが一緒だった。なんとなく雰囲気近寄りがたく、玄関先足を止める成仁。

「・・・しゅ、俊さん。大丈夫？」

「あつ悪い遅くなった、平気や。気晴らしにバイク乗ってきた」

話しながら視線は俊の後ろの見知らぬ男を凝視する成仁、それに気づく俊が難しい顔して笑う。

「ああ・・・こいつ、昔のツレなんやけど。遊びに来たらしくて手伝

わせに連れてきた、関や」

「遊びにきたわけやないわ」

「どっちでもええやろ。こっち、オレの弟の成仁や。彼女、幸の弟」

亡くなった彼女の、兄弟か・・オレが母ちゃん亡くした時くらい
の年　肉親なくす辛さは知つとる。神崎は二度目や。

支えになってた人がいなくなった、けど・・こいつのおかげで大丈
夫いうことか・・

小さく会釈する成仁に返す義斗。

幸の横に座る俊、義斗は遠くから見ていた。

「神崎、オレ邪魔なんとちゃうか。おまえの嫁さん見せてもらっ
たら帰るし。すまんかったなこんな時に」

「邪魔なんて思っへんわ。幸も会いたい言つとった・・忙しんか
？」

壁にもたれ離れて見てる義斗をじっと見上げる聞く俊、小さくため
息をついてゆつくりと歩み寄っていく義斗。

「なんもないからこつち来とつたんやろ・・暇やわ」

俊の横へと腰を下ろし幸を見つめる、ただ眠ってるようにしか見え
ないきれいな幸に呟く。

「なんや・・うれしそうに、笑ってるな」

「そうやろ・・喜んでくれてた。逝く時、きつと・・」

神崎の表情に小さく微笑む、辛いのはわかっていただけで幸せ
が見えて少し安心したわ。

そつと彼女の手を握り締める神崎に後ろから弟が覗き込んだ。

「姉ちゃん、俊さんのこと大好きだったから・・」

誰にもなく出る言葉に顔を上げる俊と義斗。

「喜んでるに決まってる。姉ちゃんが指輪受け取らなかったのは、こうなるってわかってたからで・・・ホントはすごくほしかったはずだし」

キラリと光る幸の指を見つめる、その微笑みがなによりの証拠だというように。

「最後の最後に、我慢できなくなったみたい。姉ちゃんらしいよね」小さく笑う成仁、一瞬にして険しい表情へと変わる。その表情に覗き込む俊。

「ごめん、オレからも謝らせて・・・俊さんのこと縛ってる」

ふいに出る言葉に思わず立ち上がってしまう俊、びっくりして後ずさる成人。

「アホなこと、縛られてなんかないわ。オレが無理に受け取らせたもんやろ。謝るんわこっちや」

「わかつとらんなあおまえら」

二人のやり取りに割って入る否定の声。

「わかつてんだろ、この人の気持ち。おまえらに笑っててほしかっただけや。謝りあつとるんわ違うやろ」

義斗の言葉に見合う二人、ばつ悪そうに腰を降ろした。

「話聞いてるとわかるわ、この人がどうしたかったというのが。おまえらもわかつてるんやろ、素直に受け取れや」

「おまえに言われんでも・・・わかつとるん。気持ちの整理いうんがあるんや・・・」

軽く突き出す拳をパシリと手のひらで受け止める義斗、複雑な思いを受け取るように。

「そうですか。そりやすんませんでしたね。外行ってるわ」

笑いながら立ち上がると席を外すように部屋から出て行った、そんな義斗を見つめる成仁。

「なんか、よくわかんないけど・・・あの人って」

見かけによらずやさしい人なのかな、オレたちのことわかってくれる気する・・・少ししか話きてないはずなのに。

「ホンマ口悪うてすまん。あれで励ましてくれてるんやと思っわ・・・痛いところばっかついてくれるわ」

「けど合ってるよね、言われたこと」

小さく笑う成仁につられるように笑う俊。

「オレ姉ちゃんに感謝してる。俊さんに会わせてくれた・・・大事なものの、残してくれた」

涙を浮かべて呟く言葉を胸に込める俊、オレも感謝してるこのかけがえのない幸せな時をくれた幸に・・・これからをくれる成仁に。

「いつまでも・・・一緒や」

成仁の手を取り一緒に幸の手へと重ねた・・・ふいに二人の指輪が触れ合って、小さな音が部屋に響くと空気が静かに揺れた気がした。

「さて、オレはなにしようか」

バイクにもたれ掛かり、タバコをふかす義斗。

青空にタバコの煙が広がった。

場違いやったから帰ろうと思った、けど・・・あんな顔されるとな。あいつとはケンカばかりしてたからあんな顔は初めて見たわ・・・別に心配なんてしたくないんやけど、調子狂うわ。

髪をがしがしとかき上げ、ふと顔を上げると遠くから人影が近づいてきた。

走ってくるその人影は近づくにつれてスピードを緩めると・・・義斗の目の前で止まる。

うつむいて肩で息をしているのは、家からの距離走ってきていたはじめ。

「ふうー。よしっ！」

大きく息をはいて勢いよく顔を上げる。

その時初めて横にいる影に気がつき、不審に思った。

誰だよこんなところにバイク止めるやつは、俊のじゃないよな・・・人、乗ってるし。

視線がぶつかった瞬間、表情を固めるはじめ。

こいつ・・・なんで、こんなとこに・・・

はじめは一目でそれが長年会っていない、弟の義斗だと気が付いていた。

普通ならわからないところだが、高校ぐらいの時に何度か見かけたことがあった・・・面影は、変わっていなかった。

はじめのことに気づかない義斗が怪訝に見つめ返していた。

「・・・なんやあんだ。なんか用かよ」

こいつ、オレのこと気づいてない・・・それならわざわざ気づかせることもない。

「・・・失礼」

何食わぬ顔をして、成仁の家に入ろうとするはじめを、なぜか止める義斗。

「おい。あんた誰の知り合いかしらんが今はいかんぼうがええぞ、取り込み中や」

思わぬ声に足を止めるはじめ、振り向くと今度はしっかりと目に入るお互いの顔。

イヤな緊張感がはじめを襲う、普通に見ているだけなのにきつくなる視線。

「・・・あんたこそ誰の知り合いなんだ？」

ここにいて中の様子も知っていると、俊か成仁の知り合いということになる。

訛りが出ていることから想像はついていた・・・が、関係ないと思いたかった。

「オレは、神崎ってやつ、どうでもええやろ・・・で、おまえはなんや」

睨むと答えず入って行こうとするはじめの腕を掴んで止める義斗。

「おい、行くな言うとりやろ」

その手を振りほどくはじめ、至近距離でにらみ合う。

一瞬、義斗の表情が変わった気がし・・・慌てて顔を背けるはじめ、背中を向け呟いた。

「オレはこの事情よく知ってるんだよ、おまえよりな」

「おまえ、ええ態度やのお。初めて会うやつにそんな態度とられておとなしくしてるやつやないぞ。言い直さんかいっ！」

「・・・あいかわらず・・・」

あいかわらず自己中なやつだとため息をつくはじめは、殴られそうになるのを避けて向かい合った。

なんやこいつは・・・売られたケン力は買うぞ。

にらみ合っていると、なにか違和感を感じた・・・ふと重なる記憶。

・・・なんや、オレ・・・こいつのこと知って、る？

昔の記憶がふいに襲う

「おーい、よしー」

「はじめ兄ちゃん」

小さい頃の笑顔の二人がいた・・・次の瞬間、大きくなったはじめの怒ってる顔が怒鳴る。

「昭次は、渡さないからなっ！」

頭に響く言葉に胸が痛んでいく、義斗。

・・・そうや、こいつ・・・オレの、兄　はじめ兄、やないか・・・

記憶から消そうとしていた人物に会ってしまい、記憶がとめどなく溢れ出していく。

「・・・はじめ・・・兄」

その呟きにまた小さくため息をつくはじめ、今度は少し揺らいた瞳で義斗を見つめた。

「なんで・・・今、現れるんだよ・・・」

「・・・あんた、神崎の知り合いか？・・・冗談やろ」

「それは、こっちのセリフだ。俊のこと知ってるなら話が早い、大変なんだよ今。帰れ」

大変な時なのは本当のことで、しかしはじめは違うことに気を急いでいた。

べつにこいつがいちゃ駄目なことはないだろう、人手は多いほうがいい・・・だけど、昭次には会わせられない、忘れてる記憶が戻ってしまいそう。

・・・きつと、会ってしまえば思い出してしまう・・・絶対そうなる、予感がした。

「なんで帰らないかんのや、そっちこそなにしに来たんよ。大変なんやろ、おまえも邪魔ものや」

「オレは、来てくれ言われたの。おまえにとにかく言われる覚えはない」

「なんやそれ、そっくり返したるわその言葉。手伝え言われたのオレも。神崎も心配されるほど落ちとらん、そういう気遣いは重いんじゃない」

「知ったようなこと言うな。おまえが俊のなんだろうが知らないけどな、今一緒にいたのはオレたちだ。心配してなにが悪い、わからないわけないよな、こういう気持ち」

お互いに経験のある出来事、眉をひそめてるはじめ。

オレだつてなににもできないことはわかつてる、心配が重荷なのも知つてる。

けど、あの二人を見ていないおまえなんかになにがわかる・・・大切な人を亡くす辛さは知ってるはずだろ・・・

「・・・なにが言いたいんじゃない」

「なんでもない。俊たちにはオレたちがついてる、それで十分だつて言つてんだ」

「そりゃ、オレはいらん言いたいんじゃないか？ふざけんな、今もなんもないんじゃない。オレの存在はオレが決める、あんたには関係のないことやろ！」

嫌な思い出と重なり、激しく打つ鼓動・・・耐えるようにはじめを睨んだ、苦しみをわかつてもらうように。

玄関先で大きな声を上げている二人に、部屋の中にいた俊たちが異変に気づく。

「あれ？誰か外にいるのかな」

「・・・まさか関のやつ問題起こしてへんやろなあ」

「さっきの今でなにかあるっての、ひどいなあ俊さん」

「いや、あいつはそういうやつなんよ。問題だらけなんやから」

笑いながら玄関の戸を開けた二人、向き合う義斗とはじめの姿に一瞬固まった。

「・・・加賀さん？なにやってんの、入ればいいのに・・・」

「え？はじめ？」

とりあえずはじめを見てそう言う成仁、だが様子のおかしさに俊を振り返った。

怖い顔した俊が二人の間に走り寄り、はじめを背に義斗を睨む。

「おいっ関、なにやってんのや。オレの友達やぞ」

「はっ。なんもしてへんわ」

俊の登場にばっ悪そうに門から離れ背中を向ける義斗。

「・・・悪い、なんでもない。それより、幸さん来たのか？」

「あ、うん。中で寝とる。会ったって・・・」

少し困惑気味の俊をよそになにもなかったように話すはじめ。

「そうさせてもらう。成仁、少しの間仕事いいからゆっくりしてろ」

「あ、はい。さっき昭次くんに電話入れといた。聞いてない？」

ふいに出る昭次の名前に大きく反応してしまうはじめ。

思わず振り返っていた、ゆっくりと視線を向ける義斗・・・逃げるように成仁を連れて部屋の中へ入っていく。

「さっきまで走ってたから家帰ってないんだ。昭次起きてた？」

「起きてたよ。心配そうにしてた、早く帰ったほうがいいんじゃないですか？うちは大丈夫だから」

「そうだな。また後で来るよ。おまえ、義斗・・・あいつのこと知ってるのか？」

外に向ける視線に成仁が首を傾げていた。

「ああ、俊さんの友達なんですよ。オレさっき始めて会ったよ。結構いい人そうだったよ、いろいろ気使ってるみたい、言葉とかには出さないんだけど」

微笑んで義斗のことを話す成仁に複雑な顔をしてるはじめ、もう一度振り返る。

「なんか加賀さんも知ってるみたいだね、義斗って名前言ってたよ今」

「・・・ちよつとな」

呟き黙り込むはじめにさらに首を傾げる成仁。

姉のところへ逃げるように入って行く先輩を見つめた。

絶対なんかあったと思うんだけど、知らない人とケンカするほど子供じゃないと思う。

なのに怒鳴り合ってるように聞こえた・・・二人はどんな関係なんだろうか。

はじめの背中と玄関を交互に見て、また首を傾げる成仁だった。

玄関先、肩を掴まれて振り払う義斗が俊を睨んでいた。

「なんじゃ。なんもしてへんぞ」

「・・・うそ言うな。はじめおかしかったぞ。誰かれかまわずケンカ売らんやないわ」

「そんなんやない言うとるやろが。久々に会って怒りが戻ったんやろ、オレは知らん」

「怒り？久々って、おまえらやっぱ知り合いなんか？」

よけいなことを言ったと顔を背ける義斗、俊はよくわからないまでも照れているのかと笑う。

「なんや、知り合いならそういやあええのに。二人ともおかしいで」

能天気な俊に大きくため息をつく義斗。

「ずっと会ってへんのやから、知らんやついうほうが合ってるわ、

もうあいつのことはええから、おまえ忙しいんやろ？余計なこと考えるなよ」

「氣遣いどうも。まあええわ。おまえも中入れ、お茶でも飲もうや」
まったく行く気がない義斗、背中を叩いてせかす俊。

「なんやおまえらしい。ケンカしとるんなら仲直りのええ機会やないか、仲介したるから」

「いらんことするな。仲直りいうレベルやないんや！」

腕を思い切り振り払いバイクのほうへと歩いていく義斗、ふいに立ち止まり目を細める。

「あれ・・・って、まさか・・・そんな、わけない・・・けど、似てる。遠くからこちらに向け歩いてくる人物に、目が離せなくなっていた。

俊は俯いてうなりながら二人の様子を思い出していた。

「・・・どんなレベルのケンカやちゅうんじゃ、こいつのこんな困つてるところ始めて見たわ。

相当こじれとるようや・・・どうにかしたりたいが、いらんお世話みたいやし。

はじめも、あの様子じゃ素直にはなれんやろうし・・・

頭を悩ませていると目の前義斗の背中、見るとどこかを見つめたまま固まっている。

なにかいたのかと顔を覗かせた時。

「あつ、俊さん。よかったこのへんだったと思ったんだけどみつからなくて。やっぱり合ってた」

俊の顔を見つけてうれしそうに駆け寄ってくるのは、松葉杖姿の昭次だった。

エピソード2

4・義斗と昭次（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉。病院で療養中、悪化し死亡した。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

「関義斗」俊のケンカ仲間、はじめとは血の繋がる兄弟。昭次との関係は？

「井川忍」昭次の同級生、俊とは家が隣同士で慕っている。

「相田武・武威直人」昭次の親友。

「佐藤達也」忍の昔の親友。

「横井良・稲葉聡」関西にいた時の俊の仲間、暴走族。

「真田幸司・伊藤和弘」義斗の暴走族仲間。

エピソード2

4・義斗と昭次

にこりと笑っている昭次にびっくりして駆け寄る俊。

「ちょ、昭次くんなにやってんの。ケガ人がこんなとこまで歩いてきたんか？迎えに行つたのに」

「え、そんないいです。もう痛くないですし。オレもなんかしたかったから・・・兄ちゃん来てる？」

「はじめ？ああ、来てるけど。お疲れさん、ありがとな。とりあえず中入るか」

二人の会話が耳に入り・・・さらに固まってしまっていた義斗。

「しょう、じ・・・はじめを兄だと言っていた・・・ホンマに昭ちゃん、なんか？」

「おいつ。なにぼけてんだよ、仲直りしろなんてもう言わへんから入れや」

「あかん・・・オレ、帰る・・・わ」

「あつ、なに言ってるの？」

「いけるわけない・・・はじめ兄と、こいつ・・・昭次・・・二人のいるところにオレが入っていけるわけない。」

「あの、どなたでしたか？オレのこと知ってる人？」

じつと見られてる昭次が不信に思い恐る恐る聞いてきた。

それを聞いてゆっくりと目を閉じる義斗。

「・・・オレのこと、覚えてもおらへんか・・・そこまで記憶から消されると逆にすつきりするわ。」

ショック受けられる立場やないからな。

「おい、顔色悪いで。どうしたん、大丈夫か」

じっと見られてる視線に胸が苦しくなってくる義斗、不安げに支えてくれる俊だった。が今はそれどころじゃなかった。

自分のこと少しくらい思い出してほしいという気持ちだが、小さく膨らんでいく。

「・・・しょうちゃん。オレのこと、覚えてへん・・・か」

「えっ?・・・」

思いきつてつぶやいてみて一瞬にして後悔した、不思議そうに見てる瞳が近くまで寄ってきてさらに見つめてくる、おもわず逸らしてしまう義斗。

「・・・あの、ごめんなさい。わからない、です。オレのこと知ってるんですね、昭ちゃんって・・・小さい時呼ばれてた、のかもしれない」

思いのほか沈んでいく昭次の様子になにかおかしさを感じていく義斗、顔を覗き込むと今にも泣き出しそうな表情。

「ええよ、覚えてないんなら。そんな落ち込むことやない。忘れてても・・・ええことや」

「忘れていいことなんてないですよ・・・思い出したいです」

ポンと頭に手を置くと泣きそうに微笑む昭次はあの頃と変らない笑顔、ほっとさせられる。

優しく笑ってくれてるその人の顔につられて笑う昭次。

この人のこと知ってる気がした・・・なのに、なんでわからない・・・オレの記憶、いつ返してくれるだろ、すごく大事な人な気がするの

に・・・さみしい顔させてしまった。

「俊さんと、知り合いなんですか？」

話を変えるように問いかけた。

「ああ。大阪にいた時の、な・・・足、どうしたんや？」

「これ、大袈裟なだけです。ケンカ、してかな」

少し強がって言うと言想以上に驚いている義斗。

「ケンカ？おまえでもそんなんするんか、負けたんやろ」

「ケンカくらいするよ、負けてもないし」

「なら勝ったのか？」

さらに驚いてる顔に観念して笑う昭次。

「実は、俊さんに助けてもらった」

納得と言うように頷いてる、俊さんの強さ知ってるんだ。

「神崎でできたら一瞬やるな。オレとはれるやつはそうおらんからよ」

「強そうだもんね二人とも。ケンカ仲間な感じ？俊さんと・・・えと、名前聞いてもいいですか？」

知り合いと言われたのに名前聞く恥ずかしさに、少し小さくなってる昭次に気にするなとまた頭を撫でる。

「・・・よしと。関、義斗や」

「義斗さんか、いい名前だね」

「べつに覚えんでもええで、もう会わへんやろし」

「なんで？せつかく知り合えたのに、オレが覚えてないから怒ってるの？」

ふいにまた覗き込んでくる大きな瞳、義斗は大きく首を振る。

「ちやうわ、そんなんと違うから・・・自分責めるんやないで」

あまり近くににいるのはいけないと感じ知らず後ずさってる義斗に気づいて腕を捕まえる昭次。

「・・・義斗さん、帰らないよね？寄って行ってって俊さんも言うてたでしょ」

つかまれた腕が硬直し動けない義斗。

「・・・ああ。帰らへん、手伝い頼まれてたわ」

「よかった。なんかオレのこと見て帰るっていうから、びっくりしたんだよ」

うれしそうに腕に掴まったままの昭次、オレは困惑の色を隠せないでいた。

こいつと・・・昭次とまたこんなふうにしやべれるなんて思いもせんかった、オレのこと忘れてくれてたからか・・・それとも覚えててもこうして普通に話してくれたんか・・・
オレのこと、嫌いになってへんのか・・・

聞きたいことが山のようにあることに気づく、今まで押えてた疑問が溢れそうになっていた。

今、こいつにとったら会ったばかりのオレのこと、気にしてるなんて・・・変わつたらんわこいつ。

人のことを安心させてくれる空気・・・また、オレのことほっとさせてくれる。

ふいに、あの時の出来事が頭に浮かぶ

小さな昭次の手を繋ぎ二人で歩いた公園。

「なあよくん、どこ行くの？」

義斗の手を握り締めて見上げる昭次、不安なんて感じられない楽しそうな笑顔。

「ん？あんな・・昭ちゃんとずっと一緒にいたいから、いいところ連れてつたる・・」

「いいところ？どこも行きたくないよ、よくんとおれたらそれでいいもん」

「・・やっぱり、帰りたいなっただ？」

少し考えて、微笑む昭次。

「・・帰りたい。けど、よくんも一緒にだよ？」

「ぼくは、帰れん・・帰るところ、あらへんもん・・」

立ち止まる義斗の腰にしがみつく昭次。

「なんで？よくんは昭ちゃんとこ帰るんでしょ、昭の兄ちゃんでしょう？・・ずっと一緒だもん」

抱きついて泣いてる昭次に義斗の手が背中に回る、ぎゅっと抱きしめ返す。

一緒にいたい気持ちが義斗を来狂わせて、いた。

「・・一緒に、来て・・昭ちゃん・・」

小さな首に這わす義斗の指が、力を込められていく

「よし、くん・・も。一緒に・・ね」

微笑んで見えた昭次の瞳・・抵抗もなかった

忘れることの、出来ない瞳やった・・

「よしとさーん？どうしたんですか、顔色悪いですよ。休ませてもらったら？」

現実に戻され見つめる瞳は・・けがれないあの頃と同じ。

ふいに首のあたりに目が行き表情が固まる・・・きつく目を閉じ逃げるように昭次から離れた。

「昭次くん、中入ったらええ。オレはまだ風にあたってるわ、たいしたことないから」

「そんな具合の悪そうな人置いていけるわけないでしょ。ならオレもここにいます。行ってもなにもやれないし・・・」

かべにもたれる二人の間には奇妙な時間が流れてく、あの頃に戻ったような・・・奇妙な時間が。

なにやら話し込んでいる二人を置いて来てしまった俊、玄関先大丈夫かと首を傾げていた。

なんかおもいきりおかしいんやけどなああいつ、なにがあったんよはじめと・・・それに昭次くんのことも知ってるかんじやし。

・・・関、昭次くんの記憶のないことは知らんみたいやった・・・それ以前の知り合いなら、ずいぶん前のことになる。教えてやればよかったかな。

「あつ、俊さん。あれ一人？関さんは」

「え、ああ。今な昭次くん来てくれて、なんや話してるで関と。知ってるみたいやから昭次くんのこと」

玄関先で話してる二人の会話を耳にし、はじめが血相を変えて走ってくる。

「昭、次・・・来たつて、言ったか？」

「えっ・・・うん、来たで。外におると思うけど・・・どうしたん、はじめ」

「なんで来てんだよ昭次・・くそっ」

走り出て行くはじめに呆然と顔を合わせる俊と成仁、後を追った。

「昭次っ！」

外に出ると怒鳴るはじめにびっくりして顔を覗かせる昭次。

義斗はわかってたように冷静に動かなかった。

「兄ちゃん？どうしたの大きな声出して」

無言で近づいてくるはじめが、昭次の腕をひっぱって自分の横へ引き寄せると松葉杖が倒れて大きなおとが響いた。

「ちょ・・痛いよ、なにしてんの。危ないなあ」

昭次を支えるように抱き止めるはじめ、視線は義斗を睨んでいた。

ただならぬ雰囲気二人を交互に見つめる昭次、義斗はじつと動かずタバコをふかしながら見つめ返していた・・どこかさみしそうな瞳で。

「・・なに話してた」

義斗にぶつける言葉、兄にはめずらしいきつい口調に昭次が慌てて口を挟む。

「なに怒つての？なに話しても兄ちゃんには関係ないだろ」

「おまえは黙ってる。もうこいつには近づくなっ。帰るぞ！俊、成仁悪いけど一回帰る、また夜来るから」

昭次を抱えたまま振り返りもせず怒鳴るはじめ、呆然と見ている俊たち。

「ちょ、わけわからんこと言うなよ。オレは手伝いに来たんだよ、降ろせっ！」

有無も言わせない態度にどうしていいのかわからない昭次、今は大人しく従う事にした。

「・・・ごめんっ、後で説明するから」

兄の変わりにみんなへと叫んだ・・・無言の兄を睨みながら。

呆然と見送る俊と成仁、義斗だけは平然と行ってしまう二人を見ていた。

「おいおい関、おまえなにやったんや、あんなはじめはそう見れへんぞ」

「怒ると怖いのは知ってたけど・・・今の態度はおかしいなあ」

理由が聞きたくて仕方ないという視線で義斗を見てる二人に顔を背けた。

「オレがああ男に嫌われてるいうだけの話や、見りやわかるやろが相手にもされてへんわ、それだけのこと」

「けどわけもなくあんなふうになる人じゃないし。昭次くんと話してただけでしょ？関さん」

どうしても気になるのか覗き込んでる成仁、義斗の様子に俊が小さくため息をついて間に入った。

「まあええわ。とにかくもう中入れるな、はじめおらへんし。おまえが来てからどたばたすぎ、ゆっくりさせてくれよ」

「そうだね・・・もうすぐ準備しないと。関さん、二人の分も手伝つてよね」

どたばたしすぎて悲しんでる暇もなく、今の二人にはちょうどいい忙しさだった。

タバコを踏み消し、後をついていく義斗に目ざとく俊が叫ぶ。

「こらっ関。タバコ拾ったかんか、人ん家の前やぞっ」

怒られたのも上の空で言われるままゆっくりと腰を落とす義斗。

・・最悪や。昔みたいだと、一瞬でも思えてしまった自分がアホみたいやな。

戻れるわけない、今こうしてられたのも奇跡みたいなもんやないか、昭次が覚えとらんから。

・・覚えてもおらんかった、嫌な出来事は記憶から消される、そういう話はよく聞くが・・忘れたいことだった、そういうことなんだな。

はじめの態度を思い出し、拾ったタバコを手の中で握りつぶす。まだ消えていなかった火が軽く皮膚をこがすにおいをあげた。

「兄ちゃん、ちゃんと説明してよ。あれじゃ失礼だろ三人ともに」あきらめて運ばれてる昭次、はじめは無言のまま家へと向かった。た。

「兄ちゃん・・義斗さんオレのこと知ってるみたいだった。兄ちゃんは知ってる？」

立ち止まるはじめ、昭次を下に降ろし大きくため息をついた。

「たしかに、あいつとは小さい頃一緒だったことがある、オレも・・おまえも。けど今はもう他人だ、関わり合うな・・」

あのバカ、なんで昭次と話なんかするんだ、思い出させたいのか・・おまえも忘れてくれてたほうがいいんだろ、悔んでるはずなんだ・・忘れられるわけないんだからオレたちは。

「・・もしかして、だけど。義斗、さんってオレの、兄ちゃん？」

はじめが目に見えて身体を揺らす、その表情にそれが真実だとわか

る。

「そう、なんだね。あの夢に出て来てた・・もう一人の兄ちゃん。そうだよ、あの人だよ・・へんな感じしてたもん、絶対だ」

確信のように一人興奮して足の痛いことも忘れ飛び跳ねる昭次、うれしそうな姿に胸を痛めるはじめ。

・・真実を知ったら、記憶が戻ったら喜んでいられるようなことじゃない。

自分のことを、殺そうとしたあいつに・・おまえはどうする。

事件があつてから記憶がなくなるまでの少しの間、なにを思っていたのか・・

変らなかつた昭次の笑顔の奥に、なにがあつたんか・・もう見ることはできない。

お前の記憶の中にオレたちを救える答えがあるんだろうか

エピソード2

5・忍と達也（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉。病院で療養中、悪化し死亡した。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

「関義斗」俊のケンカ仲間、はじめとは血の繋がる兄弟。昭次との関係は？

「井川忍」昭次の同級生、俊とは家が隣同士で慕っている。

「相田武・武威直人」昭次の親友。

「佐藤達也」忍の昔の親友。

とぼとぼと学校への道のりを歩く井川忍、俊兄のところから追いやられるように学校へ行かされ・・まるで納得がいなかった。

まったくやる気でないよ・・今学校行つたところで。

オレだって手伝えたのに、俊兄の辛い時に側に一緒にいられないなんて・・他人みたいや。

俊兄にしたら当然他人なんだろうけどオレなんて・・けどオレは本当に兄って、思ってるのに。

行きたくない学校も習慣でしつかり来てしまふ、そのままサボろうともできない自分・・なにもやる気なく机にうつ伏せてた。

ふいに小さく教室がざわめいた気がした、顔を上げるとオレの前に立っている二人・・相田と武威、こないだからいろいろうるさいんだよこの人たち。

相田がじつとなにか言いたげに見ていた・・小さくため息をつくとぽんと忍の机を叩く。

「ちよつと付き合ってくれ」

「・・オレ？なんだよ、あんたらに用なんかないんだけど」

「おまえになくてもこつちにはあるんだよ。ちよつと来い」

武威が勢いよく腕を掴む、瞬間振り払い立ち上がる忍に睨む両者。

「わかったよ。行くからひっぱんな」

まったく意味わかんないよ・・いつも怒ってんだもん、この人たち。勢いよく歩いてく忍、追うように二人もついて行く。

ざわつく教室は何事かとうわさを広げていた、接点のない組み合わせ

わせなのだ。

「で、どこ行くんだよ。どうせ加賀くんのことなんだろう、ほっといてくれないかな人のことは」

ちらりと振り返り、小さく呟く忍に駆け出し横に並ぶ相田。

「ほっとけるかよ。まあそれは、こつちもいろいろ誤解あったみたいなのは事実だ。昭次は素直だからな突き放せないだろうし、あいつみたいには」

なんのことかわからず怪訝に見てる忍、小さくため息をつく相田・小さく呟いた。

「おまえ、あいつ覚えてるよな・・達也」

名を聞いてびくりと肩を揺らす忍を確認し続ける。

「忘れるわけないか。オレ、ダチだったの知ってる？」

「え?・・」

立ち止まる忍の驚いた顔に小さく笑う相田、知らないのがおかしいんだけどなあんなに一緒だったのにオレら。

「知らないよなあ、おまえの場合周り見えてなかったし」

「なにが言いたいのかわかんない。それが・・どうしたんだよ」

「ちよつと久しぶりに連絡とれてよ、おまえの話が出た」

「オレの?・・なに、それ・・」

相田の言葉にいちいち驚いてる自分が嫌だったけど・・オレのことなんか忘れてるだろうと思ってたやつの名に、動揺は隠し切れなく。

なんで、あいつがオレの話なんかすんだよ・・そんなことあるわけない・・

呆然としてる忍にゆっくりと話を続ける相田。

「オレも昭次のことで気になってたところだし、聞いた・・・どうして逃げたのかって。知ってるだろうわさ。おまえから、逃げるために転校したってやつ」

胸元をぎゅっと掴む忍・・・言葉に即発されて蘇る記憶に、唇をかんた。

「・・・最低。思い出したくないこともあるって知らないのか。そんなこと掘り起してなにが楽しいんだよ」

泣きそうになりながら叫ぶ姿に、少しばつ悪そうに顔を見合わせる相田と武威。

「悪かった。たしかに勝手なことなのはわかってたけど、昭次のことと壊されるよりマシって思ったし」

「壊す？なにを、オレはただ友達になりたかったただだよ」

「わかってる、それも誤解なんだってちゃんと聞いた。会って謝りたいって言ってたぞあいつ。それ以上聞いてないし安心しろ。悪かったついでに外見ろよ、連れて来たうるさいから」

見ろと言われ反射的に向きを変えた瞬間、連れて来たという言葉に身体が固まったしまった。

え、うそ・・・あいつが来てるってこと？冗談だろ・・・

動けないでいる忍の肩をポンと叩き、話はそれだけと歩いていく相田たち・・・無責任にもほごがないかあ？

思わず差し伸べてしまいそうになる腕、振り返る武威に留まる手。

「ところで、昭次知らね？」

「・・・あんたらが知らないのにオレが知ってるわけないだろ」

「それもそうか。またあいつサボってんのか。たるんでんな最近」

「もう一つ言つとくが、昭次とダチになりたいいうならオレらとも仲良くしてくれないとよ、努力が大事だよ何事も」

笑いながら行つてしまふ二人を呆然と見送る忍。

なんなんだよあいつらは、勝手に怒つて勝手に解決して・・オレはどうしろつていうんだ・・

いろいろと言いたい事はあつたけど、それどころじゃない空気が右半身に・・

ゆつくりと窓の外を見た・・中庭に人影が見え、思わずガラスに張り付いた。

「冗談・・やめろよな」

そこには忘れたくても忘れられない人物が立っていた、こんなに離れていてもわかつてしまふ自分が恨めしい。

やっと、吹っ切れそうになつた気持ちどうしてくれるんだよ・・話すことなんかなにもないよオレ。

ふいに相田の言葉を思い出す・・謝りたいって言つてた。

オレのこと覚えてたんだよな、謝りたいってなにを？なにも言わずに行つちやつたこと？

知らず覗き込むように身を乗り出していた忍。

鳴り響くチャイムの音に反応したのか視線を感じたのか・・ふいに顔を上げるその人物・・佐藤達也。

忍に気づいて、目を見開き大きく手を振っていた。

瞬間、身体を引かせる忍・・会いたくない、でも話したい。複雑な気持ちが胸をかけ巡る。

「しのぶっ」

外から大きく呼ぶ声にそつと外を覗いて見た、見えたのは頭を下げてる達也の姿。

呆然とその姿を見つめてしまい、顔を上げる達也と目が合ってしまった。

なんでおまえが頭さげてんだよ・・・オレが嫌だったから、いなくなつたんじゃないの？・・・

「ちよつと、待つて・・・」

なんだかいても立つてもいられず叫んでいた、ずっと理由が聞きたかったから・・・

廊下を走っていくと、授業中の窓から何人かが覗いていた・・・やばいかな。

「おい、井川つなにやってる。授業中だぞっ」

後ろから怒鳴る先生の声にも振り返らず走る、優等生の井川の姿にしばし呆然と見送る先生だった。

靴を履き替えるのもどこかしくそのまま外へ出た、中庭のさっきの場所・・・木にもたれて達也が、いた。

「なにやってんだよおまえ、学校じゃないの？今日」

息を切らしながら言う忍にどこかうれしそうに笑っている達也・・・なに笑ってんだよ、もう。

「勢いで、ついな。おまえの話聞いたから。どうしても話したくて」

話・・・オレにだって、いっぱいあった・・・もう、忘れてしまったけど。

「武からおまえの様子がおかしいって、電話もらって。オレならなんかわかるところじゃないな」

「なんでおまえにわかるんだよ、おかしくなんかないし・・・そんなことで、なにやってんの・・・」

沈黙が流れる気まずい雰囲気、うつむく忍をじつと見つめてる達也。

「・・・おまえ、ちゃんと話せるやつできたのか？」

ふいに呟かれた言葉に、びくりと顔を上げる・・・心配そうな達也の目に腹が立った。

「はっ？なにそれ、関係ないだろそんなことおまえに」

睨みながら、悔しくて泣きそう・・・最悪こいつ、なんでおまえにそんなこと言われんの・・・心配でもしてるつもりかよ・・・。

「関係あるわ、おまえ中学の時オレの他に親しいやついたか？様子おかしいのもそれが原因じゃないのか？それでも心配してたんだよ。だから今日は来たんだぞ」

小さく震える忍、怒りにも似た感情がわきあがる。

「なあ忍。なんかあるんならオレが聞く、オレに出来ることならするから。オレたち、友達だろ？」

何かが、切れた気がした。

「心配？相談？おまえがそんなこと言うんだ？友達って・・・そんなこと思っただけに」

友達なんて軽々しく言うなっ・・・黙って離れていったやつが。涙をこらえる忍、絶対に泣かないと心に決めていたから・・・

「思ってる。おまえのことが心配だから言ってるんだ・・前はなんでも話してくれてただろ」

「心配なんて言うな。おまえが言えることじゃないよそれ・・おまえが行った後のオレがどれだけ・・なにも知らないくせに」

忍の言葉に痛い表情をする達也、それでも視線は外さずじつと見つめる。

「・・あれは、最低だったってオレもわかってる。けど理由はちゃんとある、おまえあのままだったらオレとしかいなかっただろ。他のやつらと話もしない、おまえのためだよ・・なにも言わなかったのは、悪いと思うけど」

「そんなの・・おまえの勝手な考えだろう、オレはそれでよかった・・おまえといわれたらそれで楽しかった、他なんかよかった・・きれいな事ばつかなうなよ、オレといるのが嫌になっただけだろう、そう言ってくれば・・よかったんだ」

おまえがオレのことうつとうしくなっただけで離れたのは知ってる・・始めはわからなかった、急な転校にただショックで、けどしかたないって思うほかなかった・・

けど違った、高校に入って聞いたうわさはオレと達也のこと。

あいつにはついていけないと、オレのことが怖くなったんだと・・それを聞いて力が抜けて、いつかは会いに来てくれるんじゃないかと思ってたから・・オレが原因だったなんて。

それからオレはさらに氣力をなくして一人誰ともしやべらず、ロボットのようにな家と学校を往復してた・・生きる氣力さえなく。

「忍・・おまえのことが嫌になったなんてない。これは本当だ、転校も親の急は都合で。本当だからな・・」

「もういいよ、そんな昔のこと思い出したくもない」

「聞いて、忍つつ」

「聞かなくてもわかつてるっ。おまえの口から聞きたくない」

「聞けって。大事なことだ。おまえがオレのことをなんて思っ
てよとオレは友達だっと思ってる。オレの起こした過ちは消しようが
ない、どこかで離れられてほっとしてた自分がいたのは事実だ・
だから何も言わずに行った・けどずっと後悔してた、そしたらあ
いつから連絡きて・誤解だけでも解きたかった、わかつてくれ忍」

「わかるかそんなこと・おまえの言うとおり友達なんか一人もい
なかったよ、いらなかったから。けど、今はいる・やっとなら友達に
なれそうな・」

ふと、相田たちの顔が浮かんだ。

「あつ、そうかオレがまた同じことやるんじゃないかって止めに来
たのか、あいつらに言われて」

ぴくりと眉を上げるクセ、図星の証拠・だてに一緒にいたわけじ
やない。

口ごもる達也に、小さくため息を落とした。

そうだよな、自分から来るはずないよこんなたってから。

あいつらもあんなこと言っただけのこと近づけたくなかっただけ、
なにが友達だ・なる気なんかないくせに。

みんな最悪だよ、オレがなににしたってうんだよ・ただ仲良くした
いだけなのに。

「もう、いいよ。おまえ帰れ・オレのことなんかほっとけ、忘れ
てくれていいから。オレも、忘れた・心配しなくても大丈夫、ど
うにか、生きてるだろ？」

ふと浮かぶのは俊や昭次、義斗の顔・早く、会いたい・足が勝手に家へと歩き出した。

それを止める達也の手、大丈夫だと笑っている忍の顔は全然大丈夫には見えなかった・生きてるなんて、当然なのに・やつぱりどこか変だ。

「あいつらに頼まれて来たんじゃない、オレの意思だ。それだけはわかってほしい・おまえのことも忘れない、忘れるわけないだろちゃんと・友達作れよ、オレみたいな薄情なやつじゃねえやさしいやつをな」

じつと見ているだけの瞳、聞こえているのかさえ定かじゃなかった・
・答えずに歩いて行く忍、それを見送るしかできなかった。

達也・おまえも、やさしいよ。

そのやさしさに甘えてたのはオレなんだってわかってるくせに。
正直になりたいと思う・どうしてもつないでおきたい今の関係、それにおまえとも・また、昔みたいに。

振り返り駆け寄る忍、手を差し出した。

「オレ、今絶対ほしい友達がいる。おまえと同じくらいやさしくて元気な子。怖かった、また離れられるのが・だから自分から行くのやめてたけどちゃんとしたい、逃げるのは止める。達也も、逃げないで来てくれたし。応援、してくれるか？」

「・・わかった。しっかりな」

握手を交わした、まっすぐ見据える忍にさっきの弱さはない気がし

た。

走って行こうとする忍に叫ぶ達也。

「忍っ、おまえとダチになりたがってたやついっぱいいたんだからなっ。周りちゃんと見ろよっっ」

大きく手を振り笑う忍、その笑顔は昔と変わらない。

「・・・そのチャンスを遠ざけてたのは、オレなんだけどなあ」

小さな呟きが空に消える・・・いつかのあの空と同じように。

携帯を取り出し、メールを打った・・・武に、ぐちでも付き合ってもらおうかなあ。

『武、今日はサンキュ。忍とはカタついたから。あいつの、友達にしたいってやつおまえの心配してたやつだよな、いいやつなんだろ？ゆるさねえからなもし傷つけたら・・・オレの言えた義理じゃねえけど。本音だよこれが・・・悪いけど見ててやってくれ、オレはもうダメみたいだから。あいつは次に進んでる、オレも進むよ。いつか・・・伝えたいな、オレの中に閉まってる想い』

大きく深呼吸をしよう一度空を仰いだ、思い出の中楽しそうにオレにむけて笑う忍を見つめながら。

授業中、メールを見てる相田武が小さく呟いた。

「・・・必死だと思ったら、そういうことかよ。逃げたのは自分の想いからってことね」

「なにぶつぶつ言ってるの、メール誰から？」

ふいに後ろの席、覗き込んでくるのは武威直人。

「ああ達也から。帰ったみたい、解決したって・・・」

「おいそこ、静かにしろ」

怒られ小さくなりながらメールを見せると状況を把握したのか少し苦い表情を見せてた、武威はあいつらにあんまり面識ないからな。

ふいに携帯が震える、見ると直人からメール。

「これって、達也ってやつ井川のこと、好きだったってこと？今もかなあの言い方だと」

汗の絵文字が笑えた、動揺はしても理解はできてる様子。メールで会話を続けた。

「そうやな・・・」

「いるもんだね近くにもそういう人」

「オレもそんなこと全然知らなかったからな。普通のやつだよあいつ」

「実は井川のやつもそうだったりして」

「それは違うと思う、あいつは純粋に友達ほしただけ、達也の話聞いてわかるよ」

「そうかあ？」

「まあそういう意味で言えば惚れてるかもな昭次のこと」

「・・・やっぱあいつは要注意人物ってことじゃん」

「たしかに、あとで昭次ん家行ってみよか」

「あのサボリ魔やろう、いっぺん締めとかないとな」

「なっ」

カチカチ鳴る音に気づかれ先生が近づいてきていた、あわてて隠すが遅く頭に一発つつ貰う二人だった。

勢いで走ってきてしまった忍、昭次の家に向かっていた。

なんて言われようとオレはあの人たちがほしい、ずっと一番になりたかった・・怖がってたらだめなんだってわかった、あの人たちの中に入っていきたいから

そのままのテンションで加賀家のチャイムを鳴らす、誰もいない様子。

「加賀くん、休みじゃなかったっけ・・あつ、俊兄のここかも」
なんだかいろいろあり過ぎて忘れるところだった・・大変なんだよ今日。
日は。

「今度は帰らない、俊兄がなんて言っても・・」
心に決めて駆け出す忍だが、場所を知らないまま・・闇雲に走り回るのだった。

エピソード2

6・義斗と忍・加賀兄弟（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないままはじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。

「大竹幸」成仁の姉。病院で療養中、悪化し死亡した。

「神崎俊」幸の恋人、母を病気で亡くしている。成仁に兄のように慕われている。

「関義斗」俊のケンカ仲間、はじめとは血の繋がる兄弟。昭次との関係は？

「井川忍」昭次の同級生、俊とは家が隣同士で慕っている。

「相田武・武威直人」昭次の親友。

「佐藤達也」忍の昔の親友。

エピソード2

6・義斗と忍・加賀兄弟

爆音を響かせ、ゆっくりとバイクが路地を走り回っていた。

「・・・くそつたれが」

心を落ち着かせるかのように頬に風を受ける義斗。

はじめ兄・・・まったく忘れとらんかった、それだけのことしたんや仕方ないが。

それ以上に昭次との距離離そうとしてた気する、必死で・・・オレのこと忘れていた昭次、それを思い出すなと強制しとる。

確かに思い出したらあいつも傷つくやろし、さっきの笑顔も見せてもらえんくなる・・・けどそれ以前のこととも思い出したらあかんのか？

笑顔の昭次を思い出し、唇をかみ締める義斗。

「オレの唯一の、思い出・・・消さんでや昭ちゃん・・・」

呟く声はバイクに消される。

自業自得はわかつとる、けどあの時の気持ちは今も変わらん・・・一緒におりたかつたずっと。

走っていると遠くに見覚えのある人影が見えた、あのおぼっちゃん頭。

「おい、おまえ、忍か？なにやってんのこんなところで」

バイクの音にびっくりしつとも振り返るとオレと気づき、見るからにほっとした顔。

「ああー、関さん。よかった、迷子だったんだよね。ってことはこ

のへんに俊兄が」

「なんやおまえやつぱり来たんか、迎えにいったる言つたやんけ。おとなしく学校いけよ」

「関さんにはわからないだろうけどね、こっちのが大事なのオレには・・友達作るんだ」

聞こえないように小さく呟く忍の声は、義斗に聞こえていた。

「・・どうしたん、自分えらい顔してんぞ。大丈夫か？」

「えっ？なんでもないよ、普通だよオレ・・」

顔を押える忍、今にも泣きそうなそんな表情。

「なんやわからんけど、がまんすることないぞ。オレはなんも見とらんし、後ろ乗れ」

一瞬躊躇したが、無言で背中にしがみつく忍。

その温もりに安心してか、心配されてうれしくてか一気にがまんしていた涙が零れ落ちる。

バイクの音にかき消される泣き声、義斗は見ぬ振りをして遠くを見ながら走った。

いつ以来だろう、泣いたのなんて・・やっぱり、オレ達也のこと大事だったって思うと悲しくて、離れてても忘れたことなかったし・・忘れようとしてること事態覚えてるってことだし。

あいつもオレのこと忘れないって言ってくれたことが、今さらになつてうれしかった・・あいつ以上の友達なんてホントはいらないんだ

背中で小さくなってる忍を思い、小さくため息をついた。

・・みんな、いろいろあるんやな・・こんな幸せそうなやつにも、辛いことがあって　今のオレは神崎よりましなんやないか？

もう会えんと思つとつた、話せないと・・・そんな昭次と普通に話せてる、それだけでもええんやないか。

自分のやったこと、今思つても間違いやとは思えん・・・昭次にやろうとしたこと、後悔してるなんて簡単に言つたらあかんことや今はあいつが生きてて会えたことがうれしい、矛盾なのはわかつとるが正直な気持ちや。

ぼんやりと思い出に胸を痛ませているとしがみつく忍が大きく声を上げ叫ぶ。

「・・・関さん、ずっと一緒にいるためにはどうしたらいいのか、知ってる？」

聞かれたことに肩を大きく揺らす義斗、急激に速度を落とした。

ずっと一緒に・・・それはオレがずっと知りたかったことや、なんでおまえまで同じこと。

同じようなことに、悩んでいるのだろうか。

「・・・おまえはわかるんか？オレは、失敗したやつやから。そんなん知らん」

「えっ、なにそれっ。なに失敗したの？オレもしたっ失敗。話、聞いてくれるっ！」

運転中の背中で暴れる忍に慌ててバイクを止めた、まずいこと言つたか？

「おつまえ、危ない。暴れるんやないわっ、こけたら痛いじゃすまんのやぞっ」

「ご、ごめんなさい・・・」

涙いっぱい忍に毒気を抜かれてため息の義斗、バイクを脇に寄せた。

「で、なにが聞きたいん。なんもわからんぞ、失敗聞いてもなんの

参考にもならへんやろ」

バイクに持たれかかり、タバコに火をつける。

どこか興奮してる忍は、誰かに話したくてしかたなかったように自分のことを話出した、どこが悪かったか教えてほしいと。

「・・オレはただずっと仲良くしてたかっただけそいつだけでよかったんだもん友達なんて。それがオレのためにならないって、オレから離れて行った・・オレだけが一緒にいたかっただけなんだって、わかって・・なにが悪いの？」

「あほやなおまえも、そいつも」

話を聞いてるとかわいすぎて笑えてくる。

「なんで？真剣だったんだよオレ」

怒ったように見てくる忍の頭をポンと叩く、力入れすぎなんだよおまえらは。

「想いすぎや二人して。まあ、おまえは一途っぽいからな、そのへんどうなん？」

「・・だってあいつがいたら楽しかったし、他に誰もいらなかった」

「重いやるそれ、離れてくくらいや、おまえ相当他のやつとは仲良なかったんやろ」

むすつとしてる忍、図星なんだと笑う・・不器用やな、お互い。

「悪い悪い、怒るなや。おまえが聞け言ったんやで？」

「そうやけど・・重いのかなあって、普通に仲良くしてただけなのに」

「おまえはなんか危なっかしいから、心配されるのもわかるわ。で、どうしたんやそれから他のやつとは？」

うつむいたまま、少し開く間・・・できてないんやなあ、これ。

「・・・いないよ。ずっと一人。変なうわさがたって・・・誰も近づかなくなった。それならこっちだつてって、孤立しちゃった」

「うわさがなんやねん、おまえなんもせんかったんやろ？それじゃ一緒におられへんやん」

ふいに見上げてくるキツイ瞳、拳をぎゅっと握り締めて悔しそうに吐き出す言葉。

「オレが達也に近づくやつにケガさせてたとかそんなこと言われて、気持ち悪がられて・・・達也が離れていったのもオレから逃げたんだと思ってた・・・どうしようもないよ」

思い出して唇を噛む忍、握りしめていた拳をそっと包んで緩ませた。
「やってへんのやろ、けど中学生にはきついなそれ・・・そいつとはもう会ってへんのか？話さなわからんこともあるやろ」

なにか誤解があつたんやないのか、かりにもずっと仲良くしてたやつがいきなりそんなひどいことしないだろう・・・

思わず必死にフォローを考えている義斗、どこかダブるのだろうか。
・小さな昭次と。

「・・・さつき、会いに来た」

「ホンマか？で、どうなったん。誤解やつたんやろ？」

思わず乗り出すオレに、小さく笑って頷く忍・・・なにムキになつてんのやろオレ。

「オレのことなんか忘れてると思ってた、なんかずっと気にしてたみたいで・・・ホント話さないと解決しないなあって、わかった・・・」
「わかったんなら、もう大丈夫やろ。ちゃんとダチ作れるわ今度は。」

まあその達也いうやつと

仲直りしたんなら連絡とりあうんがええんちゃう・・なんや変な顔して」

さっきの笑顔はどこいった、泣きそうな怒ってるような忍の表情に小さく笑う義斗。

「なんや？ヨリは戻したくないんか、おまえも強情なやつやな。許したれや」

「あいつ以上のやつはできないとは思うけど、もういいんだ。あいつはあいつ、また気がむいたら連絡するし・・今はな、加賀くんと友達になりたい、今度はオレも引かないから」

「・・加賀？つて、もしかして、昭次・・？」

「えっ？なんで？知ってるの関さん。今も加賀くん俊兄のそこなつて来たんだよ」

思わぬところから出た名前に、思わず持っていたタバコを落としてしまった。

なんや・・このへん知り合い度ありすぎやないか？神崎の知り合いや。おかしくはないが・・

「神崎のとこおらんぞ、家帰った」

一気に戻る現状に・・タバコを思い切り踏み潰しながら呟いた。

「・・そうなんだ、さっき行ってきたのに。そういえば関さんは、なにやってんの？」

思い出したように聞いてくる忍。

「なにつて気分転換してただけ。そーいや手伝い頼まれたような気がするわ、戻らな」

「あつ、待って。関さんの話聞いてないよつ、話してくれないの？」

「・・オレのは、そんなかわいいもんじゃないからな・・勘弁して」

くれや」

さみしそうに言う義斗、バイクにもたれて再度つけたタバコをふかす・・それをじつと見つめる忍。

「それって、小さい時のこと？最近？オレが聞いたってなにもしないけど、言ったらすすきりする思うよ・・オレも楽になったよ」
励ますように笑顔を見せる忍、苦笑いの義斗。

「おまえが元気になったんならええよ、昔のことやし。オレはそいつと会えただけでもうええから・・」

「会えた？なら、さっき言ってたじゃん戻るのが一番だって。そういうふうには思わないの？」

「戻るんならそうしたい、けど無理や・・そんな簡単のことと違う。忘れとるから話せるんやから・・」

呟くように言うときさみしそうな瞳が遠くを見つめていた、これ以上は聞けないと本能で思う忍。

辛そうにしてる義斗の頭を腕を伸ばして撫でてみた。

「もっといいほうに考えようよ。関さんとのこと忘れてるならそれに乗じて仲良くすればいいんじゃない、関さんこそ考えすぎだよ？」

覗き込むと小さく笑顔を見せる義斗、なんだかほっとした。少しは力になってるのかな。

「なるようになる、それが一番。俊兄んとこ行くんでしょ？オレも行きたい」

「そうやな。いいかげん行かな怒らすかな・・」

元気がなくなっただしまった関を見て、小さくへこむ・・やっぱり力になんかなれないみたい。

大人の人もいろいろあるのかなあ、オレから見ても聞いちゃだめなのわかったし・・

加賀くんと知り合い見たいだったなそういえば、見た目から行くと加賀くんの兄ちゃんと知り合いなのかもしれない。

バイクの後ろにしがみつきながら義斗の様子をうかがいながら聞いてみた。

「加賀くんのこと知ってるみたいだけど、年齢的にお兄ちゃんのほうと友達なの？仲いいからあの兄弟」

ふいにふかされたアクセルにびっくりして質問がかき消された、振り返る義斗。

「・・・なんか言ったかつ。しつかり捕まっとけ、とばすでえっ」

あんなんと友達なんて・・・思われたないわ。

仲ええって、そんなん知つとる・・・オレもあそこにおれたかもしれないなんて、考えられへんな今になったら。

「あかん、ちよう寄り道するで。しつかり捕まっとけよっ」

滅入っていく気持ちを押さえるために大竹家を通り過ぎスピードをあげる義斗、言われるままつかまるしかない忍。

さっきまでとうって変わったスピードに、いろんなことが飛んで行ってしまった気がした・・・オレ、なんか聞かなかったっけ？

俊の家から逃げるように帰る道の途中の公園、昭次に言い切られ・・・ベンチへと腰をすえる、話す時が来てしまったと小さくため息をつくはじめ。

「昭次、あいつのことわかったのか？」

「ん？わかんないと思うけど、なんとなく知ってる気はしたから」

知らないのに、わかる・・昭次のどこに残ってるのか義斗の記憶。オレが話さなくても・・もう、時間の問題かもしれないな・・

「教えてくれるんでしょ？あの人のこと。オレ仲よかったの？」

「小さい頃は三人でよく遊んでた、あいつが一人で遊びに来て・・今思うとよく来てたな遠くから」

「え？なんで、一緒に住んでなかったの？兄弟、だよな」

首を傾げる昭次に小さく笑うはじめ。

小さかったこいつに同じこと言われた記憶がある、なんでよくんはここにいないのって・・おまえホントに好きだったからな、義斗のこと。

「いろいろあるんだよオレたちの親にも。おまえももうすぐ高校卒業か・・知ってもいい歳だろう、隠してたわけじゃない・・オレたちには関係ないことだと思ってるから・・」

「どっちにしても、覚えてないんだもん・・隠し事なんか意味ないよ、今聞くのがオレの初めての記憶だし。それは、親のこと？義斗さんのこと？」

確かにそうだなと苦しそうに笑うはじめに昭次は微笑んだ、大丈夫だからと。

強いな、ポンと頭を撫でた・・昭次にうまく伝えられたら、いいけど。

「まず、親のほう。おまえの母ちゃんとオレの母は別人だ・・意味、わかるか？」

一瞬考え出る答えに、目に見えてうそでしょとはじめを見つめる昭次。

「・・・オレたち兄弟じゃないって、こと？」

「そうだと、思うのか？」

不安そうに見つめる昭次の肩を抱き、意地悪な質問を投げるとうそなのかよと睨んでくる。

「いくらオレでもそんな冗談言わねえよ。半分、父ちゃんは同じ」

「・・・父ちゃんは同じ・・・ってことは、兄弟だよね・・・」

複雑な思いに襲われてる昭次、はじめはただ見つめるしかできない。

「・・・兄ちゃんと義斗さんはずっと兄弟で、オレは後から・・・ってことで」

「いいよ無理に理解しなくても、兄弟には変わらない。一緒に住んでなかったのもわかっただろ？あいつは母に連れて行かれた、それだけのことだよ・・・」

結構これも痛い思い出だけだな・・・オレだけ残された、しかたないことだとわかっててもわりきれる歳でもなかったから。父親のこと嫌ってたよあの時ばかりは。

「・・・なんか、思い出すか？」

「なにも。親の顔も出てこない・・・オレの頭ん中どうなってんだろ」

小さく笑ってる昭次だった、心の中はこんな大事なことを思い出せずにいる自分に腹が立ってしかたない。

少しくらい思い出してもいいと思うけど、衝撃な話聞いてるのに・・・泣きそう。

関係ないって言っても、兄ちゃんがどう思ってるかわからなくて怖くて顔が見れない・・・

本当のお母さんと離れて、悲しくない子供なんていないと思う。

オレの母ちゃんのこと、オレのこと嫌いだったんじゃ・・・どう接してくれてたのかも、今ははじめ兄ちゃんの思いだけでいいから思い出したい。

「どうした昭次。泣いてる？聞かないほうがよかったか・・・やっぱ」
涙いっぱい目に小さくため息をつくはじめ、必死にこらえてる昭次を抱き寄せた。

「泣くなよ。関係ないって言っただろ、もし血がつながってなかったておまえはオレの弟だ、なにも変わらない」

「・・・母ちゃんのこと怒ってない？母さんと、義斗さんと離された母ちゃんのせいってことでしょ？」
小さく聞こえた声は思いがけない問いかけ、びっくりして思わず立ち上がったしまった。

「そんなことおまえが心配することじゃねえだろ。怒ってたとしてもそれはおまえらにじゃなくて父親にだ。オレたちはみんなあいつの勝手で、こうなったんだからな・・・」

「兄ちゃん・・・父ちゃんのこと怒ってたの？毎年一緒にごはん食べてるのに？なのに・・・嫌いだったの？」

うそでしょというように見上げる顔、ふいに瞳からあふれ落ちてくる涙・・・あわてて俯く昭次に、今度は大きなため息をつくはじめ。

「そんなのはなあおまえが生まれる前に終わってることだ、今は全然違う。むしろ、おまえのことオレの弟にしてくれて感謝してるし」

ポンと頭を撫でる手と、その言葉に一瞬涙が引っ込んだ・・・見上げると、優しく微笑んでるはじめ。

「オレはおまえのこと小さい時からずっと大事にしてきた、それで十分だろ？」

「うん・・オレも兄ちゃんが兄ちゃんであれしい・・」

おさえていた涙がまた溢れた、ハンカチを探すはじめだが見つからず服のすそを差し出すと笑いながら腰に抱きついて顔をうずめる昭次。

ポンポンとなだめるように頭を撫でるはじめ。

「それが一番大事なことから、忘れるなよ。母さんたちが私たちのことかわせてくれたこと・・」

何度も小さく頷いていると、ふと顔を上げ「・・義斗さんも、だよな？」小さく聞く。

一瞬、険しくなる表情・・

「・・兄ちゃん、義斗さんのこと嫌いなのか？義斗さんも兄ちゃんの弟なんだろ・・なんでいつも怖い顔するんだよ」

ぎゅつと服を握りしめ見上げてる昭次に、どこか苦しそうに視線を外すはじめ。

「・・あいつと今まで会ったことなかっただろ？それくらいオレたちも会ってない、兄弟でも一緒にいたいとはかぎらないだろ・・」

「そんなの、うそだ。兄ちゃん怒りながらだけど義斗さんのことさみしそうに見てた、義斗さんだって・・二人ともおかしい、オレにそれ知る権利はないのか？」

大きく首を振って、昭次の無垢な瞳を隠すように抱き寄せる。

「これだけはどうしても、言えない。義斗もきつと一緒に、オレたちの中にしまい込んである。誰にも言わない、言えない・・」

肩を押さえつけてるはじめの手が痛いほど、こんな兄を見たことない・・嫌、最近有った・・義斗さんという時に。

・・なんで、なにがあっただよ。

知りたい、あのひとのこと・・大事なことで胸の中で何かが騒いでる気がする。

兄ちゃんは絶対教えてくれないだろう、きっとあの人も・・だとしたら自分で思い出すしかない・・・こんなにもどかしいことは今までなかった。

兄ちゃんとの今までの記憶だけでいいって思ってた、けど今は・・もう知りたくてしかたない

義斗さん、あのひとと話せばなにか出てくるような気がした・・・

エピソード2

7・はじめと義斗の葛藤（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないまま兄はじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。義斗に会い段々と思いついてきている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。姉を亡くし俊と二人で悲しみを抱えていく。

「大竹幸」成仁の姉、病気をわずらい亡くなる。俊と夫婦となった。「神崎俊」幸と念願の結婚。母を幸と同じ病気で亡くしている。成

仁と兄弟となった。

「井川忍」昭次の同級生、俊とは家が隣同士で慕っている。

「相田武・武威直人」昭次の親友。

「関義斗」俊のケンカ仲間、昭次とはじめの兄弟。小さい頃、昭次を連れ去る事件を起こしはじめとは疎遠となっていた。

大竹家に葬儀屋が到着していた、慌ただしく動き回る神崎たち。

「まったく、あのアホ閨が。手伝ういうたやんけ・・・どこ行きよつた」

「俊さん、なにぶつぶつ言ってるんだよ。ちょっとこつち持つて。もうさっきまであんないっぱいいいたのに。加賀さん戻って来てー」

内輪だけの葬儀、小さな祭壇を作るのさえ一苦労。手伝ってくれる葬儀屋の人も苦笑いしていた。

「あとはこちらでやらさせていただきますので、休んでもらっていいですよ。お疲れでしょ」

「えっ、ああ・・・そうさせてもらいます、オレ姉ちゃんのとこ行ってる」

逃げるようにその場を離れる成仁に笑う俊。

「すみません。そちらももういいですよ、あとはさき寝かせるだけですから、お手数おかけしました」

「いえ。では失礼いたします。火葬のほうはお迎えに参りますので・・・」

「・・・お願いいたします。では明日」

深くお辞儀を残し去っていく葬儀屋さんに小さくため息をつく俊。じっと出来上がった祭壇を眺めた。

「・・・こうなると、現実味でるよね・・・」

少し離れたところから覗き込む成仁がぼそりと呟いた。

「現実や・・・今からが辛いことや。おまえがおってくれるだけ今回はましやけどな・・・」

母親の時を思い深くまぶたを閉じる・・・うつむいてしまふ俊に、そつと駆け寄る成仁。

隣に立つ温もりに気づき、そつと目を開けると静かに成が立っていた。

ふつと笑みがこぼれる、ホンマ優しい子や。

「お母さんの時、のこと・・・」

ポツリと呟く声に、小さく頷いた。

「こつちには誰も知り合いおらへんかったからな・・・ええんや、幸はおつてくれた。それで十分やつたし」

「オレ、帰ってなかったから・・・姉ちゃんにそんなことあつたことも知らなかったし、姉ちゃんがよく倒れてたのも後になってようやく知って・・・どうしようもない弟だった、最後くらいいい弟でいられたかな・・・」

化粧をされてきれいになった幸を見つめる二人。

「笑ってるよ、おまえはいい弟や。誰が見てもそう言う、自信もて悪いまま気づかんと終わってるやつらもいっぱいおるんや、おまえは戻ってこれでよかった、そうやる？」

「・・・そうや。最後の姉ちゃん見れた、幸せそうな・・・」

そつと幸の顔を覗き込み、ゆっくり横に座る成仁の頭をポンと撫でる。

「そうや、おまえの孝行はみんな認めとる・・・毎日病院に行つて幸の元気つけて、オレまで元気つけてくれた。」

「こいつも幸せやって言つとつた・・・成仁が戻ってきてくれた、ちょっとだけ病気に感謝やとかアホなこと言つてたわ・・・ホンマアホやな。」

バイクの音が鳴り響く、後ろの忍を乗せゆつくりと走る義斗。

「バイクって気持ちいいですねえ。なんかすつきりする」

「そうやる？これだけはやめられんで、忍もやったらええんやん。乗るか？」

「え？ホント？」

顔を突き出す忍を笑いながら押し返す。

「うそじゃ、おまえみたいなのに乗れへんわ。おまえにお似合いなのは原チャヤ」

後ろで「乗れるわあ」と騒いでる忍、それにまた大笑いの義斗・ふと遠くの公園に見つけてしまう人影、ギクリとした。

黙って走り去ろうとする義斗だが・・・「ああー、加賀くんっ」忍が叫ぶ。

「ちょ、関さんっストップ。加賀くんいた！」

大きな忍の声に向こうも気づいたようで、こっちを見ていた。

最悪やわ、自分・・・オレにこの状況どうせいちゅうんじゃ。

オレの気も知らず止めるバイクから飛び降りるとはじめてたちに走り寄ってく忍。

バイクにまたがったままその場にとどまった。

「加賀くんっ、探してたんだよ」

「井川くん？なんで、義斗さんと一緒なの・・・知り合い？」

昭次が呆然と遠くを見つめて呟く、その昭次に首を傾げながら答える忍。

「あつ、俊兄の友達なんだって。知ってた？加賀くんとも知り合いつて聞いて、びっくりしたよ」

びつくりしたのはこっちだよ、今義斗さんのこと考えてたところなのに・・・しかもなぜか仲良さげに井川ちゃんとバイクで現れるし、なんか嫌な気分なのは気のせいだろうか・・・

オレの動揺とはよそに兄ちゃんは井川くんに駈け寄る。

「忍くんはなにやってんだ、知らないやつバイクなんか乗っちゃだめだろ」

「知らないです、お兄さんも知り合いでしょ？加賀くんのこと知ってたよ」

言葉を無くす二人、なんだかおかしい空気に気づく忍。

「なんか・・・取り込み中だった、ですか？昭次くんの話あったんですけど」

忍の声にはっと我に返るはじめ。

「ああ、別にそんなことないよ。昭、オレ成仁んとこ戻るから」

「あつ・・・うん」

振り返ることなく走っていくはじめ、その背中を見つめ小さくため息をつく、視線を戻し今だバイクにまたがったままの人を見つめる。

オレは、あの人に用があるんだけどなあ・・・こっち来ないのかなあ。

「義斗さん・・・なんでこないの？」

「へ？そうだよ。閑さーん、なにしてるんですか？」

呼ばれる義斗は顔を上げる、すれ違うように公園を出て行くはじめ。

「おいっ」

通りすぎようとしてるはじめを呼び止める義斗、視線は合わず昭次たちを見つめてた。

「オレ呼ばれとるけど、行ってもええんか？無視しとる場合か自分」

「・・・べつに、いいんじゃないのか。オレはおまえのことも考えて

昭次に黙ってた、昭次は知りたがってるけど」

「なんやそれ。黙ってるもなんもオレとおったら思い出すかもしれんやろ、ええのか？」

ふいに視線を感じ、顔をむけるとどこか神妙に見てくるはじめの瞳。

「・・・あいつは、覚えてないんだよなにも。記憶がない・・・親亡くした以前の・・・それでもおまえがいいと思うなら、会えばいい」

静かにそう言うと言ってしまうはじめ、呆然と見つめてしまう義斗

・・・なんや、それ。さらっとえらいこと言わんかったか今・・・オレのこと忘れとるだけや、ないんか？
記憶がないって・・・親亡くしたって・・・いつの話やそれ、聞いてへんぞ・・・

あまりのことに反応が遅れる義斗。行ってしまうはじめの後を慌てて追いかける。

「・・・ごめん、ちょ・・・オレ、行くわ」

少し離れた場所から見ていた昭次、聞こえなくてもややもやしてくる。二人のことが気になり忍に呟きながら答えを待たず走っていた。

「あつ、ちょ・・・待って。オレも、行くっ」

道路に走り出て行く昭次の後を追う忍。

バイクで進路を止めて義斗とはじめが睨み合っていた。

なにかただならぬ雰囲気、ブロック塀の影に隠れる昭次と忍。

「どけよ、オレは急いでんだ。邪魔すんな」

バイクを避けようとするが執拗に道を塞ぐ義斗、必死に怒鳴る。

「なら答ええや、おまえらいつ親亡くしたんじゃ聞いてへんぞっ。

そりゃあのオヤジもっちゅうことやるっ！どういうことなんか教えてくれや」

バツの悪そうな表情ではじめは小さく息を飲む、じつと怖い表情の義斗を見つめ・小さく告げる。

「・・・交通事故だった。昭次も、そこに一緒に乗ってたんだけどお母さんにかばってもらって、奇跡的に・・・おまえに知らせなかったのは、悪いと思ってる」

目を見開き驚いてる義斗、大きく息を吐いた。

「・・・あれから会ってもおらんからなオレたち、無理ないわ」

その頃を思い出し、悔しそうに宙を睨む義斗・・・後悔だけが、胸を襲う。

「そうか・・・けど、ならオレのあの想い、なんやったんや・・・あんなことまでやって、アホやないか」

「わかってた・・・おまえのさみしかった想い、オレたちだけ仲良くやってたのががまんできなかったこと・・・おまえがあんなことしなきゃ、一緒にいられたのに・・・ホントアホだよ」

義斗の想いが伝わるようで、苦しかった・・・だけど、伝えてやれるほどの気力もヒマもなかった。

「やかましいわ・・・オレの気持ちなんかわからへんおまえには。ずっと昭次とおったおまえには」

また睨んでくる瞳、一人の辛さを伝えたいように。

そんな義斗を感じなぜか小さく笑うはじめ。

「なに、笑ってんのや・・・」

「おまえばっか辛いつて顔してるからだよ、ふざけんな」
なに？と胸倉を掴む義斗を睨み返すはじめ。

「わかんねえよおまえの気持ちなんか、わかんねえけどなあおまえだつてオレのことわかってねえだろ・・・昭次の記憶がなくなって親もいなくて、何度おまえと同じこと・・・しようとしてたか・・・」
掴んでいた腕がストンと下へ落ちる・・・信じられないという、表情で。

「・・・うそやろ？おまえがなんでそんなこと・・・」

「一緒にいなきゃわかんねえよ、大変だったんだ昭次の後遺症。小さなオレには手に追えなくて・・・がんばってたんだ」

思い出すと苦しくなる記憶・・・昭次、毎晩うなされてた、その声がかまんできなくて・・・夜中に外へ逃げたり、クッションで押し付けたり・・・おかしくなってたオレも。

義斗とはまったく違う理由で昭次をなくそうとしてた、最悪で思い出したくもない。

「おまえに昭次任せようかと思ったこともあったか・・・なにも考えないで」

「・・・そりゃ、たいそうなことやな。あんなことしたオレに任せようなんて相当や自分」

「たしかにな、おかしかった。ひどいこと・・・した」

「思い直して助かったいうことや昭ちゃんも・・・自分に危害くわえるやつとなんかおりたないやろし。オレもなににするかわからんかつ

た・・・あの頃」

「おまえに、昭次会わせたくなかっただけなんだきつと・・・オレが
変われば、一緒にやっていけたのにな」

はじめの言葉に大きく笑う義斗、ありえないいうように。

「・・・一緒になんて考えつかへんわ、今でさえそんなこと思ってへん・・・なにするかわからんオレとおらせんのは正当な理由や・・・自分でわからん、憎かったのかもしれない心の中で」

タバコを取り出し火をつける義斗、深呼吸をするように煙を吹く。
あの頃の状態はホントに悪かった、いろんな感情が渦巻いていた。

あんなに好きやった昭次のこと、どこかでオレらのことばらばらにしたあの女の子供やとか思ってたかもしれない・・・そんな小さい頃にそんなん思つとるわけあらへんけど、はつきりわからん自分のあの時の思い・・・

今度ははじめが小さく笑う。

「そんなこと思ってるわけないだろ・・・おまえ覚えてないのか、あの時のこと」

「・・・忘れるわけないやろ、今でも夢に見るわ・・・」

小さな昭次を手にかける自分・・・大きく首を振る義斗。

「だったら、わかるだろ。自分の気持ちくらい・・・おまえ、やれなかっただろが」

「怖なっただけや・・・昭ちゃんがおらんくなるより、怖くないって思っただけ。昭が、笑いよるから・・・」

「・・・笑う？その状況で、なんで笑うんだ・・・」

「わからん、けど・・・」

ため息をつきながらふと視線を上げるとその先に人影を見、口元からタバコが地面に落ちた。

「・・・しょう、ちゃん」

その呟きにはじめが勢いよく振り返り、呆然と見つめる。

「・・・今の、聞かれたんじゃ・・・」

呟く義斗に不安顔のはじめ、聞かれてはまずい話ばかりしていたことを思い、きつく目を閉じる。

二人で固まったまま、昭次の出方を待つしかなかった・・・

エピソード2

8・それぞれの想い（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないまま兄はじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。義斗に会い段々と思いついてきている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。姉を亡くし俊と二人で悲しみを抱えていく。

「大竹幸」成仁の姉、病気をわずらい亡くなる。俊と夫婦となった。

「神崎俊」幸と念願の結婚。母を幸と同じ病気で亡くしている。成仁と兄弟となった。

「井川忍」昭次の同級生、俊とは家が隣同士で慕っている。

「相田武・武威直人」昭次の親友。

「関義斗」俊のケンカ仲間、昭次とはじめの兄弟。小さい頃、昭次を連れ去る事件を起こしはじめとは疎遠となっていた。

エピソード2

8・それぞれの想い

隠れていた昭次が顔を覗かせる、明らかに聞いていた蒼白な表情・
はじめの顔も同じように青ざめる。

なに・・今の、話。

みんなが一緒にいられないのは、オレのせい？オレは、いらな
い子だったの？

「・・兄ちゃん、オレ・・ここにいたらダメだったの・・兄ちゃん
の側に。よくわかんないけど、オレなんかやったの？・・義斗さん
にも・・」

ゆっくりと近づきながら呆然と呟く昭次に慌てて弁解をする声。

「違う！おまえはなにも悪くない。なにも知らなかったんだ、悪い
のはオレなんだよ・・」

「・・なんかしたんわオレや、おまえやない。覚えてへんのは嫌な
ことやから、べつに気にすることやない。忘れてくれや」

「今の忘れるって？冗談でしょ。みんな聞いてた、なんでみんな一
緒に暮らせないの？オレ義斗さんが兄ちゃんだって知った時一緒に
住みたい思ったよ。一緒に暮らせない理由あるんでしょ、やっぱり
オレのせいなんだろ？」

黙り込むはじめと義斗、昭次が詰め寄る。

「・・さつき、兄ちゃんに聞いた。オレは兄ちゃんたちと母親違っ
って・・それがなんか関係あるの？」

どんとぶつかるように腕を掴む、はじめの表情に泣きそうになりな
がら叫ぶ昭次。

「オレのことやっぱ嫌いだったの？思い出せないんだよつなにも義斗さんのこと、思い出せないからっ・・・」

思い出せない自分にいらついでその場に座り込む昭次、慌てて抱えるはじめ。

「昭次。落ちついて、くれ・・・こうなつたらもう何もかも話すから、今は俊のところに帰ろう。それでいいな義斗、おまえが話したほうがいいだろ・・・」

もう、ムリだと思った・・・隠せられる雰囲気じゃない、昭次がいること忘れてこんなところで話してる自分に嫌気が差す、ただでさえ義斗の存在で思い出す確立高かつたつてのに。

小さく頷く昭次、力なくはじめと義斗を見上げる・・・二人の様子から、聞かないほうがいいと伝わってはくるけど、オレのことできつと二人はこんな状態になつてははずだから・・・聞けば、きつと戻れるって思う。

それがどんなことだとしても、オレは絶えてみせるって思えたから。

「・・・それでオレが納得したら、一緒にいられるよね？義斗さんも」

ふいにかかる声に、言葉に驚く義斗、そんなことを思つてたとは知らずはじめも固まる。

「・・・そんなに急がんでも話聞いたら、気も変わるわ絶対・・・」

「オレは変わらない」

言いきる昭次に、顔をしかめる義斗・・・はじめを睨む、話すなんて簡単に言いやがって。

「戻ろう。井川くんも」

そんな視線を避けながらはじめて話をとぎらせる。

昭次の後ろで見ていた忍、かなり場違いな自分に固まっていた。

「・・・あつ、そ、そうだよな。加賀くん、俊兄大変だって言ってた・早く行ってあげよ？」

小さく頷き立ち上がる昭次、引きずる足でうつむいたまま歩いて行く。

「昭次っ、義斗に乘せてもらえ。頼むぞ、先に行つててくれ」

「わかった。昭ちゃん・乗つてや」

顔を上げる昭次、今にも泣きそうな表情に胸が痛む・・・戸惑いながら、ゆっくりと後ろに跨る昭次。

「しつかり、つかまつとき。行くで」

言われるままに腕を回すと、ゆっくりと進んでいく・・・知らず力がかもる昭次、小さく唇をかんだ。

緩やかに走っていくバイクを見送るはじめて忍。

「・・・ごめんな、忍くん。へんなことに巻き込んで・・・」

「こつちこそ・・・盗み聞きみたいで、ごめんなさい。加賀・・・昭次くんは大丈夫でしょうか？」

「大丈夫、もう受け入れられる歳だと思うし。辛いのは、義斗のほうだ・・・」

小さく呟くはじめての言葉が聞こえてしまったが、聞きたいけどなにも聞けなかった。

義斗さんと加賀くんが兄弟だったなんて・・・はじめさんも、三人が兄弟。

気になってしかたないことがある・・・聞いてもいいかな、いいよね？

「・・・昭次くんは、記憶がないんですか？はじめさんのことも覚えてなかったの？」

思いきつて聞いてみると、一緒困った顔をしたが今更かため息をついて笑うはじめ。

「・・・交通事故だね。そのショックで。けどずっと昔の話だよ、あいつが小学生になる前の話・・・」「義斗さんとはそれから会ってないから、知らないんだ・・・思い出せないのかなあ」

「・・・昭次が思い出したいって言ってる。忍くん、さっきのことはもう忘れて。うちの恥だから」

小さく頷く忍、小さくため息をついた。

「・・・オレの話どころじゃない、よね・・・けど、オレも大事なことだ。早く元気な加賀くんに戻ってほしい、見てるしかできないけど。」

バイクの音が小さく響く、義斗の背中にしがみついた昭次が声を上げる。

「・・・義斗さん。オレの兄ちゃんだったんだね。なんで教えてくれなかったの？」

「全然会ったことないやつに兄やって言われてもわからへんやろ・・・知らんでもいいことや」

「そんなことあるかつ。すごく大事なことだろっ！オレが記憶なくて悔しいってわかってないんだよみんなっっ」

怒鳴る昭次に言葉を無くす義斗。

普通にしているのが当たり前になってるけど・・・なんも覚えてへんのは、辛くないわけがない。

「悪かった・・・あんまりいい思い出やないから、知らんでもええか
と思ってな・・・」

「・・・それは義斗さんの思いでしょ、オレにはいい思い出かもしれないじゃん。オレ思い出すから・・・絶対。それで義斗さんにもいい
思い出にしてもらおう。絶対だから」

誓うようにぎゅっと捕まる腕に力を入れる昭次。

義斗はただ前を見つめていた、そんなこと思いもよらなかった・・・
背中がアツい。

「・・・小さい時はよう遊びに行ってた、はじめ兄と離れるんもさみ
しかった、親の都合やしかなかったけど・・・弟が出来るん知った
らむちゃ見たあなつてな・・・おまえ生まれた時もおったよオレ」

思い出して笑みがこぼれる、ずっとほしかった弟・・・

けどオレにやなくて、兄のほうに・・・そこまで無知でもなかったか
らわかってた、オレとも血が繋がった弟なんやってことは・・・けど、
ずっと一緒にはいられない・・・兄弟だと思ってももらえんのやない
かそんな不安がオレを加賀家と繋ぎ止めてた、母の目を盗んでよう
行ってたわ。

「そんな・・・だったらなんで一緒にいなかったんだよ。オレ夢見た
小さい時の、仲良くしてた。けどどんどん先に行っちゃうんだ兄
ちゃんも義斗さんも・・・オレ、一人で泣いてた・・・なんだったんだ
ろ、これって」

「なんやろな・・・おまえおいて行ったことなんかないで。あれはお
いてった言わへんやろし・・・」

ふいに昭次の記憶に小さな男の子が現れた、いつか見たあの男の子。

あつ・・・今、なんか見たような。

夢の中の、あの子・・・もしかしてあれが義斗さん？オレ、いつも笑っててすごうれしそうあの子と一緒にだと。

やっぱり義斗さんとの記憶はオレにとつて大事なことなんだと思う、義斗さんと話してるとなんか思い出しそうなんだ。

「今、小さい義斗さん見た。きつと義斗さんに会ったからなんか外れたのかな、楽しそうだったよオレ。早く思い出したい」

無邪気にそう言い笑う昭次に胸が苦しくなってくる・・・

・・・いいんか悪いんかオレにはもうわからん・・・思い出してほしい、大好きと笑ってくれたあの笑顔が見れたらそれでええ・・・それだけで。

そんな都合のええようにはいかんやろうけど・・・

「・・・よし、くん・・・」

ふいに呼ばれるその呼び方に思わず止めるバイク。

「・・・いま、なんて言った？おまえ、もしかして思い出したんじゃないんか？」

「えっ、あつ。よしくん？なんか頭にあつたから、そう呼んでたのかなあつて。そうなの？」

大きくため息をつき、うな垂れる義斗。

「ごめん、びつくりさせて。思い出すのはいいことだね、そんな驚かなくても。よしくんかあ、呼んでたらまたなんかできそう」

「・・・ああ、あんまそれは呼ばれない。このなりで、よしくんて・・・」

「いいじゃん。オレのためだと思ってがまんしてよ、だめ？」

「しゃあない・・・ええ性格になったもんやわ、かわいかったのにな

あ
」

笑い合う二人、今はそれを楽しみながら・・・義斗は何かを覚悟していた。

ばたばたと世話しく駆け回る大竹家に残る二人。

「・・・はあ、なんとか終わった。俊さん、大丈夫？」

「おう、一応な。それにしても・・・どこに行ったんじゃない？」

ぐったりと寝転ぶ俊と成仁、手伝わずに消えていった友を思い忌々しげに呟く。

「ああ関さん？ホント、なんかケンカしてたから怒って帰っちゃったのかな？」

「そうかもなあ、あいつは前からそうや。ケンカばっかや」

思い起こすのはそんなことから、ケンカでしかあいつのこと知らんへん。

オレらはそんなもんやそれでしかわかりあえんこともある。

あいつの性格もわかっとなるがはじめのことはわからん、そこまで嫌われるやつでもないのと思うが・・・

「あいつ、はじめになにしたんやろな。こんな時にケンカしててほしくないよなあ幸・・・薄情なやつや」

「でもなんだか深刻だったよ・・・姉ちゃんが引き合わせたのかもな。世の中狭い」

偶然だとしても、それは小さな奇跡のように思えて姉を見つめ笑う成仁。

どうせならあの人たち仲直りさせてくれるといい・・・きっと姉ちゃんの世話焼き直ってないと思うから。

外、バイクの音が鳴り響く。顔を見合わせる俊と成仁。

「あいつ、戻ってきたみたいやな。ちよう絞めたるか成仁」

「そうだね、二人分手伝ってって言ったのに。お客さんに対して失礼か？」

「ええ、ええ。約束守らんのはあいつが悪いんやから。言っただれ、どんだん」

玄関先、誰かと話してる声が聞こえた、誰かと一緒か？またはじめと言いつ合ってるんやないやろな。

早足で玄関を開けようとした時、顔を覗かせるのは昭次、その後ろに義斗が立っていた。

「あつ、昭次くん・・・大丈夫？はじめさんは？」

さっきの今、お騒ぎして帰って行ったはじめたちを思い出し神妙に聞く成仁。

「・・・後で来るよ、さっきはごめんなさい。せつかく手伝いに来たのにすぐ帰っちゃって」

「それはいいんだけど・・・大丈夫だったの、先輩は」

「・・・大丈夫だと思うけど、知らない・・・それより、お線香上げさせてもらっていいかな・・・」

「あつ、どうぞ。入って・・・ありがとう」

小さく笑い首を振る、元氣なく幸の眠っている部屋に向かう昭次。心配げに見つめてる義斗に気づき、交互に二人を見つめる俊・・・なんで今度は二人で来てるんや、まったく理解に苦しむわ。

「・・・おまえ、どこ行つてやがった。一言言つてけや」

「悪い。ちょおへこんでたんでな・・・」

明らかに、元氣のない声・・・また、なにかあつたようだ。

「・・・で、どうなつたんじゃそれは」

「どうもならん・・・もつと最悪かもしれんわ、昭次の記憶が戻るかも・・・しれん」

「・・・記憶」

昭次のほづを見る、そういえば小さい頃の記憶がないと聞いていた。

「戻るなら、いいことやないんか。どこが悪いんじゃ」

「悪いんじゃ・・・最悪にな」

昭次を見つめて辛そうな義斗に、踏み込めない何かを感じなにも聞けなくなる俊。

「・・・とにかく、上げれ」

無言のまま進む義斗の今までに見たことのない姿に、小さくため息をつく俊だった。

中に入ると昭次と成仁が並んで幸の前に座っていた、なんだか落ち着く。

「オレ、なにしたらいいのかな・・・なにか手伝える？」

「一緒にいてくれたらそれで。姉ちゃんもうれしいと思うから・・・友達とか知らないから、知らせもできなくて・・・友達作らないようにしてみたいだし」

聞こえた会話に俊が顔を覗かせる。

「オレも、あいつのダチ・・・会ったことないわ。そんなふう思ったんか・・・自分のことはわかってたいうことが、アホが・・・人のことばっか考えて」

成仁の告げた初めて知る出来事に自分の至らなさを感じて腹をたて

る俊。

「ほんならおまえのダチ呼んだらええ、おまえの奥さんの式なんやからおかしいやろ？」

ふいに関が呟く。

あ？オレのダチって、会ったこともないのにそんなの迷惑やろ。

「さみしいのより楽しいほうが姉ちゃんもうれしいと思う・・・俊さん、呼んでよ」

「・・・おまえわかって言ってるのか、こんな席に呼べるやつらじゃないわ・・・」

こちらには知り合いなどなく、昔の仲間しかいない・・・成仁は、実態を知らないから。

余計なこといいやがって関のやつ。

「大丈夫、俊さんの友達だろ？悪い人なんかいないよ。それに姉ちゃんも会いたいよきつと」

「連絡先知らん・・・」

呼びたくなくて嘘をつく俊。

「ならオレが呼んだるわ。それくらいならオレにもできるで、まかせとけ」

意気揚々と電話に向かう義斗、あわてて止めに走る俊。

「あほっ、やめんかい。呼ばんでええっ！」

「なんでや、ええやろが。仲間に教えてもやらんのか結婚したこと。連絡とってへんのやろ？こんな大事な時にくらい呼んだれや」

「迷惑やろ、幸たちにも・・・あいつらにも。こんな時だけ・・・」

「迷惑なんて誰も思わんわつ。わからんのか、あいつら待ってるやんけおまえのこと。不拔けとるんや気合いれたれ」

引き止める手から力が抜ける、その隙に電話をかけてる義斗。義斗の言葉に、なにか感じたのか俊はもう止めることはなかった、じつとその様子を見つめる。

あいつら・・オレのことなんてもう忘れてるんとちゃうんか・・幸、悪いうるさいのがくるかもしれんが、そいつらもツレやからあいさつくらいさせたってな・・

なにやら楽しそうに話し、電話を切るとどこか不敵に笑ってる・・なんや。

「今すぐ連れてくつてよ、ありやオレのほうも来るかもしれん。よろしく頼むわ」

びつくりして見開く瞳、無意識に掴みかかる手。

「なっ・・最悪や、おまえらんとこと一緒に来る？おとなししとるわけない、どうするんや」

「大丈夫や、そこまで常識なくはない。おまえとオレが止めればええことやろ、腹きめえ」

大きくため息をついた・・確かに、もう腹すえるしかないかもしれん。

「なにでかい声出してんだよ・・」

玄関から呼ぶ声が、振り返るとはじめがいた。

「・・あつ、はじめ。いらっしやい・・入ってくれや」

「おまえら・・騒ぐなよ」

じろりと睨む瞳は、関へと・・やっぱ、まだあのままか。

「わかつとるわ」

「・・・すみません。こいつが悪いんで、許したって・・・ついた」
義斗に蹴られる俊、蹴り返す俊・・・ケン力になって行く。

「やめろ、まったく。俊まで一緒になつてなにやってんだ」

「ええんやこれで、神崎はこうで普通なんやから。気がまぎれるいうこと、わからんのかまじめくんには」

「・・・誰が、なんだと？」

今度は義斗とはじめが睨み合う。

「あ、ああ。はじめ、おまえも一緒やぞそれ。ほらもう上がれや。
あつ、忍もおったんか。なにしてんの？まあええわ、入れ入れ」

義斗とはじめを引き剥がし奥へと連れて行く俊。

目の前で繰り広げられた戦いに忍も恐る恐るといった感じでついて入っていく。

「・・・なにやってんのお。みんなして、うるさいなあ」

「ホントだよ、幸さんゆつくり眠れないじゃん。静かにしろよ兄ちゃんも」

ぞろぞろと入ってくる三人に睨んでる弟たち。

「・・・オレは静かにしてた。うるさいのはこいつだけ」

はじめが指を差すのは、もちろん義斗。

「ああ？」

またもや、始まるにらみ合い。

「もうっ。二人ともおとなしくしなよ。世話のやける兄ちゃんたちだなあ」

さらっと流されそうな言葉、反応したのは・・・はじめと義斗と、忍。
昭次はなんでもないと言うように笑っている、ハラハラしてる忍・・・

オレホントに場違いかも。

「ホント世話のやける兄ちゃんたちだよな昭次くん、教育し直すといいよついでに義斗さんも」

「言うやないけ成仁くんよ。まあ昭次ならまともになりそうだがな」

「わかった、教育してあげるから座ってください。俊さんもどう？」

「頼もうやないか？」

成仁と昭次の前にどかりと座る俊、三人で一緒に吹き出し大笑い。

「調子にのって・・・昭次のやつ。少し明るなったか・・・」

「・・・よかったで、ホンマ」

ひとり言のように呟くはじめにつられたように義斗が口を挟む、思わず視線がぶつかり睨み合う。

「おまえ、ちゃんとしろよ。昭次のこと苦しめたら許さねえぞ」

「言われんでもわかつとるわっ、いちいちうるさいでっつ」

「あーまたケンカしてる、いいかげんにしないと追い出すよ。ねえ俊さん」

「そうやで、ええかげんに仲良くせえよ。ケンカなんてガキやな」
さつきまでケンカしていた俊に言われ、思わず顔を見合わせたため息をつく。

「おまえに言われたないわあ」

「おまえに言われたくない」

重なる二人の声に、びつくりしてる昭次。

俊と成仁は大笑い。

「・・・あんたらしい大人が、しゃんとしてくれよ。オレらのが大人

だよな昭次くん」

「昭次、成仁おお、おちよくるのもいいかげんにしとけよお」

「うわっ、キレるよ。逃げる成くんっ」

「まずいな、後は任せた俊さん」

バタバタと立ちあがり、逃げていく二人。

「コラっっ、幸さんの近くで暴れるんじゃないっ！」

「・・・どっちがガキやいうんじゃない、たいした大人やで」

「アホばっかじゃな・・・」

義斗の言葉にまた始まりそう・・・一人あきれて見てるのは井川忍。

「・・・いいのかなぁこれで。オレの聞いた話はどうなったんだろう・・・

・空耳？聞き間違い？」

それぞれが胸に運命を抱え、事態は大きく動き出す・・・大竹幸の葬儀の後、導きのように進んでく。

エピソード2

9・再会（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないまま兄はじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。義斗に会い段々と思いついてきている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。姉を亡くし俊と二人で悲しみを抱えていく。

「大竹幸」成仁の姉、病気をわずらい亡くなる。俊と夫婦となった。「神崎俊」幸と念願の結婚。母を幸と同じ病気で亡くしている。成

仁と兄弟となった。

「井川忍」昭次の同級生、俊とは家が隣同士で慕っている。

「相田武・武威直人」昭次の親友。

「関義斗」俊のケンカ仲間、昭次とはじめの兄弟。小さい頃、昭次を連れ去る事件を起こしはじめとは疎遠となっていた。

「横井良」俊と昔暴走族のチームで一緒だった仲間。今も強さに慕っている。ケンカ早い。

「稲葉聡」俊の仲間。暴れる俊と横井のストッパー役だった。ケンカは強いがやさしい人。

「真田幸司」義斗の族仲間。冷静で落ち着いた性格。

「伊藤和弘」真田と共に義斗を支える仲間。ケンカが大好きで明るい人。

大竹幸を送るため、火葬の扉の前で立ち尽くす成仁と俊。

「・・・行っちゃった」

小さく呟く成仁の声、静まる部屋に響く。

「・・・そうじゃな」

受け取るように俊も呟く。

「これから・・・オレどうしよう・・・」

「そんな心配はいらへん・・・今までどおり、おればええ」

小さく、しかし力強く語る俊、その手の中には忘れ形見の指輪が光っていた。

「これはおまえが持っていてくれや・・・幸もそれを望んでる」

涙が小さく光る、頷き受け取ると・・・小指に嵌め、握り締めた。

火葬場の駐車場にバイクを並べて立ち上る煙を見つめている義斗たち。

複雑な表情で並ぶのは、電話で真相を知った地元の仲間。

「神崎さん・・・えらいことになったんですね」

どこか悲しげに呟くのは俊と一緒に走っていた側近、稲葉聡。

「オレも知らなかったわ、こっち来て初めて聞いた。薄情すぎや」
タバコをふかしながら大きくため息をつくように煙を吐くと、小さく呟く義斗。

それに続くように怒りをあらわに大きな声が響く。

「そりやわしらのセリフや、なんで敵のおまえに教えられなあかん・
まったく俊のやろう」

義斗を睨みながら、怒りをぶつける先がわからず拳を握り締める横井良。

それを沈めるように肩を叩く稲葉、俊を支えていた二人の親友。

「・・俊さんも大変やったんよ。母親亡くして、そのあとあの人の看病とかあったんじゃないんか。オレらと遊んどる暇なかったんやろ・・」

なだめられるが反発するようにその手を払う横井、気持ちはわかると苦笑いの稲葉。

「二、三回来てたんだがな、彼女に会ったことなかった。ずっと病院やったんやろ・・」

横井の荒れにも動じず落ち着いた様子の関に、何かを感じ取り小さくため息をつく稲葉。

隣で横井は小さく舌を鳴らしていた。

「オレらは来てもよかったんか義斗・・なんや人少ないからビビるで」

神崎とは敵対していた関の親友、伊藤和弘。

少しうるたえている伊藤の隣で義斗と同じくらい落ち着いて様子を伺っているもう一人の友、真田幸司。

「ええんじゃ・・騒がしいほうが。神崎もあいつらも、気が紛れてええ」

じつとどこかを見つめ呟く義斗、その先に数人の人影・・知らない顔だとぼんやりと真田は眺めた。

しばらくすると建物から出てくる人影、俊たちだった。

義人の視線につられるように4人が視線を向けると、それに気づく俊がうつむきながら足を向けた。

「・・・おまえら、久しぶりや、な。悪い、来てもって・・・」

稲葉と横井の前に立つと小さく笑う俊。

その作った笑いに抑えていたものが溢れそうになる横井を稲葉が押さえるように腕を掴む。

ふうつと息を吐き、それでも抑えられず叫ぶように返す横井の声。

「なに言ってるんじゃ、もつと早く連絡せんかや。急で驚いたわ」

「・・・すまん。連絡もせんようになってたし・・・あかんやろ、こんな時だけ」

プチンと切れる理性、俊の胸倉を勢いよく掴む横井・・・今度は止めに入らなかった。

「本気で言つとんやったら、覚悟せえよ。わしらそんな小さい繋がりがったんかあ、いつもみたいにドンと構えとけや」

「・・・良。オレはもうおまえらの上やない・・・勝手なこと言えへんやろが・・・」

握った拳は俊の頬へとぶつけられた・・・殴られる俊にびっくりして成仁が駆け寄る。

「なにしてんだよ、おまえっ」

ケンカ早い成仁が戦闘体勢で俊をかばうように前に立つと、睨みつけてる横井と視線がぶつかり合う。

あまりかわりたくないと言っていていたはじめ。

俊たちが合流した辺りから集団に近づき一歩引いて昭次と様子を見ていたが、

今にも手が出そうならみ合う二人の間へ飛び込む。

「おいっ！なにやってだ。時と場所考えろよっ」

突然入ってくる見知らぬやつにさらに機嫌を悪くする横井。

「なんやおまえらあ、関係ないやつが入ってくるんやないわ。わしは俊と話してんじや、邪魔やあ」

挑んでくる瞳が気に障ったのか突き飛ばされるのは成仁。

「おいっ」

はじめが睨みつけ飛び出そうとすると止める手は俊のもの、成仁を受け止めると後ろから怖い顔をして立ち上がる。

「・・・オレになにしようがかまわんが、こいつらに手出しするんやないわ」

「神崎さん・・・変わってへんのお」

おだやかに割って入るのは稲葉、二人を止めるのはいつもの役目。

「自分のことより人なんよね、神崎さんは。良さんもわかってるやろ、やめとけて」

「こいつが悪いんやろが、遠慮なんかしよって・・・上とか関係ないやろ、おまえはわしらのことダチや思つとらんのか」

「そんなこと聞かなきゃわかんねえのかよ。迷惑だと思ったから連絡しなかつたんだよっ」

突き飛ばされてそのままにいる成仁ではなく、横井の言葉に反論し怒鳴りつける。

「・・・成仁、いいから」

今にも飛び掛りそうな成仁を抱え、やんわりと止める俊。

俊のあまり見ない表情に首を傾げる横井と稲葉。

「俊、こいつなんじゃさつきから。弟か？そんなんおるの聞いたことないが」

少し間をあけ、俊が口を開くと、

「こいつは、幸のおとう・・・」

「弟だつ。オレは俊さんの弟だよ、悪いか」

言い終わる前に成仁が大きな声を出しさえぎった。

「なにムキになってんねんこいつは」

ぼそりと呟く横井に蹴りを入れながら稲葉が成仁に笑いかけた。

「神崎さん弟おったんですね、はじめまして稲葉聡です。この人は横井良、機嫌悪いんはさみしかったからやで。気にしんでな」

「な、そんなやないわい。アホっ」

稲葉の言葉に緩和していく雰囲気、はじめはいぶかしげに見渡し小さくため息をつく。

「・・・俊も、そっちもあとでちゃんと話しろよ。今は幸さんのこと送る時だろ？もう終わる頃だ・・・迎えに行つてこい。オレたちはここで待つてゐるから」

火葬場の煙を見上げて「悪い」と呟き背を向ける俊、じつと視線をぶつけていた成仁もおとなしく後を追う。

残された場にはどこかおかしい空気が流れていた・・・

大きなため息が静まった空気に響く。

「おとなしくしとけいうたよなあ。真田あ、なんであいつ連れてきたんや」

義斗が、ふてくされて背中を向けてる横井を見ながら呟く。

「知らんわそんなん。けどこいつでしょ来るなら。神崎の一番近くにおるやつやし」

そうだろうけど・・・おとなしくしとるわけないわな、この状況で。

義斗はまた小さくため息をつく。

「誰も文句言えへんからなあ、良が行くいうたら。勘弁してや、オレが押えるためについてきたんやし」

義斗たちとも顔見知りで関係性を知っていた横井と稲葉に、納得するほかない状態。

「みんな俊さんの友達なんですよ、来てくれてありがとう。俊さんも成仁くんも大変だったから、オレもうれしいです」
ふいに笑顔で間に入ってくる昭次の言葉に、固まるみんな。

あわててその前に身体を乗り出すのは、義斗。

「ちょ、昭ちゃん出てきたらあかんって」

自分たちとは明らかに雰囲気の違い昭次の姿に、視線は集中していた。

「誰やこの子、神崎さんまだ弟おったんか？」

さっきの子とはまた違うタイプやなと首を傾げながら呟く稲葉、その声に反応して顔を上げる昭次にたじろぐ面々。

「違いますよ、オレは義斗さんのほう。はじめまして加賀昭次です」
頭を下げている昭次に、顔を見合わせる真田と伊藤・・・義斗は背を向けてタバコをふかしていた。

「こっちは俊さんの隣人の忍くん、でこっちが兄のはじめです。ちよ、どこ行くのあいさつしてよ」

逃げるように離れていくはじめの腕を引く昭次、ため息について留まるはじめと、後ろに隠れたままの忍。

「・・・どうも、加賀です。今日は急にすいませんでした、むちな誘いを」

大人気なく逃げてる場合でもないとしっかりと挨拶をかわすはじめに、真田が疑問をぶつけた。

「義の弟・・・と、その兄。いうことは義とも兄弟？・・・おまえ兄弟おらん言うてなかったか」

詰め寄る真田に黙ったままの義斗。

なにかあると感じた伊藤がしつこく聞こうとしてる真田を止めた。

「まあええやんか、義斗は義斗なんやし。兄弟くらいおるやろ」

「別に隠すことちゃうやん」

「・・・べつに騙してたと違っし、ホンマに関係なかったんやオレには・・・それだけのことや」

視線を外しながら呟く義斗。

「・・・関係ない、って・・・」

「昭次・・・いいから」

義斗の言葉に疑問を感じ、昭次が言葉を挟もうとしたが・・・はじめが止める。

「・・・義斗さん、紹介してよ」

機嫌悪気に呟く昭次にはつ悪そうに顔を向ける義斗、その様子に広島組四人がめずらしそうに見て笑う。

「こっちが伊藤で、こっちが真田。ええぞ覚えんでも」

伊藤に蹴られる義斗、負けじと蹴り返しじゃれてる二人を他所に真田が乗り出す。

「なんちゅう紹介や、失礼な。オレは、透。真田透。義斗とは一緒にチームなんやで、知ってるか？こいつ族の頭はってるんやで」
伊藤とケンカしていた義斗があわてて真田を突き飛ばす。

「おまえっ、余計なこと言うんやない」

「頭つて・・・え？それつて、すごくない？」
おもわず見渡すみんなの姿、一見普通の人なんだけと言われてみれば。

それにしても義斗さんがそんなことしてる人だったとは、言われれば納得。

「おまえそんなことやってんの？どおりでガラ悪いわけだ」
はじめがポツリと呟く、それに反応するのは横井。

「兄ちゃん、ガラ悪いいうんはわしらのことか？失礼やないか」

「ああ悪い。あんたたちのことじゃなくて、こいつ・・・義斗のことな。もしかして、俊もそうなのか？」

「神崎さんはうちのアタマしてました、もう二年くらい前になるけど」

「マジで・・・」

この仲間を見れば、わかりそうなものだがちよつとそこまでには見えなかったから。

まさか族の頭をやっているとは、思いもよらなかった。

「なんや、文句でもありそうやなあ兄ちゃん」

はじめの納得いかないという表情になにか気を悪くしたのか横井が口を挟む。

「べつに、義斗はわけけど俊がなんでって思ったただだ。あの温厚

なやつが」

ふっと噴出す昔を知っている人たち。

「温厚って、昔はえらい悪かったんよ神崎さん。あばれまくりやつたで」

「暴れたら止められんかったわ、関くらいや俊とはれるのは」

以前の俊を思い出し誇らしげに笑ってる稲葉と横井、ふいに笑顔を止める。

「俊、変わったよな・・・母親の病気に気づいて」

「親子二人やったからな、それどころじゃなかったしな」

敵対する義斗も事情を知っていた、自然と絡まないようになり衝突も止み・・・

「俊が引つ越して腑抜けやったよなあうちもこっちも。関なんぞケンカしにこっち来てるくらいや」

ふいに横井から出る自分の名に、睨みを利かす義斗。

「うるさいわ、おまえらが相手にならへんからやるが」

「なにいつてんだあ、なんなら今から相手んなったるかあ」

火花散る二人の間に稲葉が割って「また怒られるで、兄ちゃんに」
ちらりと見た先には、はじめが睨んでいた。

そんな空気をかき消すように高校生二人の会話。

「二人ともそんなに強かったんだ。俊さんもちよつと怖いところあったよね、忍くん」

「うん。オレ二人のケンカ見たことあるから、怖かったよ。そうか義斗さん俊兄のこと気になって様子見に来てたんだあの時も」

天然の二人に小さく笑うみんな、義斗は心外だとばかりにほえる。
「ア、アホ言いなや。なんでオレが気になんかするんや、うつぶん
晴らしに来てただけや」

「こんなとこまで？ええやんけ、素直に言やあ」

わかってんだからと義斗をからかう真田。

うるせえと睨む義斗、そんなやりとりに昭次が小さく笑う。

ばつ悪そうにタバコに火をつけた。

「ホンマやで。一人で行きよって、わしらも連れてけや。そしたら
もつと早く知れたのに」

伊藤が呟き視線をぶつけるのは、はじめ。

「なあ義斗の兄ちゃん、あんた強そうやなあ、勝負せんか？」

構える伊藤の頭をすかさず殴る義斗。

「いった、なんなんよ」

「やめとけや、怒られるで神崎に。大事なお友達さんなんやから」
とげのある言い方の義斗を睨むはじめ。

睨みあう二人の空気の悪さに気づくのは、氣遣いのうまい稲葉。

「さつきから、ピリピリきてんでこの辺。仲ようせんとあかんよ兄
弟は」

なんでオレたちが、と聞こえそうなほど視線を外す二人に苦笑いの
人々。

空気の読めなかった横井が地雷を踏んだ。

「あつわかった、俊やろ？一緒のダチに偶然会って取り合ってたんと
違うんか、そういうんやきもち言っくんやで」

稲葉は思わず後づさっていた・横井を睨む義斗とはじめの視線に
耐え切れずに。

「・・・はあ、ホンマ兄弟やわ。そつくりやで淒み方・・・」

そつくりと言われて驚き顔を合わせる二人、すぐに視線を外しはじめが輪から外れ歩いていく。

笑いながらホンマ似てるわあと真田。

「凶星指されて怒るんも同じや。神崎は一人しかおらんぞ仲良くせえや」

「仲良くしてどうすんや。取り合ってへん」

「素直じゃないからなあんたは。あの兄ちゃんもそうらしい。神崎おらんくてよかったで、また暴れられるとこや」

伊藤はそんな二人を見ながらため息をついた。

オレらはわかってるし、ケンカしててもあきれるくらい気合ってたおまえら。

そこに入ってくるやつが嫌なんも・・・兄いぶんが余計になのかもしれん。

・・・それにしても、空気悪すぎんかあいつら・・・この子だけなんか違うよなあ。

昭次のなごやかな空気に首を傾げる伊藤だった。

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないまま兄はじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。義斗に会い段々と思いついてきている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。姉を亡くし俊と二人で悲しみを抱えていく。

「大竹幸」成仁の姉、病気をわずらい亡くなる。俊と夫婦となった。「神崎俊」幸と念願の結婚。母を幸と同じ病気で亡くしている。成

仁と兄弟となった。

「井川忍」昭次の同級生、俊とは家が隣同士で慕っている。

「相田武・武威直人」昭次の親友。

「関義斗」俊のケンカ仲間、昭次とはじめの兄弟。小さい頃、昭次を連れ去る事件を起こしはじめとは疎遠となっていた。

「横井良」俊と昔暴走族のチームで一緒だった仲間。今も強さに慕っている。ケンカ早い。

「稲葉聡」俊の仲間。暴れる俊と横井のストッパー役だった。ケンカは強いがやさしい人。

「真田幸司」義斗の族仲間。冷静で落ち着いた性格。

「伊藤和弘」真田と共に義斗を支える仲間。ケンカが大好きで明るい人。

俊と義斗の昔なじみに会い、二人のことを聞きうれしくて会話に入っていく昭次。

義斗との、微妙な関係だということは・・・頭になかった。

「義斗さんダメだよ。勝てないって、幸さんと成仁くんには。兄ちゃんだって無理」

悪びれもなく思ったことを言う昭次に、小さくため息の義斗。

「アホか、おまえまで・・・勝てんで結構、兄貴は知らんがオレはいらん。おまえがへんなこと言うからやで」

言いだしっぺの横井が、殴られそうになるのをよけながら不思議そうに昭次を見る。

「昭次くん、言ったか？君はホンマこの人の弟なんか？信じられへん」

思わず見比べて頷いてるみんな。

弟・・・本当にそうかと問われたらオレにはなんの返答もできない・・・じつと義斗を見つめる昭次。

「・・・そう、ですよ。義斗さん・・・」

鋭くぶつけてくる視線をそらせないでいる義斗・・・そうだと答えた自分はいるのに、言葉が出てこない。

そんな二人にさっきから感じる違和感、少し後ろから観察するように見ていた伊藤。

兄弟の空気ではない気がする・・・なにかありそうやな、兄ともなん

だかおかしかった・。
たしか苗字が違ったし・。

あまり触れてはいけない気がする」と話題を変えようと考えていたところ・。

「なんや、よそよそしい。兄ちゃんのこと、さんづけなんか？」

思ったことをすぐに口にする空気の読めない真田、瞬間その頭をはたく伊藤。

「あ、アホっ！」

「いった・。なんじゃあ」

「込み入ったこと言わんでもええ。ええやんけ勝手やろがどう呼ばうと」

「仲よさそうやったからおかしいと思っただけやろ、いいやんけ聞くくらい」

違和感、そうやこの二人に関してはいい空気しかなかった・。なのによそよそしい、まるで知り合って間もないような・。気を使い合ってるふうで。

「・。そうだね、へんだよね。」

小さく呟く昭次、それを切なさに見つめてる兄、義斗」

「・。昭、次」

フォローを入れようにも、なんて言っただけいいのかもわからない。

「兄ちゃんでも、義兄でも勝手に呼んだらええやんけ。おかしいで初めて会ったみたいやわ自分ら」

昭次の遠慮によかれと口を挟む真田の言葉に、びくつと肩を震わせる昭次。

義斗は大きいため息をついた・。いらんことばっか言いいやがる。

なんともいえない空気が流れる中、俊たちが遺骨を胸に輪に戻る。静まつてるみんなに首を傾げる俊。

「待たせて悪い。なに・・どうしたんや、昭次くん」
輪の中うつむく昭次の様子に駆け寄る成仁と俊。

「・・昭次くん気分でも悪いのか？顔色悪いよ」

状況的に囲んでる人々を睨みつける俊。

「おまえら、なに泣かせとんじゃ。許さん言つたやろが・・」

「待て神崎。昭次も大丈夫やな？悪気はないんやこいつも、許してやつて」

大事にしたくなく義斗が昭次を覗き込み、ぽんと頭を撫でた。
ちらりと視線を上げる昭次、悔しそうに唇をかみ締めながら小さく頷いた。

それでも浮上できない昭次は小さく頭を下げるとその場を離れ走つてく。

「加賀くんっ、ちょ、待つて。オレも行く」

昭次の後ろにくつついていた忍、事情を知ってるだけにオタオタするばかりだった。

今は昭次くんについていないと、と追いかける。

「よくわかんねえけどオレも行つて。はじめさんはどこ行つたんだよもう」

俊の心配そうな顔にオレが行くと成仁も後を追った。
残るみんなの表情がどこか沈んでいる気がした・・ホントにいじめたとかじゃないよなあ。

「・・・なにがあつたんや、昭次くん最近様子おかしいんやから、頼むでホンマ」

「わかつとるわ・・・原因は、オレたちなんや」
ふうと大きくため息をつき座り込み義斗。

「わし、なんか悪いこと言つたんかな」

自分の言葉の威力に気づいてなく首を傾げてる真田、伊藤はあきれたようにため息。

「だから悪い言つたよな、まったく始末に終えんわ」

さっきの様子を分析するようになりながら稲葉が話し出す。

「なんや、見とると・・・あの子、関さんが兄ちゃんやって、知らんかったんとちがう?」

「・・・なにそれ。関が兄ちゃんって・・・もしかして、昭次くんのことか?」

思いもよらない話に怪訝に稲葉のほうを見る俊、頷く稲葉が義斗に詰め寄る。

「自分で言つてたで、なあ関さん。そうなんじゃろ?」

「稲葉っ! ちよう、黙ってくれや」

怒鳴る義斗、さえぎられる言葉は俊に本当のことなのだと、分かった。

「・・・おまえら、三人・・・兄弟、やつたんか」

驚きを隠せないままに呟く俊、義斗は地面をたたきつけるように声を吐き出す。

「ちっ・・・最悪やわ。人のことはほっとけや、おまえらも」

「・・・悪い、あの子・・・傷つけたか・・・」

ことの重大さに気づき頭をかきむしる真田。

「そんなやわやわない・・・ええから、もう催促はなしだ。わかったな」
頷くみんなの中、俊は一人納得できない表情で見つめていた。

火葬場のロビーで一人タバコをふかしているはじめ。

さっきのやり取りに小さくため息をつく。

やきもち・・・そんなこと思ってたけど、もしかしたら本心そうかもしれない。

俊のことわかった気でいたけど、あいつのが付き合いは長い・・・どこかで張り合ってた。

俊は強いんだ思ってたより、心も身体も・・・オレも見習わないと、昭次のことも義斗のこともしっかり伝えてやらないといけないから・・・昭次の気持ちも聞けるといいと思う、本物の気持ちを。

「あいつら、いいかげん詮索しすぎなんだよ。まあ義斗が止めない訳ないけど」

オレも行くか、気合を入れてタバコをもみ消し外へ視線を向ける。いつまでも、逃げてはいられないから。

逃げるように輪から抜けた昭次たち、木陰のベンチでしばし沈黙。
沈黙。

「なにがあつたんだよ、さっき。忍くん見てたんだろ、教えるよ」
痺れを切らす成仁が小さく忍に呟く。

「・・・オレからは言えないよ、加賀くんに聞いて」

「聞けねえから聞いてんだよ。ちよつとこつち来い」

考え込んでる昭次を気にしながら腕を引き少し離れた場所へ忍を引きずる。

「あいつらになんかされたのか？」

じつと見つめる真剣な表情に心配が見えて観念する忍。

「されたっていうか・・加賀くんが義斗さんのことさんつけで呼んでるって、それがへんだって言われて・・」

「は？なんで。義斗さんでなにが悪いんだよ、誰が言ったんだそんなこと」

今にも駆け出しそうな成仁の手を掴み止める忍。

「待ってって。誰が言ったとか忘れたけど、自分の兄にさんづけはおかしいって疑問に思ったただけだろうから」

入ってくる言葉に一瞬混乱する頭、なんか違うかないか・・今の。

首を傾げる成仁が呟く。

「・・なに？今義斗さんと昭次くんの話だよな・・」

「うん」

「兄って、義斗さんがってことか？どうなってんだよ」

「知らないよオレに言われても、声大きいって」

あまりの驚きに昭次に気を使わずにパニくる成仁をあわてて押さえる忍。

「・・ちょっと待て、頭が混乱してる。」

義斗さんが昭次くんの兄だと・・そうになると、はじめさんと義斗さんは兄弟ということか？

そうとも限らないけど・・義斗さんの来た時のはじめさんの慌てよう、繋がる気した。

考え込む成仁の肩を叩く手、振り返ると昭次が立っていた。

「・・ホントだよ、兄ちゃんなんだって、義斗さんも」

動揺を隠せず口に出る言葉は、昭次の気持ちを考えずぶつける疑問。
「けど・・はじめさんにもう一人弟がいるなんて聞いたことない。
なんで隠す必要があるんだよ、それになんであんな仲悪いんだよ・・」

質問攻めの成仁を押える忍。

「やめなよ、昭次くんだってそのことで頭いっぱいなんだから。知
ったばかりなんだから」

「・・え？」

詰め寄る身体を押さえる成仁、そつと昭次を伺うとさみしそうに呟く。

「オレも聞いたばっかなんだよね、兄って・・詳しく知らない、覚えてない頃の話だから」

頭を押える成仁・・勢いよく頭を下げた。

「ごめん・・オレまたやった。そうだよな、覚えてないんだ昭次くん・・だから、言えなかったあの人たちも」

昭次くんのおかしいのは知ってたはずなのに、あおってどうすんだよ・・

以前にも無神経なことと言って沈ませてることを思い出し自分が嫌になった。

落ちてく成仁を大丈夫だと小さく笑う昭次。

「・・なんかね、ヨシくと話してるといろいろ一瞬だけ、思い出せるよ」

「よし、くん？」

さらっと呼ばれた名に、誰のことが一瞬わからず聞き返す二人。
少し照れながら昭次が笑う。

「そうヨシくん。思い出した一つ、小さい時そうやって呼んでたみ

たい。義斗さんにそう呼んでみたらびつくりしてたけど」

「あれでよくんなんて呼ばれたら、ちょっと嫌かも。じゃあもつと義斗さんと話したらいいじゃん、思い出せるんだろ？」

「ちよつとあせりすぎ成仁さん。義斗さんのほうがなんか話したくないみたいだから・・・」

何度目かの制止に小さくなる成仁を笑いながらポツリと呟く声。

「・・・話してくれるって。兄ちゃん、はじめのほうね。みんな話してくれるって。幸さんのことが終わったら・・・そうだよ、今は幸さんのことだけ考えてるって決めたのに、ごめんね成くん。戻ろう」

一瞬忘れてしまっていたことを反省し、あまり大丈夫じゃない表情の昭次がみんなのところへ走ってく・・・あまり納得のいつてない成仁、行ってしまう後ろ姿を見つめた。

姉ちゃんのこと考えてくれるのはうれしいんだけど・・・昭次くん顔色悪すぎ。

なにをそんな隠してんだか、はじめさんたちは・・・ちゃんと昭次くんのこと見てるのか？

思い出したら困ることかもしれないけど・・・今の昭次くんより守らないといけないことなのか？

ホント納得いかない・・・このままじゃはじめさんたちのこと問い詰めそう。

暴走しそうな自分を今は抑えた、今はオレにも乗り越えることがあるのだから

駐車場の一角、ずるずると引っ張られるように義斗を捕まえ輪から

抜ける俊、着いてくるなとみんなに一括し。

「なんや神崎。催促なし言うたよな」

「アホか、オレははじめも昭ちゃんも大事なんや。関、おまえも相
当や・・聞く権利はある思う」

「なんもない、話すことなんて」

腕を振り払い背を向ける義斗、なにもないなんてよく言うわ。

「おまえとはじめのケンカも、昭ちゃんに関係あるんやろ」

無言の義斗、凶星だと黙ってしまうのがこいつの癖・・やっぱりか。

「おまえらっていつから会ってへんの？相当前だよなあ、オレがお
まえに向こうで会ったの中学入る前か・・その間に、会ってないな、
この様子じゃ」

観念したのか小さく話し出す、きつと誰かに話したかったのだろう・

・昭次くんのことなんかすごく気にしてるふうだからなこいつ。

「最後に昭次に会ったんは・・小学校の頃やった、話かけようと思
ったら逃げられた。オレのこと怖なったんやって、ずっと思ってた・
・まさか記憶がないなんて」

「・・おまえ、勘違いしたまま会いにいけんくなってたのか。勇気
出したらよかったのに、こんなたってから・・昭次くんも余計わか
らんくなるわ」

あまり見たことのない顔で、笑う関・・小さくため息をつき見つめ
る俊。

いつもはどこまでも強気なくせに、それほど怖かったってことなの
だろうか・・なにが、と考えるとまたわからなくなる。

昭次くんが関のこと怖くなったってのは、どうしてなのか・・そこ
が問題な気がした。

エピソード2

11・義斗の想い（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないまま兄はじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。義斗に会い段々と思いついてきている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。姉を亡くし俊と二人で悲しみを抱えていく。

「大竹幸」成仁の姉、病気をわずらい亡くなる。俊と夫婦となった。「神崎俊」幸と念願の結婚。母を幸と同じ病気で亡くしている。成

仁と兄弟となった。

「井川忍」昭次の同級生、俊とは家が隣同士で慕っている。

「相田武・武威直人」昭次の親友。

「関義斗」俊のケンカ仲間、昭次とはじめの兄弟。小さい頃、昭次を連れ去る事件を起こしはじめとは疎遠となっていた。

「横井良」俊と昔暴走族のチームで一緒だった仲間。今も強さに慕っている。ケンカ早い。

「稲葉聡」俊の仲間。暴れる俊と横井のストッパー役だった。ケンカは強いがやさしい人。

「真田幸司」義斗の族仲間。冷静で落ち着いた性格。

「伊藤和弘」真田と共に義斗を支える仲間。ケンカが大好きで明るい人。

エピソード2

11・義斗の想い

・・なあ幸、どうしたらいいんやろな。

俊は空を見上げた、義斗の気持ちの重さを感じていた。

「無理だろ・・」

ふいに後ろから人の気配、ぼーっと考え込んでいた俊と義斗が同時に振り向く。

「オレが、会わせないようにしてたから、どうせ無理だったよ」
いつからいたのか、突然話に入ってくるはじめに驚く二人、言った言葉にも。

「・・会わせん、って。いくらケンカしとったとしてもものそこまでするのか、小学生やるその頃。関係ないやん昭次くんは」
はじめと関のケンカに巻き込まれたとかやったら最低や、思わず睨むとそんなじゃねえと首を振るはじめ。

「小学生だってな、もう十分もの考えられる歳なの。いろいろあんだよこっちにも」

それ以上突っ込むなと言われたようで、俊はおとなしく二人を伺う。
じつと義斗を見つめる視線、大きく息を吐きゆっくりと問いかけるはじめ。

「なあ義斗、おまえどうしたかったんだ・・それだけがオレにはずっとわからなかった・・昭次に全部話す前に、聞かせろよ」

背を向けたまま、呼吸を整えるように肩を揺らす義斗が昭次の走っていった先を眺めながら呟き出す。

「・・・オレは、昭ちゃんとおりたかったただけだ・・・おかんがおらんくなって、一人で・・・おまえも辛かったってわかってる、けどオレの苦しさはわからんやろ・・・親がいて、昭次がおって・・・それを見た、オレの思いなんて・・・」

思い出しながら悔しそうに地面をじつと見つめ吐き出す言葉・・・はじめは冷静にそれを受ける。

「わからない、だから聞いてるんだ。おまえの気持ちもちゃんと知りたいって思ったから。オレたちには終わったことでも、昭次には今からの・・・頼むから聞かせてくれ、理解したうえで話たいんだよ。頼む」

頭を下げるはじめ、それを見てぎゅっと瞼を閉じて考え込む義斗・・・お互い思い出す辛さはわかってることだから。

「・・・オレ、席外すわ。ちゃんと話すんやで」

その空気に俊が応援するように呟くと背中を向けた、それを止める声。

「ええ、神崎も聞いてけ。二人とも昭次に負い目があるんや、あいつのこと頼みたい」

「そうだな・・・話した後、どうなるか想像つかない・・・オレたちが一緒にいいと思うから。こんな時にごめん・・・」

二人に頼られ、気になっているのは本心で断る理由はない。

「なら聞く。こっちは気にするな、幸も世話になったおまえらのことや、許してくれるわ」

お櫃を抱えて笑う俊に小さくお礼をしめすはじめ。

義斗は空を見上げてしばらく黙っていた。

「・・・昭次のこと、家に連れてこうとしてた」

「家？」

「オレの住んでた小さなアパート・・・おかんおらんくなつた後やからもうなかったけど。幸せそうなおまえらを困らそうと思ってたんやろ、ガキの小さないたずらや」

小さく笑う義斗、二人は黙つたまま聞いていた。

「けど・・・いたずらじゃ、すまなくなつた・・・このまま昭次を連れてつてもすぐに戻される、またオレの前から消えてまう。それならいっそ、ここでずっと一緒につて・・・思つたらもう止まらんかった」ぎゅつと瞳を閉じて、小さく震える手を押さえるように拳を握る義斗・・・消え入りそうな声で吐き出した。

「昭次の・・・首、しめてた」

あまりのことに、俊は声もなく固まつた・・・

ウソやろと思つた、が二人の顔はそれが真実だと告げるように辛そうに歪む。

あまりの重い過去・・・そんな状況に追い込まれるて、同情の念が俊を襲う。

「あの頃のおやじは、オレも許せなかつた・・・義斗のこととも全然わかつてなくて、辛いなんて考えもしてなかつただろう・・・義斗の気持ちもわかつてた、けどそれとこれとは別だよな。昭次には関係ない・・・」

わかつてるからこそ、義斗のしたことが許せなくてずっとさけていたはじめ。

思い出しただけで、胸が痛くなる出来事。

「そうや、関係ない。親もなんも関係ない、オレがただ昭と一緒におりたかっただけや・・」

そんなことはわかってると唇をかみ締めて強く言う義斗、自分のしたことが許せないでいる。

「・・昭ちゃん、大丈夫やったん、やな」

締めたとしても思い留まったということなら、恐る恐る俊が問いかけるとはじめが小さく頷く。

「できなかったんだろ、できねえよこいつらすげえ仲良かったんだから。寝てる昭次の横で、自分の首絞めようとしてた・・」

青い顔して、泣きながら震える手でロープ持って・・

横に昭次は倒れてるし、尋常じゃない様子にオレもやばかったなあとはじめは鮮明に蘇るその光景を見つめていた。

「最低やった、ホンマ死にたかった・・見つかつてははじめ兄には思いきり殴られて、それからしばらく記憶なかった・・」

起きた時、誰もいなかったのを覚えている・・病院のベッドの上、廊下からはじめの怒鳴り声が聞こえていた・・オレのこと怒ってると思ってたけど、父を叱っていたのかもしれない。

もう、会えないんだと悟り、静かに泣いていた義斗・・それから道は外れていく。

「オレもな、おまえがてんぱってるのわかってたのに目離したこと後悔してる・・昭次、目覚めて一番におまえの名前呼んでた」

「え・・オレを？」

初めて聞く出来事に、驚きはじめを見つめ固まる義斗。

そうか・・・あの後もオレのこと、嫌いにならずにおってくれたのか。小さくほころぶ頬、黒い記憶を少しだけ浄化できた気がした。

「俊、悪いけどフォロー頼んでいいか・・・話せば記憶戻るかもしれない、もう全部言うから。母さんが死んだ時のことも思い出したら、どうなるかわかんねえから」

もう話すのは心に決めたことで、望んでることだとしても衝撃はあいつにしかわからない・・・戻る記憶が、幸せなものだけならいいのに。

はじめは唇をかみ締めて、俊を見つめる・・・思いを受け取るように、小さく頷いた。

「目の前で昭次かばって死んだってな・・・そっちも、相当きついわ」
義斗は自分のしたことの重みに、さらに重なってしまう辛さと思うともう告げなくてもいいのではとさえ思ってしまう。

「なあ、言ってもいいのか・・・」

独り言のようにぼそりとつぶやく義斗に、同じに小さくつぶやくはじめ。

「もう、決めた。昭次も隠されてるほうが辛いつて・・・もう、知ってもどうにかできる歳だしな、きつと」

しばしの沈黙の後、大きなため息とともにはじめが顔を上げた。

「・・・幸さんごめんな、中断して悪かった。帰ろうか」

「そうだな、昭ちゃんの様子も心配や。早く帰ろう、あーあいつらほっときはなし」

俊があわてて走ってく、その後ろを連なるように歩くはじめと義斗。

二人の胸中は不安で渦巻く・・・態度に出さないようにと落ち着かせるのがやっとだった。
気持ちを隠すのがくせになってる二人なのだが・・・今回は、自信がもてないでいた。

バイクの横、駆けつけてくれた仲間が静かな空間に、時間をもてあましていた。

「みんなどこ行ったんよ、関係者一人もおらんじゃないか」

「しゃあないやろ、いろいろ忙しいんじや葬式は」

痺れを切らし愚痴る伊藤、返すようにつぶやく稲葉の言葉に、それは違うと誰もが思った。

「誰かさんがへんなこというから忙しくなったんちゃうんか」
ぎくりと真田が振るわせる肩、同時に聞こえた先をにらむ。

「横井い、なんか言ったか・・・」

「間違つてへんやろ？」

今にも手が出そうな二人の間に入る伊藤。

「いいかげんにせえよ。真田あ・・・わかってるやろ、大変なんやヨシモ」

チツと舌打ちして下がる真田、バツの悪さに地面に転がる石を蹴り飛ばす。

自分の失言は後悔しているのだ・・・はあ、やっぱオレのせい？

義斗・・・怒ってる、やろか。

サーと血の気が引く、頭の怖さは身にしみている・・・その時、タイミングよく戻ってくる子供たち。

「あれ？俊さんたちはどこ行ったんですか？」

成仁があたりを見渡し知らない顔ばかりに足を止める、後ろから覗く昭次。

「おつ、戻ったか・・昭次くん？さっきはホンマごめんな、いらんこと言った」

ふいに謝られびっくりしてあわてて首を振る昭次。

「なにがですか、謝られることなんかないです・・こっちこそ、ごめんなさい雰囲気悪くしちゃって」

逆に謝られてたじろぐ真田に伊藤が笑う。

「ホンマしつかりしてんなあ。雰囲気悪したんはこのおっさんじゃ、あとあっちにおる人ら。謝らんでもええし」

俊たちが走り寄ってくるのが見える、それを指して微笑む伊藤にっられるように笑う昭次。

「昭次くん、兄ちゃんたちは好きか？」

ふいに稲葉が昭次に問いかける。

「・・好き、です」

「なら信じたれや。辛くても同じくらいそういう時はあっちも辛かったと思うよ。恨んだらあかんぞ」

「そんなこと、思ってない」

「じゃ、大丈夫や。強いなおまえは」

ぽんと頭をなでられて、心配してくれていたのだと知る。

小さく頷いて、微笑む昭次。

・・兄ちゃんたちも、辛かったんだ。

思い出せなくて辛かったオレと同じくらい、思い出してほしいと思ってくれてるのかもしれない・・

「・・強くなるんだ、なに聞いても大丈夫なくらいに。ありがとうございます」

少し元気の出た昭次の笑顔にそこにいるみんなが、なぜだかほっと

していた。

密談を終え、無言で戻ってくる三人。

「あつ。帰ってきた。なにやってたんだよ、俊さんまでいつのまに」

「悪い。待たせてた？じゃあ帰るか、みんなもうちきてくれ。食事用意してるから」

無意識に昭次のほうを見られないでいる俊、成仁がそれに気づき耳元、小さくつぶやく。

「・・・どうしたの、なんか聞いた？はじめさんたちに。なんか変」
少し眉をひそめると笑う俊。

「なんでもない、気のせいやる。昭次くんは、よかったか？」

ちらりと見る昭次は少し顔色もよくなり笑っていた、大丈夫そうやな。

「まあ一応だけど、がんばってるよ。さっき聞いたんだけど・・・義斗さんって」

「オレも、聞いた・・・兄弟だったとはな」

「・・・びっくりした。なんか大変そうだったよ、昭次くん。辛そうだった・・・」

黙り込む俊、事情を知っているだけに今、辛そうだったと聞き言葉が出なかった・・・

オレたちも相当だと思ってたけど・・・あいつらは、もっと大変だったと思う。

「オレなんかに、支えられることじゃない気がする・・・」

小さくつぶやく声を拾う成仁・・・俊の見つめる先に、加賀さんたち

がいた。

たぶん、なにか聞いたのだと思う・・・戻ってきた三人の顔は誰が見てもおかしかった。

兄弟だってだけなら、こんな深刻にならないだろう。

知りたかった、興味本位じゃなく・・・ただ、力になりたいと思うから。

成仁も、見つめた・・・ぎこちなく笑う昭次とはじめ、その横に立つ義斗を。

エピソード2

12・ともしび（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないまま兄はじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。義斗に会い段々と思いついてきている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。姉を亡くし俊と二人で悲しみを抱えていく。

「大竹幸」成仁の姉、病気をわずらい亡くなる。俊と夫婦となった。「神崎俊」幸と念願の結婚。母を幸と同じ病気で亡くしている。成

仁と兄弟となった。

「井川忍」昭次の同級生、俊とは家が隣同士で慕っている。

「相田武・武威直人」昭次の親友。

「関義斗」俊のケンカ仲間、昭次とはじめの兄弟。小さい頃、昭次を連れ去る事件を起こしはじめとは疎遠となっていた。

「横井良」俊と昔暴走族のチームで一緒だった仲間。今も強さに慕っている。ケンカ早い。

「稲葉聡」俊の仲間。暴れる俊と横井のストッパー役だった。ケンカは強いがやさしい人。

「真田幸司」義斗の族仲間。冷静で落ち着いた性格。

「伊藤和弘」真田と共に義斗を支える仲間。ケンカが大好きで明るい人。

火葬場からそれぞれの移動手段で連なるように大竹家へ・

一気に騒がしくなる静まっていた家、明かりが灯るように感じた。

「俊さん、お寿司きたよ。手伝って」

頼んでおいた食事が届き玄関先、成仁の大きな声が響くと駆け寄る昭次。

「オレ持つてく。中運べばいい？」

「昭次くんはいいって。オレ手伝うから」

手持ち無沙汰な昭次がなにかやりたくて動き回る、が足の調子が悪いためかばわれて拗ねてる。

「サンキュ。これ持つてって。もう食ってていいから、みんなにも伝えて」

「わかりました」

張り切ってかけていく忍を眺めたため息をつく昭次。

「何でこんな時にケガしてんだろ、最悪。手伝えもできないよ」

「昭次、じゃま。座つてろよ、これ持つてって」

「邪魔はくない？もう、わかったよ」

本当に邪魔そうなのであきらめて座り込む昭次を笑う声。

「追い出されたんかあ、座つてたらしいのに」

まるで自分の家のようにくつろいでる稲葉たち。

「なんかしたかったんです、邪魔とか言われた。ひどいよなあ」

「兄ちゃんに任せとつたらええ。こっちの人は動こうともせえへん

ぞ」

出された料理をつまみながら義斗がオレに振るなと睨む。

「・・・やりたいやつにやらせときゃええやる。オレは客や」

「義斗が手伝つてたら怖いわ」

「手伝えるかよ、なんもできへんやる義」

横槍の親しい仲間、伊藤と真田の突っ込みに蹴りを入れる義斗。

「やかましい、やらんだけや。それより足まだあかんか、昭次」

「まだ、ちよつとダメみたい。体重かけると痛いから」

松葉杖はさすがにもういらなくらいなのだが、普通には歩けない状態。

「どうしたんそれ。こけた？」

実はさつきから足の引きづりに気づいていた稲葉、話題に乗り出す。

「そんなドジじゃないですよ。稲葉さんたちみたいな人に絡まれてやられました」

笑いながら告げる昭次に、一瞬ぽかんとした稲葉が皆と顔を見合わせ吹き出す。

「わしらみたいなのってのはどういうことかの昭次くん、このやるつ」

首をつかまれ抱えられる昭次、笑いながら怒ってる稲葉。

「冗談ですって。ぶつかっただけで殴ろうとかしないですよね稲葉さんたちは」

どうですか？というように笑う昭次。

「そんなん、するわけないやんかあ。オレはな、あいつらはやるかも」

指を指される義斗たち、思い切りその手をたたかれてる。

「それで、大丈夫やったんか？ケンカして勝ったんか」

「オレはしてないよケンカ」

「どういうことよ、そういうのに絡まれてただで帰れるわけあらへんやろ。逃げたんやなあ」

「逃げてないよあ、やられたらやり返すくらいできてたと思う。たぶん」

おおっと声を上げるみんな、根性あるやんと笑う。

「俊さんに助けてもらったんです。ホント偶然。そこで知り合ったんですけど」

「そりゃよかったわ。気をつけなあかんで。ずっと関か俊についてたらええわ」

俊らしい出会い方やと笑う稲葉、あいつはなんかそういうの多い気がするわ。

「なんの話してんの、ついてたらって。ほら、はじめ作。うまいでお盆に料理を乗せて俊が運んできた、その姿に吹き出してる横井と稲葉を睨みつける俊。

視線をそらして苦笑いの横井。

「いやの、昭次くん守つたれ言う話。世の中危ないやつら多いからの」

「そりゃおまえらのことか？なあ、昭ちゃん。気をつけなканで、危険人物やからな」

「おまえだけには言われたないわ」

・ 楽しそうににらみ合って笑ってる俊、その姿に昭次は心から笑った・

ずっと気が張っていたと思うからみんな来てくれて本当によかったと思う、心を許せる関係って大事なのだと改めて感じた。

騒ぎの中、昭次の携帯が鳴り響く・・・表示を見ると相田武から。

「もしもし、武？どうしたあ」

席を立ち廊下に向かう昭次、それを見て相田の名に顔を引きつらせてるのは忍。

・・・いろいろあつて忘れるところだった、達也との約束・・・半分くらいはいけてる気もするけど、今日は特別な気がする・・・ちゃんとしなきゃ。

そんな忍には気づかず、親友との会話を続ける昭次。

「もう学校終わる時間なんだ、気づかなかった」

『のんきな奴だな、サボりが。で、どこにいの。今おまえの家まで来てるんだけど』

「えっ、オレンち？なんで。今日は友達とこの葬式なんだよ。で休んだの、サボりじゃないって」

『マジか。そりゃ邪魔したか』

「大丈夫、一息ついてるとこ。近くだからちょっと来てよ」

『関係ないやつが行けるかよ。いいって今日は帰るし』

「家に来るくらいな用事なんだろ、気になるじゃん」

『・・・話は大事だけど。武威も一緒だぞ、いいのか？』

「ちょっと待って、聞いてみる」

電話を押えて俊のところへ走った、キッチンで兄の手伝いしてる様子。

「俊さん、今うちに友達きてるみたいなんですけど、呼んでもいいですか？」

「約束あつたんか？ええから呼びな、食うもなくなっちゃうぞ」
忙しそうな俊に遠慮がちに告げるとすんなり返ってくる声。

「約束してたわけじゃないですけど、すみません。ちょっとだけ話
あるみたいで」

「そうか、ええよ。そうじゃ、迎えにいつてこか？場所しらんやろ」
「いいですよそんな。教えたら自分たちでこれるから」

「自分は迷つてたのに、か。ええ、オレが行ってきたるわ」
ふいに義斗が話に入ってきた、昭次の後ろに立ちバイクの鍵を鳴ら
す。

『おい、昭次。無理しなくていいって。明日でもいいから』
「あつ、悪い。いいって。あの、今からオレの兄が迎えに行つてく
れるから。待つてて・・・あつ、よし・・・」

中途半端に電話を切られて、相田は呆然と携帯を見つめていた。
加賀家の玄関先、相田は武威へと困った顔を向けた。

「・・・昭次の兄ちゃんが、迎えにくるって」
「マジで？オレあんま知らないんだけど、なんでそんなことに」
さあと腕を上げる仕草。

「昭次には早く伝えたかったけど、そこまでしなくてもなあ・・・な
んかこたごたしてるみたいだったぞ電話で」
言い知れぬ不安が小さく二人を包む、なんだか嫌な予感。

暇だったのか返事も聞かずにすでに玄関へ向かう義斗を追いかける
昭次。

「義斗さん、ごめんホントにいいの？」

昭次の呼びかけに、一瞬その瞳を見つめ小さく息を吐く。

「・・・好きに呼んでええから。よし、くんでもええし。おまえなら、許したる」

バイクにまたがりながら独り言のように呟く義斗、下を向いたまま上がらない頭は照れているのか・・・そんな気遣いが昭次はうれしかった。

「・・・気にしてくれてたんだ、ありがとう。じゃ義兄って呼んでもいい？」

気持ちのままお礼を言つと、考えていた呼び名を告げてみた。少し驚いて顔を上げる義斗、伸ばす手が昭次の頭を撫でた。

「兄って呼んでほしかったんや・・・願い叶ったわ、サンキュ」

小さく言つと走っていくバイク、その表情は・・・うれしそうに笑っていた。

そんな顔を見れたことがすごくうれしくて顔の筋肉が緩んでく。

「よしにい・・・うん、いい感じ」

上機嫌の昭次、行く先に待つ親友に大事なことを言い忘れている・・・それさえも忘れていた。

加賀家の前、どうするよと嘆きながら帰るわけにも行かずおとなしく昭次の兄を待っていた。

ふいに相田たちの前で一台のバイクが止まった・・・

じつと見ているそのバイクの男、何かと顔を見合わせる二人。

「・・・おまえら昭次の友達？」

知った名を告げられびっくりして後ずさる。

「・・・えつ。そ、そうですね。え？この人がお兄さん？」

武威は兄をあまり見たことがないようで、相田に問いかけるも違うよと小さく首を振る。

「昭次にお兄さん待つるよう言われてます、が」

この人は昭次の兄ではないのは見ればわかる、オレは結構一緒に遊んでもらってるし。

「それオレのこと・・・昭次に頼まれた。しかし二人とは、乗れるか？」

後ろを見ながら体格と計算してるように呟く義斗を不振に見てる相田。

「お兄さんが来てくれるはずなんですけど、知ってます？」

「ああ、はじめのことか？あいつは忙しくてな・・・代理。後ろ乗って、乗らんのなら歩いてついてくるか？」

ためらいながらもはじめさんのことを知ってるし昭次に頼まれたって言うてるし、なにより怖そうなこの人に逆らう気にはなれずおずとバイクにまたがった。

相田と武威はもっとうめるよとケンカしながらしがみついている。

「しっかりつかまっとれ。ゆっくり行つたるからよ」

言う間もなく走り出すバイク、義斗にとってはひどくゆっくりなのだが・・・

後ろの二人はそのスピードに硬直、必死に義斗にしがみつく、怖いなんていつてられない状況。

一瞬の間にたどり着く目的地。

「ついたぞ。おい、大丈夫かおまえら・・・」

「・・ゆ、ゆつくり、って言ったのに」

「むちや早いって・・頼みますよ、もう。あーこわ」

しがみついたまま固まってる二人を笑ってる義斗。

「なに言ってるのや、むちやゆつくりやったやろ」

「おかえりなさい、義兄。ありがとお」

バイクの音に気づいて出てきた昭次、三人の様子に少し驚いていた。

「おう。なんかつぶれてるからどうかしたって」

さつきと変らない笑顔につられて笑顔の昭次、そんな昭次に二人は飛び掛る勢い。

「おいっ昭次！誰よこの人は。びっくりするだろがっ」

「おまえ、今この人のこと、よしにい、って呼んだ？兄ちゃん？」

二人の驚きは違う位置、どちらも驚いたことで言いながら顔を見合わせる。昭次を見る。

昭次はなんでもないふう言葉に告げた。

「兄ちゃんが迎えに行くって言ったよな。オレの兄ちゃん、義斗さん」

兄がもう一人いる、今までそんな話は聞いたことなかった相田は首を傾げた。

「混乱するから言わんかったのに。自分で言ってるし」

「いいんだ、こいつらには隠し事したくない」

「・・ならええけど、先行くで」

何か言いたそうな義斗、行ってしまう背中を見つめる昭次、はっと背後の気配に我に返った。

「本当に兄ちゃんなのか？聞いたことないけど」
「オレも」

昭次の同意に、は？と聞き返す二人。

「オレも知らなかったの。小さい時離れてそれ以来会ってなかったんだって。びつくりだよ」

「びつくりって・・・簡単だなあ昭次よお」

「簡単ってこともないけどな、まだなにも知らないし・・・これから教えてもらう」

苦笑いの昭次に、それ以上聞くことがためられた。

空気を読み話を変える相田。

「そっちのことはわかったらまた教えてな、結構気になる」
そのやさしさに甘え小さく頷く昭次。

「とりあえず今日の用事・・・おまえ今日井川と会った？」

「えっ、なんで？忍くんなら中にいるけど。亡くなった人つながりあってたさ」

「え？ここに。いないと思ったら、でなんか話聞いたか？」

「え、っと・・・聞いてない。なんか用あつただやっぱり。オレちよつと取り込んで、とにかく中に入る。今聞くわ」

相田たちの少し神妙な顔に、大事なことだったんだと感じた。

自分のことでいっぱいだったといえ、オレのこと探してくれてたみたいだったのに・・・

「あつ、いらっしやい。昭ちゃんも早く食わな全部食われるぞ。君らもどうぞ」

優しい笑顔で迎えてくれる俊におずおずと頭を下げる相田と武威。

「・・・あの人が亡くなった人の？」

「そう、俊さん」

部屋の中に入っていくと幸の位牌に気づく相田。

「オレ、お線香あげさせてもらっよ・・・聞いてくる」

「あつ、オレも」

律儀な性格の相田、つられるように武威もついて俊のところへ走っていく二人。

昭次は忍を見つけ近寄った、側には義斗が一人。

「あれ、みんなは？」

「慣れないことに疲れたみたい、向こうでつぶれてる」

見ると隣の部屋で何人も転がっていた、思わず吹き出す昭次。

「そうか、たしかに疲れたかも・・・」

「昭次くんは大丈夫なの？足痛いのにあんま歩かないほうが・・・あつ、相田くんたち来たんだ」

ふと顔を上げ見つけた相田にピクリと体を震わす忍。

あいつらとなんかあったのか？それが話したかったのかもと連れて来たことを少し後悔。

「・・・あつ、なんか話あったんだよね。ごめん、今頃。聞いていい？」

はっと目を見開く忍、一瞬静まる部屋。

気をきかせてか義斗が腰をあげたのを合図かというように、口を開く忍。

「あの。改めて、今頃言うのもあれなんだけど・・・オレと、友達になっってほしい」

忍の言葉に、一瞬何を言ってるの？と首を傾げてしまう昭次。

「友達って・・・もう友達だと思ってたけど、違った？」

思わず聞き返してしまう昭次に、忍はその言葉にゆっくりと笑顔を

見せた。

「うん、オレも思ってる。ありがとう」

友達と想ってくれてる、それだけでうれしくて満足してしまいそう。

「オレ・・兄弟っていないから憧れてて、そういう特別な存在になりたいって思ってる」

不安そうに続ける忍の言葉に、じっと見つめながら昭次は思う。

兄弟か、たしかにそういうの特別って思うのわかる・・今だからってわけじゃない、はじめ兄ちゃんだったってそうだったから。

でも、友達をそう感じたことはないんだよね・・武たちとだって。

ああ、そうか。深く考えすぎなんだって、きっと。

「じゃ、まず呼び方とかからでいいんじゃない？しのぶと、しょうじ」

「しょうじ?・・・」

「そう、そういうのって自然にできてくものだと思うから。これからもよろしくな」

はい握手、差し出す手とオレの顔を交互に見て勢いよく両手が包み込む。

何度もうなづいてうれしそうな忍に、オレもうれしくなってくる。

「・・・よかったな。今度は逃げられんように気をつけんとな」

窓の外を眺めていた義斗、事情を聞いていただだけにふいに忍へ向ける意地悪な言葉。

「義斗さんっ、余計なこと言わないでよっ」

びくりと体をはねさせて反論の忍を笑いながら部屋を出て行く義斗。

そんなやり取りに首を傾げてる昭次。

「なに？・・もしかして、うわさのこと気にしてたとか？」

ピクリと肩を震わせる忍、悲しそうに顔を上げる。

「・・やっぱり、知ってたよね。けどそれ違うから、オレはそんなことしてないしっ」

必死に弁解する忍の手をもう一度強く握り締めた、強く頷く昭次の瞳は分かつてるよと言ってってくれるような気がして・・忍はぎゅっと手に力を込める。

「昭次さんと本当に仲良くしたいだけで、俊兄と義斗さんみたいに」

「うん、それわかる。オレもあの二人みたいな関係好きだよ。ケン力はしたくないけど」

「ケン力は嫌だよね」

笑いながら泣きそうな表情の忍に、精一杯笑顔を向ける昭次だった。

エピソード2

13・友情（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないまま兄はじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。義斗に会い段々と思いついてきている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。姉を亡くし俊と二人で悲しみを抱えていく。

「大竹幸」成仁の姉、病気をわずらい亡くなる。俊と夫婦となった。「神崎俊」幸と念願の結婚。母を幸と同じ病気で亡くしている。成

仁と兄弟となった。

「井川忍」昭次の同級生、俊とは家が隣同士で慕っている。

「相田武・武威直人」昭次の親友。

「関義斗」俊のケンカ仲間、昭次とはじめの兄弟。小さい頃、昭次を連れ去る事件を起こしはじめとは疎遠となっていた。

「横井良」俊と昔暴走族のチームで一緒だった仲間。今も強さに慕っている。ケンカ早い。

「稲葉聡」俊の仲間。暴れる俊と横井のストッパー役だった。ケンカは強いがやさしい人。

「真田幸司」義斗の族仲間。冷静で落ち着いた性格。

「伊藤和弘」真田と共に義斗を支える仲間。ケンカが大好きで明るい人。

昭次の天然が忍の固さを紛らせてくれたよう、重い空気は和らいでいった。

そんな二人を後ろから見守っていた相田。

「なにやってんの、君たちは」

ふいにかけられる声にあわてて手を引つ込めたのは忍、またへんなこと言われたくないから。

「どーも・話はすんだ？」

忍の困った表情に苦笑いしながら声をかける相田におざなり程度に頷く忍。

「なんか知らない間に通じてるよな話、オレだけなんか事情しらないじゃん」

相田と忍の間にいつの間にかできてる空気に首を傾げてる昭次。

「まあちよつとなあ。井川はそれでいいんだよな」

「それでつてどういう意味だ武くん。いいよねえ忍」

「ね。いいんだ、昭次と友達になれるんなら、それで・・・」

相田が達也のことを言っているのがわかった忍は自分に言い聞かせるようにつぶやく。

「ならもうなにも言わないけど・・・」

相田は達也のことを言いたかったが、もう言う必要はない気もした。後ろでじつと見ていた武威が、抑えられず言葉を発した。

「治まったのならいいけどよ、おまえ達也つてやつに連絡とろよ。気にしてんだから、まだ・・・」

「おい直人、言わなくていいって」

「けど、なんかすつきりしてねえじゃん。昭次は達也にはなれない

んだからなっ」

達也の想いを知ってしまい、忍の態度に釈然としない武威

「な、わかってるよそんなこと。あいつと昭次はまったく違う、変わりになんかしてない。もういいって言ってるだろっ」

「・・・もうやめたれや。忍が決めたことやろ、好きにさせたれ」
大きな声に集まってくる兄たち、義斗が割って入る。

「義斗さん・・・聞いてたんですか」

「聞こえるわ、そんなでかい声で話しとれば」

「どうしたんや、ケンカはいかんで」

「おまえ武威ってっただけ、騒ぐんならうちに帰ってからにしてくれよ」

ふいにでかい人たちに囲まれて後ずさる武威。

「・・・すいません。でかい声出して。昭次、オレ帰る・・・ごめんな」

「ちょ、なんで。まだいいじゃん、直人っ」

出て行ってしまう武威を追いかけようとしてつまずく昭次。

「大丈夫か、なにやってんだおまえらは。人のうち来てケンカしてんなよ」

「ケンカなんかしてないけど。どうなってんの忍。武もなんか知ってんの？」

巻き込むなよというように二人を見つめる昭次に、小さくなってる忍。

相田は小さくため息をつき忍を覗き込む。

「・・・井川、昭次には言ってもいいよな。というより言つぞ」

無言のままの忍に、話を進めていくことにした相田。

「昭次・・・こいつのうわさ知ってるよな」

「一応。けど違うつて」

下を向いたままの忍を心配しながら、話は気になり小さく呟く。

「そう、違う。こいつがなにかしたわけじゃなくて離れてったのは相手のほうで。こいつは被害者つてこと、まあ井川も行き過ぎてたところもあつたんだろうけど」

素直な感想を告げると睨んでる忍、昭次の視線にはつと動けなくなつた。

「それから、怖くて友達作れなくなつてたつてわけだ」

相田がフオーするようにできるだけ軽く告げた。

「・・・達也、あいつのことはもう今日解決したんだ、謝りにきてくれて・・・オレの間違いだったから」

視線をそらすように小さくなる忍、小さな声で付け加える。

「あいつ、戻りたいって言つてたぞ・・・自分が勝手なことしたから言えなかったみたいで。おまえの誤解は解けたんだ、井川のおまえの気持ちしだいでもなるつてこと」

「え？」

相田の言葉に小さく揺れる忍の瞳。

「・・・昭次、おまえどう思う？」

ふいに話をふられ、なんでオレに聞くんだよと思いながらもさすがのような忍の目にしばし考えた。

「オレはよくわかんないけど、そいつと友達にもどりたいならそうするのがいいと思う。そんなに悩むことじゃなくない？友達は一生ものでしょ」

「・・・オレは昭次みたいに器用じゃないから、たくさん友達なんて

できないよ」

「なんで、一緒にいるのだけが友達と違うでしょ。辛い時に電話一本できるような人のことだよ。俊さんと義斗さんみたいになりたいって言うてたじゃん。そういうことだと思うよ・・・オレはもうおまえが困ってたら助けに行ける」

「・・・昭次」

昭次の言葉に小さく笑う相田、こいつにかかるとなんでも簡単にいくような気がしてくる。

そんな単純でもないんだけどね今回ののは。

「まあそういうことだな、昭次が行くならオレも、直人だつて行くだろうし。今一番困ってるのは、達也つてことになる。直人のことは許してやってよ達也の本音聞いて戸惑ってんだよ」

達也の書いたメールを見せる相田、じっと見つめてる忍の目にたまっていく涙・・・

「オレは器用じゃないよ、なりたい人と友達になつてるだけ。忍のいる場所くらい十分あるから。来たい時に来たらいいんだよ」

「・・・うん、うん」

後ろで見守っていた大人たち、その笑顔にほつとしたように小さく微笑んでいた。

「昭次くん、すごいやん。はじめの教育のたまものか？」

「なんでよ、オレもあんなこと言えません。誰に似たんだか」

「こいつじゃないことはたしかじゃなあ」

義斗を指さし笑う俊、無言のまま小突き合いが始まった・・・

「おまえら、ケンカは外でやれ。まったくどこがいいんだか忍くんはこんなの」

はじめがあきれたようにため息をつくど、反応するのは俊。

「こんなのつて、オレも入ってるんかなあそりゃ。おまえも来いや一緒につぶしたる」

「ちょ、オレはいいつて。巻き込むなあ」

はじめの首を引き寄せて義斗共々、隣で寝ているみんなの上に勢いよく飛んでいく。

なだれ込む俊たちに成仁もつぶされ飛び起きた。

「い、ったあー・・・なん、なに・・・地震？」

きよろきよろと見渡す視界に暴れてる人たちの姿、なにしてるんだか。

「てめえ、寝込み襲うとはどういう見じゃっ！」

思い切りおなかをけられて起き上がる真田。

「・・・いったあ、関いやるんかあこらあ」

横井もうれしそうに立ち上がり騒がしい中へと入っていく。

稲葉は寝ぼけ眼で本能ではじによけ大きなあくびをしていた、被害を受けなかった伊藤うるさい中平然と眠っている。

「あつ、成仁くん。こっち、巻き添えにあうよっ」

ぼけつと見ている成仁を昭次が引つ張り騒ぎから逃げる。

「なにしてんだよ。はじめさんまで・・・」

逃げ込んだ隣の部屋には学生たちがびっくりしながら見学していた。

「・・・どうなってるの、誰よあの人ら」

「兄ちゃん巻き添えみたい、かわいそうに。あの人たちは義斗さんと俊さんのケンカ仲間、かな」

いたそうと苦い顔をしながら昭次が相田たちに説明中。

「あれ誰？しかもなんか泣いてるし忍くん、どうしたの。オレが寝てる間にいったいなにが」

「あ、お邪魔してます。相田武です。昭次のツレで、ちょっとこいつらに話あってやらせてもらいました。大変な時にすいません」

「ああ、こちらこそ。昭次くん借りてました。オレ大竹、大竹成仁ね。ゆっくりしててよ」

二人のやり取りに小さく笑う昭次、つながりができるってすごいなあって思う。

自己紹介も終え、忍のことやケン力になった理由を説明すると納得したように聞いている成仁。

「たしかにあんなケンカばかりしてる二人みたくなりたかったのは疑問だけど、ああいうのもありかな。忍くん、そんなことで泣くかな男の子が」

「泣いてなんかないよ、それよりいいの、あれは・・・」

いつの間にやらエスカレートしてる人たち・・・家が揺れていた。

「いいかげん止めないと家が壊れる・・・こらあー、もうやめろって」
恐れなく俊たちの間に入っていく成仁、はじめも手伝って手際よくみんなをはがしていく。

「うわあ、成仁くんも迫力。度胸あるなああそこに入ってくなんて」
「葬式に見えんなこの家は」

ぼそりと呟く武にホントだなあと昭次は思う、あんなに沈んでいた世界が变っていく・・・幸さんも喜んでくれてたらしいよね。

「・・・井川、どうするんだ達也のこと」

ふいに戻る話、忍は難しい顔をしてため息をついた。

「わかんない。もう一回会って話す・会ってみたいとわからんないよ」

「会うのか？気をつけるよ、切羽詰った男はなににするかわかんねえぞ・・・」

相田の言葉に首を傾げてる忍、そんな姿に小さく吹き出してる相田。

「さすがに、ないかな。あいつに限って」

「なに言ってるんだよさつきから。昭次、いろいろごめんな。今日はもう帰るよ、達也に電話する」

すつきりした表情で告げる忍に駆け寄る昭次。

「ホント。がんばって、戻るように応援してる」

「うん、ありがとう。昭次のほうもすつきりしなよ、兄ちゃんたちのこと」

問題山積みなのはオレのほうかと苦笑いを浮かべて頷く昭次。

「そうだね・お互い気合入れて、がんばろ」

「うん。俊兄たちにもよろしく言っといて。取り込み中みたいだからさ」

じゃあねと帰っていく忍、見送り外に出た昭次と相田。

「さつきなにを気をつけるって言ったの？危ないやつなのかよ」

気になってた言葉、暴力とか許せないよ。

相田は、一瞬間を置き・小さく首を振る。

「・・おまえには、きっと理解できないよ・・そういや昭次って好きな子っていたっけ？」

「いきなりなんの話だよ、いないよ別に」

「いないよなあ、やっぱりおまえには難しい話だしそれどころじゃないだろ。もう一人の兄ちゃんのことわかったら教えてくれよ。がんばるってそのことだろ？」

いまいち腑に落ちないが確かに他のこと考えてる余裕はないかも。

「わかった・・なに、帰るの？」

「おう。もう話もすんだし、おまえも元気そうだから。直人んとこでもよってく」

「そうだな、機嫌直せって言っというて」

相田を見送り部屋に戻ると、静かになっていた。

「ケンカすんだ？」

倒れこむみんなを眺めて笑ってる昭次にはじめがぼやく。

「もうケンカなんかにつきあわんど。昭次、なんかくれ水」

「はあ息上がつとんのかいな、おやじやお。若さには勝てんか」
義斗の言葉に無言でケリを入れるはじめ。

「・・昭次。このおっさんケリよった、怒ったつてくれや」

「はい、水。なに言ってたんだよ、さっきまでケンカしてた人が。あみみなすごい顔になってるよお」

よく見ると血が出てるし、腫れてるし・・そんな本気でやらなくても。

あきれてる昭次に苦笑いの義斗。

「はい、手当ては自分でしろよ。ふすまもちゃんと直して。今度からは外でやれよ」

「つめたいなあ成仁。オレは巻き添えくっただけなのに」

「十分やってたよ。あきれてるよ昭次くん」

はっと昭次を見るはじめ、楽しそうに笑っていた。

「わかってるって、収まってよかった。けどこんなケンカならいいんじゃない、陰湿なのより全然いいよ・・」

義斗とはじめを見ながら思う、初めに会った時のこと思えばよくな

ったほうだと思う・・・オレのせいでケンカしてるんと思うと余計辛いし。

男はぶつかったほうがいい、みんな見てるとよくわかる。

しばらく寝転んで休んでいた横井と稲葉が立ち上がり大きく伸びをすると、俊に声をかけた。

「ほんならわしらはそろそろ帰るわ」

「まだええぞ。泊まってつてくれても」

「そこまで図々しくできんし、また改めて寄らせてもらいます。今度は連絡くださいよ」

少し寂しそうに稲葉、そんな親友の二人に心から感謝し御礼を告げる俊。

「・・・わかった、今日はホンマありがとう。みんなに紹介できてよかった・・・」

「おまえらもよう来てくれたな、オレは明日帰るし。みんなに言っ
といてくれや」

それに習うように義斗も伊藤と真田に挨拶を交わすと、えーつとふ
ててる伊藤。

「なんじゃ、わしらも帰るんかあ」

「暴れたりんわ、神崎もたまには帰ってこいや。またやろうで」

真田が伊藤の襟をつかみ外へと押し出した、しゅしゅバイクへとま
たがり騒ぐ。

「ホンマやで。こんかったらこっちから行くからな」

「おう。ゆっくりできたらな」

笑いながら答える俊、走り去っていくバイクを見送った。

バイクに乗り込み帰り際、真田が義斗に近づいて小さく呟く。

「・・・おまえ気をつけよ」

「なにがや・・・」

「気づいてへんかもしれんけど、おまえ昭次くんのことえらい目で見てるで・・ケンカする時の切れたような目で」

一瞬、わからない程度に息を飲み、なんでもないように答える義斗。

「・・気のせいやろ、なんでオレがそんな目で昭次見るんや」

「ならええが・・弟やるようなことにならんようにの。雰囲気おかしいで、おまえら」

遅れて走り出す真田のバイクの音を聞きながら義斗はゆっくりと、瞳を閉じる。

ちよつとしかオレたちのことを見ていない真田に指摘されたこと・・近くに居てはいけないのだろうか、静かに感じ空を仰いだ。

エピソード2

14・蘇る記憶（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないまま兄はじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。義斗に会い段々と思いついてきている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。姉を亡くし俊と二人で悲しみを抱えていく。

「大竹幸」成仁の姉、病気をわずらい亡くなる。俊と夫婦となった。「神崎俊」幸と念願の結婚。母を幸と同じ病気で亡くしている。成仁と兄弟となった。

「関義斗」俊のケンカ仲間、昭次とはじめの兄弟。小さい頃、昭次を連れ去る事件を起こしはじめとは疎遠となっていた。

見送りを終え、部屋に戻る面々。

がらんとしてしまった部屋、小さくため息をつく成仁。

「はあ。なんか一気に静かになっちゃったな」

「うるさいからのあいつらは、悪かったなへんの呼んで」

「なんで？楽しかったよ、なんで謝るかな。おかげで寂しい思いしなくてすんだ」

幸の位牌を見つめながら呟く成仁に俊がそつと頭をなでる。

それはオレも同感、騒がして悪かったな幸・・ゆっくり休んでくれな。

「ホント楽しくて考えるの忘れてたなあ」

横で俊たちを見ていた昭次がポツリと呟いた。

その呟きは後ろにいたはじめにも、玄関に座っていた義斗にも聞いていた。

なにも言わず、その背中を見つめる。

「今日は、もう遅いから・・泊まってってや、はじめたちも」

おかしな空気を察知し、俊が振り向き声をかけた。

ふいに明るくなる昭次の表情「いいのぉ」とうれしそうに。

「いいよな、成。今日はもうずっと騒がしいほうがいい」

「全然いいよお。じゃあここでみんな寝よう、そのほうが姉ちゃんもうれしいと思うし。先輩たちもいいよね？」

入り口、黙ってみている二人・・・どこか難しい顔。

「ええよな、ちょう手伝つて。二人はそこで机片付けてて」

はじめと義斗を連れ出す俊、昭次と成仁は言われるまま部屋の片付け。

布団を取りに行くのは口実で、切羽詰ってるような二人を俊がなだめた。

「今日はもうええんやないか・・・」

一瞬間を置き、義斗が呟く。

「いや、今日言う。なんや偶然重なってみんな解決してるやろ、今日のがええ気する・・・」

「オレもそう思う。きつと、なにかあんだよ今日は・・・こんな偶然ありえない」

ふとはじめが見つめた先は、幸の遺影・・・俊も、なにか感じていた。

「・・・わかった。成仁はどうする、何も知らんやろし」

「いいよ、一緒に・・・あいつも関わってる、昭次のこと」

渡された布団を抱え、微笑むはじめ。

義斗も反論なく、いまだ険しい表情で・・・大丈夫かあいつ、どう伝えるのか必死なんやろうけどそんな顔してたら昭次くん怖がるやん。

もっていた布団で義斗にぶつかっていく俊。

「て・・・なんや、危ないのお」

「そんな顔すんなよ、昭次くんの前で。心配が移るぞ」

小さく言うとはじめを追って部屋に入る俊、義斗は廊下で頭を抱えていた・・・どんな顔したらええんじゃ、普通にするなんて無理や。気持ちのままいくしかないと落ち着かせる心、一歩足を踏み出す・・・

「大の男が並んで寝るって。オレは成と昭次の間やないと寝んぞ」
布団を引きながら気づくむさ苦しさに俊がぼやく。

「なに子供みたいなこと言ってるだよ、どこでも一緒だろ」

「オレはこいつの隣じゃないならどこでもいいけど」

「それはこっちのセリフじゃ」

こちらでもはじめと義斗の子供のケンカ、苦笑いの成仁。

「まあまあ、好きなところで寝たらいいじゃん。かわいいなあみんな」
昭次に笑われたため息をつく三人、成仁は爆笑中。

ふとんがしきつまり寝転がるみんな、必然的に義斗は隅へその隣に、
昭次が転がった。

「・・・おまえここなんか？」

「ダメ？ここがいいんだけど・・・」

半身を起こし明らかに動揺している義斗、昭次は少し寂しそうに見
つめていた。

そんな二人にあわてて俊が声を上げる。

「ならわしは昭次の隣で、成がその横。はじめは一番端な、いいよ
な？」

「いいんじゃないか。昭次がいいなら」

ふいに呼ばれ振り向く昭次、うんと大きく頷くと笑った。

「場所も治まったことやし、本題や」
ふいに静まる部屋、なんのことだかわからない成仁は首を傾げてい
た。

「本題？なんか大事な話？オレ上行つてようか・・・」
「居てくれ。おまえもきつと必要だ・・・頼むぞ、俊」
壁際にもたれはじめたちとの間を開け、じつと三人を見つめる俊。
成仁はいろいろ聞きたいこともあつたのだが、雰囲気飲まれて俊
の隣静かに座る。

「・・・そんなかしこまらなくても、いいんじゃない？」
はじめと義斗にはさまれた状態で見られてる昭次が苦笑いを浮かべ
た。

「全部言うつて言つたよな。おまえにはきついこと言うから・・・気
をしつかり持て」

「・・・大丈夫。稲葉さんにいいこと教えてもらつたもん・・・大丈夫。
聞きたいこと聞いてもいいかな？」

ちらりと義斗を見る昭次。

「ええぞ・・・みんな答えたる、から」

じつと見つめる義斗を見つめ返す昭次。

「じゃあ、義斗さん・・・義兄がなんで一緒に暮らせなかつたか教え
て。それが一番、納得いかない」

「・・・オレたちと昭次のおかん違うのは聞いてたか、離れないかん
かつたのはそこからや。親が別れて・・・オレがおかんで、はじめが
おとんについてった」

「どっちかなんて選ぶの辛いに決まつてるだろ、義斗はまだ小さく
て母親が必要だった・・・譲つた形だったけど、父親についていつて
よかつたのは、昭次と会えたことだよな・・・」

ぽそりと呟くはじめに義斗は小さく微笑む。

「はじめとはよく連絡とつてたからおかかもオレも、つながりでき

ててよかった思った。おまえが生まれて、弟ができた・・・うれしかったで。おかんに黙って会いに行つてたおまえらに」

昭次は自分がそんな喜んでくれた存在だと知り、胸が熱くなる・・・なにか吹き上がってくそうなほどに。

「・・・少ししておかさんが、死んだんや。おまえが生まれて五年くらいした時か・・・オレも一人にされて生きていける歳やなかったからおとんのところこうと思った・・・けど、行けん。おかんの死を知らんと楽しくやつとるあいつなんか頼りたくなかった・・・」

「親父、知ってたよ・・・泣いてたの、見た・・・」

一瞬顔を上げる義斗、すぐに視線を下げ首を振る。

「今さらどうでもええわ。あの家に未練があつたんは、おまえだけやった・・・昭次と一緒におれなくなるんが耐えられなくて、おまえのこと連れ出して・・・」

「・・・っ」

ふいに頭を押さえる昭次。

「昭次っ？どうした、頭痛いのか・・・昭次？」

はじめの声に答えるでもなく宙を見つめたまま動きを止める昭次

ふいに広がる景色は、白くぼやけた風景。

その中に、小さな昭次と、もう一人・・・

「あつ、よくんだあ。あそぼ、あそぼー、なにして遊ぶ？」

「・・・そやね、お絵かきでも・・・しよか」

無邪気に駆け寄る小さな昭次、義斗の頬に涙を見つけてそっと触る。
「よし、くん？どつか、痛い？いたいなの？・・・」

つられて泣きそうな昭次。

「・・・どこも、いたない・・・なんでも、あらへんよ。ほら笑ってるやろ？」

頬に涙を伝えながら笑う義斗、小さいながらもその辛さが昭次に伝わる。

「うわぁーん、よしくん泣いちゃダメよ・・・ぼくも泣かないからあ泣くのをはまんしながら言葉とはうらはらに大泣きの昭次に抱きつく義斗。」

「・・・そやな、泣かへんよ・・・もう。昭ちゃんが泣かんでくれたら、泣かへんから・・・なっ」

「うん・・・泣かない、泣かないから。よしくんも笑って」

抱きしめられながら昭次は小さく笑う、そのぬくもりは・・・鮮明に残っていた

思い出した・・・あれは、よしくんのお母さんが死んだ時のこと・・・あの後兄ちゃんも父ちゃんも、黒い服着て出かけて行ったの知ってる。

「・・・ようじ、昭次っ！」

「えっ、あつごめん大丈夫。ちょっと頭痛くなった・・・だけ」

「もう、やめるか？」

「なんで。まだ終わってない・・・最後まで、聞く。いいよねよしくん」

じっと見つめてくる昭次に義斗は少し体を引いた・・・

「・・・なんか・・・思い出したんか？」

「・・・べつに、なにも」

外されない昭次の視線になにかを感じる義斗、気づかないふりをした。

やめたほうがいいかもしれないと思う反面、話したい自分を抑えられない・・よしくと自然に出てくる名に、よみがえってくる楽しい日々。

心は葛藤していた、思い出すな・・思い出せ・・義斗は小さく息を呑み話を続ける。

「おまえのこと、連れ出して普通に遊んでた・・始めはな。けど、おかしくなってたんやと思うわ。あんなことする気なかった・・どこかで、独り占めしたい思ってたんやろうけど・・・」
進んでいく話の間に、昭次には見えていた・・いろんなことが。

白い世界、記憶の中に昭次はいた

・・オレと義斗さんが歩いてる。
本当に仲よさそう・・この後なんかあった気がする、断片的に見える義斗さんはいつも辛そうにしていた・・
その原因がわかるなら、オレは全部見るから。

「・・昭ちゃん、帰りたなっただ？」
「帰りたい・・よしくんも一緒にだよ？」
「ぼくは帰れん・・帰るところ、あらへんもん」
「よしくんは昭ちゃんとこ帰るんでしょ。昭ちゃんの兄ちゃんよ？
ずっと、一緒って言った」

小さな昭次が義斗に抱きしめられる、思い出していた昭次にも同じ

感覚・

一緒にいたい・自分の気持ちがすごくわかる。
いつも帰ってしまうようにいつも同じように思ってた・

そして今も、首にそつと加えられる力を感じながら思ってる、一緒に
ならいいって・

「よし、くん・も、一緒に、だよね・」

微笑む昭次にすぐに離される手、オレはそのまま気を失った。

小さな頃の記憶が蘇る・
よかったんだ、その思いだけで・そのまま一緒にいても、ずつ
と一緒にいられたのだから。

意識が現実に戻ってくる、ふいに大きくなった義斗と小さなよしくん
が重なった。

「・・すぐに手を離してた、おまえが笑ってええよって言ったから・
・自分の状況わかってオレのすることになにも抵抗せんかった、
そんな昭次にオレはなんてことをって・思ったら、自分が許せん
くなって・」

「許せなくて、なに？もしかして・なにか、やったの？よしくん
自分だけ死のうとしたのか？そんなのひどいっ、ぼくのことと一緒に
に連れてってくれるって、言ったのにつ」

ふいにあげるオレの声にみんながどうということだと目をむいて固ま
った。

「よしさんと、一緒ならばはよかったのに・・・」

小さく告げる言葉と共に、ふっと意識を失う昭次を抱き止める義斗。

「・・・なに、今・・・小さい時の、昭ちゃんが」

腕の中の昭次を見つめて放心状態で呟く。

「記憶・・・戻った、のか？」

恐る恐る聞くはじめ、昭次を覗き込む・・・異常はないようだ、気を失ってるだけで。

「・・・わからん、けど一緒のこと・・・言ってたわ。あの時と・・・」

オレたちしか知らない会話、それを口にしたということは思い出した可能性が高い。

「・・・今の、昭次くんの言葉。なんや、全部納得しとった感じじゃなかったか？」

「そういえば・・・昭次、病院で気づいた時、よしさんと行くのにつて・・・言ってた覚えが」

「・・・そんなこと思ってたなんて、最悪」

昭次を抱えながらうなだれる義斗、しばしの沈黙。

「二人とも・・・昭次くんのこと考えもしてなかったのな。それで？その後は？義斗さんがまたなんかするといけないから会わせなかったって。それこそ最悪なんじゃないの」

沈黙を破るのはやっとで事態を理解した成仁、昭次の気持ちがわかった気がした。

「・・・はじめだって考えてのことや」

「ホンマになにするかわかんかったし、それでよかった・・・わ」
落ち着いた俊と義斗の答えに反論する成仁、だからダメだったんじゃないのか。

「よくない、昭次にさみしい思いさせてるだけじゃん、わかんないの？頭のいい子でみんなの気持ちもわかってたみたいだし・・・がまんしてたんだよ」

「さみしそうだったのはわかってる、義斗の気持ちも・・・けど、オレは許せなかった」

心狭かったと苦笑いのはじめに、気持ちを察し座り込む成仁。

「・・・その後すぐ事故で。昭次くん、忘れたかったのかも・・・どうせ会えないならって」

成仁の呟きに顔を上げるはじめと義斗・・・昭次を見つめた。

「・・・とにかくオレがすべての元凶やった、今さらどうにもならんけど・・・昭次が知りたい言ったから教えた。したらこの有様」
そつと布団の中に昭次を寝かせる義斗、恐る恐る頭をなでる。

「昭ちゃん・・・大丈夫か」

「・・・気絶してるだけだと思っから。悪かったな、成仁も変なことにつき合わせて」

「昭次くんの話し相手にくらいなれるかな・・・」

「おお・・・頼むな」

それぞれ布団にもぐり深く息をつく、心配そうにみんな昭次を見ていた。

「義斗、昭次のこと頼むぞ。ちゃんと様子見てろよ」

「言われんでも見とるやろ、おまえらはさつさと寝え」
疲れていたみんなはすぐに眠りに落ちていった。

義斗は窓際タバコをふかしながら昭次を見つめる、静かな時間がゆっくりと流れていた。

気を失った昭次は、夢を見ていた

「・・・昭次くん、昭次くん・・・こつち」

呼ばれるまま歩く昭次、大きな光に包まれていく。

「昭次、くんやね？おばさん、義斗の母親や」

「えっ・・・亡くなっただって聞いた。これ、夢？・・・」

「夢、昭次くんの夢にお邪魔してるんよ、ちょお謝りたくてな・・・
義斗のこと」

「・・・義斗さんのこと？べつになにも怒っては・・・」

「私があの子連れてきたんが全部原因作ってる・・・お父さんのところに行かせてたら昭次くんとも一緒やったのに、ごめんな・・・離れさせて」

「離れたのは悲しかったけど、大丈夫・・・今はきつと一緒にいてくれるから」

「あの子強情やから大変やと思うけど、本心は一緒に暮らしたい思ってるから・・・気長に頼むわね昭次くん」

「わかりました・・・絶対幸せになるから」

「・・・ええ子やね昭次くんは。はじめが育てたとは思えんわ」
やさしく頭をなでる手、やけにリアルに感じた。

「兄ちゃんはいいろいろ教えてくれた、お母さんの息子は最高にいい人だよ」

「・・・昭次くん、会えてよかったわ・・・アホ息子たちによろしくなあ」

消え入りそうに呟く母に名残おしく腕を伸ばす。

「あつ、お母さんっ・・・義斗さんのこと気づいてたの？オレたちのとこ来てたの怒ってる？」

「・・・気づいてたよ、怒ってへん・・・さみしくさせてたんやし、それくらいええんよ」

「オレも、会えてうれしいです・・・ありがとう、お母さん」

消えていく母に叫ぶ、伸ばす手の向こうに義斗が見えた気がした・・・

月明かりに照らされた部屋、昭次を覗き込み義斗が小さく呟く。

「昭次・・・おまえの生活壊してごめん、オレの気持ちは変わってへん。おまえの笑顔見たらまた連れてきたなる・・・」

「・・・うん。よしくん、あの時からやり直そ・・・」

思わぬ返事に、びっくりして身体を起こす義斗。

「・・・アホ。冗談じゃ・・・おまえ、大丈夫なんか？頭、痛ないか？」
驚きながらも冷静に昭次を見つめ、頭をそつと撫でた。

「冗談じゃない・・・よしくんといたいよ。もう大きくなったんだから、いいでしょ？」

「よくないやろ・・・」

「なくないよ、うちにこればいい。引き止める力くらいもうあるよオレ」

腕にしがみつく昭次。

「・・・おとなし寝とれ。また倒れられちゃかなわん・・・」
押しのける弾みにふいに義斗の大きな手が昭次の首に触ってしまう、
動けなくなる義斗。

「・・・義斗さん、まだオレのこと・・・殺したい？」
目を見開く義斗、瞬間昭次の手を取り・・・勢いよく抱きしめる。

「殺したかったんやないつ、一緒におりたかったただけや・・・なんで
オレがおまえのこと殺すんよ、こんなに想ってるのに」

「・・・知ってる、義斗さんのやり方間違ってた・・・小さかったから
しかたないよね・・・お互い無知だったね・・・」
抱きしめる背中にしがみつく、昭次の頬に涙が流れ落ちた。

「昭次・・・オレのこと、怖ないか？」
「・・・怖いわけ、ない」
見つめる笑顔、二人で微笑み合う。

「・・・もう、寝ろ。一緒に、寝よか？昔みたいに」
「うん・・・なんか、照れるね」
「アホ。こっちも照れるからやめてくれ、静かに寝る、ほら」
腕に抱えられ目を閉じると、小さい頃引っ付いて寝ていたのを思い
出して小さく笑う昭次。

安心したのかすぐに眠る二人。
昭次のことが気にかかり話し声に敏感に起きていたはじめと俊・・・
頭を抱えていた。

「・・・あいつら、なんやあぶないで。いろんな意味で」
一人呟く俊に、返されるはじめの声・・・小さく漏れる。

「・・・やめてくれ・・・」

身体を起こす二人、引っ付いて眠っている義斗と昭次を見つめ苦い顔のはじめ。

暗闇の中、大きなため息が部屋に響いた。

エピソード2

15・静かな朝（前書き）

家族・兄弟愛・友情がテーマな少し謎めいたストーリー。人物紹介です。

「加賀はじめ」加賀家の長男、弟を支えてきた。いろいろ過去を抱えている。

「加賀昭次」幼い頃の記憶がないまま兄はじめを頼りに、時折記憶の断片に悩まされている。義斗に会い段々と思いついてきている。

「大竹成仁」はじめの働き先の後輩、姉の病気がわかるまでは荒れていた。姉を亡くし俊と二人で悲しみを抱えていく。

「大竹幸」成仁の姉、病気をわずらい亡くなる。俊と夫婦となった。「神崎俊」幸と念願の結婚。母を幸と同じ病気で亡くしている。成仁と兄弟となった。

「関義斗」俊のケンカ仲間、昭次とはじめの兄弟。小さい頃、昭次を連れ去る事件を起こしはじめとは疎遠となっていた。

「横井良」俊と昔暴走族のチームで一緒だった仲間。今も強さに慕っている。ケンカ早い。

「稲葉聡」俊の仲間。暴れる俊と横井のストッパー役だった。ケンカは強いがやさしい人。

「真田幸司」義斗の族仲間。冷静で落ち着いた性格。

「伊藤和弘」真田と共に義斗を支える仲間。ケンカが大好きで明るい人。

静かに訪れた朝

はじめがじつと見下ろしてる先には・・気持ちよさそうに寝ている二人の姿。

独占欲の強さ、二人の思いは小さい頃からわかっていたつもりだが・
・目の辺りにすると、どうにも腹が立って仕方ない。

おもいきり義斗を蹴り起こす。

「・・ん、なんじゃ？」

「なんだじゃねえよ・・うちの弟になにしてんだ」

寝ぼけ眼に義斗は見た状態は、腕に寝ている昭次の姿。

「こ、こりゃ・・オレのせいや、ないやろ」

焦って起き上がる義斗、勢いで昭次が転がった。

「・・おっ、なに？なんか、痛い・・」

「昭ちゃん・・大丈夫か？顔色は、ええみたい。よかった」

昭次を見下ろしてほっとしてる俊、身体を起こし笑顔の昭次。

「おはようございます。すごく気分いいよおっぱい寝たし・・で、なにやってんの二人は」

にらみ合ってるはじめと義斗に気づいて首を傾げてる昭次。

昭次ののんびり顔に小さくため息のはじめ、この苛立ちは義斗へとむけられる。

「おまえねえ・・兄ちゃんの心配全然わかってないな。義斗、やっぱりおまえが悪いっ」

「はいはい、そうやそうや。神崎い、腹へったあ。なんかない？」
「おまえはっ！遠慮つてものを知らないのかつ。話すんでねえぞ」

義斗に掴みかかるはじめ、その間に入り止める昭次。

「朝からケンカするなよお。兄ちゃん最近怒りっぱいな・・オレのせいかな」

「おまえらの、せいだ。もうオレが結論出せばすむってことだろ・・
義斗おまえの部屋は自分で作れよ。手伝わねえからな」

意味のわからない様子の義斗、昭次は一瞬考えて悟り問いただす。

「え？それって、義斗さんも一緒に住んでいいってこと？」

「・・まあ、お前がいいなら。しかたねえだろもう」

「いいに決まってるよお。いいでしょ、義斗さん。来てくれるでしよ？」

飛び跳ねて喜んでる昭次の横で複雑そうに顔をしかめてる義斗。

「・・オレは」

ふんぎりのつかない義斗にはじめが挑発しだす。

「なんだよ、おまえ怖いとか？まだ自分に自信ないって？」

「そんなんやない。なんもせんぞオレはもう、絶対に」

まんまと挑発にのる義斗に、小さく笑いながら兄の顔をするはじめ。

「なら、いいだろ。昭次のためだと思って・・素直に喜べ」

並ぶ二人の笑顔に、うれしくないはずはなかった・・ずっとあこがれていた家族との暮らし。

素直には行かないにしても、昭次のためだと言われたら断る理由はない。

「しゃあないのお。そこまで言うなら、住んだるわ」

調子にのるなよとはじめに睨まれるも、うれしそうな昭次に緩んでしまふ義斗の顔。

「マジか。またうるさなるやん・・ええんか、チームは」

「ええ。そろそろ潮時やったしな、怒るやろけどな真田あたりが」

「わしまで恨まれそうやわ・・まあ昭ちゃんがうれしそうやから、がまんしたるか」

軽く話しているが内心かなり複雑な心境だった、わかってくれとは思っけど。

「・・ちゃんとしてこいよ。けじめはつける」

無言で頷く義斗、少し大人になったように吹っ切れた表情をしていた。

朝食を終え、あわただしかった日々が終わろうとしていた。

「一度あつちに帰るけど・・昭次、待っててくれるか？」

大きく頷きバイクに駆け寄る昭次。

「今度来た時はおかえりって迎えてあげるから。気をつけて、いつてらっしゃい」

少し照れたように微笑むとポンと頭を撫で、頼むなというように手をあげて去っていく義斗。

走っていくバイクをずっと見送っている昭次の肩を抱いて微笑むはじめ。

「兄ちゃん、ありがとう」

「なにか礼言われることしたか？オレたちも、帰るか」

はじめのやさしさが、染みる・記憶を取り戻してもやさしい兄を忘れずにすんでうれしかった。

思い切り抱きついて笑ってる昭次を、はじめも同じ気持ちで見つめていた。

「俊さん成仁くん、お世話になりましたあ。また遊びに来てもいい？」

「いつでも来てや、待ってるから。はじめもお疲れさん」

どことなく生気を取り戻しつつある俊、騒いだかいもあったということか。

「なんかあったら呼んでくれていいからな、おつかれさま」

「ありがとう。気をつけてな」

「先輩、オレも明日はいけると思うから。またよろしく願いします」

「おう。頼りにしてる」

ぽんと成仁の頭をなで、手を振る昭次たちを晴れやかに見送る。

お互いに、新たな出発には最適の気持ちのいい朝だった。

「昭次。おまえ、大丈夫なの、か？」

昨日倒れたこととか記憶が戻っておかしなところはないのかと、改めて聞くはじめ。

「全然。なんで？」

「おまえ、昨日話聞いてたら倒れたんだよ・思い出すのきつかったか」

「そんなこと、ないよ．．みんな優しくて、うれしかった」

少し切なさそうに笑う昭次の肩を抱く。

「．．事故のことは、どうだ．．」

「うん．．なんとなく。いいんだ、両親と兄ちゃんと一緒にいた記憶は思い出せる．．それで十分だよ。また家族と暮らせるもんね」

大きく首を振って笑顔を戻す昭次。

辛いことを思い出す必要はないから．．少しづつ感じていけるほうが昭次も楽だと思う。

「そうだな。今度こそ、仲良くな．．」

「うん。っていうか、兄ちゃんとよくんのが心配なんですけど？」

指摘され、苦笑いのはじめ．．徐々に、やってくしかないと思います。

「そうそう、たぶん倒れたって時だと思うけどね．．オレ、お母さんに会ったよ二人の」

は？どうということ？首を傾げてるはじめに、昭次が笑う。

「夢だと思うけど、兄ちゃんたちのこと頼むって言ってたよ」

「．．そうか。弟にそんなこと頼むなよなあ」

どこかうれしそうに疑いもなく聞いているはじめ、小さく笑った。

「兄ちゃん全然疑ってないね」

「うそなの？」

「ホントだよ。義斗さんのこと謝りにきてくれたみたい．．」

「ああ、なるほど．．許してやった、か？」

「許すもなにもないよ、謝られてあせっちゃった。でも、よくわかんないけど会えてうれしかったなあ・・夢なのに、すごく覚えてるところが現実っぽいんだよね」

「そうだな・・最近、なんかおかしいこと続いてたからな。あつてもおかしくない・・もう大丈夫って伝わったかなあ」

はじめは空を見上げ母に微笑んだ、今度はオレのどこ来てよ・・謝るのはオレだよ、弟のこと守ってやれなくてごめん。

やり直すから、許してくれよなああさん。

まだ解決していない出来事が、ちらほらと。

井川忍は、携帯を握り締めて・・・何度目かのため息をついていた。
「・・・よし」

電話を見つめ呟く忍、意を決して番号を押し始めた。

『もしもし・・・佐藤ですけど』

出てきた本人・佐藤達也におもわず息をのむ忍。

『もしもし?』

聞き返されてあわてて名乗った、これじゃいたずら電話だ。

「あつ、オレ。井川ですけど・・・達也?」

一瞬、間が空くと驚いた声で聞き返される名。

『・・・忍?どうして・・・』

「あの、ちよつと話があつて・・・出てこれないかな」

『・・・昨日、話しただろ。まだなにか・・・怒ってるのか?』

「違うよ。ただ・・・用事あるんならべつにいいけど」

あまり乗り気じゃないのを感じ、不機嫌に呟く忍。

『・・・行くよ。どこ行けいいの?』

オレのわがままは慣れてる達也・・・狙ってるわけじゃないけど、今も変わらず聞いてくれた。

「いつも会ってた公園、覚えてるか?そこで一時に待ってるよ」
『わかった・・・じゃ、後で』

電話を切ると大きくため息をつく忍。

なんか思ってたのと違う・・相田のやつにそそのかされたのだろうか、なんかまた怖くなってきた。

自分で言ったこと、戻るならそのがいい。

もう一度ため息をつき、時計を見る・・気合を入れて立ち上がった。

あと30分もすると約束の時間

大阪に戻った関義斗・・仲間を集めて、報告中。

「もう一回言ってもらおか？なんちゅうたんじゃ今」

襟を掴み睨むのは、真田。

「・・やから、あつちで一緒に住むことになったいうてなんべん言わすんじゃアホ」

「アホは義斗じゃろが。それはもうわかったわ、その後。やめるいうんはホンマか」

真田と義斗の間で冷静ながらも明らかに動揺している伊藤が再度聞く。

「じゃあないやろ・・両立なんてできへん」

「で、こつちを切るいうんか」

冷めた声で真田が義斗を突き飛ばす。

「・・考えて決めたことなんや、わかってくれてもええやろ」

「わかつとる。おまえの向こうでの顔見とるからな・・そんな気もしとった。けどこつちの気持ちも少しはわかれや」

「オレらはおまえのここに集まってできたチームや。簡単には納得できん話やろ」

二人にさみしそうに睨まれてる義斗、自分でも無茶なことをしているとわかってるだけにその視線は痛かった。

「そう、や・勝手なのはわかつとる、どうしたらええんやろな。オレもわからん・」

頭をかきむしる義斗を、少し落ち着きを取り戻した真田が大きなため息をついた。

「・おまえ、あつちは解決したんじやな」

「・あつちつて、なんや」

「昭次やらのことじゃ、話ついたんか？」

どかりと義斗の前に座り込む、もう怒っている様子もなく心配そうに話を聞く体勢の二人。

「ああ・おまえが最後に言つてったこと驚いたわ・」

「なんや、やつぱり凶星やったんか」

状況を把握することには自信がある真田、こと義斗に関しては結構な確立。

あんな顔見たら誰だつてわかりそうなものだが。

「昭次も自分のことまだ殺したいのか言つて聞いてくるし・そんなこと思つてもないのに」

義斗の言葉に一瞬目を見開く二人、すぐに小さくため息をつき言葉を返す真田。

「言われてもおかしくない顔してたわ。おまえ前科もちなんか？」
軽く重いことを言う真田に伊藤は内心ハラハラ、義斗は気にもせず小さく笑う。

「まあの・もう忘れることにしたけどの、それは。昭次もわかつてくれてたみたいやし」

本当に気にしていない様子を見せる義斗に気持ちは固まったというように真田が切り出す。

「なら、さっさと帰れ。この部屋はわしが貰う・・・それで、ええな？」

「・・・まあそれが妥当か。おまえの下いうんがちょっと気に食わんが、オレは頭の器じゃない。がまんしたるわ」

伊藤も同じ考えだというように話にのった、一言多いわと小突きあつて二人を驚いて見ている義斗。

「・・・おまえら。チーム、やってくれるんか？」

「なに言っくんじゃ、誰が解散せえ言つた。任せんかい、一言多いアホ伊藤」

「そうやで、任せえや。なあ、頼りにならんアホ真田」

笑いながら顔をヒクつかせる二人、お互いの襟元を掴みにらみ合う。

「なんじゃ、文句ありそうじゃの・・・やるんか、こら」

「やったるうやんけ」

「ちよう、ケンカすんなや・・・おまえらに支えてもらわなあかんのやから。頼むで二人とも」

二人の間に割つて入る義斗に伊藤が吹き出す。

「ケンカなんかいつものことやろ、ホンマおとなしなうてからに」

「伊藤お、ふざけんなや・・・」

力なくうなだれる義斗の頭をぼんと叩く二人。

「アホ、気にしすぎじゃ・・・真田のことわかつてるやろ、やる時ややるやつじゃ。ちゃんとするように監視しとるし。安心せえ」

「また一言多いちゆうねん・・・けど、おまえは自分のことしかりせえよ。ケンカすんなよ兄ちゃん、おまえらなんじゃ天敵みたいやで見てる」と

はじめのこととなると素直になれない義斗、嫌そうな顔をして小さくため息をついた。

「あいつと同じ家・気が重いわホンマ」

義斗の性格をわかつている二人、素直じゃないこととケンカ早いことを合わせると安易に予想がつく光景。

「けど、あれや昭次くんおるんやろ、どうにかなるわ。あの子が二人止めてくれるやろし・・なんにしても、大変じゃのお」

元気づけようとした伊藤だが、最後には同情を隠せず肩を叩く。

二人のことは気にもせず立ち上がるのは真田。

「おし、みんなに知らせに行くど。新アタマの紹介じゃあ」

「違うじゃろ、義斗の引退祝いや。アホが」

「アホいうんやないわつつ」

またつかみ合って騒いでる、もう止めることなく取っ組み合いを笑う義斗だった。

その頃小さな公園、午後一時前

「・・早く来すぎたか」

ほっとしたようにベンチに座ろうとする忍、ふいに影が自分と重なった。

「・・よう。ここいいか？」

その声に、びくりと顔を上げるとそこに待ち人、達也の姿。少し息を弾ませながら、ベンチの隣へ腰を落とす。

「びつくりした・・・早かった、ね」

心からの驚きの言葉に達也が小さく笑う。

「おまえが、電話なんかしてくるからだろ。こっちがびつくりしたよ」

「あつと、急にごめん・・・友達できたって、伝えたくて・・・呼び出すまでなかったね」

うつむいたままの忍、達也の表情が見えず小さな沈黙に鼓動が早くなっていく。

「・・・よかったな。うまくやってけそうか？」

返される言葉に思わず顔を上げると視線がぶつかる、達也は笑っていた。

「う、うん。大丈夫、すごくいい子で・・・仲良くしてもらってるから」

「そうかぁ・・・で、オレはもう必要ないって、言いにきたのか」

「・・・えっ？」

ふいに表情を曇らせて呟く言葉に、忍は固まった。

「違うか、もうオレは昨日の時点で終わってたな・・・」

ひとり言のように呟く達也に勢いよく立ち上がったいた忍。

そんなこと聞きたくてきたんじゃないのに！

なんだか腹がたってしまい、思わず感情をぶつけてしまった。

「ああ、もうっ！おまえ、オレのこと好きなんじゃないの？なんでそんなすぐあきらめ入るんだよ、いいのかよ、もう会えなくなっても。おまえは平気なのかっ」

言ってしまったからあわてて口を押えた、がすでに遅く達也は呆然と忍を見上げていた。

顔を背ける忍・・・オレって、何様・・・もう最悪かも。

「・・・なんだよ、それ。どういう意味・・・」

肩をつかまれじつと見つめてくる達也、ここまできたらもう開き直るしかないと言悟を決めた。

「メール・・・見せてもらった」

「メール?・・・」

一瞬考えて、思い当たる節に息を呑む達也。

「・・・なんで、そんなことに。冗談だろ、やめてくれよ。なんで見せんだよあのやろう」

青い顔して背中を向ける達也、今度はお前が逃げんのかよ。

「相田のことは後にして。あんなメールじゃわかんない。おまえがどうしたいのか、オレにちゃんとやってよ」
駆け寄り顔を覗き込む忍、聞かずに終わってしまうのはもう嫌だった。

「・・・なんか、性格変わったなおまえ。おとなしかったのに」

「おまえといた時はおとなしくしてたの。こんなだよオレの性格、だから隠してた。嫌になるだろしつこくて・・・」

達也の驚いた顔を見て、悲しくなりうつむいてると肩に置かれる手。

「いいんじゃない。忍は忍だし・・・じゃあ、ちゃんと言う。また、一緒にいたい。居たかった・・・」

達也の勢いに思わずあとづさる忍、相田の言葉が頭にめぐっていた・

『せっぱつまつた男はなにするかわからない』・・・

「あ、あの・・・オレは友達でって、ことなんだけど・・・」

「・・・わ、わかってるつて。そんなこと思っ てない・・・」

「そうなの？・・・なんだ、悩んでそんした。おまえならいいかなあ
とか思っ てたのに」

「・・・マジ？」

掴んでる手が力を強める、じつと見つめてくる達也に逃げ腰の忍。
逃がさないというように抱きしめてくる腕。

「じよ、冗談だよっ！離してよ卑怯だぞ、体格違いすぎなのに」
抱きつく達也に押し返す力はなく、あきらめて力を抜く忍。

「・・・オレは、そっちの好きと違うからな。友達だからな」
言い聞かすように呟くと小さく笑う達也。

「わかつてる・・・なにもしないつて。また嫌われないからな」

瞬間足を蹴飛ばしていた、まだ誤解してるのが悔しくて。

「嫌ったことなんかない。勝手に決めんな・・・」

睨みながら顔を上げた時・・・唇が頬に、一瞬触れた気がした。

え？つと視線を上げると真っ赤になっ てる達也の頬。

気のせいじゃないことを知る。

「じゃ、遠慮なくがんばる。今日はもう帰る、なにするかわかんね
えし。また電話くれよ」

逃げるように走っ ていく達也を呆然と見つめる忍。

「・・・あのやろう、次会った時覚えてる。殴っ てやる」
達也のが移ったのが真っ赤になりながら言っ つ忍の表情、どこかふっ
きれたような笑顔だった。

義斗との約束を交わした次の日、加賀家にはそわそわとしている弟が一人。

「・・・義斗さん、いつ来るんだろお」

「うるさい昭次。何回同じこと言っつてんだ、おとなしく待つとけ」
「だって、ホントに来てくれるのかわかんないし・・・」

「おまえ義斗のこと信じてないんだ、うそつくようなやつだったか？」

何気に弟のことちゃんと見ているはじめに驚きながらも小さく笑う昭次。

「そうだよな。おとなしく待ってる・・・あつ、手伝うよ」

食事の用意をしていたはじめのほうへかけていく、ただ待っているよりなにかしていたほうが時間は早く流れる・・・期待と緊張に昭次の胸は高鳴っていた。

手伝いに没頭し緊張も解けてきた頃・・・遠くにバイクの音を聞く。

「・・・今、バイクの音した？・・・」

「したな。もうこっちはいいから迎えにでも行つてやれば。バイクは庭に置くように言つて」

走り出す昭次の笑顔にはじめも静かに微笑んだ、うれしそうな昭次を見るのはうれしい・・・たとえその原因が気に食わなくても。

駆け出した玄関先、メットを外す義斗の姿を発見し小さく深呼吸をする昭次。

とことことその横へと近づいた。

「お出迎えか？サンキュ、ちょっと遅くなった・・・」

照れくさそうに頭をかく義斗、じつと見つめる昭次は少し口を尖ら

せる。

「・・・ホント、遅いよ」

「・・・悪い、待たせた」

すねて下を向く昭次の頭をぽんとなでる義斗、うれしそうに顔を上げて笑顔を見せる。

「おかえりなさい・・・よしにい」

一瞬間を置くと不器用に微笑む義斗。

「・・・ただいま・・・これから、よろしくな」

照れたように笑い合う二人を夕日が静かに照らしていた。

バイクと一緒に片付けてはねるように家に入る昭次、義斗の到着をはじめに報告に走る。

「兄ちゃん、義斗さん・・・じゃなくて、義兄きたよあ」

「・・・変わってへんな、部屋」

玄関を入るとゆっくりとあたりを見渡しながら呟く義斗。

「うん。みんながいたままにしてる・・・義兄の部屋はね、オレの部屋の隣だよ」

二階に上がっていく昭次、こっちだよと手招きしてる。

誘われるまま階段を上ろうとした義斗を止めるはじめの手。

「よお、よく来た。一つだけ言っておく・・・昭次に、手出すなよ」

それだけ言くとキッチンに戻ってくはじめ、呆然とする義斗。
我に返り怒鳴る。

「あ、アホかつ！誰が弟に手だすんじゃ。変なこと言っつ」

なに考えてんのやあの男は。

いくら好きいうてもそういうことやない、人の純粋な想いになにケ

チつけてくれてんねん。

怒りながら階段を駆け上る先に昭次が覗きこんだ。

「義兄？なにしてんの、早く来てよ」

急に顔を覗かせる昭次にびつくりしたのか動揺したのか・足を踏み外し、階段をすべり落ちていく義斗。

「うわああー、義兄っっ！・・・」

大きな音と昭次の叫び声にはじめが何事かと駆けつけ、階段の下で転がっている義斗にあきれぎみにため息。

「・・・なに、やってんのおまえは」

「なにつて・・・おまえがへんなこと言うからじゃっ！・・・いたた」

「大丈夫かつつあ」

一人慌てる昭次、駆け下りてくる足はもつれ・・・

「うわっ、ちょ。あぶねえっっ」

「こ、こらっ！来るなっ」

「うわあ・・・どいてどいてっ・・・いったあ」

がんばってこられる昭次だが最後の最後ですべる足。

巻き添えをくって潰される二人の痛そうな顔に笑ってごまかす昭次だった。

そのころもう一つの家族・・・大竹家。

騒がしかった部屋も片付いて、俊と成仁はゆったりとした時間の中秋食の時。

「成仁。おまえどっちで住みたい？やっぱりこのままのがいいか？」

一緒に住むというのはすでに暗黙の了解だったのだが細かなことはなにも決めてなく、落ち着いた今切り出す俊。

一瞬考えた後、幸のほうを見て上の部屋を見つめる成。

「・・・できたら俊さんこっち住んでほしい・・・」

「うん。オレもそうしたいって思ってた・・・」

「姉ちゃんの部屋使つてよ・・・よかったら。姉ちゃんも喜ぶよ」

「いいんかな、使つても」

なんだかプライベートな部分な気がして一瞬気が引けてしまう俊、そんな俊を見て笑ってる成仁。

「何言つてんだよ、夫婦でしょ。好きなように使つてよ・・・なんかいつもこつちの都合ばっか言ってるよね。俊さんなんでも言ってくれていいからね」

なんだかテレくさくなり早口でそう告げる言葉に、ごはんを食べていた俊の手が止まった。

「なんかある？」

その様子に悟った成仁が身を乗り出す、俊は箸を置きじつと前を見据えた。

「・・・成仁、おまえオレの養子にならへんか」

思わぬ言葉に目を見開く成仁、天涯孤独の身・・・願ってもない申し出だった。

「そ、そんなの・・・俊さんの、負担に・・・」

「こつちが希望しとるのに負担もないわ。なんかはじめたち見てたら血やないなあ思つてな、あつこは片親一緒やけどオレたちはなんも繋がってへん、それでも兄弟・・・家族になれる思う」

ずっと思っていてくれたのだろう、俊の気持ちは固いものに感じた。すでに気持的には兄なのに、形にできることがなんだかすこくうれしく思えた。

「オレも、そう思う。ありがとう、お願いします」

深く頭を下げる成仁、その言葉に姿に目頭が熱くなってくる俊。小さく鼻をすすると笑ってる成仁。

「涙腺弱いよねえ俊さんって。兄さんは簡単に泣かないでほしいなあ」

「やかましいわ。生意気な弟やなっ・・・オレにびったりじゃ」

じゃれあいながら笑い合う、団欒の席。

写真の中でうれしそうに微笑んでいる、幸がいた

階段の下、固まってる三人の男たち。

「家の階段落ちるやつがいたとはびっくりだね。まったく来たそうそう世話のやける」

「だから、おまえのせいやって・・・いたた。言うてるんがわからないのか、ったく」

一応文句を言いながらも手当てをしているはじめ。ふいに動きを止め、小さく呟く。

「昨日の夜・・・聞いてました」

なんのことだかわからず首を傾げて睨む義斗に「布団に、二人でなあ・・・」なにやってたんだかと続けるはじめの言葉。

・一瞬考えて、真っ赤になる義斗。

「あれ、は。ちゃうで・兄弟の愛情やろが。あんな言われたら・しゃあないやろが」

「ほお、けどオレがあんなことしませんよお兄弟ですが」

「はい持って来た氷。折れてないよねえ・」

タイミングいいのか悪いのか、袋に氷を入れて心配そうに現れる昭次。

思わず顔を背けながら「そんなやわやない、大丈夫や」どきまぎの義斗。

それを見ていたずら心か、心配してか・ふいに昭次に抱きつくはじめ。

「なにしてんの、兄ちゃん？」

「これが普通の反応なんだけどね・けど、おまえには」

ポンと昭次の背中を押すと義斗のほうに倒れ込む、反射的に支えようと腕を伸ばす義斗・抱きつく形に慌てて飛び起きる昭次。

「うわっ。ご、ごめんなさい・ちょ、兄ちゃんなにがしたいんだよっ。危ないだろ」

明らかに自分の時との反応の違いに小さくため息をつくはじめ。

「・真っ赤ですよ昭次くん。なんか兄ちゃんジェラシー、なんの絆で結ばれてるんだかねえ・」

顔を見合わせて真っ赤になってる二人・それを見てまたもため息のはじめ。

「な、慣れてないだけだよ。なに变なこと言ってるんだよ、もう」

なんだかよくわからない気まずさに昭次がおたおたしてる。そんな様子に小さく笑うのは、義斗・・やられてばっかでおれるかい。

「まあ絆はホンマよなあ。ずっとかわらん想いつてのは、すごいと思わへんか？」

なあと昭次を見上げ笑うと少し驚いたように見て、続く昭次の言葉。

「そうだよなあ、勝手にジェラシー感じてなよね。なあ義斗さん、仲良くしようなあ」

はじめへのお返しだとわかったのか楽しそうな笑顔の昭次。たいした玉やと苦笑いを浮かべる義斗、はじめは「少しは気にしろ」と盛大にため息をついていた。

ふいに、電話が大きな音を奏で、場を落ち着かせた。

「おい昭次、電話出る。まったく、勝手にやってるっての」

「なんだよ機嫌悪いなあ。あつ義兄、ちゃんと冷やしててよ。はい、今出ますよ」

受話器の向こう、見知った仲間の声。

「おつ武。またなんか問題でもあったか？」

こいつが電話してくる時はいつも問題発生時、思わず条件反射で告げると。

『問題つていえばそうかもな。達也と井川、寄り戻ったみたいだぞ』『ホント？よかった。いいことじゃん、なんか問題？』

『達也が、井川のこと好きだとしても？』
一瞬意味がわからず固まる、好きだから仲良くしたいのは当然じゃね？

「好きなんだから寄り戻ったんだろ、なんか変か？忍も好きなんだよね。両想いってことか・・・あれ・・・」
「なんかこれって・・・恋愛に、似てないか？」

『おつめずらしくなんか気がついたみたいだな。寄り戻るってのは、付き合うってこと。わかる？』

「うそ・・・けど、そんなのできるのか？」

『別にいいんじゃないの？おまえには知らせとこうと思ってな、理解してやれよ友達なんだからよ』

「あ、うん・・・そうだな・・・」

理解というより頭がついていかず、生返事を返すオレを笑ってる声。
『明日おまえに会うのが楽しみだな、余計なことは言っなよ井川たち。それだけ、またな』

言うだけ言って電話を切る相田・・・呆然と受話器を握りしめゆっくりと戻した。

考え込みながら入ってくる昭次に首を傾げるはじめ。

「昭次。なにやってんだ、できたから早く食えよ。義斗もいつまでも寝てんなよ」

「・・・あのさあ、男同士って付き合えるものなの？」

思ったことをそのまま口に出す昭次。

「な・・・なに言ってるんの、急に」

びっくりして義斗の足につまづいてこけるはじめ。
義斗もなにごとだと見上げていた。

「・・・あつ、なんでもない。ちょっと聞いただけ。ごはん食べよう」
なんでもない様子ではない、首と腕を大きく振りながら食卓へと座り込む昭次。

「・・・おまえ、なんか昭次に吹き込んだのかっ」

「アホか、今の電話や。武、言うてたかな。昨日のやつか？」

「あのやろう、昭次になにする気だ」

「おい、食べないの？先にいただきますよー」

張本人のんきに叫ぶ、顔を見合わせるはじめと義斗・・・慌てて席へとついた。

「おい昭次。おまえなに聞いてたんさつき。おまえの話じゃないよな」

「男となんか付き合っちゃダメだぞっ」

乗り出す二人の兄をよけながら「なにいつてんの」と傾げてる首。

「あつ、さっきのか？なんでもないって、忘れて。誰かなんか言えません」

「・・・忍、言った気したけどなあ」

びくつと肩を揺らす昭次にまるわりの二人。

「・・・内緒だからな。ところで・・・付き合ってもいいの、男同士？」
話を通ったところで自分の疑問には正直な昭次、どうなんだよと興味津々。

昭次の純粋な悩みに苦悩する兄たち、思わず顔を見合わせる。

「おい、おまえの兄ちゃん初仕事。頼んだぞ。オレは、しらん」

逃げるようにごはんをよそいに行ってしまうはじめを睨みながら、見つめる昭次に頭を抱える。

「どうせいちゅうんじゃ・・・で、昭次はそれ聞いてどうすんの？」

「えっ？べつに気になったただけだよ。忍に悪いことさせられないでしょ？」

他意はない様子、ホントにわからないだけらしい・・・どんだけ、純なんだよおまえは。

大きくため息をついて昭次の肩を叩く義斗。

「・・・悪いことやないから、そつとしとくのがいいんじゃないかな・
・はあ」

「そうだよね。人を好きになるのは自由だもんね、わかった。そつと見守ってる」

につこりと、まぶしい笑顔につられて笑うしかない兄たちだった。

こうして小さな悩みを抱えながらも運命は進んでいく。
いつまでもそれぞれの家族とともに、絆を深めながら

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6000f/>

BROTHER - blood -

2010年10月9日14時31分発行